

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第156集

来光川遺跡群 I

平成11～16年度 一級河川来光川河川改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

仁田館遺跡

2005

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第156集

来光川遺跡群 I

平成11～16年度 一級河川来光川河川改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

仁田館遺跡

2005

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

来光川遺跡群と称する来光川流域に分布する遺跡の発掘調査は平成11年度から平成15年度までのほぼ5年間にわたって行われた。仁田館遺跡のこけら経をはじめとして数多くの発見があった発掘調査の成果がこのたび調査報告書としてまとめられた。今回の報告には仁田館遺跡の調査の成果を所収している。

来光川遺跡群の調査の主な成果として、先にあげた仁田館遺跡の867枚におよぶこけら経の発見や屋敷をめぐる堀の検出、仁田館遺跡、五反田遺跡の下層で確認された縄文早期遺物包含層の成果など枚挙に暇がない。これら豊富な考古資料は、本遺跡群が地域史のなかにも大きな足跡を残す証と言えよう。

最後に、本遺跡の現地調査ならびに本報告書の作成にあたっては、静岡県沼津土木事務所、静岡県教育委員会文化課をはじめとした関係機関各位に多大なる援助・協力を得た。この場を借りて厚く御礼申し上げる。また、現地調査・資料整理に参加した多くの調査員、作業員の方々の労をねぎらいたい。

平成17年3月
財静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

例　　言

1 本書は田方郡函南町大土肥から仁田に所在する米光川遺跡群に所収される仁田館遺跡の発掘調査報告書である。

2 調査は平成11～16年度一級河川来光川河川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県沼津七木工事事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

3 調査の体制は次のとおりである。

平成11年度（現地調査）

所長 斎藤 忠、常務理事 伊藤友雄、副所長 山下 晃、総務課長 杉木敏雄、会計係長 杉田智

調査研究部長 佐藤達雄、調査研究二課長 達藤喜和、調査研究員 鈴木武幸

平成12年度（現地調査）

所長 斎藤 忠、常務理事 伊藤友雄、副所長 山下 晃、総務課長 杉木敏雄、会計係長 大橋薰

調査研究部長 佐藤達雄、調査研究部次長 及川 司、調査研究二課長 篠原修二、

主任調査研究員 鈴木武幸、調査研究員 富永樹之

平成13年度（現地調査・資料整理）

所長 斎藤 忠、常務理事 余田徳幸、副所長 山下 晃、総務課長 本杉昭一、会計係長 大橋薰

調査研究部長 佐藤達雄、調査研究部次長 余野克巳、及川 司、調査研究三課長 飯塚晴夫

主任調査研究員 鈴木武幸、調査研究員 岩本 貴

平成14年度（現地調査・資料整理）

所長 斎藤 忠、常務理事 余田徳幸、副所長 飯田英夫、総務課長 本杉昭一、会計係長 大橋薰

調査研究部長 山本昇平、調査研究部次長兼二課長 佐野五十三、調査研究員 岩本 貴

平成15年度（現地調査・資料整理）

所長 斎藤 忠、常務理事 余田徳幸、副所長 飯田英夫、総務課長 鎌田英巳、

会計係長 野島尚紀、調査研究部長 山本昇平、調査研究部次長兼二課長 佐野五十三、

調査研究員 岩本 貴、技術員 木村忠義

平成16年度（資料整理）

所長 斎藤 忠 常務理事 平松公夫、副所長 飯田英夫、総務課長 鎌田英巳、

会計係長 野島尚紀 調査研究部長 山本昇平、調査研究部次長兼二課長 佐野五十三、

調査研究員 岩本 貴、技術員 木村忠義

4 資料整理及び報告書作成作業は、平成13年7月から開始し、平成17年3月まで実施した。

5 本書の執筆は、岩本 貴、木村忠義、西尾太加二（保存処理室長）が分担して行った。執筆分担は以下の通りである。

第Ⅰ章 岩本 貴、第Ⅱ章 木村忠義、第Ⅲ章・第Ⅳ章第1～4節 岩本 貴、木村忠義、第Ⅳ章第

5 節 西尾太加二

- 6 遺物写真撮影は、岩木 貴が行った。また、保存処理は、当研究所保存処理室が実施した。
- 7 発掘調査資料は、すべて静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。
- 8 発掘調査及び報告書作成・執筆に当たっては、次のの方々・機関から御教示やご協力を賜った。(五十音順・敬称省略) 池谷信之 池谷初恵 市原壽文 小野正敏 加藤芳郎 加藤理文 元興寺文化財研究所 国南町教育委員会 栗木 崇 小崎 晋 佐々木健策 笹原千賀子 塚本和弘 辻 真人 長野康敏 仁田 昇 平川 南 平間亮輔 藤澤良祐 藤原理恵 松井一明 水野正好 山田康雄 湯ノ上隆 渡井英吾
- 9 本書の編集は、静岡県埋蔵文化財調査研究所が当たった

凡 例

本書の記述については、以下の基準に従い、統一をはかった。

- 1 出土遺物は、10m方眼のグリッド毎に通し番号を付して取り上げた。
- 2 遺構の標記は次のとおりである

S H = 建物跡

S D = 壴

S E = 井戸

S K = 土坑

S R = 自然流路

S X = その他の遺構

- 4 遺構・遺物の出土状況図の中で、一部記号を用いて表したものがあるが、次のとおりである。

P = 土器

C = 陶磁器

W = 木製品

M = 金属器

- 5 遺物の中で被熱、炭化、赤彩、漆の塗布などが確認されるものについてはトーンによって表現したものがある。

被熱、炭化



赤彩



漆(黒)



漆(赤)



- 6 遺物観察表・遺構図の土色の同定については、農林水産省水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖 1997年版』を使用した。

目 次

序

例 言

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3節 静岡県東部・北伊豆地方の水害史	7

第Ⅲ章 仁田館遺跡の調査

第1節 調査の概要	13
第2節 土 層	13
第3節 仁田氏について	17
第4節 遺構と遺物	
縄文時代の遺構と遺物	20
古代・中世・近世の遺構と遺物	40

第Ⅳ章 総 括

第1節 仁田館の礎石建物と平面構造について	183
第2節 仁田館遺跡で検出された堀 (SD1) について	193
第3節 仁田館遺跡出土の遺物について	197
第4節 仁田館遺跡出土のこけら経について	207
第5節 こけら経保存処理のための予備実験と処理の実際	222

挿図目次

第1図	遺跡の位置および周辺図(1)	6
第2図	米光川遺跡群調査区分分布図	14
第3図	米光川遺跡群グリッド配置図	15
第4図	土層柱状図	16
第5図	調査区全体図（縄文面）	21
第6図	集石遺構平面図	22
第7図	縄文土器出土状況図①	23
第8図	縄文土器出土状況図②	24
第9図	縄文土器出土状況図③	25
第10図	縄文土器出土状況図④	26
第11図	石器出土状況図	27
第12図	礫出土状況図	28
第13図～第18図	縄文層出土遺物実測図（土器）	29
第19図～第20図	縄文層出土遺物実測図（石器）	35
第21図	等高線図	41
第22図	断面図	42
第23図	トレンチ土層図	43
第24図	遺跡全体図	45
第25図	SH1平・断面図	47
第26図	SH2・SH3・SH4平・断面図	49
第27図	SH5・SH5平・断面図	51
第28図	SH7・SH8・SH9・SH10・SH11平・断面図	52
第29図	SH12平・断面図	53
第30図	SH13平・断面図	54
第31図	SH14平・断面図	55
第32図	SH15平・断面図	57
第33図	SH11・SH16平・断面図	59
第34図	SH18・SH19・SH20・SH21・SH22・SH23平・断面図	61
第35図	SH24・SX1平・断面図	62
第36図	SE1・SE2平・断面図	66
第37図	SE3・SE4平・断面図	67
第38図	SE5・SE6・SE7平・断面図	68
第39図	SE8平・断面図	69
第40図	SE9平・断面図	70
第41図	SK1・SK2・SK3・SK4・SK5・SK6平・断面図	72
第42図	SK7・SK8・SK9・SK10平・断面図	74
第43図	SK11・SK12・SK13平・断面図	75
第44図	SK14・SK15平・断面図	76

第45図 SD1平・断面図	77
第46図 SD2平・断面図	79
第47図 SD3・SD4平・断面図	83
第48図 SD5・SD6平・断面図	86
第49図 SD7・SD8平・断面図	87
第50図 SD9・SD10平・断面図	89
第51図 SD11・SD12平・断面図	90
第52図 SD13平・断面図	91
第53図 SD14平・断面図	92
第54図 SD15・SD16・SD17平・断面図	94
第55図 SX2・SX3平・断面図	95
第56図 SR1平・断面図	96
第57図～第97図 出土遺物実測図（土器・陶磁器）	97
第98図 出土遺物実測図（その他）	141
第99図～第107図 出土遺物実測図（木製品）	143
第108図～第112図 出土遺物実測図（金属製品）	152
第113図～第116図 出土遺物実測図（錢貨）	157
第117図～第122図 出土遺物実測図（石器・石製品）	161
第123図 出土遺物実測図（骨・その他）	167
第124図～第126図 時期別造構分布図	186
第127図～第130図 仁田館建物状況図	189
第131図 仁田館遺跡と山中城の堀 比較図	195
第132図 豊臣軍の進軍経路	196
第133図～第135図 中世遺物分布図	200
第136図～第139図 中世遺物出土量	203

別冊図版 第1～48図 こけら経実測図

挿表目次

第1表 調査工程表	2
第2表 静岡県東部・北伊豆地方の水害史年表	10
第3表 遺物観察表（縄文土器）	37
第4表 遺物観察表（土器・陶磁器）	168
第5表 遺物観察表（木製品）	179
第6表 遺物観察表（金属製品・錢貨）	180
第7表 遺物観察表（石器・石製品）	182
第8表 こけら経韻字脱字類一覧	208
第9表 文献、絵巻に見られるこけら経写経	211
第10表 こけら経写経教典配巻表	212

図版目版

- 図版1 遺跡全景
- 図版2 1. A区南半全景（北東から）
2. A区南半全景
- 図版3 1. A区北半全景（北から）
2. A区北半全景
- 図版4 1. A-2区／下水区全景（北西から）
2. A-2区／下水区全景
- 図版5 1. B区中近世面全景（南から）
2. B区縄文面全景（南から）
- 図版6 1. A-2区全景（東から）
2. SH2完掘状況（南から）
- 図版7 1. 下水区全景（東から）
2. SH2完掘状況（南から）
- 図版8 1. SH2／SH3完掘状況（南から）
2. SH1検出状況（東から）
- 図版9 1. SH1全景（北から）
2. SH1礎石12刻書礎石検出状況
3. SH5完掘状況（南から）
- 図版10 1. SH4完掘状況（西から）
2. SD10完掘状況（北から）
- 図版11 1. 一分金出土状況
2. SE5完掘状況
3. SE6完掘状況（北から）
4. SE8完掘状況（南から）
5. SE9半截状況（南から）
6. SE9完掘状況（南から）
- 図版12 1. SD1完掘状況（南から）
2. SD1完掘状況（東から）
3. SD1完掘状況（西から）
4. SD1完掘状況（西から）
- 図版13 1. SD2完掘状況（東から）
2. SD2内貯藏穴完掘状況（西から）
3. SD8完掘状況
4. SD7溝完掘状況（南から）
5. SD17南端完掘状況（南から）
6. SD3遺物出土状況（東から）
- 図版14 1. SD16完掘状況（東から）
2. SD13完掘状況（北から）
3. SK6完掘状況
4. SK12完掘状況（北から）
5. SK7完掘状況（北から）
- 図版15 1. SK10完掘状況（東から）
2. SK9完掘状況（東から）
3. SX4遺物出土状況（南から）
4. SR1完掘状況（北から）
- 図版16～図版17 出土遺物（縄文土器）
- 図版18 出土遺物（石器）
- 図版19～図版26 出土遺物（陶磁器）
- 図版27～図版31 出土遺物（木製品・金属製品）
- 図版32～図版33 出土遺物（金属製品）
- 図版34 出土遺物（石器・石製品／その他）
- 図版35 出土遺物（石器・石製品）
- 図版36 出土遺物（石器・石製品／銭貨）
- 図版37 出土遺物（銭貨）
- 図版38 出土遺物（銭貨／骨・その他）
- 図版39～図版85 出土遺物（こけら経）

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

平成10年（1998）8月27日から9月1日にかけて静岡県東部地方に上陸した「台風4号」が、強風と豪雨をもたらし、多大なる災害をもたらしたのは、人々の記憶に新しいところである。特に函南町上沢地区では、来光川の右岸180m、左岸260mに渡り越水し、農地23.1ha、床下浸水136戸、床上浸水95戸、総額2億3,600万円という被害をもたらした。これに際して、静岡県では、河川災害復旧等関連緊急事業、災害復旧助成事業として、来光川の河川改修工事を計画した。

平成11年、静岡県沼津土木事務所より静岡県教育委員会に埋蔵文化財の包蔵の有無の照会がなされた。静岡県教育委員会では周知の遺跡包蔵地にかかる部分の確認調査を函南町教育委員会に委託し、その結果、仲道遺跡、仁田坂遺跡、仁田館遺跡において遺構・遺物が確認された。本調査は平成12年より静岡県埋蔵文化財調査研究所に委託されることとなり、静岡県沼津土木事務所・静岡県教育委員会・静岡県埋蔵文化財調査研究所の協議の結果、調査区は未買収地が多いが、買収済みの地区から調査する依頼を受けた。

第2節 調査の方法と経過

来光川遺跡群の調査は、仁田館遺跡、仁田坂遺跡、仲道遺跡、八ツ構遺跡、五反田遺跡の5遺跡について、第1期、平成12年3月から平成14年3月までの2年12か月間、第2期、平成14年10月から平成15年3月までの5か月間、計41か月間に渡り実施した。

来光川河川災害復旧等緊急事業に伴う発掘調査という性格上、調査範囲が川に沿って細長く設定され、調査区は北へ約930m、東へ約220mに及んでいる。遺跡全体を把握するために、国土座標に準ずるグリッドを設定し、基点（A-1）をX=-102.400、Y=40.800とした。そこから10mごとに北方向には0・1・2・3…100、東方向にはA・B・C…AA・AB…AZまで方眼を組んだ。グリッドはその10m四方の区割りとし、南西隅の交点を代表させてC-12区などとした。調査区内には5つの遺跡（仁田館遺跡・仁田坂遺跡・仲道遺跡・ハツ構遺跡・五反田遺跡）があり、各遺跡の中を3つから4つに分け、A区・B区・C区・D区とした。

調査区が川のすぐ近くにあり、多くは川の水位より掘り下げて調査したので、湧水が多く調査区の周りに水路を掘り水中ポンプで水を汲み上げたり、調査区を鋼矢板で囲って調査を行った。

発掘調査は層位的に行い、遺物の取り上げ、遺構図は株シン技術コンサルの遺跡測量システムを用い光波測定器によって測量を行った。遺物にはグリッド・遺構別に土器=P、石器=S、陶磁器=C、金属=M、骨=Bなどの略号と3桁の番号を付し、XYの座標と標高の記録とともにコンピューターに保管し、一部の遺構図も同様にコンピューター上で作成し、1/20の図面の打ち出しどもに保管している。また、断面図・細部図等については手実測でおこない、1/20～1/10の図面を保管している。また、写真撮影には中型カメラ（6×7判、白黒）、小型カメラ（35ミリ白黒、カラーネガ、カラースライド）を使用した。また、遺跡遠景、全体写真は高所作業車により撮影した。さらに調査の進捗を考え、場合によつては、広範囲の実測はラジコンヘリを使っての写真測量を利用した。

第1表 来光川遺跡群 調査工程表

		平成12年	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
		3 4 5 6 7 8 9 10 11 12	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
準備工		■				
仁	A区-1 3,962m ²	■				
田	A区 2 262m ²			■		
館	B区 1,750m ²				■	
遺	縄文面 450m ²				■	
跡	下水区 390m ²			■		
	資料整理		■	■		■
八	確認 565m ²	■				
ツ	A区 50m ²		■			
溝	B区 50m ²		■			
遺	C区 100m ²		■			
跡	D区 1 250m ²		■			
	D区-2 250m ²		■			
	資料整理		■	■		■
仲	A区 50m ²		■			
道	B区-1 600m ²		■			
遺	B区-2 550m ²		■			
跡	C区 1200m ²		■			
	資料整理		■	■		■
仁	A区 200m ²		■			
田	B区 800m ²		■	■		
坂	C区 1,300m ²		■			
遺	D区-1 250m ²	■				
跡	D区-2 275m ²	■				
	資料整理		■	■		■
五	確認 1,790m ²			■		
反	本調査 1,790m ²			■		
田	縄文面 1,790m ²				■	
遺						
跡	資料整理				■	

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地理的環境

来光川遺跡群は、静岡県東部、函南町を南北に流れる来光川によって形成された微高地、後背湿地上に位置している。

来光川は、同町の最高峰、鞍掛山（標高1,004m）を源とする桑原川と、田代盆地を源とする冷川の合流によって生まれ、後に柿沢川へと合流し、狩野川へ注ぎ込む流程約14kmの河川である。（註1）

北東の箱根連山から南西の大城山に向かう山岳地帯は、多くの河川による浸蝕を受け、緩やかな傾斜をみせる放射状の丘陵をつくり出す。一方で狩野川とその支流の来光川、柿沢川が運ぶ土砂は、中西部の田方平野を展開し、上流の谷底平野、扇状地、中流の自然堤防、後背湿地、平野、下流の黄瀬川扇状地、沼津狭窄部など様々な地形を生み出し、長い歴史を通じて、人々の生活を支えてきた。

この田方平野の形成に関しては、過去の研究によって、4期に渡る大きな自然環境の変化が認められている。第1期は、今から約18,000年前、地質年代の更新世後期、ウルム冰期の極相期に、「古狩野川」及び、「古黄瀬川」の開析作用によって、深さ80～100mに及ぶV字状の「狩野谷」が形成された。

第2期は、約14,000年前、新期富士の活動による粘性の低い玄武岩質溶岩、通称「三島溶岩流」が、この「狩野谷」を約35m付近まで埋め、扇状地形の原型を形成した。

さらに、第3期、約8,000年前後の地球規模での気候の温暖化による海面の上昇、所謂、縄文海進で、浅海性内湾「古期古狩野湾」が出現する。過去のボーリング調査によって確認された、海洋性シルト層は、「狩野谷」の8m～35mに及んでいる。（註2）

以後、海面上昇の一時的な停滞と若干の寒冷化に伴う海退によって、この内湾は一時陸化するが、再び海進は進み「新期狩野内湾」が形成される。先の海洋性シルトの分布によれば、その最盛期には、中伊豆の白山堂付近まで内湾が及んでいたことがうかがわれる。

その後、第4期にはいると、内湾の海面は下降、富士火山の噴火による火山灰、砂礫、スコリアなどの降下堆積物、狩野川、黄瀬川の河成堆積物が流入し、しだいに陸化されていったと考えられる約2,800年前の縄文時代晚期には、黄瀬川扇状地泥流堆積物が三島溶岩流、古狩野沖積層を覆い、函南町間宮から清水町柿田を限界とする「三島扇状地」を造りだした。（註3）

弥生時代中期頃には、現在の地形が確立されていたと考えられ、生活に必要な環境が整ったと見られる。田方平野には、来光川以外に、黄瀬川、柿田川、狩野川、境川、大場川などの、大小の河川が存在するが、それらが造りだす微高地、後背湿地上には、古くから集落が営まれていたと考えられる。

この東部山岳地帯と中西部の田方平野という地理的特徴は、それぞれ旧石器時代から縄文時代の遺跡、及び、弥生時代以降の遺跡の分布に概略することができる。

本遺跡群は、後者に属するものの、その東側には、平井、柏谷の丘陵地がせまっている。時代を問わず、数多くの遺跡が密集する本遺跡群の周辺は、県内でも有数の遺跡分布地と言うことができるであろう。

註

註1 函南町教育委員会 1974 『函南町誌』上巻

註2 三島市教育委員会 1996 『西大久保・奈良橋向遺跡』

註3 三島市教育委員会 1993 『金沢遺跡』

第2節 歴史的環境

東部山岳地帯における旧石器から縄文時代の遺跡、中西部の田方平野における弥生時代以降の遺跡という特徴については既に述べたが、本節では具体例を挙げて本遺跡群周辺の歴史的環境を概観したい。

JR函南駅から北東の箱根連山に向かう丘陵地には、柳沢B・C・D遺跡、上黒岩遺跡、中原遺跡、上原遺跡、三本松遺跡、下人原遺跡、上男山遺跡、大田原遺跡など旧石器時代の遺跡が直線的に並び、ナイフ形石器をはじめ、尖頭器、搔器、彫器、細石刃等の多数の石器類が出土している。

さらにその周辺には、大奴田場遺跡、笹ヶ久保遺跡、平沢遺跡、大休場遺跡、伊山遺跡、下伊山遺跡、神原遺跡、大竹上原遺跡、大竹浜井場遺跡、細沢遺跡、といった縄文草創期から前期の遺跡が分布し、有舌尖頭器、陸繩文土器、爪形文土器、押型文土器、条痕文土器を出土している。

中期以降、生活の場が丘陵鞍部から台地端の平坦地に移ると、前期頃から安定し始めていた集落が規模を拡大しながら発展していったと考えられる。向原遺跡、館遺跡、蟹ノ沢遺跡はこの時期の遺跡で、加曾利E式土器、磨石、打製石斧（向原）、掘ノ内式土器、加曾利B式土器、安行I・II式土器（館）、称名寺式土器（蟹ノ沢）などが発見されている。

昭和25年の山木遺跡の発見によって、伊豆地方の弥生時代の遺跡は全国的にも注目を集めるようになる。同遺跡からは、弥生後期～古墳初頭の水田跡、竪穴住居などが検出された。また、弥生後期、古墳前期を中心とした土器を数多く出土した他、田下駄、田舟、鍬などの農耕具、杓子、匙、鉢、腰掛、案などの什器類、建築材などの木製品、銅鏡、滑石製勾玉などが出土している。このように、本遺跡群の周辺の弥生時代の遺跡では、木製品、農耕具の出土が多いという特徴がある。（註1）

JR函南駅南側に伸びる台地、通称「平井の台地」と来光川に挟まれた微高地、後背湿地には、十二大遺跡、浜井場遺跡、鎌治ヶ久保遺跡、大土肥境B遺跡、町屋遺跡、寺尾原遺跡、平井向原遺跡、前佃遺跡、仲道遺跡、伊豆通信病院敷地内遺跡などの弥生時代以降の遺跡が数多く確認されている。

平井向原遺跡は鶴ヶ式土器、有東式土器の他に太形船刃石斧、鑿形石斧、偏半片刃石斧などの弥生時代中期の遺物を出土する遺跡である。また、前佃遺跡からは古墳時代の矢板列、田下駄、田舟、杓子といった木製農具が発見され、本地域の農耕形態を知る上で貴重な資料を提供している。

本遺跡群周辺で最大の規模を持つ伊豆通信病院敷地内遺跡では、平成10年度までに、弥生時代後期から古墳時代、奈良・平安時代にかけての合計134軒の住居を検出した他、掘立柱建物址、溝状造構、古墳の周溝、方形周溝墓なども確認された。（註2）

また、一部が本遺跡群の調査対象となる仲道遺跡では1975年、研究を目的とした調査において、方形周溝墓群、弥生時代中期の土器を発見、1991・92年の調査では、弥生時代中期の溝1条、古墳時代中期の方形周溝墓1基、古墳時代前期から奈良・平安時代にかけての住居53軒、江戸時代の溝2条を検出している。（註3）

来光川の西岸を南北に流れる大場川近辺に目を移しても中島西原田遺跡、八田畑前田遺跡、梅名大曲田遺跡、中島上舞台遺跡、大場中島遺跡、中島下舞台遺跡、安久沓形遺跡、安久跡といった弥生時代以降の遺跡が多く存在している。中島上舞台遺跡からは、弥生時代中期の方形周溝墓6基、後期の住居址2軒、古墳時代五領期、和泉期、鬼高峰期の住居址がそれぞれ1軒、4軒、13軒。奈良・平安時代の住居址44軒、掘立柱建物7軒が検出されている。また、下流500mに位置する中島下舞台遺跡からも古墳時代鬼高峰期の住居址14軒、奈良・平安時代の住居址12軒、発見されており、両者の関係とともに、大集落の存在の可能性が注目される。

三島市と函南町の境界部分に位置する安久沓形遺跡は、1990年の調査で、古墳時代から近世にかけての遺物とともに、溝状造構9条、井戸状造構2基、柱穴1基が検出され、堅然と区画され、配置された

溝は、灌漑・排水といった生産関係の遺構として位置づけられている。

また安久沓形遺跡の南東には、安久遺跡が存在し、安久奥屋敷遺跡と安久川崎原遺跡に2分される。特に後者からは、古墳時代中期9軒、後期4軒、平安時代1軒の計14軒の住居址を発見された他、弥生時代中期、後期の遺物を多く出土し、その中には祭祀に使用されたと思われる杯・高杯・壇の一括墓業が認められ注目される。

さらに、本遺跡群の周辺には、多くの古墳群、横穴群が存在することが知られている。函南町だけでも、落合・藤明古墳群、丸山古墳群、竹倉越古墳群、和鏡が出土し経塚との関係も想像される瓢箪山古墳などが挙げられる。

また6世紀末から9世紀の初めにかけては、柏谷横穴群、台の山横穴、下ノ谷戸横穴、岩崎横穴群、日守中里横穴群、八重座横穴群、政戸境横穴群などの横穴が榮んに形成された。特に柏谷横穴群は国指定史跡に指定され、火を受けた亀甲が出土し、ト部や新しく入ってきた技術集団との関係を伺わせるなど興味深い遺跡である。(註4)

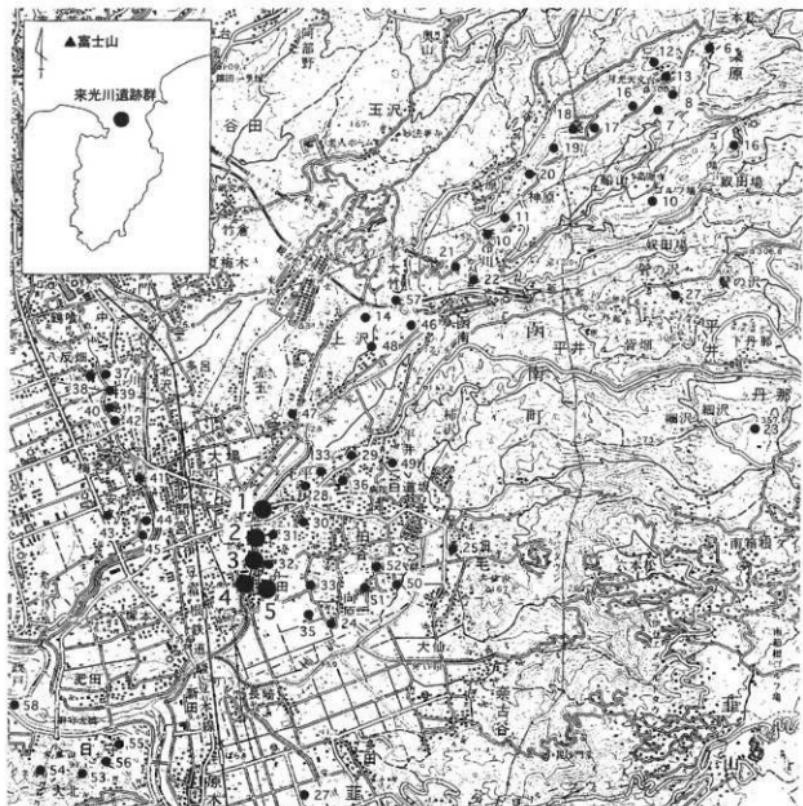
このように本遺跡群の周辺には数多くの遺跡が密集している。『和名類聚抄』によれば、律令時代の伊豆・田方郡は13の郷から成っていたようである。現在、その地域を正確に同定することはできないが、本遺跡群周辺が13郷のうちの1つを構成していた可能性は否定できない。それだけに、周辺の遺跡の状況を把握した上で、本遺跡群との関係を比較検討し、総合的な視野に立つて研究を進める必要が不可欠だろう。

註

- 註1 函南町教育委員会 1974 『函南町誌』上巻
- 註2 函南町教育委員会 1999 『函南町埋蔵文化財発掘調査報告V』
- 註3 函南町教育委員会 1996 『函南町埋蔵文化財発掘調査報告II』
- 註4 静岡県教育委員会 1986 『駿河・伊豆の横穴群』

参考・引用文献

- 函南町教育委員会 1984 『伊豆通信病院敷地内遺跡』
- 函南町教育委員会 1995 『函南町埋蔵文化財発掘調査報告書II』
- 函南町教育委員会 1999 『函南町埋蔵文化財発掘調査報告書V』
- 函南町誌編集委員会 1974 『函南町誌』上巻
- 三島市教育委員会 1989 『安久遺跡』
- 三島市教育委員会 1991 『安久沓形遺跡』
- 三島市教育委員会 1993 『金沢遺跡』
- 三島市教育委員会 1996 『西大久保・西大久保・奈良橋向遺跡』
- 三島教育委員会 1992 『長伏上塩辛田遺跡』
- 静岡県 1990 『静岡県史』資料編1 考古1
- 静岡県教育委員会 1986 『駿河・伊豆の横穴群』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993 『御殿川流域遺跡群I』



1	八ツ渕	11	上原	21	大竹上原	31	大土肥墳B	41	大塙中島	51	柏谷横穴D
2	井源	12	三本松A	22	大竹浜井塙	32	町屋	42	中島下岡台	52	柏谷横穴E
3	仁田坂	13	三本松B	23	御沢	33	寺尾源	43	安久雀形	53	台の山横穴
4	仁田館	14	下人原	24	向原	34	平井向原	44	安久典座敷	54	下ノ谷戸横穴
5	五反田	15	大双田	25	鎌	35	前堀	45	安久川崎原	55	岩崎横穴群
6	柳沢B	16	大林塙A	26	夏ノ沢	36	伊豆遼便病院敷地内	46	落合・藤原古墳群	56	日守中里横穴群
7	柳沢C	17	大林塙B	27	山本	37	半島西原田	47	丸山古墳群	57	八重瀬横穴群
8	柳沢D	18	伊山	28	十二天	38	八反難崩田	48	竹倉越古墳群	58	戸戸横横穴群
9	上黒岩	19	下伊山	29	浜井塙	39	舞名大曲田	49	黒原山古墳		
10	中原	20	神原	30	鐵治ケ久保	40	中島上岡台	50	柏谷横穴A		

第1図 遺跡の位置および周辺図 (1/50,000)

第3節 静岡県東部、北伊豆地方の水害史

北の富士、愛鷹山、北東の箱根連山、南の大城山に囲まれる当地域は、それらの丘陵を走る多くの水系と地下水脈に恵まれ、水の豊富な土地柄にある。それは、灌漑用水として、農業生産を支えてきたのみならず、当地域の風土、文化を生む基盤として、人々の生活と深い関わりを持ってきた。しかし、三、角州平野を自由蛇行して流れる狩野川及びその支流は、富士、大城山といった年間降水量が3,000mmを超える多雨地域に囲まれ、時として氾濫し、水害となって人々を苦しめてきたのも事実である。本遺跡群の調査は、来光川の河川改修工事に伴うものであり、ここで簡単ながら当地域の水害の歴史を振り返りたい（第2表）。

文献で確認できる最も古い記録は、和銅2年（709）のものである。「続日本紀」卷第5、元明天皇5月20日の条に「五月一（中略）一乙亥、河内、攝津、山背、伊豆、甲斐五國連雨損苗…」とあり、伊豆を含む5国で長雨により苗に被害が出たことがわかる。

また、宝亀10年（779）7月14日の条には、駿河国に大雨が降り、2郡の堤防が決壊し、家屋と口分田に被害が出たことが記されている。続く天慶元年（939）9月8日には、駿河国の洪水により、京への出発が遅れていた武藏国馬を牽き進めたという記録が「本朝世紀2」に残されている。上述の三例以外では、「続日本後紀」卷7に、承和5年（838）の7月から9月にかけて、遠江、駿河、伊豆を含む16国で雨が続いたという記録があるが、損害はほとんど無かったようで、水害とするのには疑問が残る。このように、古代における水害の記録は、ほとんど残っておらず、当時の様子を伺い知ることは難しい状況である。

中世に入ても、水害に関する資料の欠乏は同様で、わずかに『吾妻鏡』に確認できる程度である。文治4年（1188）を初めとして、数回に渡る記述があるが、どれも鎌倉を中心としたものであり、本地域に当てはめることは難しい。本地域に直接関係する記述としては、建仁元年（1201）江馬太郎（平素時）が前年の租を免じたこと、寛喜3年（1230）に、窮民を救うため、穀物を持つ富豪者に出米を出すことを命じたこと等があるが、いずれも水害によるものかどうかは判然としていない。

以降、江戸時代に至るまで、本地域の水害の状況を示す資料は、大平村（沼津市）に伝わる『大平年代記』が唯一のものと言える。延元元年（1336）8月3日の記録に「一八月三日、大水面 新地田畠悉く指埋一」とあるのをはじめ、安永8年（1779）に至るまでの記述があるが、これ以外の資料は皆無に等しい。

以上見てきたように、古代から中世における水害の記録は非常に少ない。『日本凶荒史考』によれば、625年から1886年の1,260年間に430回近く、実に3年に1度の割合で旱魃が起ったというが（註1）、中世はむしろ冷温多雨で、大雨、洪水による灾害が増えた時期とも言われている。また、鎌倉時代には『餓鬼草紙』のように、飢饉を題材とした絵巻物が多く作られている。これらが全て水害によるものとはできないまでも、記録以上の被害があったと考えて良さそうである。

これに対して、近世以降の水害の記録は非常に豊富である。特記すべき水害としては、まず、寛文11年（1671）の通称「亥の満水」が挙げられる。韭山町には、狩野川より2km離れた多田神社の石段の3段目までが浸水したという記録が残っているし、神社、仏閣の宝物、伝記、重要文化財などの多くが流れ、田畠は泥土と化し、人畜の溺死も相当數に昇ったという。『大平年代記』にも「死者七人、家潰十二軒、川欠破損八ヶ所、田畠荒地諸久、前代未聞の大水」とあり、その被害の大きさが想像できる。

東海道は、江戸時代を通して、最も大きな賑わいを見せた街道であり、その情景を主題とした街道絵図が多く残された。中でも、鑑賞用として描かれた岡屏風は、東海道のあるべき姿が表現される性格上、制作時の実景との間に矛盾のある作品が多い。その景観年代を知る一つの術として、六郷川（多摩川）

の架橋の有無が注目される。六郷橋は、増水の度に落橋を繰り返した為、貞永5年（1688）以降は、舟による「渡し」に切替えられている。これは、天保4年（1833）に発表された、初代歌川広重の「東海道五十三次之内 川崎 六郷の渡し」でも確認できる事実である。当地域との直接関係を見ることはできないが、江戸時代前半の水害の多さを物語る一つの押話である。

江戸時代前期後半から中期以降にかけて、特に水害が多いとされるのは、単に記録が多く残されているという物理的要因と、天候が不順だったという自然的要因にとどまらず、人的要因にも原因を求めるべきである。それは、木材の需要の増加に伴う森林の伐採によるものである。慶長11年（1606）に江戸城の築城を開始してから、明暦3年（1657）の明暦の大火の復旧までの約60年間の木材の需要は、それまでとは比較にならないほどあったという（註2）。

特に、明暦の大火による江戸の町の被害は凄まじく、その復旧に要した木材の需要も相当なものであったはずである。1月18日、本郷本山の本妙寺から出火した火は、江戸城大守闇、大名、旗本屋敷を始め、300以上の寺社、60を超える橋、800余町の町に飛び火し、江戸の町の半数以上を焼き尽くす大災害をもたらした。

これに対して、幕府は、木曾、伊那、飛騨、土佐、東北から急速木材を航漕させた他、蝦夷にまでその資源を求めたという（註3）。『駿東郡誌』に、「富士及沼野、愛鷹山等が、徳川時代の幕府直轄の御林とされていた」とあり、江戸にも近い本地域の木材が大量に使用されたことが想像できる。

この木材の需要の増加と水害の関係は、全国的な問題で、幕府の懸案とするところでもあった。貞永元年（1684）には、特に水害の酷い淀川、大和川筋の諸大名に対して、山林を切り開いた後の、畑の作付けを禁止して山林の保護を命じているし、明和元年（1764）8月には、京都、大坂、駿河城の10里四方と江戸城下四方の御林山からの、御用木以外の伐採を停止している。一方で、宝曆4年（1754）の記録に、幕府直轄の代表的御林として、「豆州天城山」の名が挙げられており、当地域産の木林の需要の増加と水害との関係が想起されるのである。

また、水害を考える上で注目されるのは、飢饉との関係である。江戸時代を通じては、寛政、享保、天明、天保期にそれぞれ大飢饉が起こっているが、年表に示すようにこの時期には水害も多く起こっている。

享保17年（1732）に起きた大飢饉は、全国で265万人の人が飢餓に苦しんだと言われている。三島宿にも、「三ヵ年据え置き十五ヵ年賦返納の長期を以って、救済米（夫食）を借り入れ急場を凌ぐ」という記録があるが、本地域では「享保の連続洪水」と言われる程、江戸時代を通じても特に水害の多い時期であった。

天明の大飢饉は、浅間山の噴火に端を発し、同2年（1782）から7年（1787）にかけて、全国へ広がったとされるが、本地域でも、享保期同様、ほぼ毎年のように水害が起きている。

続く天保の大飢饉でも、同4年（1833）から7年（1836）の間に毎年水害が起きている。『増訂豆州志稿』によると、天保4年の5月から8月の4ヶ月間の晴天日は、僅か7、8日であったというからその異常気象ぶりが伺われる。このように、大きな飢饉が起きる時期には、必ずと言って良い程水害が起きており、これは、水害が人々の生活を左右する大きな要因であることを物語っている。

時期は前後するが、寛政3年（1791）に起きた大水害は、寛文11年の「亥の満水」に準え、「寛政3年亥の満水」と呼ばれている。南江間村（伊豆長岡町）の狩野川通りで、国役御普請所が大破したという記録がある他、各村々で被害が報告されている。中でも、蘿山村付近の記録によると、その増水は2丈3尺に及んだという（註4）。

さらに、幕末期、安政6年（1859）の「未の満水」は特記すべき大水害であった。6月24日の暴風雨によって、翌25日の早朝には大洪水となった。『田方郡誌』には、「山間の美田の多く浸地となり、水量

亥の満水に勝るとなす、神島より吉田の間、及、御門、白山堂、守木、共に「大湖の觀をなせり」とある。安政期は、連年水害が及んで「未曾有の大水害」と呼ばれる程水害の多く続く時期であった。寺家村では、同2年(1855)の「水害注進書」を始めとし、「大雨村々被害状況書上」(同3年)、「田植時大雨注進書」(同5年)、「大雨につき注進書」(同6年)などの記録が残されている。

近代、現代と時代は進んでも、水害の猛威は留まることを知らない。その記録は膨大に及ぶ為、ここに詳しく述べることができないが、大正時代、狩野川筋にある民家の2階の底には、水害時の脱出用の舟が吊り下げられていたという。また、各河川流域の村々では、7、8月のお盆の頃になると、麦などで作った大きなタイ(松明)に火を付けて川に流し、水難者の靈を弔う「川流し」「厄流し」という行事が広く行われていたという(註5)。

鎌倉時代の北条氏の手による守山開削といった河道整理や、江戸時代の江間太郎左衛門による開削計画など、各時代において堤防築造、放水路の開削は試みられてきた(註6)。

こうした治山治水事業は、昭和時代に各村々で組織された、治水工事を求める組合に受け継がれた。大規模な工事が進む一方で、住民の労力の提供などもあったようである。戦時中の中断や、戦後の物資不足などの糺余曲折はあったものの、各河川の改修、堤防は次第に整備されていく。それでも、大きな台風、集中豪雨などが起こる度に、狩野川及びその支流は氾濫を繰り返している。特に昭和33(1958)年9月26日の狩野川台風と昭和49(1974)年7月7日年の七夕豪雨は、その被害の大きさもあって、人々の記憶にも新しいところである。このように、本地域の人々にとって、水害は最も身近にある災害であると同時に、その生活、文化、民俗など様々な面に大きな影響を与えていているのである。

最後に、平成10年(1998)の「台風4号」による被害を簡単に記したい。8月27日から9月1日にかけての豪雨によって、函南町上沢地区では、来光川の右岸180m、左岸260mに渡り越水し、農地23.1ha、床下浸水136戸、床上浸水95戸、総額2億3,600万円という被害をもたらした。これに際して、静岡県では、河川災害復旧等関連緊急事業、災害復旧助成事業として、来光川の河川改修工事を計画した。本遺跡群の発掘調査は上記の計画に基づくものであることを明記して本節の結びとする。

註

- 1 静岡県 1992 『静岡県史』別編2 自然災害史
- 2 所三男 1980 『近世林業史の研究』
- 3 所三男 1980 『近世林業史の研究』
- 4 三島市誌編纂委員会 1959 『三島市誌』下巻 816頁
- 5 静岡県 1992 『静岡県史』別編2 自然災害史
- 6 建設省沿津工事事務所 1976 『狩野川放水路工事誌』 115頁

参考・引用文献

- 『本朝世纪2』
- 『田方郡史』
- 『駿東郡史』
- 『続日本記 卷第五』
- 『日本凶荒史』
- 『太平年代記』
- 『増訂豆州誌稿 伊豆七島志』 長倉書店
- 吉川弘文館 1974・1975 『吾妻鑑 第1~第4』 新訂増補国史大系普及版

第2表 静岡県東部・北伊豆地方を中心とした水害史年表

和銅2	709	5月20日、河内、攝津、山背、伊豆、甲斐の5国、連雨により苗に被害 (『続日本紀』)
宝亀10	779	7月14日、大雨、2郡ノ堤防が決壊、家屋、口分田ニ被害 (『続日本紀』)
天慶元	938	9月8日、駿河国の洪水で京への到着の遅れた武藏国の馬を牽き進めた (『本朝世紀2』)
延元元	1337	8月3日、大水により新地田畠埋まる (『大平年代記』)
3	1340	5月、満水、3R~8Rの浸水。以降5年間數度の出水 (『大平年代記』)
貞治元	1362	7月、出水、以後5年まで毎年出水 (『大平年代記』)
6	1367	8月、14~15日閻水が引かず、一面海の如し (『大平年代記』)
応永元	1394	大平村、出水 (『大平年代記』)
14	1407	大平村、満水 (『大平年代記』)
18	1411	秋、出水 (『大平年代記』)
	32	1425 満水、江尻橋、大橋が流失、田畠荒廃 (『大平年代記』)
康正元	1455	満水、作物皆損 (『大平年代記』)
寛正2	1461	出水、狩野川筋替る (『大平年代記』)
3	1462	満水、江尻橋、大橋流失、田畠荒廃 (『大平年代記』)
4	1463	遠江東大寺領大岡洪水損毛 (『御殿川流域遺跡群I』)
5	1464	秋、大雨により崩れ (『大平年代記』)
文明4	1472	日損水損で指損 (『大平年代記』)
5	1473	日損水損で指損 (『大平年代記』)
16	1484	秋、豆州堺(境)川、狩野川急水7人流死、作物損失失 (『大平年代記』)
長亨元	1487	3度の出水 (『大平年代記』)
2	1488	大水により川除普請ができない (『大平年代記』)
明応元	1492	度々の出水 (『大平年代記』)
天文6	1537	度々の山水 (『大平年代記』)
大正17	1589	8月13日、大雨が長く降り山が崩れる (『大平年代記』)
慶長14	1609	駿河国、大風雨、洪水、西国東国いずれも同じ (『当代記』)
15	1610	駿河国、大風雨、洪水、西国東国いずれも同じ (『当代記』)『徳川実記』
16	1611	永明寺堂宇流失 (『静岡県史』自然災害史年表)
寛永5	1628	8月、大水により田畠破損、川筋通荒地となる (『大平年代記』)
8	1631	8月、伊豆国洪水 (『増訂豆州志稿』)
13	1636	加殿村、湯ヶ島村で田地が荒川となる (『御殿川流域遺跡群I』)
慶安3	1650	9月、洪水 (『御殿川流域遺跡群I』)
5	1652	6月11日、大雨 (『御殿川流域遺跡群I』)
承応2	1653	8月、霧雨により満水 (『大平年代記』)
3	1654	出水、塚本村、御園村の田畠欠落 (『大平年代記』)
明暦3	1657	上之郷、北条、江間村等急水、麦流失、上流より麦ト死体が流れてくる (『大平年代記』)
万治2	1659	付荒、水入、年貢減免 (『塩山町『土屋文書』』)
3	1660	4月、満水により上之郷、北条、江間村で麦が流失 (『大平年代記』)
寛文2	1662	東海道、関東で洪水 (『徳川実記』)
6	1666	度々出水、田畠小物が皆損 (『大平年代記』)
11	1671	8月27日、「亥の満水」狩野川より2kmの多田神社の石段3段目まで浸水 (『塩山町『与五沢家文書』』)
延宝8	1680	長崎村、加殿村、湯ヶ島無駄で付荒川急により年貢減免 (『御殿川流域遺跡群I』)
元禄元	1688	7月22日、「辰の満水」田畠の荒廃いちじるしい (『三島市史』下)
2	1689	大水 (『塩山町誌』5・下)
3	1690	大水 (『塩山町誌』5・下)

元禄5	1692	大水により川除土手破損 (『大平年代記』)
6	1693	4月、大水 (『函南町誌』下)
7	1694	4月2日、大水 (『御殿川流域遺跡群I』)
9	1696	長崎村、湯ヶ島村で水損により年貢減免 (『御殿川流域遺跡群I』)
11	1698	60日間に渡り雨、川が氾濫、山崩れがおこる (『函南町誌』下)
12	1699	狩野川溝水、大平村田畠皆無同然 (『大平年代記』)
13	1700	7月、出水により堤防38ヶ所が破損 (『大平年代記』)
14	1701	狩野川洪水、北伊豆入りで年貢減免 (『蓮山町『与五沢家文書』)
宝永2	1705	長崎村、湯ヶ島村、水損により年貢減免 (『御殿川流域遺跡群I』)
7	1710	8月出水 (『大平年代記』)
正徳元	1711	水損、虫食により不作 (『大平年代記』)
2	1712	北伊豆大水 (修善寺町『小川文書』)
4	1714	8月8日、大風雨、加殿村で夫食拌柵 (『蓮山町誌』5・下)
5	1715	湯ヶ島村で水腐、年貢減免 (『御殿川流域遺跡群I』)
享保元	1716	御門、田原、白山堂、守木村で大風雨不作 (『蓮山町誌』5・下)
3	1718	9月12日、風雨激しく箱根山の損傷甚だしい近衛う不口、二日間関東行きを遅らせる (『三島市史』下)
6	1721	湯ヶ島村で水腐 (『蓮山町誌』5・下)
7	1722	5月、大水 (『増訂豆州志稿』)
8	1723	8月18日出水「亥の満水に近い増水」 (『函南町誌』下) 11月、辰雨により、田畠冠水 (『函南町誌』下)
12	1727	秋、狩野川溝水で川除土手所を破損田畠不作 (『大平年代記』)
13	1728	洪水 (『函南町誌』下)
15	1730	加殿村で風水損15石余 (『蓮山町誌』5・下)
16	1731	加殿村で風水損19石余 (『蓮山町誌』5・下)
17	1732	春、出水により土手少々破損 (『大平年代記』) 村方相談の上、自前でも修繕することを決める (『大平年代記』)
享保19	1734	8月8日、大水 (『大平年代記』)
元文2	1737	長崎村で大豆水腐 (『蓮山町誌』5・下)
延享2	1745	5月、桑原村で大南洪水 (『蓮山町誌』5・下)
4	1749	6月4日、風雨強くなり大水となる (『函南町誌』下) 8月、大水 (『大平年代記』)
寛延元	1748	6月4本、風雨洪水 (『増訂豆州志稿』)
2	1749	8月、剛氷により大水、所々で破損 (『大平年代記』)
宝曆元	1751	6月25、27日「未の荒」大雨で洪水、狩野川も氾濫 (『函南町誌』下)
7	1757	4月末～5月7日まで雨、大洪水となる。 (『函南町誌』下)
9	1759	7月17日、大洪水、死者多数 (『函南町誌』下)
12	1762	大水も秋作には障りなし (『大平年代記』)
13	1763	5月21日夜、大水川欠 (『蓮山町誌』5・下)
安永元	1772	伊豆大風、三日間雨を伴い吹き荒れる
6	1777	7月、大雨風で八ヶ橋 (南江間村) 落崩 (『御殿川流域遺跡群I』)
8	1779	8月24日より大雨、25日出水 (『大平年代記』)
		東海道、関東、奥羽で洪水 (『静岡市史』近世)
天明元	1781	7月2日、大雨風 (三島)、7月11日～12日大雨 (大野村)、 (『蓮山町誌』5・下) 7月、大雨風、田方地方、漬家1,300戸 (『田方郡誌』)

大明 2	1782	7月15日～19、大雨洪水（『増訂豆州誌稿』）
3	1783	春～秋まで長雨、（『増訂豆州誌稿』）
6	1786	7月17日～18日、28日、洪水9月大水洪水（『大平年代記』） 12月17日、関東筋、伊豆出水につき普請申渡（『蔚山町誌』5・下）
7	1787	長崎村で出水、不作届（『蔚山町誌』5・下）
8	1788	5月～6月、南天、不時の冷気、山本（蔚山）で麦不作（『蔚山町誌』5・下）
寛政 2	1790	狩野川洪水、（伊豆長岡町『津田文書』）
3	1791	4月、洪水、長崎村で大雨害状況注進8月、「寛政3年亥の満水」（『御殿川流域遺跡群Ⅰ』） 南江間村、狩野川通りで国役御普請所が破損（『蔚山町誌』5・下）
5	1793	6月、狩野川大満水（伊豆長岡町『津田文書』）
7	1795	狩野川度々出水、南江間村、御普請所少々破損（伊豆長岡町『津田文書』）
11	1799	4月12日、大雨洪水、（『増訂豆州誌稿』）
享和 2	1802	6月29日、大雨出水（冷川平井）（『蔚山町誌』5・下）
文化 3	1806	長崎村で水損（『蔚山町誌』5・下）
5	1808	原木村で水損（『蔚山町誌』5・下）
6	1809	秋、狩野川、天野村で洪水（『蔚山町誌』5・下）
7	1810	天野村、加殿村、洪水（『蔚山町誌』5・下）
10	1813	大風雨により、田畑作物皆無（小土肥『勝呂義文家文書』）
12	1815	修善寺氾濫、湯場で敷軒流失（『増訂豆州志稿』）（『修善寺町誌』）
13	1816	11月2日、伊豆で大洪水（『函南町誌』下）
14	1817	狩野川大風雨（伊豆長岡町『津田文書』）
文政 3	1820	8月、大風雨（『蔚山町誌』5・下）
6	1823	狩野川長岡付近で出水（伊豆長岡町『津田文書』） 奈古谷村で嵐水損、換見取（『蔚山町誌』5・下）
11	1828	水損虫付の被害（『蔚山町誌』5・下）
12	1829	南江間で出水（『御殿川流域遺跡群Ⅰ』）
天保 4	1833	露雨飢饉（『増訂豆州誌稿』）
5	1834	4月8日、明け方より大風雨洪水（『函南町誌』下）
6	1835	6月下旬、出水、換見取願（長崎村）（『蔚山町誌』5・下）
7	1836	伊豆、雨天多く飢饉（『増訂豆州誌稿』）
8	1837	洪水（『蔚山町誌』5・下）
11	1841	10月25日、出水（冷川）（『蔚山町誌』5・下）
12	1842	狩野川、御門、白山堂で大雨洪水（大仁町『勝村文書』）
弘化 3	1846	長崎村、大雨で難渋（『蔚山町誌』5・下）
嘉慶 5	1852	7月洪水、大雨大水洪水、沼津城破損（『静岡県の土木史』）
安政 2	1855	7月27日～28日、伊豆地方大暴風雨、反射炉大破（『田方郡誌』）
3	1856	県東部～江戸まで大風雨（『静岡県史』自然災害史年表）
4	1857	出水（寺家）（『蔚山町誌』5・下）
5	1858	6月23日、24日、大雨、大場川氾濫（『函南町誌』下）
6	1859	「未の満水」神島より吉田の間及び御門、白山堂、守木、一大湖の觀（『田方郡誌』）
万延元	1860	小作畠大水に付き被害（寺家）（『蔚山町誌』5・下）
文久 3	1863	2月6日大雨（『蔚山町誌』5・下）

第Ⅲ章 仁田館遺跡の調査

第1節 調査の概要

仁田館遺跡は調査区をA区、A区-2、B区、下水工区に区分して調査を行った。A区は半分を土置場とする都合から2分割して調査を行った。調査は平成12年8月から開始し、仮囲い後、表土である第Ⅰ層を機械掘削により除去し第Ⅱ層は人力掘削で行った。江戸時代後期の遺構を第Ⅱ層下位で確認し、調査を行った。また第Ⅲ層及び第Ⅳ層上面で中世～近世前半の遺構を調査した。調査区南西部において伝承どおり方形居館が存在したことが明らかになり、特に歓堀の発見は館の規模を確認することになった。また、A区の北端部では当初は館の北東隅が検出されると予想していたが、完全に低地と同じ堆積をしており、中・近世の遺構がほとんどないことが明らかになった。しかし、その堆積した河川の跡から20枚前後を一束としてまとまったこけら経が出土した。一緒に出土した陶磁器の年代から室町時代のものと考えられる。また北端に試掘トレンチを入れた結果、仁田坂遺跡などと同様の古墳時代・古代の包含層であることが判明し、この部分を調査した。発見された遺構はほぼ中・近世のものに限定され、礎石建物跡、掘立柱建物跡群（ビット群）、堅穴状遺構、井戸、土坑、溝、堀などである。遺物はこけら経、カワラケ、国産陶磁器、中国陶磁器、木製品（漆椀、曲物、横槌、桶他）、石製品（石臼、砥石、火打ち石他）、金属製品、錢貨が出土した。また、北東部で確認された古墳時代・古代の包含層では多量の土師器・須恵器が出土した。未調査区300m²は次年度に調査を実施した。

平成14年度は、未買収地であったA区-2を対象として、11月から3月にかけて調査を行った。歓堀を検出し、館の南西のプランを確認した。下水工区は、A区-2の北側に位置する調査区で、平成14年12月～平成15年1月にかけて調査を実施し、柱穴群を検出したものの、検出が予想された歓堀の続きは確認されなかった。周辺の表土を除去したところ、歓堀が、A区-2と下水工区の間で屈曲する形態であることが確認された。

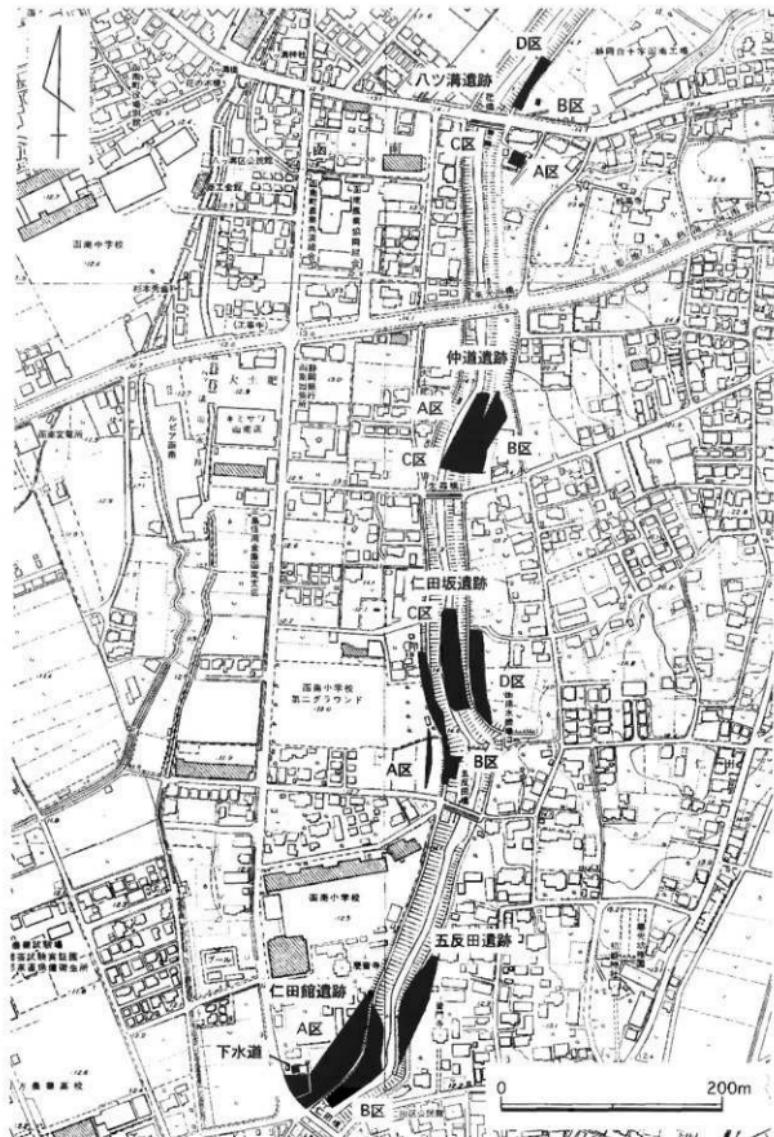
B区は平成15年度5月から8月にかけて調査を実施した。B区においては、中世～近世の遺物包含層の下層に縄文土器を出土する層を確認、人力掘削により遺物包含層調査を実施、縄文早期の上器、石器類を多数出土した。

第2節 土 層

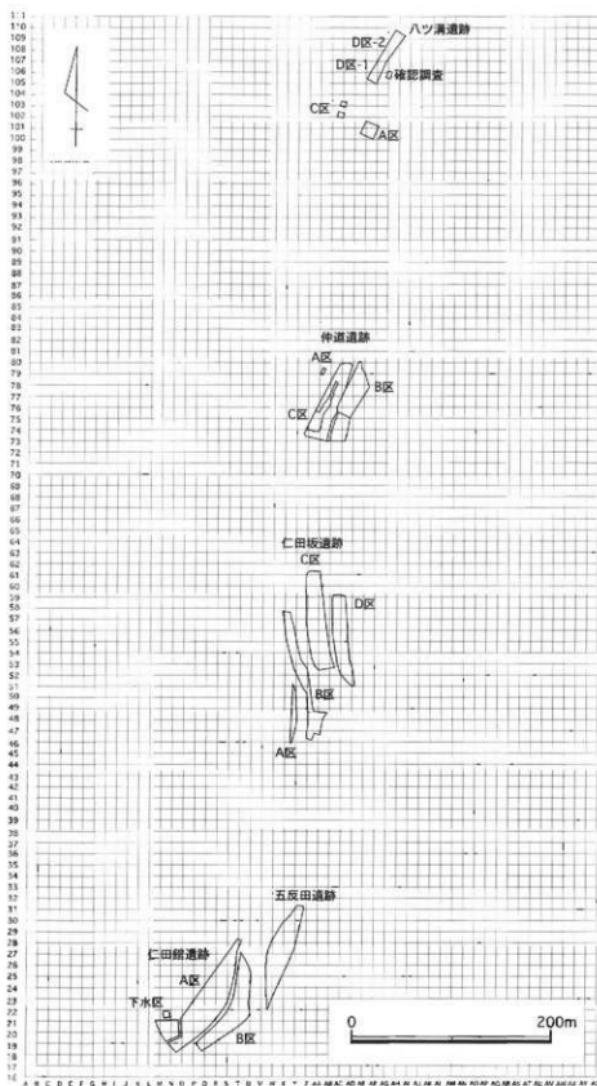
来光川遺跡群の発掘調査の土層は大きく4つに分けることができる。まず来光川河川敷低湿地部、次に仁田館跡部、そして扇状地微高地部、最後に埋没丘陵地部である。

仁田館跡部の土層として、第Ⅰ層は表土であり、黒色または黒褐色を呈する場所が多い。近年の耕作土でありきめが粗くしまりが弱い。厚さは10cm前後である。第Ⅱ層は褐色土であり、しまりはやや強い。仁田坂遺跡では明治時代の頃の土としているが、仁田館遺跡では中世～明治時代の包含層及び地業層と時代的に幅広くなっている。その違いは仁田館遺跡では宅地であったために基本的に土層は変わらず、堆積も薄いという性格の違いがある。しかし、他の来光川遺跡群のⅡ層と仁田館遺跡のⅡ層は見た目は質的には大差はない。調査区内の平坦な部分では20～50cmの厚さがある。第Ⅱ層の下部は江戸時代後期の遺構検出面でもある。第Ⅲ～Ⅶ層は基本的に存在せず、これらの土層が低地の堆積層であるため、微高地である仁田館遺跡には堆積しなかったと考えられる。

第Ⅷ層は灰色の砂質層である。硬化し粘板岩状になっており、板状に剥離する。無遺物層であり、仁



第2図 来光川遺跡群調査区位置図



第3図 来光川遺跡群グリッド配置図

来光川遺跡群の基本土層

- I : 黒色土層
- II : 褐色土層
- III : 赤色粘質土
- IV : 底褐色粘質土
- V : 黄褐色・灰色沙層
- VI : 灰色砂層
- VII : 灰色・暗褐色粘質土
- VIII : 黑色砂層
- IX : 赤峰のある黄褐色粘質土
- X : 黑色土層
- XI : 黑色土層
- XII : 茶褐色土層
- XIII : 淡黄灰色土層
- XIV : 黑色土
- XV : 淡黄色ローム層

表土及び底土層、焼地の耕作土
近代の古い段階で田を埋めた可能性がある。仁田経道跡・五反田遺跡では中世～明治時代の遺物包含層及び地基層
径2~3mの赤色スコリアを含む。水田の土である可能性がある。中世後半～江戸時代の遺物包含層。

Ⅲ層からスコリアを含むものに近い。場所によってⅣ層と同化する。中世の遺物を特に含む。

鉄分の豊富な場合がある。古墳時代の遺物を少量含む。奈良・平安時代前後の堆積と考えられる

木目の無い砂及び小粒の小石が主。弥生中期～古墳時代の遺物包含層。

無遺物層でしまりは極めて強い。

粘土岩状に硬化し板状に剥離する。無遺物層で斜面堤主流に比定される。

仁田経道跡・五反田遺跡では、多くの遺物がこの層に盛り込まれている。中世～江戸時代の堆積換出層。

Ⅸ層の中間層として2~4寺に渡りⅩ層。仁田経道跡・五反田遺跡では、Ⅸ層上部がなくなり、一見Ⅹ層の下にⅨ層が確認されることがある。

X : 径1mm以下の白色バニス（カワゴ平バニス）を含む。縄文早期の遺物包含層。富士墨色土（F B）～Kuに比定される。

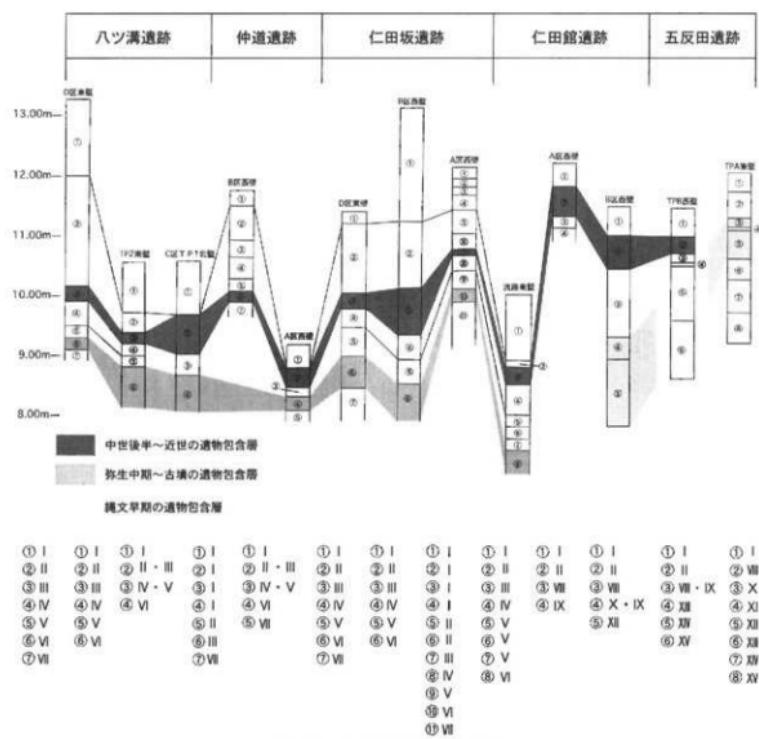
XI : 層に似るがバニスが認められない。縄文早期の遺物包含層。富士墨色土（F B）～Kuに比定される。

縄文中期の遺物包含層。富士墨色土（F B）～Kuに比定される。

休場層（Y L）～B B1に比定される。

B B1～第三スコリア層に比定される。

第三スコリア層～BB2, BB3に比定される。



第4図 来光川遺跡群基本土層図

田館遺跡内の多くの遺構がこの土層に彫り込まれており、中世～江戸時代前期の遺構検出面である。第IX層は赤みがかった黄褐色粘土質で粘土層である。第VII層の間にはさまれ5～10cm位厚さがある。第VI層の上部がなくなり、第IX層の中間層として2～4次にわたって帯状に入っている。それごとに番号も第X層以降をつけなければいけないが、質的にまったく同じためすべて第IX層として扱った。仁田館遺跡内では第VII層の上部がなくなり、第IX層が第II層の下に確認されるケースがあるが、その場合は第IX層の下に第VII層があるという一見逆転したような形になる。第VII層、第IX層は御殿場泥流に起源を持つ層と考えられる。御殿場泥流は、約2,500年前に発生した富士山の山体崩壊による岩屑堆積物が、洪水堆積物となり流下したとされている（註1）。

仁田館B区の一部では、VII層、IX層の下部に、縄文早期の土器を出土する黒色土層が確認された。この層は更に3層に分層できるが、白色軽石が認められる層をX層、認められない層をXI層、黄茶褐色～茶褐色を呈する層をXII層とした。X層に認められる白色軽石は、径1mm以下の中微細なもので、約3,000年前に噴出した天城カワゴ平バミスである。さらに下部には淡黄灰色を呈するXIII層、黒色を呈するXIV層、淡黄色ロームであるXV層が確認された。また、XIV層とXV層の中間に、スコリア層の凝集が認められた。これらは、本来、遺跡周辺の丘陵地で確認される層で、これらは、本来、遺跡周辺の丘陵地で確認される層で、XI～XII層はFB（富士黒色土）-Ku、XIII～XIVの中間までがYL（休場層）-BB1、XIV中間～XV中間までがSC III（第IIIスコリア）-BB2-BB3、それ以下が上部ロームの最下部に比定される。

また、B区の東側（河川側）は、現代の護岸工事によって中～近世の遺物包含層、遺構検出面層、縄文早期の遺物包含層が削除され、河川堆積層が自然堆積する様子と盛土によって埋められている様子が確認された。

註

- 宮地直道 1984 「富士火山御殿場岩屑流の分布と堆積物の特徴（演旨）」、火山、29, 145.」

第3節 仁田氏について

仁田館遺跡は、鎌倉時代、源頼朝の家臣として活躍した、仁田四郎忠常及びその後承の居館跡である。仁田氏は、当地域の該期の歴史において重要な役割を果たしたばかりでなく、その後も当地域の発展に様々な面で貢献している。ここで簡単ではあるが仁田氏の歴史を振り返りたい。

仁田四郎忠常以前の仁田氏の系譜について、太田亮氏は『姓氏家系大辞典 第3巻』において、藤原家南家、天野氏氏族と位置付けている。これは、『尊卑分脈』にもその名の見える、藤原為憲のことと考えられる。為憲は、天慶年間（938～947）に達江守に任じられたことのある人物で、木口助であったことから、その工の字と藤原の藤の字をとて工藤の姓を名乗っている。以後、為憲流からは伊豆押領使、駿河守に就く人物も多く、また、当地域周辺に居を構えた、狩野氏、天野氏、河津氏などの東国武士団を多く輩出している。

仁田四郎忠常は、仁安11年（1167）4月10日、仁田村に生まれたと伝えられる（註1）。兄に次郎忠俊、三郎忠次、弟に五郎忠正、六郎忠時がいたとされ、確認できる限りでは三男となるが、四郎を名乗ったところをみると四男であった可能性が考えられる。忠常の文献上の初見は『保元物語』（註2）で、狩野茂光が、（1170）に源為朝を討ったときの從軍に「新田四郎」の名がみえる。同様の記述は、『増訂豆州誌稿』（註3）にも確認できるが、生誕年を仁安11年とすると、喜応3年の時点では、忠常の年齢は僅か三歳となり、文献と伝承に齟齬が生じる。文献に登場するのは、あるいは父親とされる仁山忠行である。

可能性が考えられよう。中世前半の地方豪族の系譜を特定する事は仁田氏に限らず難しい状況にあると言え、それ故に忠常以前の系譜の解明は、仁田家の歴史にとどまらず、当地域の中世以前の歴史を明らかにする上で大変注目されている。

忠常は、治承4年（1180）の「山木攻め」に参加、平兼隆、堤信達の館を攻め一番乗りを果たした。しかし、続く「石橋山の合戦」では、大庭景親、伊東裕親の大軍に破れ敗走を余儀なくされる。石橋山に破れた頼朝が房州に渡ると、忠常もこれに従い、藍沢街道では大庭景親を降伏させるという戦功をあげた。元暦元年（1184）1月には、勢多で木曾義仲と戦い、さらに2月の「一の谷の合戦」にも参加。9月には、源範頼とともに西海に向かっている。文治元年1月には九州に入り太宰少弐と戦い、7月には九州一円を平定した。同5年（1189）には奥州征伐に従軍、建久元年（1190）11月、頼朝に従い入京、その際52番手を勤めている。また、11月の石清水八幡参詣の折りには次御車役に任せられた。このように、仁田四郎忠常は鎌倉幕府の成立に際して、平氏追討に尽力し、後に阿多美（熱海）郷の地頭職にも就き、鎌倉にも邸宅を構える御家人であった。

幕府成立後、建久4年（1193）下野国須野の狩倉では駒馬衆22人の1人に選ばれた。同年5月「富士の巻狩り」では、その日一番の獲物となる猪を勇敢に退治し、頼朝からその勇気を礼賛され、富士山麓に500町歩の土地を下賜されている。また、同日の「曾我兄弟の仇討ち」で、兄十郎祐成を討った話はつとに有名である。「富士の人穴探索」の話も地元では有名で、富士山麓の洞穴を從者と共に探索している。この逸話は、後に『北条九代記』「富士人穴草子」と受け継がれていき、次第に富士浅間信仰、仏教説話と混合し怪奇話として後世に伝えられたようである。また、忠常に関する記事は『伊豆鑑』「曾我物語」等の文献、鎌倉時代の歴史書として最重要なものとされる『吾妻鑑』（註4）にも登場している。さらに、尾形礼正の画、小学校唱歌「仁田四郎」等でも後世に伝えられている（註5）。

また、仁田家は古くから仏教に造詣が深い家柄であったようである。永仁6年（1298）の日興本尊分写帳（「北山本門寺文書」）の中に日興の弟子として当地の土佐ノ瀬があり、日興の第一の弟子として、新田四郎信綱の名がある（註6）。信綱は仁田家の出身と考えられており、同家と仏教の関係が伺われる。訓斎区の北側には、同家の菩提寺である慶音寺があり、その起源は天正年間まで遡るようである（註7）。

建仁3年（1203）、二代将軍頼家が病床に伏すと、一幅と千幅に地頭職を分割させようとする北条時政と一幡の外祖父である比企能員との間に対立が起こる。この将軍後継問題に端を発する「比企能員の乱」の混乱の際、忠常は兄弟と共に鎌倉で命をおとし、地方武士としての仁田家の歴史は幕を閉じることとなる。

中世後半～近世以前の仁田氏の動向について、これまで研究が進展しなかったのは、水害によって同家の文書の多くが消失しているためである。ここで、中世以降の当地域の歴史を振り返り、仁田家の動向を探ってみたい。

室町時代後半に入ると、当地域は、後北条氏の支配下におかれることとなる。「北条氏所領役帳」には、北条氏馬廻衆松田六郎康長の所領して、二十五貫文「仁田堀内分」という記載が残されている。また、「北条家朱印状 西原文書」には、永禄6年（1563）西原源太に「仁田郷」の内十貫文を給与し、さらに、同7年（1564）には、仁田郷善右衛門尉代官所から給米二十俵を増加、元亀2年（1571年）にも、給米二十俵・代方十貫文を給与したとの記載があり、後北条氏による支配が仁田館周辺に及んでいた状況が概観できる（註5）。

豊臣秀吉の小田原侵攻に対して後北条氏は、家康を介して、秀吉との講和をの道を探る一方で、当地域での防衛の基盤を固めていく。天正15年（1587）に中山城を普請すると、同17年（1589）には、秀吉の宣戰布告状を受けて伊豆東浦に陣営を発している。この時期には、先述の松田康長は中山城の城主となり敵情を報告している。秀吉軍の進軍の状況は、駿府城からの家康を先発隊として、秀吉軍も清水港

から上陸、現在の沼津市の三枚橋城、長泉町の長峰城で軍議を持ち、中山城、蘿山城を視察するなど、仁田館周辺で活発な攻防があった状況がみてとれる。実際に蘿山城は、織田信雄による攻撃をうけた他、「北条氏直感謝状 宇津木文書」には、仁田表において宇津木下総守氏久が敵兵を捕らえたとして賞状を与えたとあり、その岐路にある仁田館の動向が気になるところである。

さらに、先述の西原家は仁田家と外戚関係にあると伝えられること（註5）、また、『静岡縣家歴鏡』には、21代当主、仁田五兵衛の妻は元山中城主松田尾張守の娘であることから（註7）、近世以前、特に戦国時代の仁田家の動向については、間接的ではあるものの、後北条氏との関係を想起させる内容が多い。仁田家と後北条氏との直接的な関係を示す資料は現在確認されていないが、その可能性は否定できないと考えておきたい。

幕末から近代にかけては、再び歴史の表舞台に登場し、当地域の農村経済の振興と殖産興業の新興に旗手的な役割を果たしている。「仁田大八郎」という名は、第22代を初代として、代々当主が継承する名前で、全部で7人が大八郎を名乗っている（註5）。

第35代大八郎（幼名龍次郎 隠居後常種）（文政5年（1822）～明治31年（1898））は、明治2年（1869）祖父の職を継ぎ、総代名主となる。明治6年（1873）、伊豆生産会社を設立、天城山に寒天製造所を興し、寒天が伊豆の一大産物となるきっかけを創った。また、養蚕業にも力を注ぎ、昭和9年（1876）には蘿山製紙所を設立、子弟を上州（埼玉県）に派遣している。他にも裁茶、牧牛等の産業に力を注ぐ一方で、教育の普及にも積極的に貢献し、昭和9年の函南小学校の火災の際には私財を投じ同校の再興に協力している（註6）。

第37代大八郎（幼名甲子朗）（明治4年（1871）～昭和20年（1945））は、明治28年（1859）帝国大学農学部卒業後、蘿山中学校（現蘿山高校）の講師に就任、1896年には仁田信用組合（函南農協）を設立、組合長に就任するとともに、1926年には伊豆畜産販売購買利用組合を設立、組合長に就任している。自ら農村経営にあたる傍ら、子弟の教育の必要性を説き、旧方農林学校（現田方農業高校）を開校した。また、県東部地域で初となる電灯事業に参画、駿豆電気株式会社を設立、社長に就任、後の伊豆箱根鉄道の設立のきっかけを創った。昭和13年（1938）には、伊豆銀行（静岡銀行の前身の一つ）頭取に就任、さらに、昭和7年（1932年）衆議院議員選挙に当選し、政友会代議士として国政に参加している（註6）。以上、農業、酪農、産業、政治、経済、教育の各分野において光彩を放つ人物であり、地元では、忠常に匹敵する知名度を持つ人物である。さらに、仁田家からは、シェークスピアの翻訳家としては、最も古い一人に数えられる、仁田桂次朗（安政5（1858）～明治24（1891））など、様々な分野において優秀な人物を輩出している（註6）。

ここまで簡単ではあるが仁田家の歴史を振り返った。仁田家は中世および近世後半から近代において当地域の歴史におおきな足跡を残している。しかし、中世後半から近世中頃までの足取りについては、不明な点も多い。それ故に、本遺跡の調査は、仁田家の歴史を解明するにあたり大変重要であり、同時に当地域の歴史を明らかにする上でも注目されるところである。

註

- 1 函南町誌編集委員会 1974 『函南町誌 上巻』
- 2 柳町敏直 2002 『將門記・陣奥話記・保元物語・平治物語』日本文学全集41 小学館
- 3 1967 『増訂豆州誌稿 伊豆七島志』長倉書店
- 4 古川弘文館 1974・1975 『吾妻鏡 第1～第4』新訂増補国史大系普及版
- 5 小野眞一 1986 『伊豆武将物語』
- 6 静岡新聞社出版局 1991 『静岡県歴史人物事典』

参考・引用文献

- 長倉書店 1972 『静岡県駿東郡史』
千秋社 1995 『静岡県田方郡史』
黒坂勝美 1964 『本朝世紀』改訂増補国史大系第9巻 吉川弘文館
黒坂勝美 1966 『続日本紀』新訂増補国史大系第2巻 吉川弘文館
太田 亮 1963 『姓氏家家系大辞典 3巻』
吉川弘文館 1983 『尊卑文脈』
有朋堂書店 1927 『保元物語・平治物語・北条九代記』

第4節 遺構と遺物

縄文時代の遺構

集積遺構

Q-20・R-20グリッドで検出された。土坑を伴わず、レベル差を持っていない。規模は約5m×約4mで礫数は89個である。ほとんどの礫が受熱礫ではなく調理以外の機能を有すると考えられる。あるいは、一括で廃棄されたものである可能性も考えられよう。

縄文時代の遺物

仁田館遺跡では、御殿場泥流層（第VII・第IX層）の下部に堆積する黒色土層（第X層～第XII層）を中心約1,500点の縄文時代土器が出土した。その中心となるのは、早期後半の東海条痕文系と呼ばれる土器の一群である。そのうちの144点について以下のように分類して報告する（註）。本分類は、来光川遺跡群に所収され、本遺跡を上回る土器が出土した五反田遺跡を基準とした。したがってここで報告する本遺跡出土の土器は分類外面の一部に合致する。また、本遺跡出土の土器の外面には、褐鉄鉢（通称高師小僧）が付着し、顕著な凹凸を形成する個体が見られ、拓影に外面現されている場合がある。

I群 茅山上層式

II群 絆条体压痕文施文土器

III群 粘烟I式

A類 酒酒杯状突起を有するもの

- 1種 内面に横位の隆帯を貼り付けているもの
- 2種 内外面に刺突列を有するもの
- 3種 外面に刺突列を有するもの
- 4種 内面に刺突列を有するもの
- 5種 無文

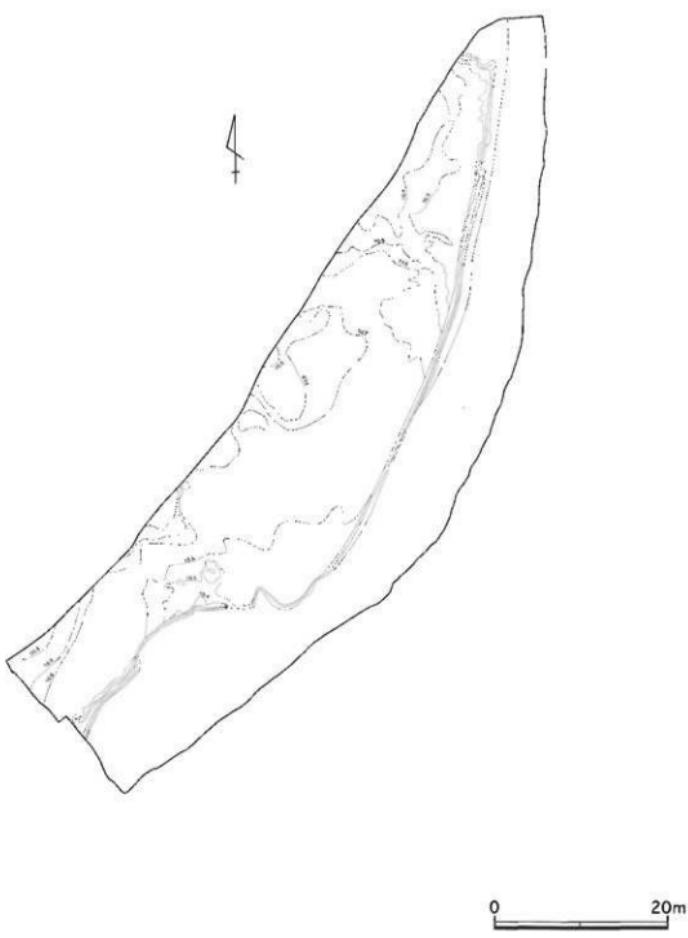
B類 肥厚した口縁を有するもの

- 1種 口縁の一部を肥厚させるもの
- 2種 口縁の全体を肥厚させるもの

C類 垂下降帶を有するもの

D類 口縁部破片

- 1種 内外面に刺突列を有するもの
- 2種 外面に刺突列を有するもの



第5図 調査区全体図B区

3種 内面に刺突列を有するもの

4種 無文

E類 胸部破片

IV群 粘烟II式

V群 上ノ山I式

A類 刺突列を有するもの

B類 無文

VI群 上ノ山II式

VII群 入海I式

VIII群 入海II式

IX群 打越式

X群 木島式

XI群 無文土器

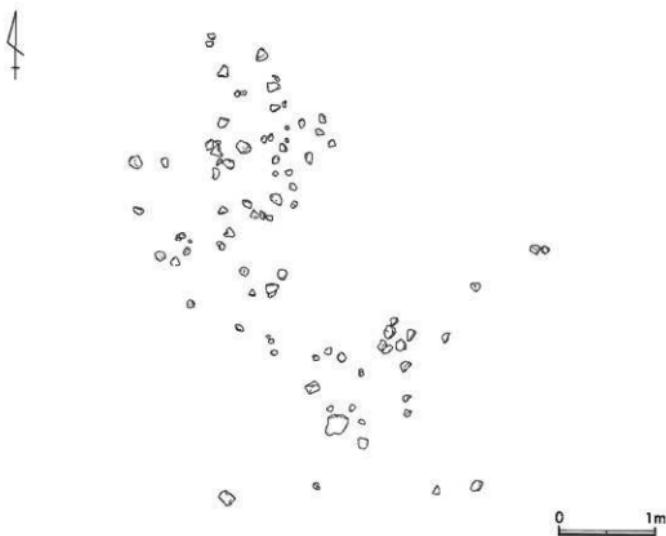
XII群 その他の時期に属する土器

I群土器 茅山上層（第13図1～4）

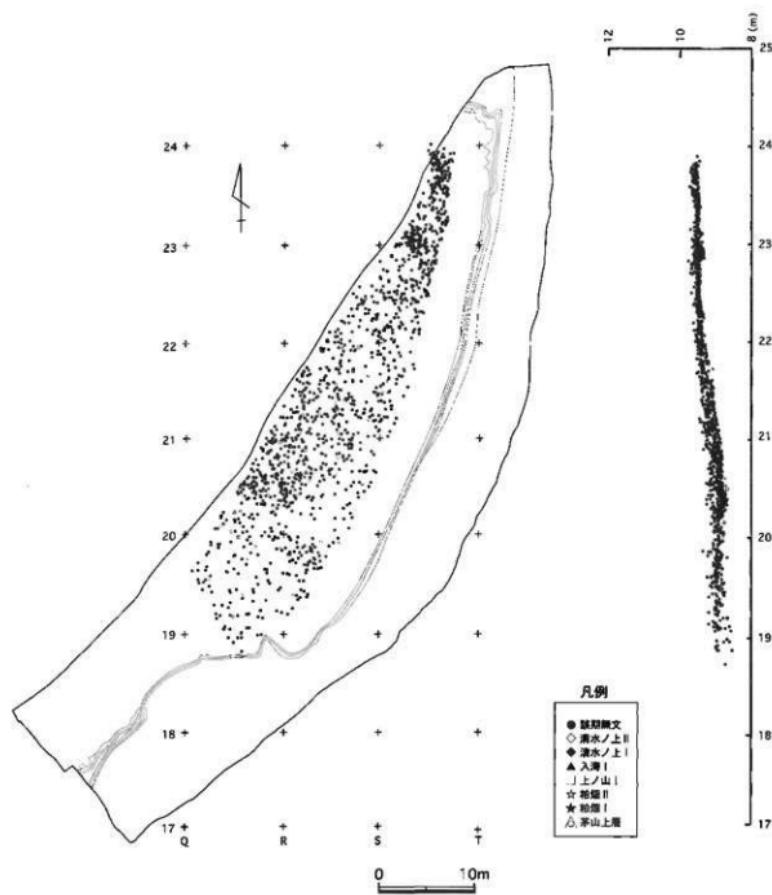
I群は茅山上層式とした。仁田館遺跡からは4点が出土した。第13図1は口唇部に刻みを有する。圓化できなかった無文土器の中に、I群土器に該当する可能性のある個体が含まれる。

III群土器 粘烟I式（第13図5～第15図26）

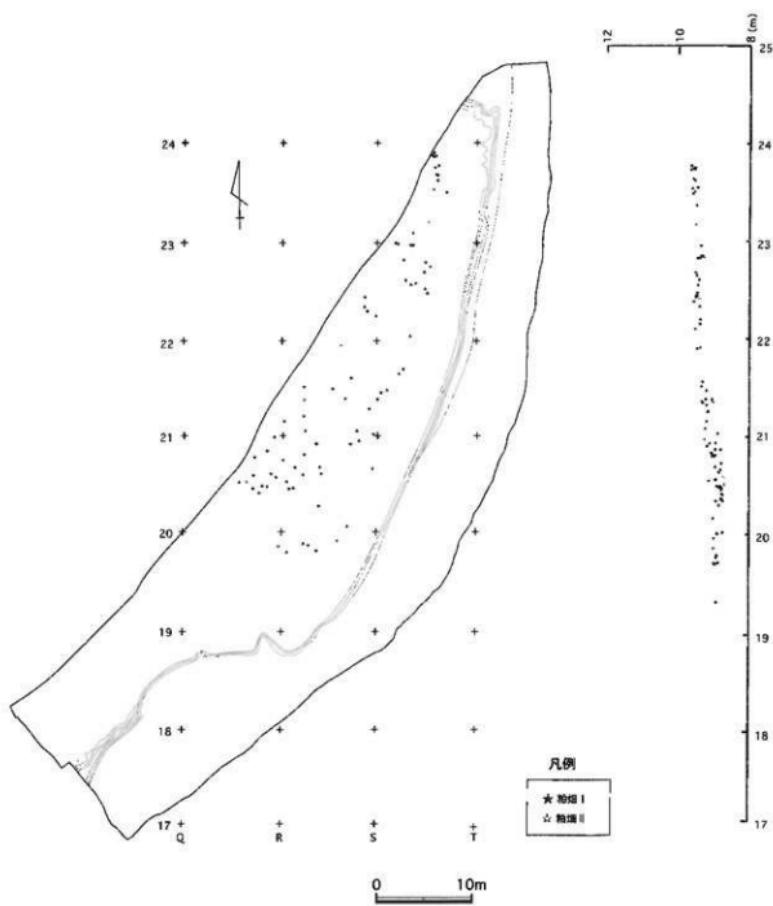
III群は粘烟I式である。III群土器は、A類は酒杯状突起を有するもの、B類は口縁を肥厚させたもの、C群は垂下隆帶を有するものに分類し、さらに必要に応じて細分類した。



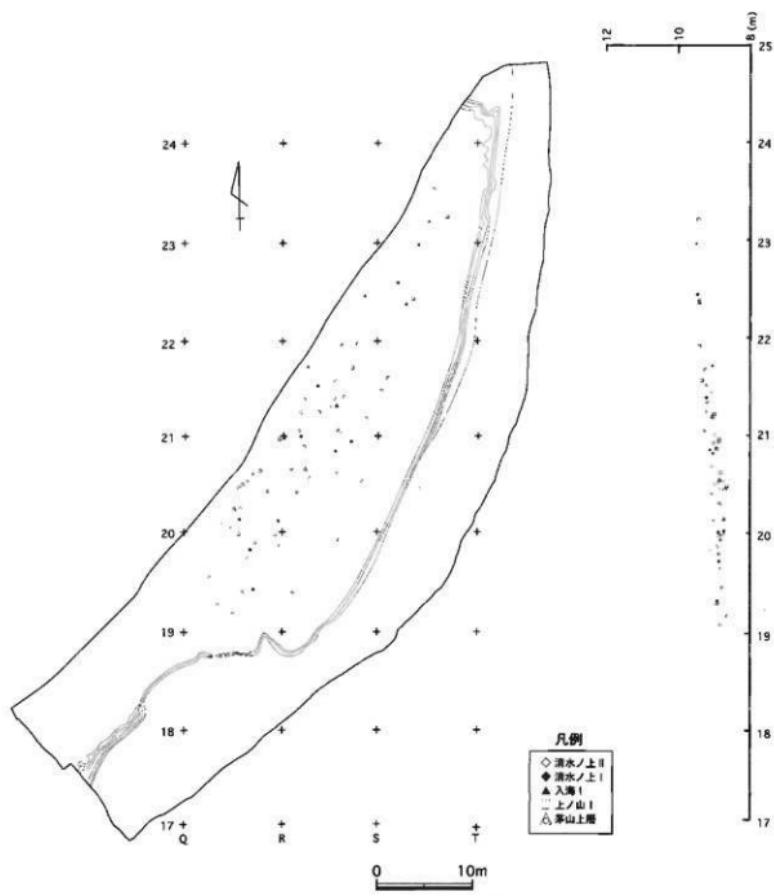
第6図 集石遺構 平面図



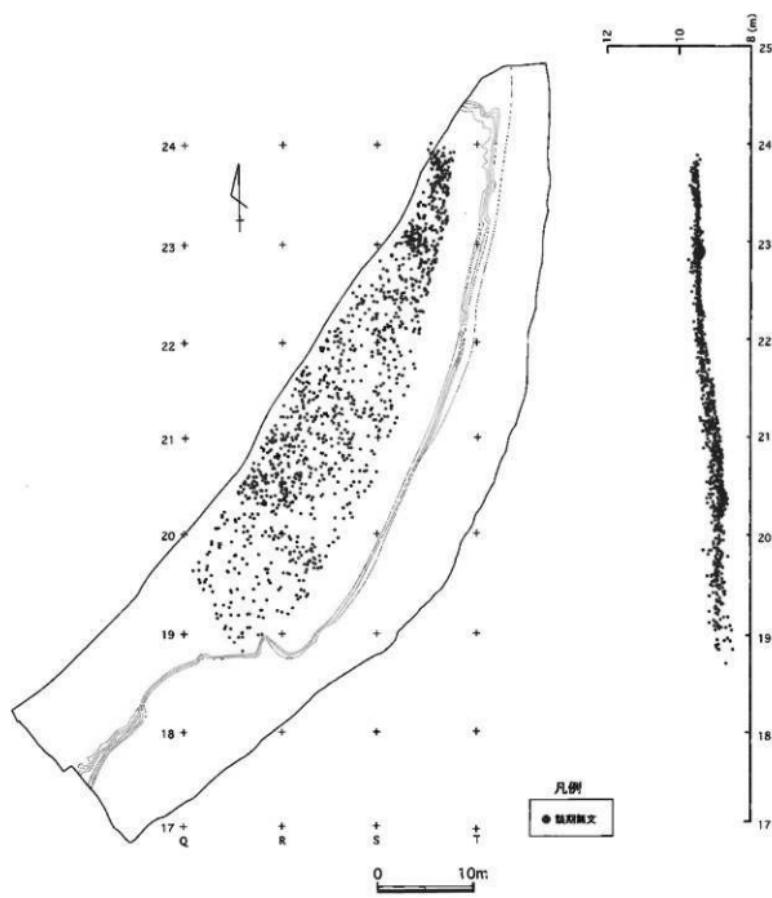
第7図 仁田館遺跡 縄文土器出土状況図①



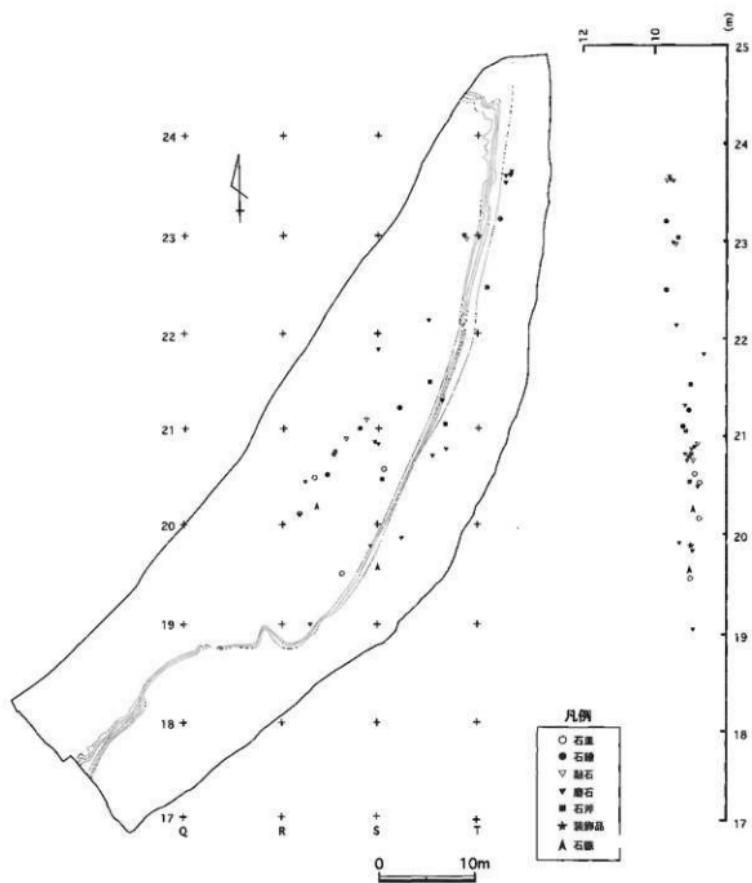
第8図 仁田館遺跡 繩文土器出土状況図②



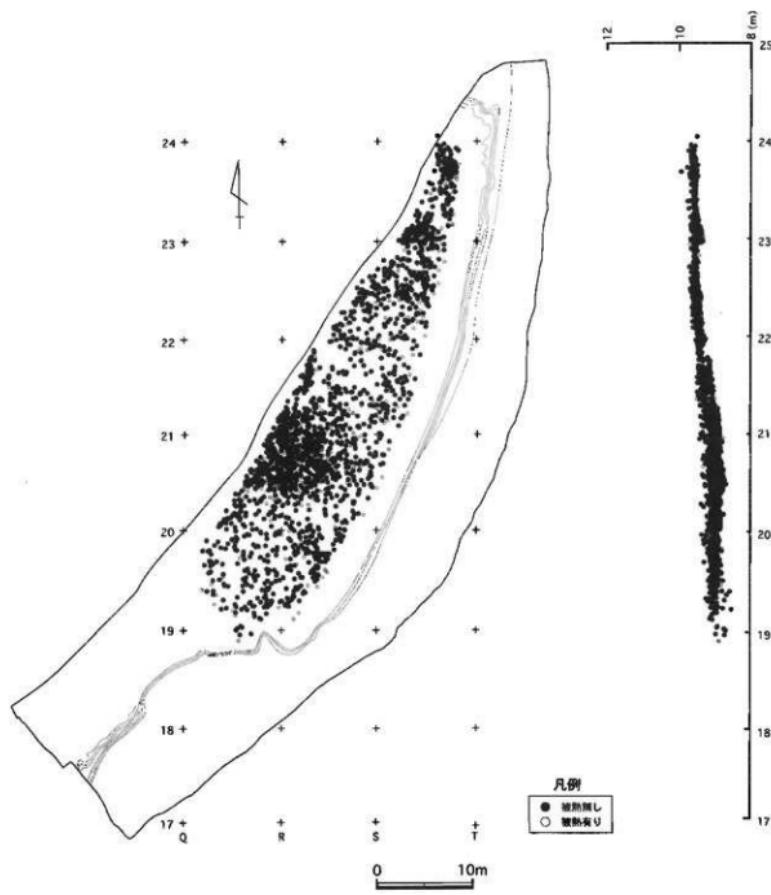
第9図 仁田館遺跡 繩文土器出土状況図③



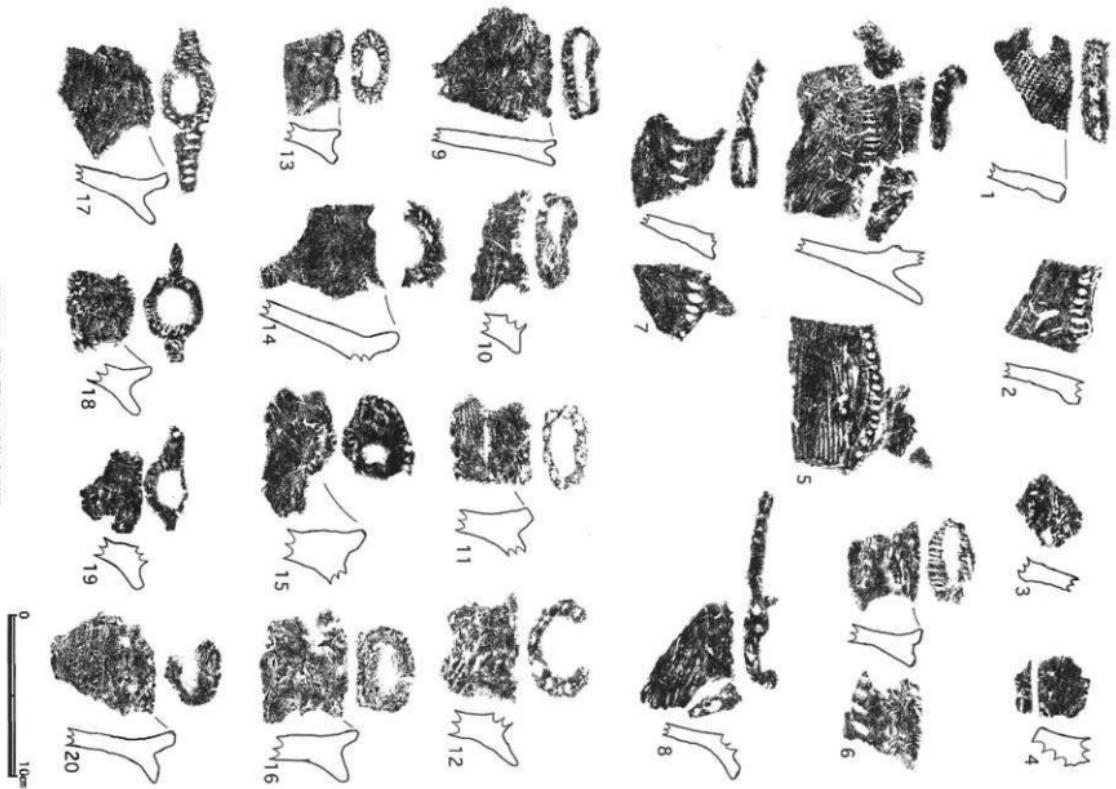
第10図 仁田館遺跡 繩文土器出土状況図④



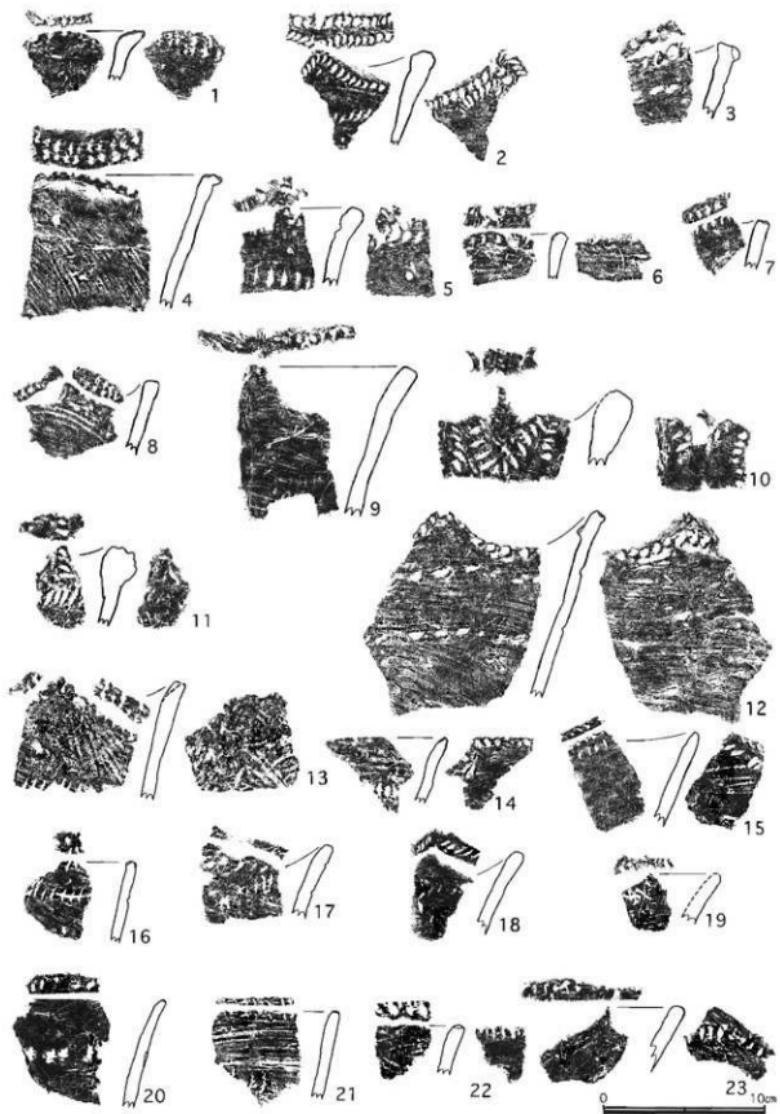
第11図 仁田館遺跡 石器出土状況図



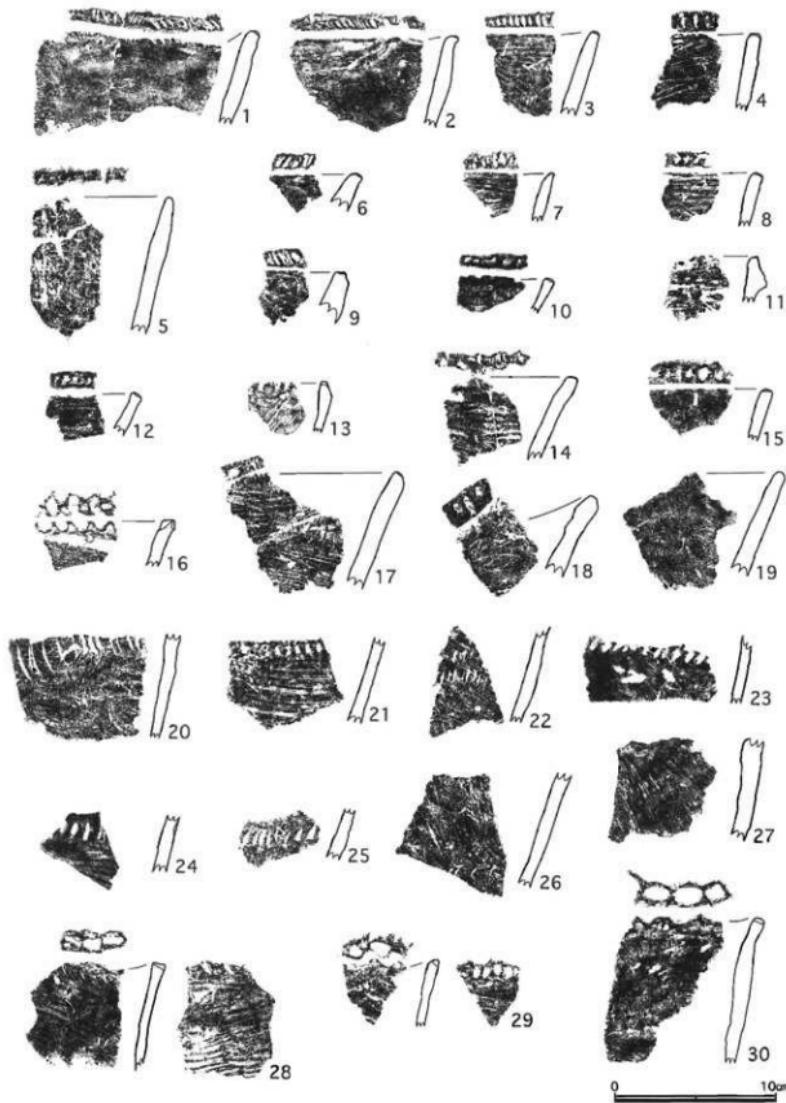
第12図 仁田館遺跡 破出土状況図



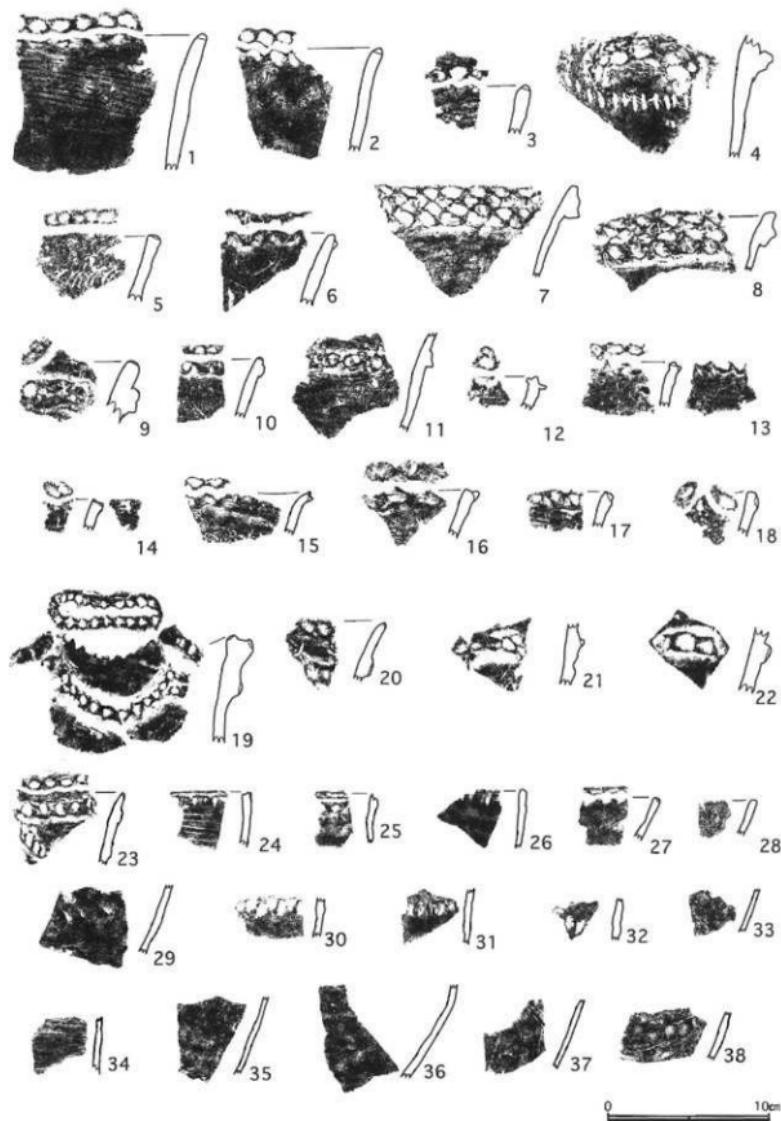
第13図 繩文層出土遺物実測図



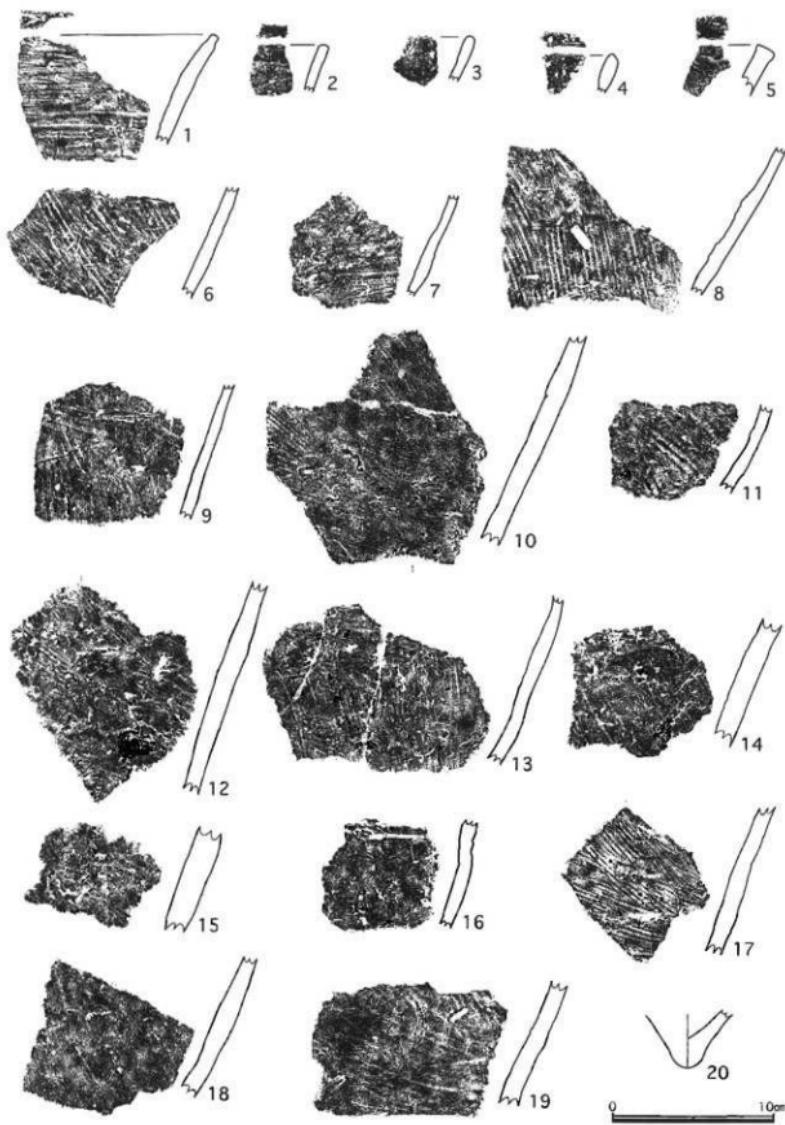
第14図 繩文層出土遺物実測図



第15図 繩文層出土遺物実測図



第16図 繡文層出土遺物実測図



第17図 繪文層出土遺物実測図

A類2種（第13図5～7）

A類2種は、酒杯状突起を有し、内外面に刺突列を施文するもので、第13図5～7が相当する。5は口唇部に刻みを有する。6・7はいずれもやや小型の酒杯状突起を持つ。

A類5種（第13図8～20）

A類5種は、酒杯状突起のみで、器面は無文、もしくは条痕が認められるものをまとめた。8・12は明瞭ではないものの条痕が認められ、17・18は口唇部に刻みを有する。

B類1種（第14図1）

B類1種は、口縁の一部を肥厚させたもので第14図1が該当する。1は内外面、口唇部に刺突列を有する。

B類2種（第14図2～9）

B類2種は、口縁の全体を肥厚させたもので、平縁（第14図4・5・6・9）と波状口縁（第14図2・3・7・8）が認められる。2は内外面に2条の刺突列を有し、さらに口唇部にも同様の工具により2条の刺突列を有する。4は器面に条痕が観察でき、口唇部には2条の刻みを有する。

C類（第14図10～11）

C類は、垂下隆帯を有するもので本遺跡では2点が出土した。10は内外面に縦位の刺突列を有する。

D類1種（第14図12～15）

D類1種は、口縁部破片で内外面に刺突のあるものをまとめた。12は波状口縁、内外面に口縁に沿って刺突列が巡り、さらに外面に横位の刺突列を2条有する。

D類2種（第14図16～22）

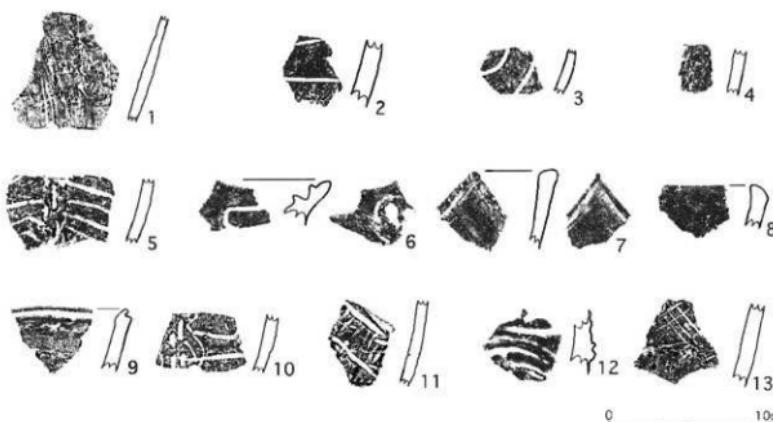
D類2種は、口縁破片で外面のみに刺突列を有するもので、20は貝殻復縁による横位の刺突列を有する。

D類3種（第14図23）

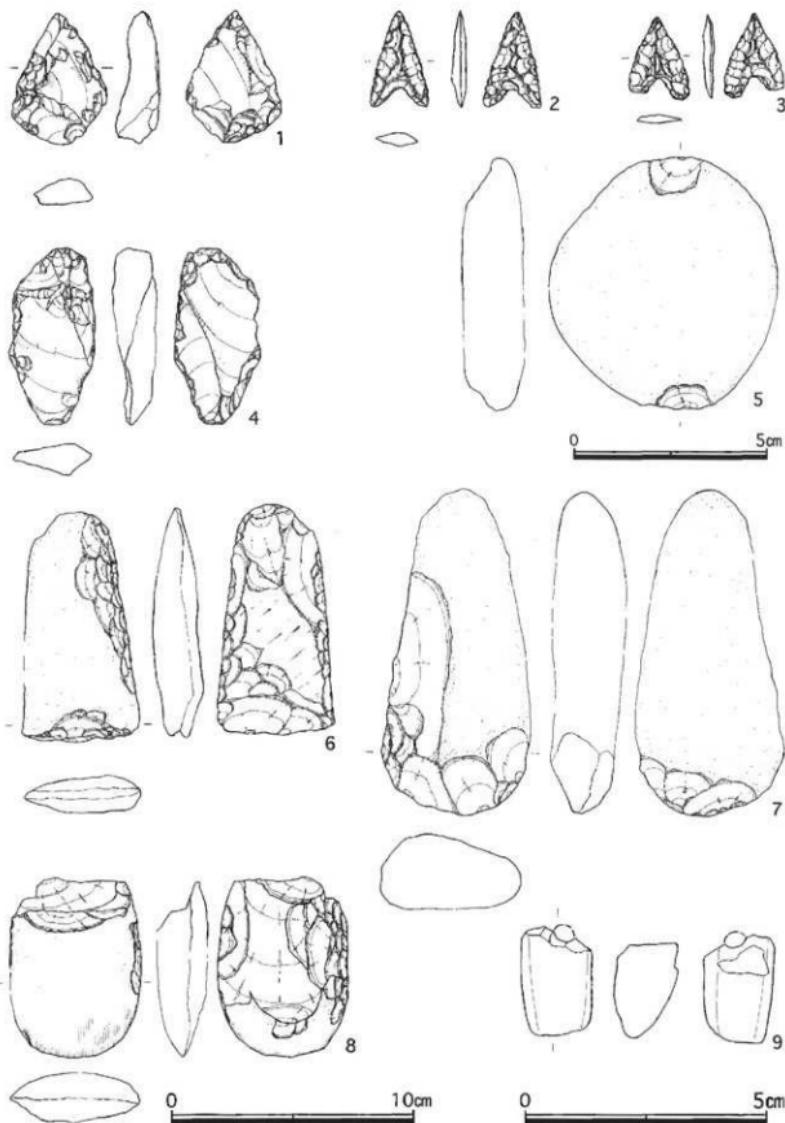
D類3種は、口縁破片で、内面のみに刺突列を有するもので、本遺跡からは1点が出土した。

D類4種（第15図1～19）

D類4種は、口部破片で内外面に刺突列がないものである。第15図1～16は平縁で、第15図17～19は波状口縁である。1・2は口唇部に爪形の刻みを有し、同一個体の可能性がある。



第18図 縄文層出土遺物実測図



第19図 仁田館遺跡 出土遺物実測図(石器1)

E類（第15図20～27）

E類は胸部破片である。20～25はいずれも外面に横位の刺突列を有し、26・27は胎土含有物、焼成、色調、から無文ではあるが鉛烟I式と考えられる胸部破片である。

IV群（第15図28～30・第16図1～6）

IV群は鉛烟II式とした。いすれも口唇部に連続押圧を施す。第15図28～30は横位の刺突列を有し、細15図1～3は無文である。4は胸部で、外面に部分隆帯を貼り付け、隆帯下部に横位の刺突列を施す。6は外面に横位、爪形の刺突列を1条有し、口唇部には円形の刺突列を有する。

V群（第16図7～18）

V群は上ノ山I式とした。5～9はいすれも横位の隆帯を貼り付け、上下交互押圧を施している。5は口縁部と隆帯が一体となり、3条の押圧が施される。

VII群（第16図19～22）

VII群は入海I式とした。19は酒杯状突起を有し、突起および口縁の口唇部に刻みを施す。外面には円形の隆帯を貼り付ける。

X群（第16図23～38）

X群は木島式とした。本遺跡出土の本群の土器は概して、指頭圧痕を明瞭に観察しうる個体が多い。23は、塩屋上層式とした。外面に2条の浅い隆帯を貼り付け、隆帯、口唇部に同様の工具により刺突列を施文する。また、24以降は清水ノ上式で、外面に横位の刺突列を有する個体と（23～32）無文（33～38）の個体とに細分される。

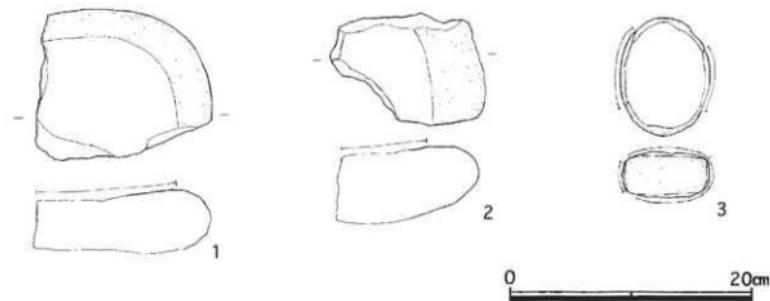
XI群（第17図1～20）

XI群は該期無文の一群をまとめた。1～5は口縁、6～19は胸部、20は底部である。6・8・17は条痕が顕著に観察できる。また、本遺跡出土の土器群は、にぶい黄褐・にぶい褐・褐・黒褐・赤褐・橙等の色調に大きく分類できる。

XII群（第18図1～13）

XII群はその他の時期の土器をまとめた。1は前期初頭の胸部破片、2・3は中期の土器で、2は2条の沈線を施文し下部の沈線の下には繩文が施される。4～7は後期初頭、8～11は後期前葉、12～13は後期後葉に比定される。5は横位の沈線を4条施文する。13は半截竹管状の工具により格子目状の文様を施文している。

（註）分類は本研究所技術作業員下島建弘が行った。



第20図 仁田館遺跡 出土遺物実測図（石器2）

第3表 遺物觀察表（縄文土器）

図版 番号	年代/形態	分類	型式	色調	胎 土	文 様
13 1 R-22 XII	—	下群	釜山型	2.5YR4/6C(赤黒)	径0.5~1mmの白、灰色粒子 輝石が多く含む	無文
13 2 Q-20 XI	—	下群	釜山上	SYR6/4C(赤黒)	径0.5~3mmの白、灰色粒子を多く含む	縫帶に刺突円内面
13 3 R-21 XII	—	上群	釜山上	2.5YR5/4C(赤黒)	径0.5~2mmの白色粒子を多く含む	無文
13 4 Q-20 XI	—	上群	釜山上	3YR5/4C(赤黒)	径0.5~2mmの白、白色粒子を多く含む	無文
13 5 Q-21 XI	田原A型2種	釜原1	釜原1	7.5YR3/5(赤黒)	径2mmの石英、白色粒子をやや多く含む 径0.5mmの黄褐色を少し含む 織維を含む 高部小瘤	酒杯状突起 刺突円外側1列
13 6 S-20 XII	田原A型2種	釜原1	釜原1	7.5YR3/5(赤黒)	径0.5mmの黃褐色をやや多く含む 径1mmの石英を含む 高部小瘤	酒杯状突起 壁面に逆続刺突 刺突円内面1列
13 7 Q-22 XII	田原A型2種	釜原1	釜原1	7.5YR6/4C(赤黒)	径1mmの石英を多く含む 径1mmの白色粒子 径0.5mmの輝石を含む	繩に逆続刺突 酒杯状突起 刺突円内面1列刺突起
13 8 Q-21 XII	田原A型5種	釜原1	釜原1	7.5YR4/4(赤黒)	径1mmの石英を多く含む 径0.5mmの輝石 径2mmの白色粒子を含む	酒杯状突起 壁面に逆続刺突
13 9 R-22 XII	田原A型5種	釜原1	釜原1	SYR4/5(赤黒)	径1~2mmの石英、白色粒子を含む 織維を含む 高部小瘤	酒杯状突起
13 10 S-25 XII	田原A型5種	釜原1	釜原1	7.5YR7/6(赤)	径1mmの石英 径0.5mmの輝石を含む 径1.5mmの白色粒子をやや多く含む	酒杯状突起
13 11 R-21 XII	田原A型5種	釜原1	釜原1	7.5YR5/4(赤黒)	径1mmの白色粒子を多く含む 高部小瘤	酒杯状突起のみ
13 12 S-20 XI	田原A型5種	釜原1	釜原1	7.5YR4/5(赤黒)	径0.5mmの赤褐色、輝石 径2.5mmの白色粒子を含む	酒杯状突起口縁のみ
13 13 K-24 XI	田原A型5種	釜原1	釜原1	7.5YR4/2(赤黒)	径1mmの石英 径0.5mmの輝石を含む	酒杯状突起 壁面に逆続刺突
13 14 Q-20 XII	田原A型5種	釜原1	釜原1	3YR5/6(赤黒)	径1mmの石英を多く含む 径1mmの輝石、赤、白色粒子 径4mmの石英を含む	酒杯状突起のみ
13 15 Q-21 XII	田原A型5種	釜原1	釜原1	7.5YR6/4C(赤黒)	径1mmの石英、白色粒子 (40.5mm)の輝石、赤色粒子を含む 織維を含む	酒杯状突起 壁面に逆続刺突
13 16 S-20 XI	田原A型5種	釜原1	釜原1	3YR6/5(赤)	径1mmの白色粒子を多く含む	酒杯状突起
13 17 Q-21 XI	田原A型5種	釜原1	釜原1	7.5YR5/4C(赤黒)	径1mmの石英をやや多く含む 径0.5mmの輝石 径3mmの白色粒子 径11mmの白色粒子を含む	壁面に逆続刺突 酒杯状突起
13 18 Q-21 XII	田原A型5種	釜原1	釜原1	10YR5/3C(赤黒)	径1mmの石英を多く含む 径0.5mmの赤、白色粒子を含む	酒杯状突起 壁面に逆続刺突
13 19 —	—	—	—	7.5YR6/4C(赤黒)	径0.5mmの輝石、黑色粒子、石英 径1mmの輝石を含む	酒杯状突起のみ
13 20 S-20 XII	田原A型5種	釜原1	釜原1	7.5YR5/3(赤黒)	径0.5mmの白色粒子をやや多く含む 径1mmの石英、赤色粒子	酒杯状突起 壁面に逆続刺突
14 1 Q-21 XII	田原B型2種	釜原1	釜原1	7.5YR5/2(赤)	径0.5mmの黃褐色を多く含む 径1mmの石英を含む 織維を含む	壁面に逆続刺突(以降)
14 2 S-20 XII	田原B型2種	釜原1	釜原1	7.5YR4/4(赤)	径1mmの石英をやや多く含む 径0.5mmの黃褐色を含む	後続1箱 口縁の内部と外面に刺突円 刺突円外側1列
14 3 S-24 XI	田原B型2種	釜原1	釜原1	7.5YR6/3C(赤)	径1mmの石英を多く含む 径0.5mmの輝石 径1.5mmの白色粒子を含む	口縁の内部と外面に刺突円
14 4 Q-21 XII	田原B型2種	釜原1	釜原1	7.5YR6/4C(赤)	径1mmの白色粒子を多く含む	壁面に逆続刺突(以降)
14 5 S-24 XII	田原B型2種	釜原1	釜原1	7.5YR5/2(赤)	径0.5mmの黃褐色をやや多く含む 径1mmの石英を含む	後続1箱 口縁の内部と外面に刺突円 刺突円外側1列
14 6 K-22 XII	田原B型2種	釜原1	釜原1	7.5YR7/2(赤)	径1~2mmの白色粒子を少し含む 織維を多く含む	壁面に逆続刺突
14 7 S-24 XI	田原B型2種	釜原1	釜原1	7.5YR6/4C(赤)	径0.5mmの白色粒子を含む	壁面に逆続刺突
14 8 S-23 XII	田原B型2種	釜原1	釜原1	7.5YR6/3C(赤)	径1mmの石英 径0.5mmの黃褐色をやや多く含む	酒杯状突起(小型) 壁面に逆続刺突
14 9 Q-21 XII	田原B型2種	釜原1	釜原1	5YR5/4C(赤)	径1mmの石英 径0.5mmの輝石をやや多く含む 径1mmのQ、赤色粒子を含む	壁面に逆続刺突 並下地帯
14 10 R-21 XII	田原C型	釜原1	釜原1	7.5YR6/3C(赤)	径1mmの石英をやや多く含む 径1mmの白色粒子 径0.5mmの輝石を含む	並下地帯に刺突円内面1列 刺突円外側1列
14 11 S-22 XII	田原C型	釜原1	釜原1	7.5YR5/3C(赤)	径1~2mmの石英、輝石、白色粒子を含む	下下地帯の壁面に逆続刺突 剥離円内面1列
14 12 S-24 XII	田原D型1種	釜原1	釜原1	7.5YR6/3C(赤)	径1mmの白色粒子を多く含む 径0.5mmの石英を含む	剥離口縁 壁面に逆続刺突 剥離円外側1列
14 13 R-20 XII	田原D型1種	釜原1	釜原1	7.5YR5/3C(赤)	径1mmの石英 径0.5mmの輝石をやや多く含む 径1mmのQ、白色粒子を含む	剥離口縁 壁面に逆続刺突 剥離円外側1列
14 14 S-23 XI	田原D型1種	釜原1	釜原1	7.5YR6/3C(赤)	径1mmの石英 径0.5mmの黃褐色をやや多く含む	壁面に逆続刺突 剥離円外側1列
14 15 R-23 XI	田原D型1種	釜原1	釜原1	7.5YR5/3C(赤)	径1mmの石英 径0.5mmの黃褐色を多く含む 径2.5mmの縫隙を含む	壁面に逆続刺突 剥離円外側1列
14 16 R-22 XII	田原D型2種	釜原1	釜原1	5YR6/4C(赤)	径2mmの長石 径0.1mmの輝石を含む 径0.5mmの白色粒子をやや多く含む	壁面に逆続刺突 剥離円外側2列
14 17 S-24 XI	田原D型2種	釜原1	釜原1	7.5YR4/2(赤)	径1mmの石英を多く含む 径0.5mmの黃褐色 径1mmの白色粒子を含む	研究円2列 壁面に逆続刺突 剥離円外側1列
14 18 S-23 XI	田原D型2種	釜原1	釜原1	7.5YR3/3C(赤)	径1mmの石英を多く含む 径1mmの白色粒子 径0.5mmの黃褐色を含む	剥離1列 壁面に逆続刺突 剥離円外側1列
14 19 XII	—	田原D型2種	釜原1	7.5YR6/3C(赤)	径1mmの石英 径0.5mmの白色粒子、黃褐色を含む 織維を含む	前部に逆続刺突 剥離円外側1列
14 20 R-22 XII	田原D型2種	釜原1	釜原1	7.5YR6/3C(赤)	径2~3mmの輝石 径0.1~0.5mmの輝石、黒、灰色粒子 径0.5mmの黃褐色を含む	壁面に逆続刺突 剥離円外側1列(裏)
14 21 R-22 XII	田原D型2種	釜原1	釜原1	7.5YR6/2(赤)	径1~2mmの白色粒子、白色粒子を含む	壁面に逆続刺突 剥離円外側1列(裏)
14 22 S-23 XI	田原D型2種	釜原1	釜原1	7.5YR4/2(赤)	径0.5mmの黃褐色を多く含む 径3mmの石英を含む	壁面に逆続刺突 剥離円外側1列
14 23 砂鉢	—	田原D型3種	釜原1	7.5YR4/4C(赤)	径2mmの石英 径1mmの白色粒子 径0.5mmの黃褐色を含む 高部小瘤	剥離口縫 剥離円外側1列
15 1 S-24 XI	田原D型4種	釜原1	釜原1	7.5YR4/3C(赤)	径0.5mmのQ、輝石、白色粒子を含む	壁面に逆続刺突
15 2 S-24 XI	田原D型4種	釜原1	釜原1	7.5YR4/3C(赤)	径0.5mmのQ、輝石、白色粒子を含む	壁面に逆続刺突
15 3 S-23 XII	田原D型4種	釜原1	釜原1	7.5YR4/4%	径1mmの石英 径0.5mmの白色粒子をやや多く含む	壁面に逆続刺突
15 4 K-21 XII	田原D型4種	釜原1	釜原1	7.5YR4/5/6%	径0.5mmの白色粒子をやや多く含む	壁面に逆続刺突
15 5 S-24 XI	田原D型4種	釜原1	釜原1	10YR5/4C(赤)	径0.5mmの長石を含む 径0.5~1mmの白色粒子 径0.5mmの黒色粒子をやや多く含む	壁面に逆続刺突

固	番	アリフ/種別	分類	形式	色 葉	幼 生	成 熟
13	6	S-23	XII	Ⅲ前D類4種	始稚I SYRS/5赤赤斑	径1mmの石英、白、赤色粒子を含む	暗面に連続刺突
15	7	R-22	XII	Ⅱ前D類4種	始稚I 7.SYRS/3赤斑	径2mmの黄斑 (60.5mm)の黒、赤色斑子、球石を含む	暗面に連続刺突
16	8	Q-22	XII	Ⅲ前D類4種	始稚I 7.SYRS/2灰斑	径1mmの球石を含む (10.1~0.5mm)の白色粒子をやや多く含む (0.1mm)の球石を含む	暗面に連続刺突
15	9	S-24	XII	Ⅲ前D類4種	始稚I SYRS/6赤赤斑	径0.5mmの石英、径1mmの黒、白色粒子を含む	暗面に連続刺突
15	10	R-22	XII	Ⅲ前D類4種	始稚I 7.SYRS/1灰斑	径0.5mmの球石を多く含む 径1mmの石英、白色粒子を含む	暗面に連続刺突
15	11	R-21	XII	Ⅲ前D類4種	始稚I SYRS/4赤い斑	径1~2mmの白色粒子を少し含む	暗面?
15	12	Q-22	XII	Ⅲ前D類4種	始稚I 7.SYRS/2灰斑	径3mmの白色粒子 径1mmの石英 径0.5mmの黄斑を含む	暗面に連続刺突
15	13	Q-22	XII	Ⅲ前D類4種	始稚I 7.SYRS/1灰斑	径1mmの白色粒子を少し含む	暗面に連続刺突
15	14	R-23	XII	Ⅲ前D類4種	始稚I 7.SYRS/3赤い斑	径0.5mmの黄斑を多く含む 径2mmの石英、白色粒子を含む	暗面に連続刺突 波状口縫
15	15	R-22	XII	Ⅲ前D類4種	始稚I 7.SYRS/2灰斑	径0.5mmの長石をやや多く含む 径0.1~0.5mmの白色粒子を含む	暗面に連続刺突
15	16	R-22	XII	Ⅲ前D類4種	始稚I SYRS/4赤い赤斑	径0.5mmの白色粒子を多く含む 径3mmの球石 径1mmの長石を含む	暗面に連続刺突
15	17	S-23	XII	Ⅲ前D類4種	始稚I 2.SYRS/4赤い赤斑	径0.5mmの白色粒子 径1mmの白色粒子 径2mmの球石 径0.5mmの球石を含む	暗面に連続刺突
15	18	Q-21	XII	Ⅲ前D類4種	始稚I 7.SYRS/6赤	径1mmの石英、球石をやや多く含む	波状口縫 暗面に連続刺突
15	19	Q-21	XII	Ⅲ前D類4種	始稚I 7.SYRS/6赤赤斑	径1mmの石英 径2mmの白色粒子を含む 球石を含む	波状口縫 暗面に連続刺突
15	20	R-20	XII	Ⅲ前D類	始稚I 7.SYRS/3赤い赤斑	径1mmの石英、白色粒子 径1~5mmの球石を含む 高峰小網	刺突外縫1列
15	21	R-24	XI	Ⅲ前E類	始稚I 3.YR4/4赤い赤斑	径0.5mmの黄斑をやや多く含む 径1mmの石英 径2.5mmの球石を含む	刺突外縫1列(4)
15	22	S-23	XII	Ⅲ前E類	始稚I 7.SYRS/4赤い赤斑	径0.5mmの球石 径1mmの石英 径1.5mmの白色粒子を含む	刺突外縫2列
15	23	R-21	XII	Ⅲ前E類	始稚I 7.SYRS/2灰斑	径1mmの球石 径0.5~1mmの白色粒子 径2mmの球石を含む	刺突外縫2列
15	24	Q-21	XI	Ⅲ前E類	始稚I 7.SYRS/2灰斑	径0.1mmの球石を多く含む 径0.5mmの白色粒子を少し含む	刺突外縫2列
15	25	S-24	XI	Ⅲ前E類	始稚I 7.5YR4/4赤	径1.5mmの石英を多く含む	刺突外縫2列
15	26	R-23	XII	Ⅲ前E類	始稚I 7.SYRS/2灰斑	径3mmの石英、白色粒子をやや多く含む 径0.5mmの黄斑を含む	刺突外縫1列
15	27	R-22	XI	Ⅲ前E類	始稚I 7.SYRS/3赤い赤斑	径0.5~1mmの球石を多く含む 径2mmの球石 径0.5mmの白色粒子を含む	氣丸
15	28	Q-21	XII	Ⅲ前E類	始稚I 10.YR6/2赤灰斑	径0.5~1mmの球石を含む (0.5~1mm)の白色粒子 径1mmの球石を含む	暗面に連続刺突(1)連続刺突内面1列
15	29	Q-22	XII	Ⅲ前E類	始稚I 7.SYR4/4赤斑	径0.5~1mmの球石を含む 径1mmの球石 径0.5mmの白色粒子を含む	暗面に連続刺突(1)連続刺突内面1列
15	30	S-24	XI	Ⅲ前E類	始稚I 7.5YR4/3赤	径0.5~1mmの球石を含む 径1mmの球石 径0.5mmの白色粒子を含む	暗面に連続刺突
16	1	R-20	XII	Ⅳ前	始稚I 7.SYRS/3C赤い赤斑	径0.5~1mmの球石を含む 径1mmの球石 径0.5~1mmの白色粒子を含む	暗面に連続刺突
16	2	Q-21	XII	Ⅳ前	始稚I 10.YR6/3赤い赤斑	径0.5~1mmの球石を含む 径1mmの球石 径0.5~1mmの白色粒子を含む	暗面に連続刺突
16	3	R-22	XII	Ⅳ前	始稚I 10.YR7/2C赤い赤斑	径0.5~1mmの球石を含む 径1mmの球石 径0.5~1mmの白色粒子を含む	暗面に連続刺突
16	4	S-24	XI	Ⅳ前	始稚I 2.5YR4/6赤	径2mmの球石を含む (0.1~0.5mm)の黒、白色粒子をやや多く含む 球石を含む	氣丸 刺突外縫1列
16	5	Q-21	XII	Ⅳ前	始稚I 7.SYRS/2灰斑	径0.5mmの球石を多く含む (0.5mm)の石英を含む	暗面に連続刺突 刺突外縫1列
16	6	S-24	XI	V前	始稚I 7.SYR3/3赤	径0.5mmの球石 径1mmの石英を含む	暗面に連続刺突 刺突外縫1列 植物名
16	7	Q-21	XII	V前	上ノ山 7.SYR3/3C赤い赤斑	径0.5mmの球石を多く含む 径2.5mmの石英 1.5mmの長石を含む	暗面に連続刺突 薙根に押す
16	8	Q-22	XII	V前	上ノ山 7.SYR3/3C赤い赤斑	径0.5mmの球石 径1mmの球石をやや多く含む	暗面に連続刺突 薙根に押す
16	9	Q-21	XII	V前	上ノ山 7.SYR3/3赤斑	径1mmの石英 径0.5mmの球石をやや多く含む 径2mmの白色粒子を含む	暗面に押根(上下にはない)
16	10	R-21	XII	V前	上ノ山 7.SYR6/4赤い赤斑	径1mmの石英 径0.5mmの球石をやや多く含む	暗面に連続刺突 薙根に押す
16	11	Q-21	XII	V前	上ノ山 7.5YR5/2灰斑	径0.5mmの球石をやや多く含む 径1.5mmの石英を含む	暗面に押根
16	12	R-22	XII	V前	上ノ山 7.5YR6/2灰斑	径1.5mmの石英 径0.5mmの球石をやや多く含む	暗面に連続刺突
16	13	Q-22	XII	V前	上ノ山 7.5YR5/2灰斑	径0.5mmの球石 径3mmの球石をやや多く含む	暗面に連続刺突
16	14	Q-21	XII	V前	上ノ山 7.5YR6/1灰斑	径1mmの球石をやや多く含む	暗面に連続刺突
16	15	R-22	XII	V前	上ノ山 7.5YR4/2場	径0.5mmの球石をやや多く含む 径1.5mmの石英をやや多く含む	暗面に連続刺突
16	16	Q-21	XII	V前	上ノ山 7.5YR6/4C赤い赤斑	径3mmの球石 径0.5mmの球石を含む	暗面に連続刺突
16	17	S-23	XII	V前	上ノ山 7.5YR6/4C赤い赤斑	径2mmの球石 径0.5mmの球石を含む	暗面に連続刺突
16	18	R-22	XI	V前	上ノ山 7.5YR6/3C赤い赤斑	径3mmの球石をやや多く含む	暗面に連続刺突
16	19	S-23	XII	V前	入ノ内 7.5YR6/3C赤い赤斑	径1.5mmの球石を含む 径0.5mmの球石 径0.5mmの球石を含む	暗面に連続刺突
16	20	S-23	XI	V前	入ノ内 7.5YR6/3C赤い赤斑	径1.5mmの球石 径1mmの球石を含む 径0.5mmの球石を含む	暗面に連続刺突
16	21	K-22	XII	V前	入ノ内 7.5YR6/1灰斑	径1mmの球石を含む 径0.5~1mmの球石、白色粒子を多く含む	暗面に刺突
16	22	K-21	XII	V前	入ノ内 7.5YR5/3C赤い赤斑	径0.5mmの球石、白色粒子をやや多く含む 径0.5mmの球石を含む	暗面に連続刺突
16	23	K-22	XII	V前	堆積上 7.5YR6/4C赤い赤斑	径1~2mmの長石 径0.5mmの球、白色粒子を多く含む 径0.5mmの球石を含む	暗面に連続刺突 薙根に押す2本

回 数	器物番号	分類	型式	色調	胎 土	文 様
16 24	Q-20 XII	X群	清水上	10YR6/28赤黄斑	径0.2~0.5mmの褐色粒子を多く含む 径0.5mmの白英、白色粒子を少し含む	口縁にたてに隙 脚部縁に隙
16 25	R-23 XII	X群	清水上	10YR6/4赤い黄斑	径0.1~3mmの石英 径0.1~0.5mmの褐色粒子を多く含む	縫帶にきざみ
16 26	Q-22 XII	X群	清水上	10YR6/2赤黄斑	径0.1~2.5mmの石英を多く含む 径0.5mmの黑色粒子を少し含む	脚部外側1列
16 27	Q-21 XII	X群	清水上	10YR6/4赤い黄斑	径0.5mmの石英を多く含む 径1mmの白英 径2mmの白色粒子を含む 小節小槽	縫帶に連續刻突
16 28	Q-20 XII	X群	清水上	10YR6/2赤黄斑	径2mmの石英、白色粒子を含む	無文
16 29	Q-22 XII	X群	清水上	10YR5/3赤い黄斑	径0.5mmの赤色粒子やや多く含む 径2mmの白色粒子、徑 径1mm の石英を含む	刺突外側1列
16 30	Q-21 XII	X群	清水上	10YR6/2赤黄斑	径0.1~1.5mmの白英、白色粒子 径0.1~0.5mmの黑色粒子を多く含む	刺突外側1列
16 31	K-22 XI	X群	清水上	10YR6/4赤い黄斑	径0.1~0.5mmの褐色粒子を少し含む 径0.1~2mmの石英を多く含む	刺突外側1列
16 32	M-21 XII	X群	清水上	10YR6/3赤い黄斑	径0.1~0.5mmの白英 径0.1~0.5mmの褐色粒子を多く含む	刺突外側1列
16 33	R-22 XI	X群	清水上	10YR6/4赤い黄斑	径0.5mmの石英、白英 径1.5mmの白色粒子 /を含む	無文
16 34	Q-20 XII	X群	清水上	10YR6/3赤い黄斑	径0.1~2mmの石英を多く含む	縫がくいてある(隙隙)
16 35	R-22 XII	X群	清水上	10YR6/4赤い黄斑	径1mmの石英 径0.5mmの石英を多く含む	無文
16 36	R-21 XII	X群	清水上	10YR6/4赤い黄斑	径1mmの石英 径0.5mmの石英を多く含む 径1mmの白色粒子 小節	無文
16 37	R-22 XII	X群	清水上	7.5YR6/4赤い黄斑	径1mmの石英、白色粒子 径0.5mmの赤色 /を含む	無文
16 38	K-21 XII	X群	清水上	10YR5/3赤い黄斑	径0.5mmの石英の端局をやや多く含む 径0.5mmの白色粒子 径0.5mmの石英 を含む 小節小槽	無文
17 1 Q-21 XII	X群	無文	SYR5/6赤	赤	径1mmの輝石、白色粒子を含む	
17 2 Q-21 X	X群	無文	7.5YR6/4赤い黄斑	径1mmの石英 径0.5mmの赤色 /を含む		
17 3 R-22 XI	X群	無文	7.5YR6/4赤い黄斑	径0.5mmの石英を多く含む		
17 4 S-23 XII	X群	無文	SYR5/6赤	赤	径2mmの白色粒子 径0.5mmの石英、輝石を含む	
17 5 R-20 XII	X群	無文	7.5YR6/4赤い黄斑	径0.5mmの石英を少し含む		
17 6 S-23 XII	X群	無文	10YR5/3赤い黄斑	径0.5mmの端局をやや多く含む 径1mmの石英、白色粒子 /を含む 縫隙を含む		
17 7 Q-21 XII	X群	無文	10YR5/3赤い黄斑	径0.5mmの石英を多く含む 径3mmの白色粒子 径0.5mmの赤色 /を含む		
17 8 Q-21 XII	X群	無文	7.5YR6/3赤い黄斑	径1mmの石英 径0.5mmの石英を多く含む 径2mmの白色粒子 /を含む 小節小槽		
17 9 S-23 XI	X群	無文	7.5YR6/3赤い黄斑	径0.5mmの石英 径0.5mmの白色粒子を多く含む 径2mmの白色粒子 /を含む 小節小槽		
17 10 S-23 XI	X群	無文	7.5YR4/4赤	赤	径0.5mmの石英を多く含む 径0.5mmの石英をやや多く含む 径0.5mmの石英を含む 縫隙を含む 小節小槽	
17 11 —	—	無文	7.5YR2/2赤	赤	径0.5mmの石英、白色粒子 径0.5mmの白色粒子を多く含む 縫隙を含む	
17 12 S-23 XII	X群	無文	SYR4/4赤い黄斑	赤	径0.5mmの石英、白色粒子 径0.5mmの白色粒子を多く含む 径0.5mmの石英を含む 縫隙を含む	
17 13 S-24 XI	X群	無文	SYR4/4赤い赤斑	赤	径0.5mmの石英、白色粒子 径1mmの石英 径0.5mmの石英を含む 縫隙を含む	
17 14 K-22 XII	X群	無文	2.5YR4/6赤	赤	径0.5mmの赤 径3mmの白色粒子 /を含む 小節小槽	
17 15 Q-20 XII	X群	無文	SYR5/6赤	赤	径0.5~1mmの黒、白、赤色粒子、石英を多く含む	
17 16 S-24 XI	X群	無文	2.5YR4/6赤	赤	径3mmの赤、径1mmの黒、白色粒子 /を含む 縫隙を含む	
17 17 S-24 XI	X群	無文	2.5YR4/6赤	赤	径1.5mmの石英、白色粒子 径1mmの黑色粒子を含む	
17 18 R-20 XII	X群	無文	SYR6/6赤	赤	径1mmの石英を多く含む 径2mmの白色粒子 径0.5mmの輝石、白色粒子を少し含む	
17 19 R-23 XII	X群	無文	SYR6/6	赤	径1mmの石英 径0.5mmの輝石を含む 縫隙を含む 小節小槽	
17 20 Q-21 XII	X群	無文	7.5YR6/4赤い黄斑	径2mmの白色粒子を多く含む 径1.5mmの白色粒子 /を含む		
18 1 Q-21 XII	X群	角解剖削面	7.5YR5/2赤	赤	径1mmの石英をやや多く含む 縫隙を含む	条縫
18 2 P-20 XI	X群	中層	SYR6/4赤い黄斑	径1mmの石英、輝石を含む 径3~5mmの縫を少し含む	沈縫と風文	
18 3 S-24 XI	X群	中層	SYR5/4赤い赤斑	径1mmの石英、輝石 径2~3mmの白、白色粒子をやや多く含む	沈縫	
18 4 R-23 XIII	X群	中層	SYR4/6赤	赤	径1mmの白、褐色粒子、石英を少し含む	無文
18 5 Q-20 XII	X群	吸溜刮削面	7.5YR5/3赤い黄斑	径1mmの白を含む 径1mmの白色粒子をやや多く含む	沈縫	
18 6 S-23 XI	X群	後剥離面	7.5YR6/6	赤	径0.2~1.5mmの褐色粒子を少し含む 径0.2~1.5mmの石英 径0.2~1mmの白色粒子を多く含む	沈縫
18 7 R-21 X	X群	後剥離面	SYR6/6	赤	径0.1~0.3mmの白色粒子を多く含む 径0.1~0.3mmの白色粒子を少し含む	縫帶に連續刻突
18 8 S-24 XI	X群	後剥離面	SYR4/6赤	赤	径0.1~2mmの白色粒子 径0.1~1mmの石英、輝石を多く含む	無文
18 9 R-24 X	X群	後剥離面	7.5YR5/4赤い黄斑	径1mmの石英、輝石 径0.5mmの白色粒子を多く含む	口縁部に沈縫	
18 10 Q-20 XII	X群	吸溜刮削面	7.5YR6/4赤い黄斑	径1mmの白、輝石、白、褐色粒子を少し含む	沈縫	
18 11 M-22 XII	X群	吸溜刮削面	7.5YR5/4赤い黄斑	径1mmの石英、輝石を含む 径1mmの白色粒子をやや多く含む	沈縫	
18 12 S-23 XI	X群	吸溜刮削面	7.5YR6/4赤い黄斑	径0.1~2mmの白色粒子 径0.2~1mmの石英をやや多く含む 径0.2~1mmの白色粒子を少し含む	沈縫	
18 13 R-21 XII	X群	吸溜刮削面	7.5YR5/3赤い黄斑	径1mmの石英、輝石、白、白色粒子を少し含む	半截竹状工具による格子状の溝文	

中近世の遺構

建物跡

S H1 (第25図)

O-21・O-22・P-21・P-22・Q-21・Q-22グリッドで検出された礎石建物で、建物方向は東西方向である。柱穴は直径約80cmのやや隅の丸い方形で、南北方向に7基、東西方向に8基、約1.8mの間隔で並んで検出された。柱穴内部には、栗石、玉石が認められる柱穴があり、石場立建物が想定される。柱穴の並ぶ方向に検出されない柱穴があり、その他の遺構の影響もあり、総柱の建物であるかは不明である。また、数回に渡り立て替えられた痕跡が認められ、ある柱穴は新たに構築され、ある柱穴は再利用された可能性を示している。規模は、梁行約17m、桁行約16m、7間×6間であるが、近世後半の仁田館を描いた銅版画に描かれる母屋、明治前半に撮影された母屋と位置、構造が類似しており、本遺構がこの時期の母屋に相当する可能性が高いと考えられる。また、銅版画、写真にみる母屋の規模は、12間×6間が想定され、その他の遺構の位置関係をふまえると、本遺構は母屋の東側に相当する部分であると考えられ、さらに西側に延びる可能性が高いと考えられる。出土した遺物は、瀬戸美濃系の灯明皿、柳茶碗、掃鉢、肥前系の筒型碗、信楽産の小杉碗等で18世紀後半から19世紀代の製品を中心である（第58図～第60図）。

S H2 (第26図)

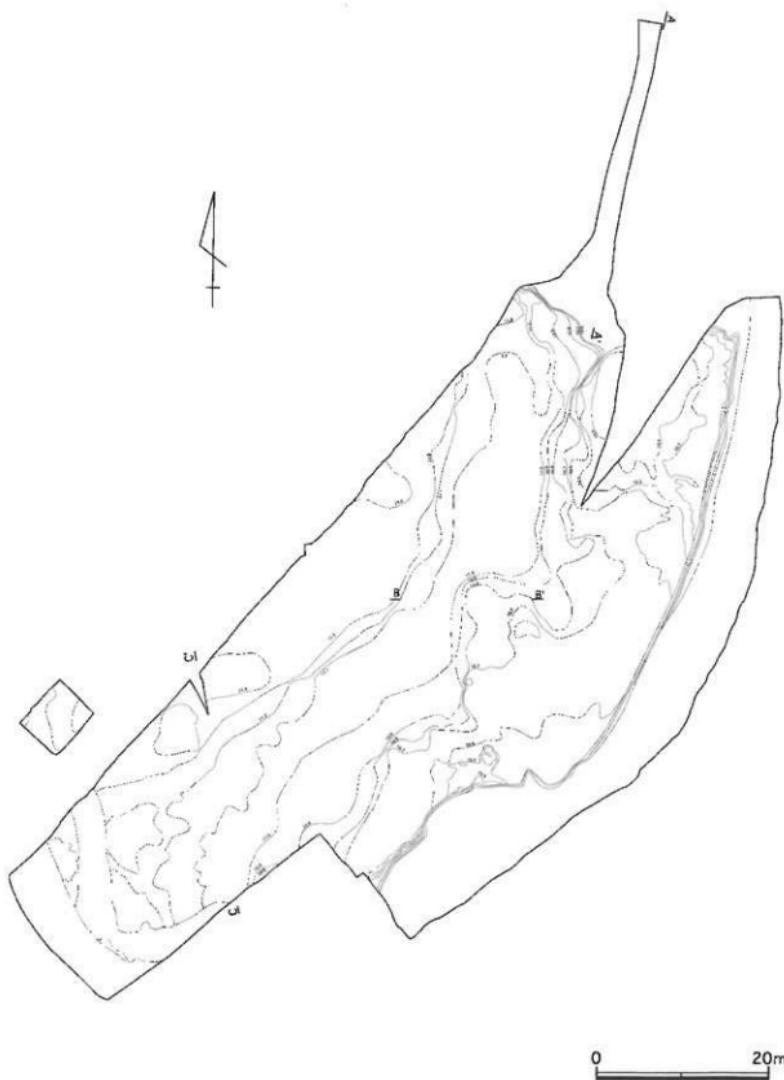
M-20・N-20グリッドで検出された。北東から南西に向かって調査区のラインに切られるため、平面の構造および全体の規模については不明である。検出された規模は、南北約5.4m、東西約4mである。硬質の御殿場泥流層（VII層・VIII層）を約1m堀り込み、底面に幅約50cm、厚さ約20cmの方形の石を1.2m～1.8mの間隔で配し、その上に幅約20cm、長さ約80cmの長方形の石を立て礎石としている。西側の礎石の列と東側の礎石の並び（F-F'以東）にややずれが認められ、石材も違うことから、これらはやや時期を異にし、どちらかが後に付け加えられた可能性がある。覆土は大きく3層に分層されるが、突き固められた様子はなく、また、南東の角が南に向かってスロープ状の斜面を形成することから、建物が存在した時期には、掘り込みが空間として機能していた可能性が高く、半地下の倉庫のようなものが想定される。出土した遺物は、中世の常滑窯の焼が1点含まれるが、瀬戸美濃系の灯明皿、肥前系の中皿など近世の遺物が出土している。近世後半の仁田館を描いた銅版画には、母屋の西側に位置する「はなれ」状の建物が描かれており、現存する仁田三兄弟の墓や土器との位置関係から、本遺構がはなれ状の建物に相当する可能性が高いと考えられる。

S H3 (第26図)

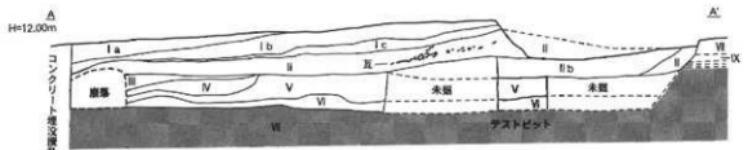
N-20・N-21グリッドで検出された。北東から南西に向かって調査区のラインに切られるため、平面の構造および全体の規模については不明である。検出された規模は、南北約6m、東西約3.7mである。幅約50cm、厚さ約20cmの方形の石が6基検出された。西側、南側において1.8m間隔で、東側においては3.6mの間隔で配されており、礎石であると考えられる。また、礎石の上端のレベルとSH2の礎石の上面のレベルに差がないこと、東西方向の礎石が並んでいることから、同一の建物を形成した可能性、あるいは、SH2を倉庫とした場合の、家屋に相当すると考えられる。本遺構から遺物は出土していない。SH2同様、近世後半の仁田館を描いた銅版画に描かれる「はなれ」状の建物に相当する可能性が高いと考えられる

S H4/S H6 (第26・第27図)

P-23グリッドで検出された礎石建物で、建物方向は東西方向である。柱穴は直径約60cmのやや隅の丸い方形で、検出面から堀方底面までの深さは約20cm～70cmである。柱穴内に径40cm、厚さ20cmの礎石を配する。柱穴の底面に平たい礎石を置き、その上に長方形の礎石を建てるもの、平たい礎石を2枚重ねているもの、また、北側に配される礎石のように堀方を持たないもの等、數種類の礎石のタイプが認め



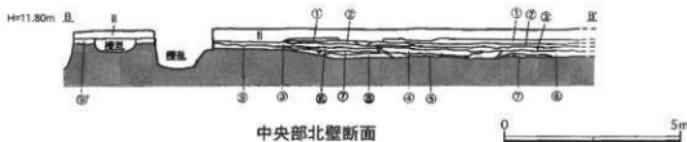
第21図 等高線図



北端トレンチ東壁断面

0 10m

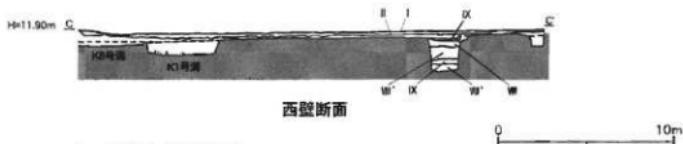
- | | | | |
|------|------------------|------|--|
| I a | 褐色砂層（野川台風による） | IV | 灰褐色粘質土層 |
| I b | 黒褐色土層 | V | 黄褐色・灰色砂質 |
| I c | 黒褐色土層（炭化物 大正～戦前） | VI | 灰色砂礫層 |
| II | 褐色土層（中世～明治） | VII | 灰色・暗褐色粘質土層（縄文海進による） |
| II b | 褐色土層（中世） | VIII | 灰色砂層（粘板岩状） |
| III | 黄灰色粘質土層 | IX | 黄褐色粘質土層（VII層の中間層として2～4次にわたり堆積
一部VII層がなくなり、IX層の下にVIII層がある） |



中央部北壁断面

0 5m

- | | | | |
|---|--------------------------|----|---------------------------------------|
| ① | 暗褐色砂層（VII層ブロック稀 下部に黄色砂多） | ⑥ | 暗褐色土層（やや灰色味を帯びる炭化物少） |
| ② | 褐色土層（しまり極めて強） | ⑦ | 暗褐色土層（炭化物やや多） |
| ③ | 暗褐色土層（炭化物少） | ⑧ | 灰褐色粘質土層（粘性極めて強） |
| ④ | 暗褐色土層（VII層ブロック極めて多） | ⑨ | 褐色土層（炭化物 焼土流粒やや多
径1～3cmの粗層ブロックやや多） |
| ⑤ | 暗褐色土層（やや灰色味を帯びる炭化物 焼土粒少） | ⑨' | 褐色土層⑨と大差なし 焼土は少ない |



西壁断面

0 10m

- | | |
|------|--------------------------------|
| I | 黒褐色土層（表土） |
| II | 褐色土層 |
| VII | 灰色砂質層（粘板岩状） |
| VII' | 暗紫褐色砂層 |
| IX | 黄褐色粘土層（VII層の間に5～10cmの厚さで縞状に堆積） |

第22図 断面図

られる。規模は、梁行約6.5m、桁行約8m、4間×4間の建物が想定される。中央部付近には、長さ約90cm、厚さ約10cmの石材を組みあせて構築した、深さ約20cmの溝状の造構が東西方向に配されており、排水溝のようなものとして機能した可能性がある。出土した遺物は、肥前系の筒型碗、瀬戸美濃系の埴硝摺等である。(第60図9~12)

S H5 (第27図)

P-19グリッドで検出された礎石建物で、建物方向は南北あるいは東西方向である。南北方向に約1m間隔で配される、径約30cm、厚さ約20cmの礎石が2列検出された。南西から北東に向かって調査区のラインに切られ、北側は擾乱により削平を受けているため、平面構造および全体の規模は不明である。本造構の北側で検出されたSX1と関連する可能性がある。本造構から遺物は出土していない。

S H7 (第28図)

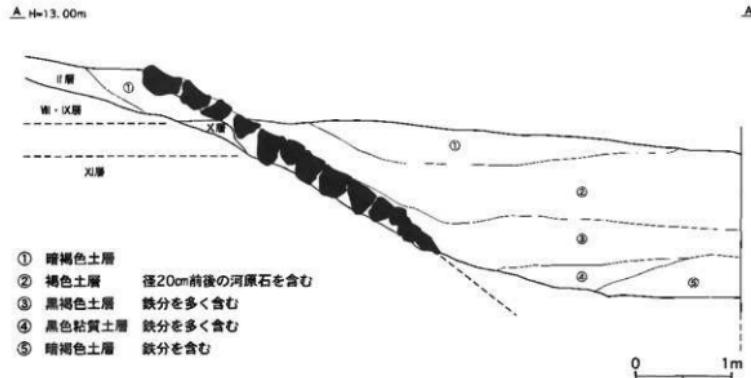
P-23・Q-23グリッドで検出された掘立柱建物で、建物方位は北東あるいは南北方向である。柱穴は直径約40cmの円形で、検出面から堀方底面までの深さは約20cm~70cm、梁行は約2.7m、桁行は約6mである。1間×2間の建物を想定したが、西側の柱穴は4SEにより削平されたものと考えられる。柱穴覆土から遺物は出土しなかったが、建物方位から中世の造構と判断した。

S H8 (第28図)

Q-23グリッドで検出された。直径約20cm、深さ約30cmの柱穴が南北方向に並んでおり、柱間は約2mである。その他の柱穴との組み合わせは不明であるが、方向、柱間、柱穴の形状等から、掘立柱建物の一部を構成すると考えた。柱穴覆土から遺物は出土していない。

S H9 (第28図)

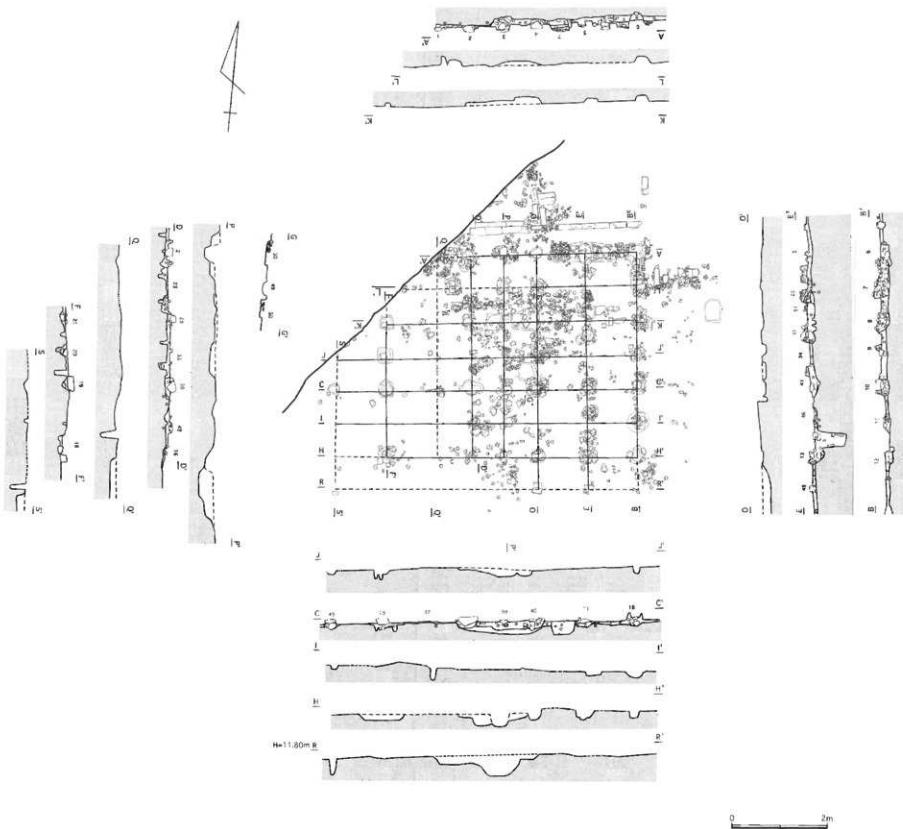
Q-23グリッドで検出された掘立柱建物で、建物方向は北東あるいは南北方向である。柱穴は直径約20cmの円形で、検出面から堀方底面までの深さは約15cm~35cm、梁行は約1.25m、桁行は約2.8mである。1間×2間の建物を想定したが、南東の面に、柱穴が並ぶ状況が確認でき、4間となる可能性がある。柱穴覆土から遺物は出土しなかったが、建物方位から中世の造構と判断した。



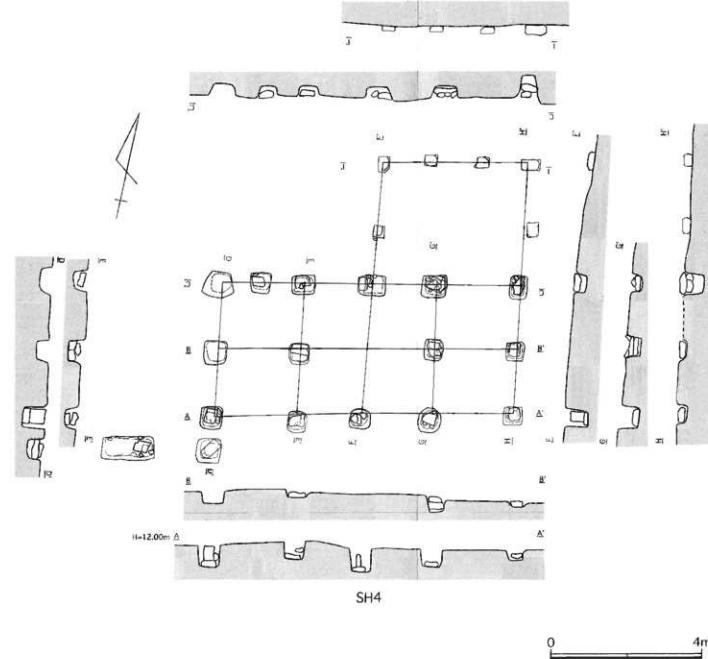
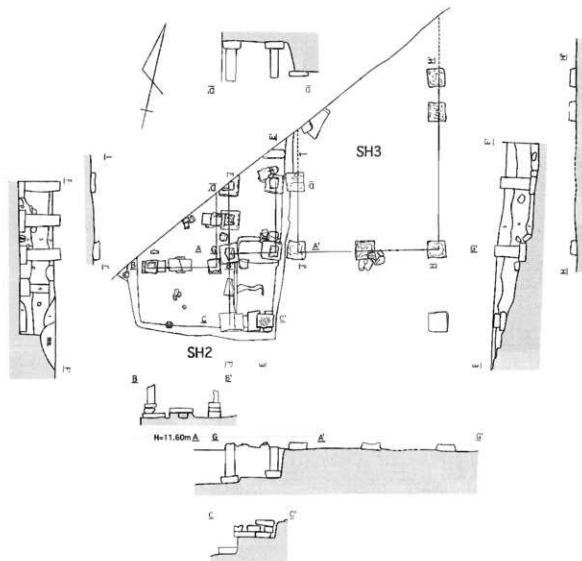
第23図 土層図



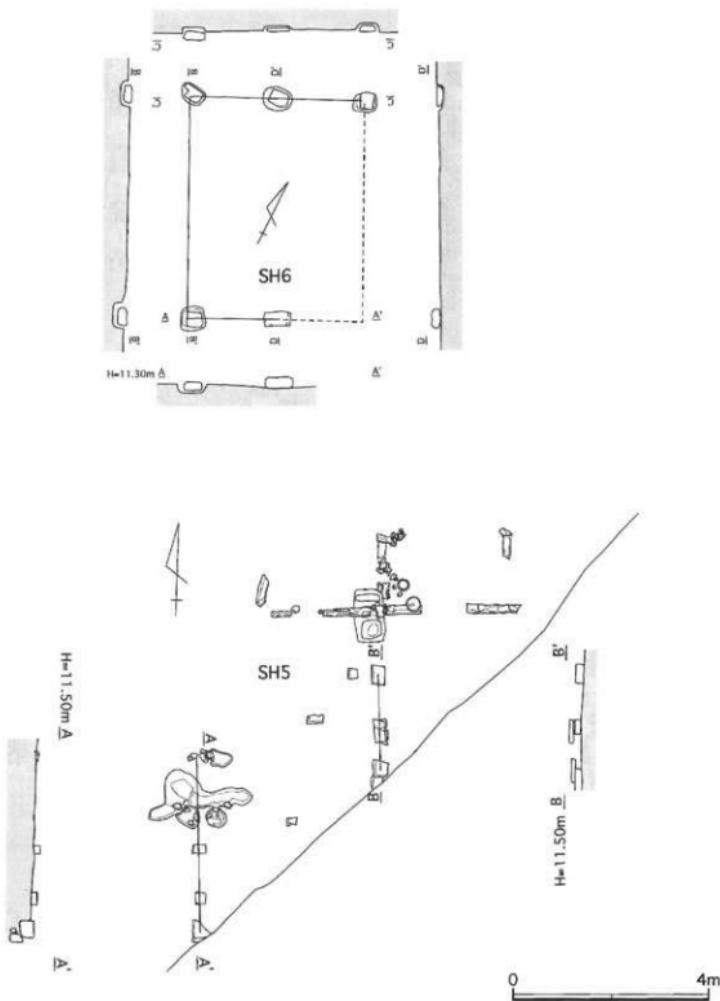
第24図 仁田熊遺跡全体図



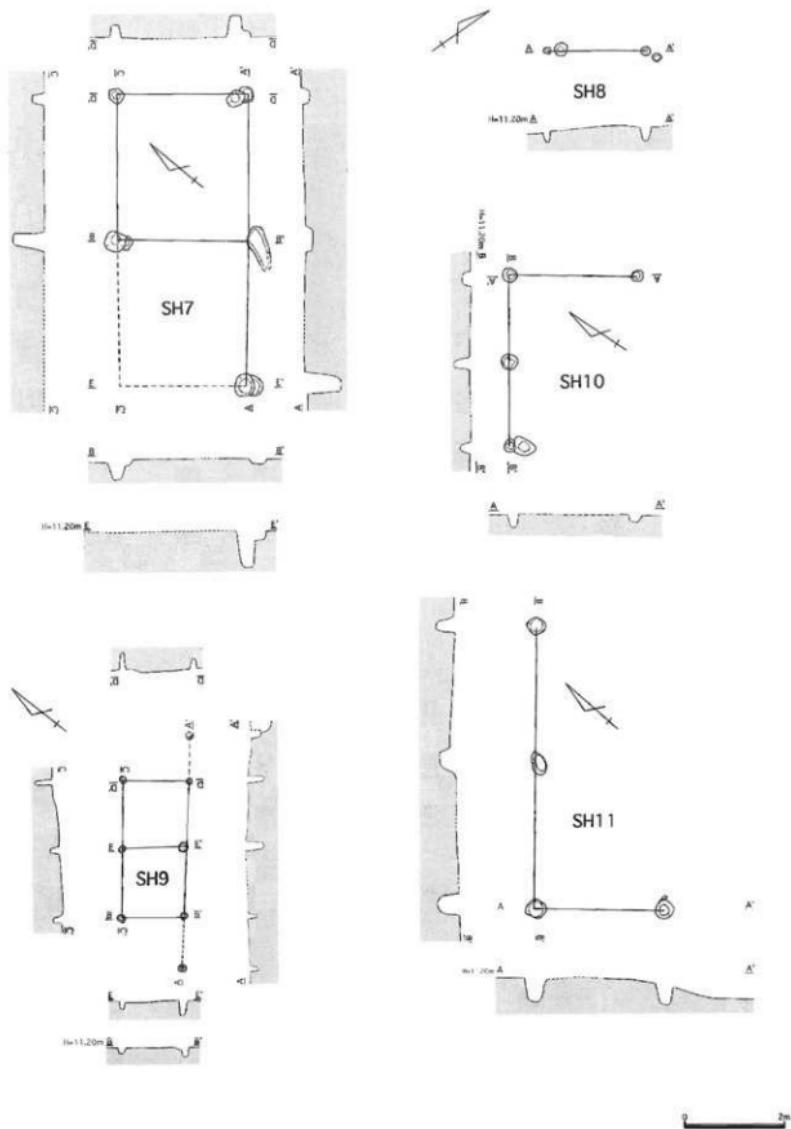
第25図 SH1平・断面図



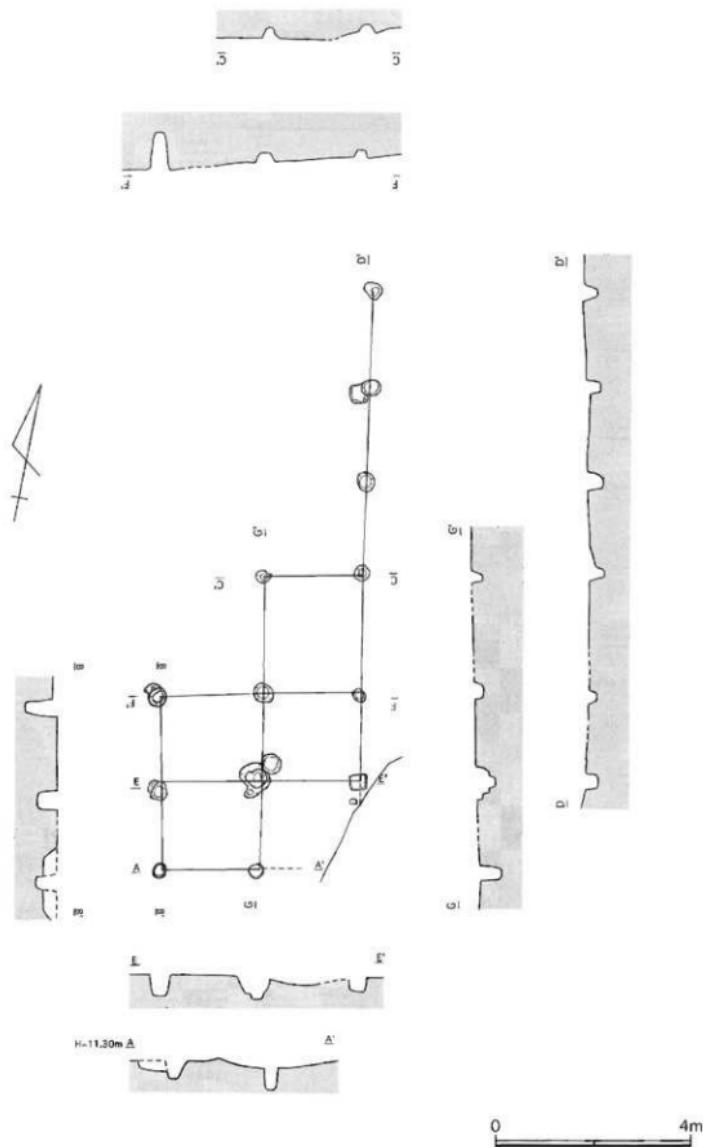
第26図 磯石建物平・断面図



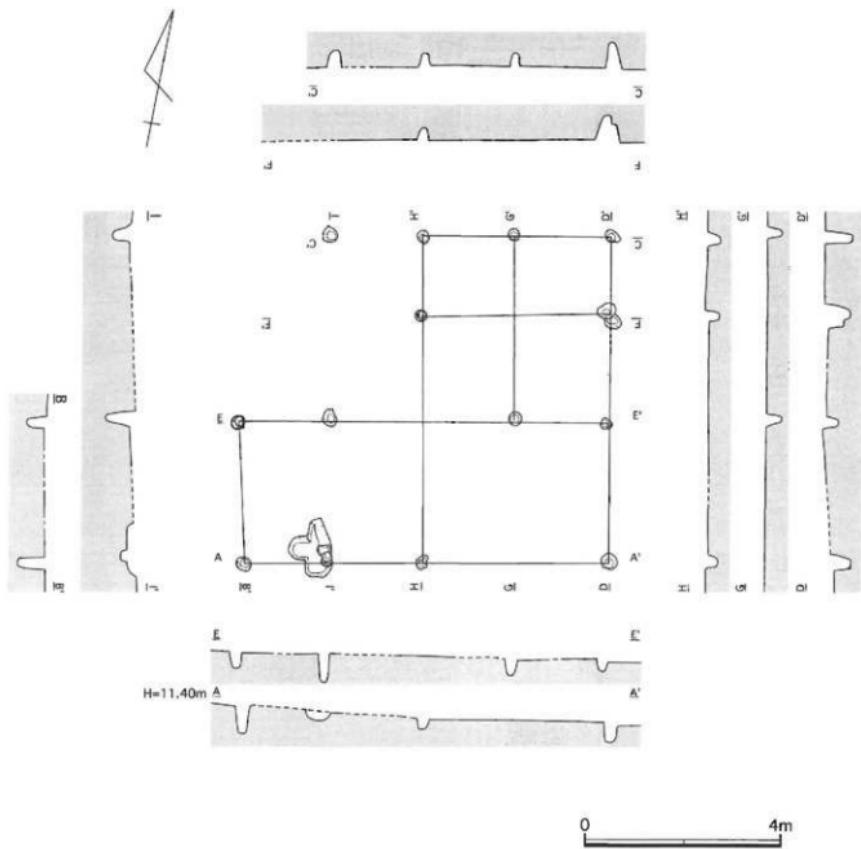
第27図 磯石建物



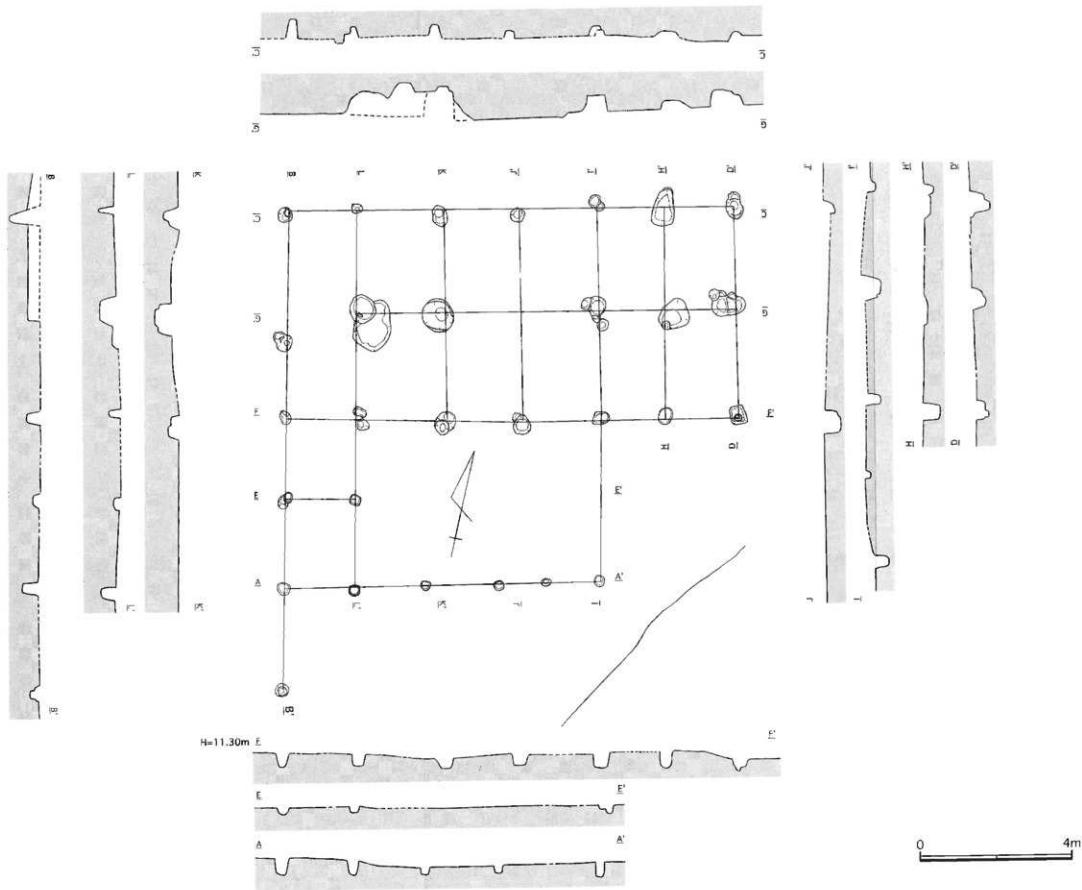
第28図 SH7~11平・断面図



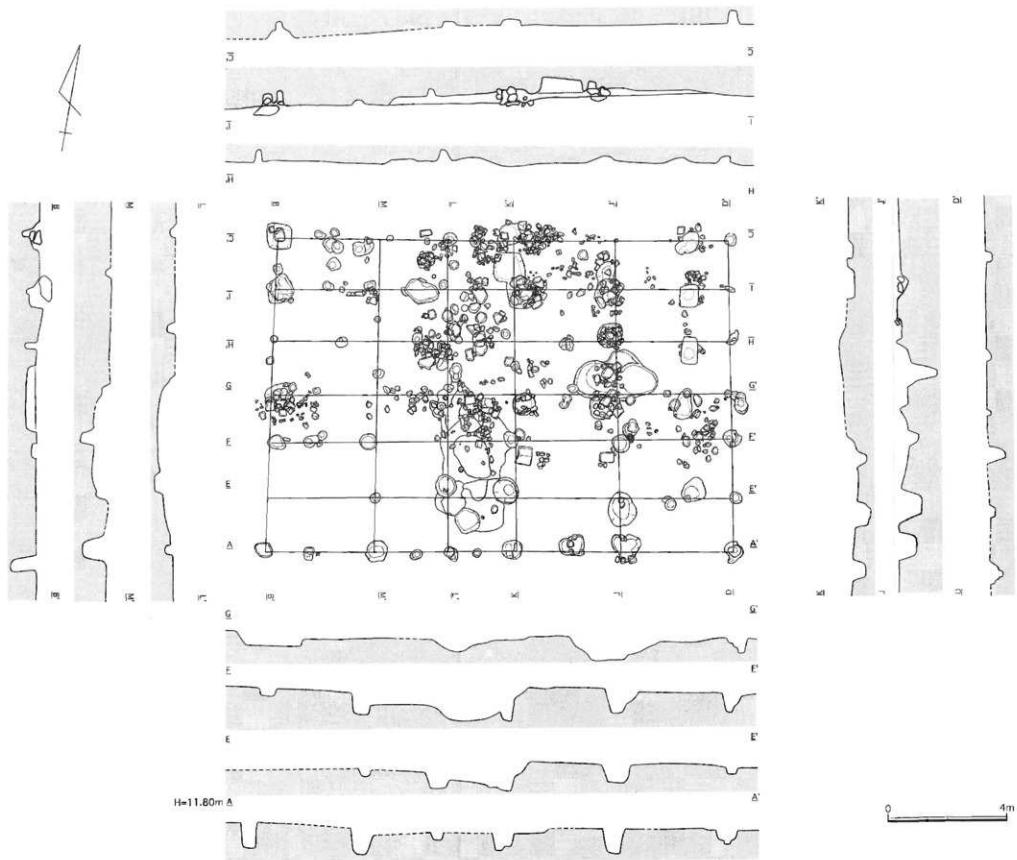
第29図 SH12平・断面図

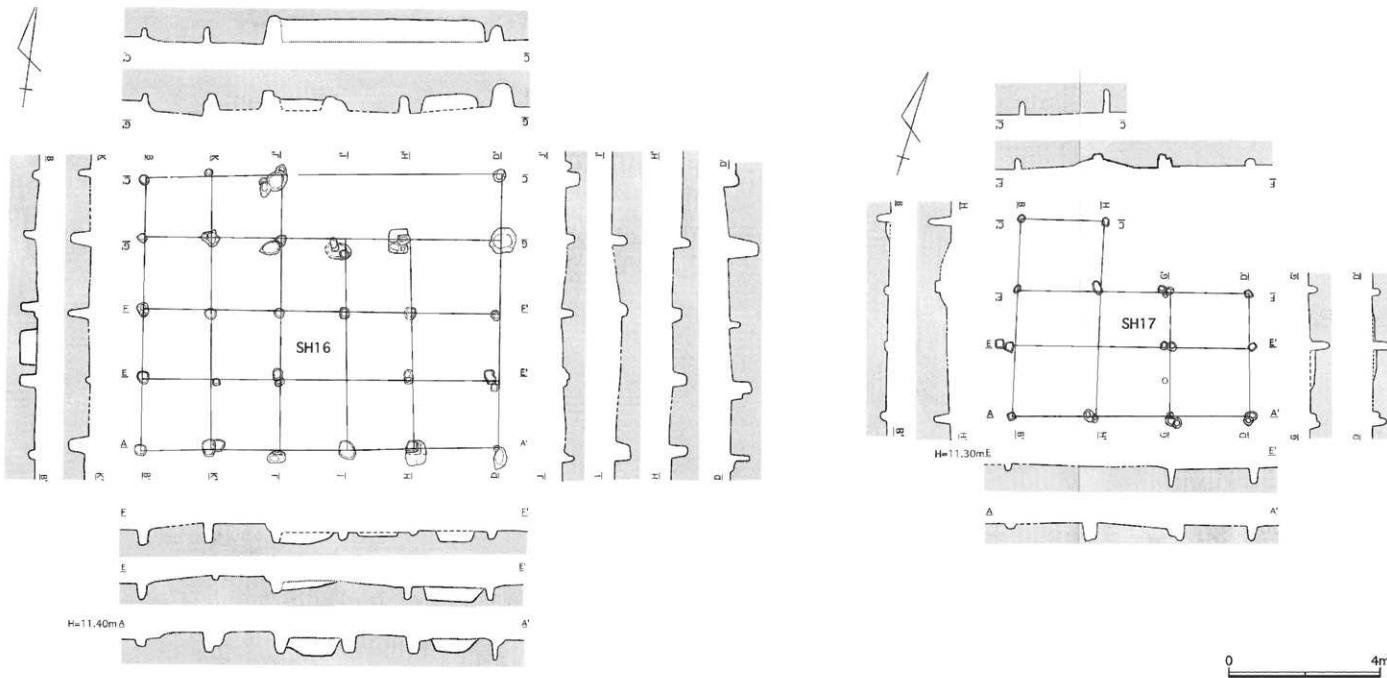


第30図 SH13平・断面図

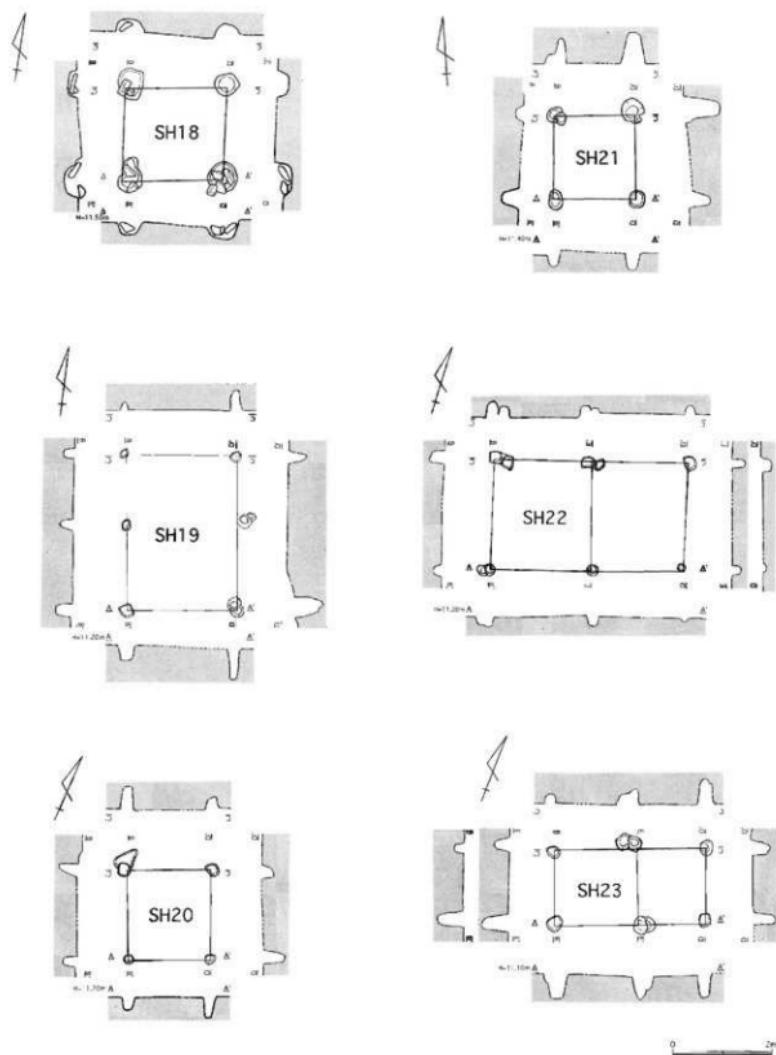


第31図 SH14平・断面図





第33図 SH16/17平・断面図



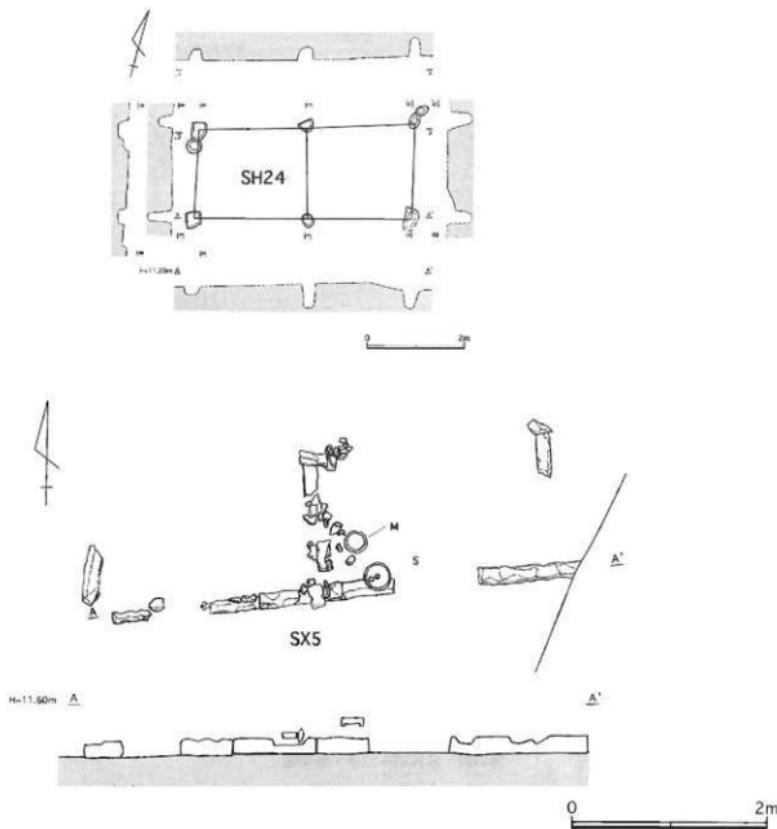
第34図 SH18~23平・断面図

S H10 (第28図)

Q-23グリッドで検出された掘立柱建物で、建物方向は北東あるいは南西である。柱穴は直径約20cmの円形で、検出面から塙方底面までの深さは約20cm～33cm、梁行は約2.6m、桁行は約3.5mである。1間×2間の建物を想定した。柱穴覆土から遺物は出土していないが、建物方向から中世の遺構と判断した。

S H11 (第28図)

Q-23グリッドで検出された掘立柱建物で、建物方向は北東あるいは南西である。柱穴は直径約40cmの円形で、検出面から塙方底面までの深さは約35cmから50cm、梁行は約2.57m、桁行は約5.6mである。1間×2間の建物を想定した。検出面の第VII層・Ⅷ層が東に向かって落ち込んでおり、東側の柱穴が2基検出されなかつたが、整地した後に建てられたものと考えられる。柱穴覆土から遺物は出土していないが、建物方向から中世の遺構と判断した。



第35図 S H24/S X21平・断面図

S H12（第29図）

Q-21・Q-22グリッドで検出された掘立柱建物で、建物方向は南北方向である。柱穴は、直径約40cmの円形で、検出面から堀方底面までの深さは約20cm～80cmである。南西の角は調査区外に位置し、北西部はSH1の影響により、平面構造および全体の規模は不明であるが、最大で梁行約4m、桁行約12m、2間×6間の建物が想定される。柱穴覆土から遺物は出土していない。

S H13（第30図）

P-22・Q-22グリッドで検出された掘立柱建物で、建物方向は南北あるいは東西方向である。

柱穴は直径約20cm～30cmの円形で、検出面から堀方底面までの深さは約30cm～60cm、SH1、SD2持ち建物の影響で、平面の構造および全体の規模は不明であるが、最大で、4間×4間の建物となる可能性がある。南側の柱間がやや広いため、北側のみで2間×4間の建物を形成する可能性あるいは、南側の柱の間に並ぶ柱穴が間柱を構成する可能性がある。柱穴覆土から遺物は出土していない。

S H14（第31図）

P-20・P-21・Q-21グリッドで検出された掘立柱建物で、建物方向は南北あるいは東西方向である。柱穴は直径約20cm～60cmの円形または方形で、検出面から堀方底面までの深さは約40cmである。その他他の遺構、搅乱の影響により平面の構造および全体の規模は不明であるが、5間×6間以上の建物が想定される。柱穴覆土から遺物は出土していない。

S H15（第32図）

O-21・O-22・P-21・P-22・Q-21・Q-22グリッドで検出された。建物方向は東西方向である。主柱の柱穴は直径約80cmの円形または方形で、栗石、玉石が確認されることから石場立て建物が想定される。検出された規模は、5間×6間、梁行約10.8m、桁行約15mであるが、西側に延びる可能性がある。また、柱間にばらつきがあるため、線上に並ぶ小型の柱穴は間柱を構成する可能性がある。SH1と同様の正確を有する建物が想定され、近世の遺構と判断した。

S H16（第33図）

O-21・P-21グリッドで検出された掘立柱建物で、建物方向は南北あるいは東西方向である。

柱穴は直径約20cm～30cmの円形または方形で、検出面から堀方底面までの深さは約10cm～40cmである。検出された規模は、梁行約7.1m、桁行約9.2mである。5間×4間の建物を想定したが、周囲に遺構、搅乱があるため、平面の構造および全体の規模は不明である。柱穴覆土から遺物は出土していないが、建物方向から近世の遺構と判断した。

S H17（第33図）

M-18・N-18グリッドで検出された掘立柱建物で、建物方向は南北あるいは東西方向である。柱穴は直径約30cmの円形または方形で、検出面から堀方底面までの深さは約20cm～60cmである。3間×3間あるいは、2間×3間の建物を想定した。やや不整な平面となるため、東の部分が独立した1間×2間の建物となる可能性もある。柱穴覆土から遺物は出土しなかったが、建物方向から近世の遺構と判断した。

S H18（第34図）

O-21グリッドで検出された。建物方向は東西あるいは南北方向である。柱穴は直径約1mの円形で、検出面から堀方底面までの深さは約60cm、柱間は約1.9mである。4基検出された柱穴の内3基において栗石が確認されており、石場立て建物が想定される。東西および北側に搅乱があるため、平面の構造および全体の規模は不明。また、柱穴覆土から遺物は出土しなかったものの、建物方向、基礎の形態から近世の遺構と考えられる。

S H19（第34図）

N-18・N-19グリッドで検出された掘立柱建物で、建物方向は南北方向である。柱穴は直径約30cmの円

形及びやや隅の丸い方形で、検出面から堀方底面までの深さは約15cm～1m10cm、検出された規模は、梁行約2.1m、桁行約3.05mで、1間×2間の建物を想定した。柱穴覆土から遺物は出土していないが、建物方向から近世の建物と判断した。

S H20（第34図）

M-18・N-18グリッドで検出された掘立柱建物で、建物方向は南北あるいは東西方向である。柱穴は直径約20cmの円形で、検出面から堀方底面までの深さは約30cm～50cm、柱間は約1.5mである。柱穴覆土から遺物は出土していないが、建物方向から近世の建物と判断した。

S H21（第34図）

O-20グリッドで検出された掘立柱建物で、建物方向は南北あるいは東西である。柱穴は直径約30cmの円形、楕円形、やや隅の丸い方形がある。検出面から堀方底面までの深さは約20cm～70cm、東西に擾乱、南にSK2があり、平面の構造および全体の規模は不明である。柱穴覆土から遺物は出土していないが、建物方向から近世の以降と判断した。

S H22（第34図）

M-18・N-18グリッドで検出された掘立柱建物で、建物方向は東西方向である。柱穴は直径約20cmの円形または方形で、検出面から堀方底面までの深さは約10cm～30cm、検出された規模は、梁行約2.05m、桁行4.5mで、1間×2間の建物を想定した。柱穴覆土から遺物は出土していないが、建物方向から近世の遺構と判断した。

S H23（第34図）

N-18グリッドで検出された掘立柱建物で、建物方向は東西方向である。柱穴は直径約30cmの円形で、検出面から堀方底面までの深さは約20cmから1m、検出された規模は、梁行約1.5m、桁行約3.1mで、1間×2間の建物を想定した。柱穴覆土から遺物は出土していないが、建物方向から近世の遺構と判断した。

S H24（第35図）

N-18グリッドで検出された掘立柱建物で、建物方向は東西方向である。柱穴は直径約20cm～30cmの円形または方形で、検出面から堀方底面までの深さは約20cmから50cmである。検出された規模は、梁行約2m、桁行約4.4mで、1間×2間の建物を想定した。柱穴覆土から遺物は出土していないが、建物方向から近世の遺構と判断した。

井 戸**S E1 (第36図)**

M-17グリッドで検出された。平面の形状は円形で、断面の形状は筒型である。規模は、上端の直径約80cm、下端の直径約75cm、検出面から堀方底面までの深さは約90cmである。出土した遺物は、鍔付鍋、大窯4期前半の志戸呂産の擂鉢（第63図1～3）で中世の遺構と判断した。

S E3 (第37図)

R-21グリッドで検出された。平面の形状はやや東西に長い梢円形で、断面の形状は漏斗型である。規模は上端の長径約1.46、短径約1.16m、下端の径約86cm、検出面から堀方底面までの深さは約3.22mである。覆土は3層に分層でき、下層は粘質性が高く遺物を多く含む。出土した遺物は、近世に比定される瀬戸美濃産の天目茶碗、カワラケ、（第63図7・9・11）、漆椀（第102図1～3）、木筒（第102図4）、桶（第103図3）、建築部材（第104図1～13）が出土している。近世前半から中頃の遺構と判断した。

S E4 (第37図)

R-21グリッドで検出された。平面の形状は円形、断面の形状は筒形が想定されるが崩落により不整である。規模は上端の直径約1.7m、下端の直径約85cm、検出面から堀方底面までの深さは約3.42mである。覆土は3層に分層でき、下層は粘質性が高く遺物を多く含む。出土した遺物は、椀、箸、鍔先、部材等の木製品である。（第105図～第107図）。

S E5 (第38図)

M-20グリッドで検出された。平面の形状はやや南北に長い梢円形で、断面の形状は円筒形であるが部分的に崩落が認められる。規模は上端の直径が約65cm、下端の直径が約20cm、検出面から堀方底面までの深さは約2.5mである。覆土は4層に分層されるが、上部と下部で明確に分層できる。上層は褐色を基本とする上層で炭化物を含み、下層は粘性の高い覆土に鉄分、礫、木片を含む。出土した遺物は近世に比定されるカワラケで（第63図4）、底部に直径約5mmの孔が開けられており、井戸の祭祀に関連すると考えられる。

S E6 (第38図)

N-19グリッドで検出された。平面の形状は、上端においてはやや不整な方形であるが、すぐ下部で円形となる。断面の形状は不整な円筒形である。規模は上端のA-A'における径が約1.3m、検出面から堀方底面までの深さは約2.05mである。覆土は6層に分層できるが、最下層では、底面よりやや上部に敷石状に繕が確認された。出土した遺物は中世のカワラケ（第63図5）である。

S E7 (第38図)

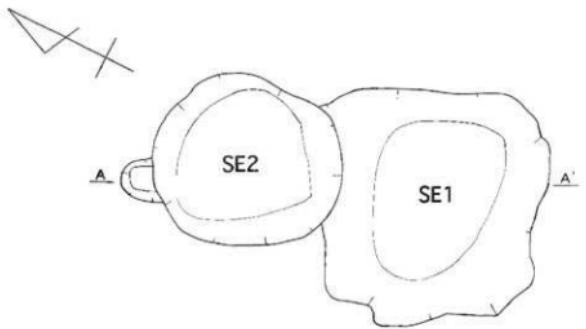
Q-19グリッドで検出された。平面の形状はやや隅の丸い方形で、断面の形状は筒形である。規模は上端の径約1.36m、下端の径約80cm、検出面から堀方底面までの深さは約1.86mである。覆土は4層に分層されるが、いずれの層にも炭化物を多量に含んでいる。本遺構から遺物は出土していない。

S E8 (第39図)

O-19・O-20グリッドで検出された。攪乱を除去した段階で検出されたため、平面の形状および全体の規模は不明であるが、断面の形状は漏斗型となる。規模は、上端の直径約3.15m、下端の直径約1.5m、検出面から堀方底面までの深さは約4.15mである。覆土は5層に分層できる。出土した遺物は、中世に比定される鍔付鍋、大窯期の瀬戸美濃産、志戸呂産の皿類、擂鉢、常滑窯の甕類、中世および近世のカワラケ（第62図）、木製品（第100図4～8・第10図1～4）である。

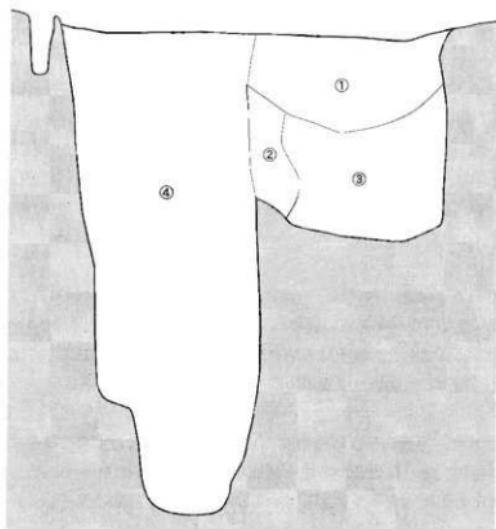
S E9 (第40図)

P-23グリッドで検出された。西側を攪乱により失うが、平面の形状は円形で、断面の形状は漏斗型である。規模は上端の直径約3m、検出面から6m以上の深さを有する。幅約20cm、長さ約2mの板材を



H=11.00m A

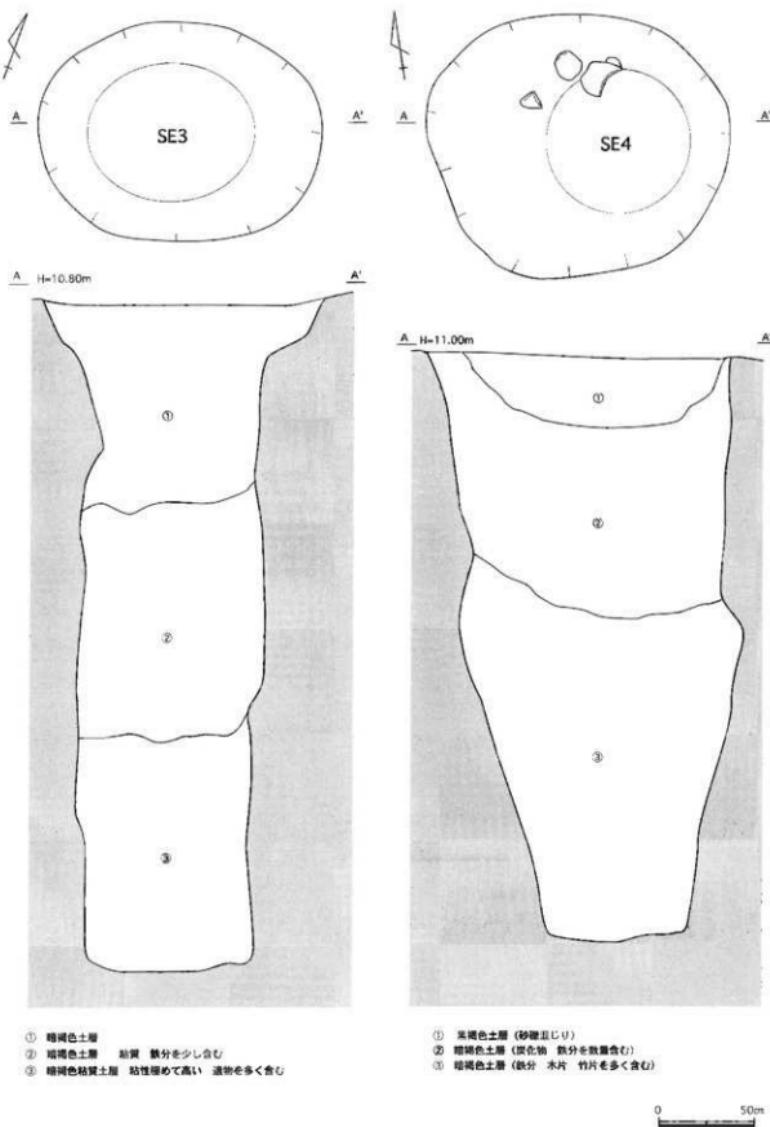
A'



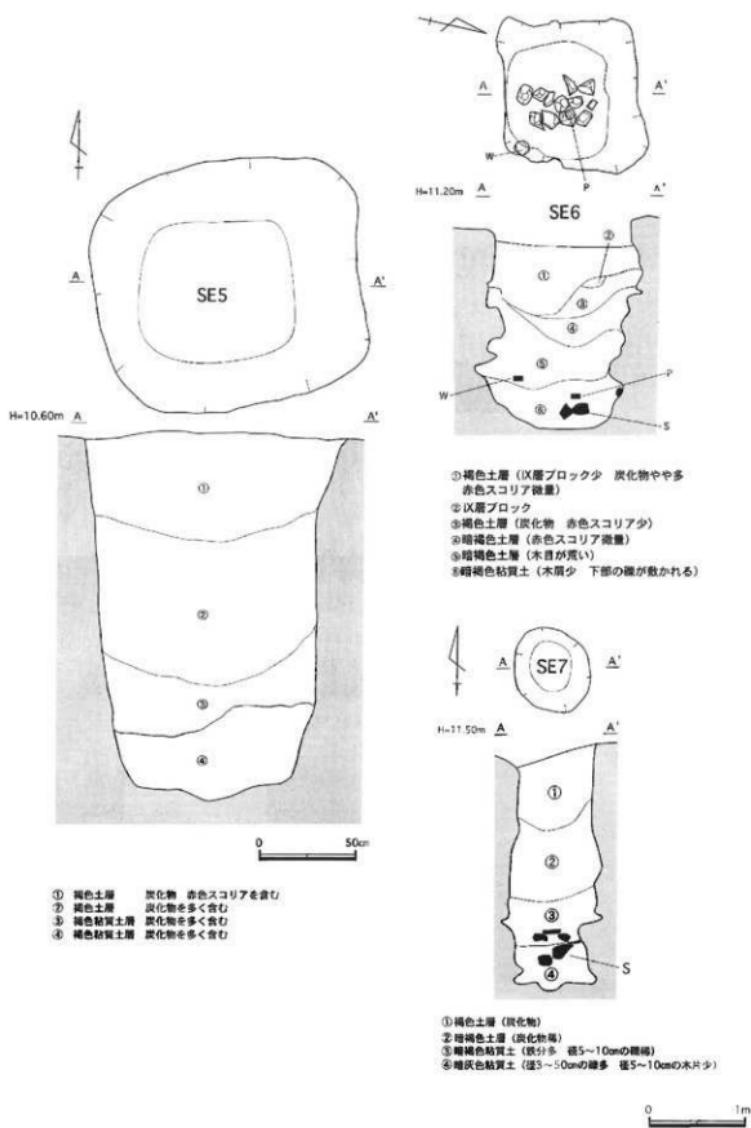
- ① 暗褐色土 灰色ブロック（マサ）多
- ② 暗褐色土 灰色ブロック（マサ）非常に多
- ③ 暗褐色土
- ④ 暗褐色土 （粘性あり）



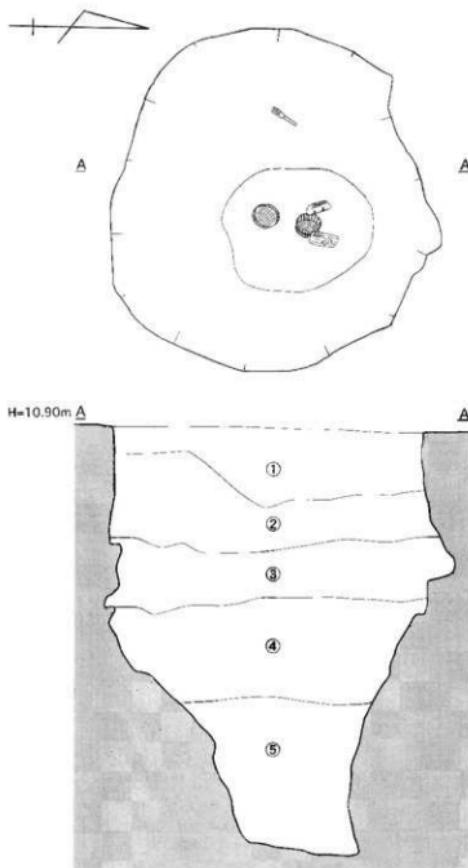
第36図 S E1/2平・断面図



第37図 SE3/4平・断面図



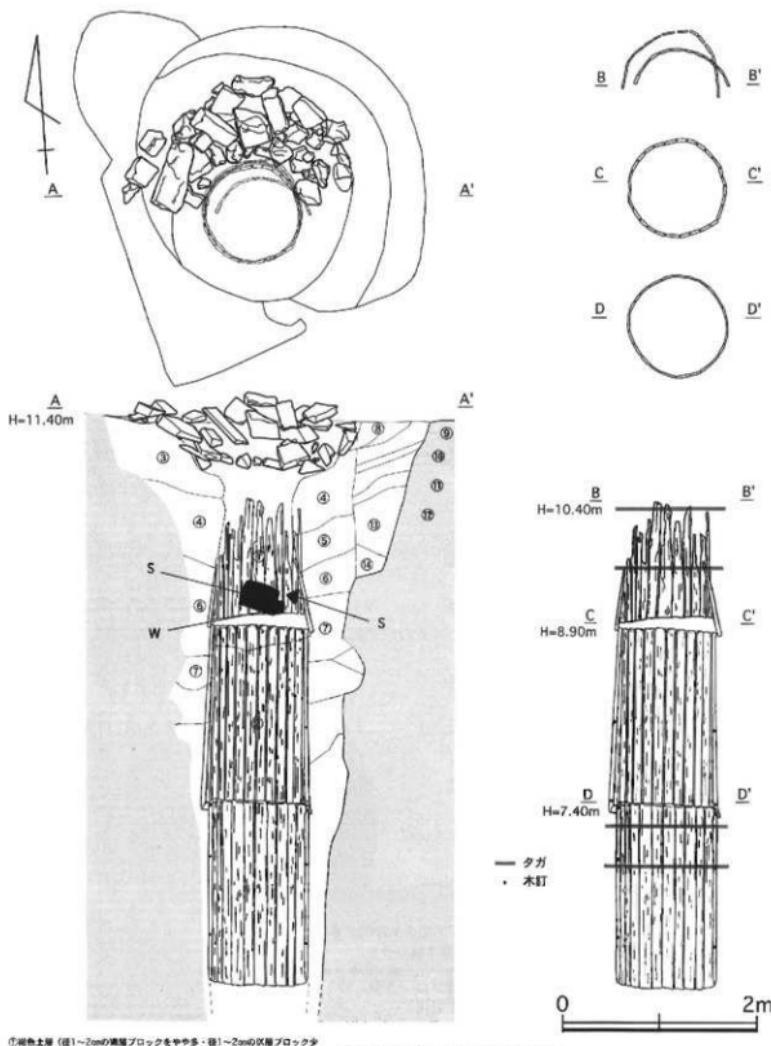
第38図 SE5~7平・断面図



- ①褐色土層（径1～10cmのⅧ層ブロック非常に多）
- ②褐色土層（径1cmのⅧ層・Ⅸ層ブロック少
炭化物微量径10cm～50cmの河原石稀）
- ③暗褐色土層（径3～5cmのⅧ層ブロック少
径50cm～の河原石稀）
- ④暗灰色褐色粘質土（径2～5cmのⅧ層ブロック少　木製品）
- ⑤暗紫褐色土（径10～50cmのⅧ層ブロック多　木屑少）

0 2m

第39図 S E 8平・断面図



①褐色土層（径1~2mの塊状ブロックをやや多く、径1~2mの汎層ブロック少
量化物 質分 傷色スコリア 径30~40cmの角部）

②青灰色砂質土（径5cmの颗粒）

③暗褐色土層（径4~5cmの塊状ブロック非常に多く、径2~3cmの汎層ブロック多
量化物 傷色スコリヤ）

④褐色土層（径2~3cmの塊状ブロック非常に多く、径2~3cmの汎層ブロック多
量化物 傷色スコリヤ 径10cmの砾）

⑤青褐色土層（径2~3cmの塊状ブロック多く、径10cmの汎層ブロック非常に多く）

⑥褐色土層（径3~4cmの塊状ブロック、径1~2cmの汎層ブロックやや多く）

⑦暗褐色土層（径3~4cmの塊状ブロック多く、径1~2cmの汎層ブロックごく少
なく3cmの砾 傷色スコリヤ）

⑧褐色砂質土（径1cmの汎層ブロックごく少 砂質）

⑨茶褐色土層（径2~3cmの汎層ブロック少 質分少）

⑩褐色砂質土（径3~4cmの砂層・汎層ブロックやや多く 質分少 砂質）

⑪褐色土層（径2~3cmの汎層ブロック多 量化物ごく少 質分少）

⑫褐色土層（径3~5cmの砂層ブロック大層 質分や量）

⑬褐色土層（径3~5cmの砂層・径2~3cmの汎層ブロックを多
量化物・質分少）

⑭暗褐色土層（径2~3cmの汎層ブロック少 質分少 質化物ごく少）

第40図 S E9平・断面図

24~58枚組み合わせた井戸枠が二段確認された。井戸枠の径は約1mで、下部の井戸枠が上部の井戸枠の中に数cm入るように組み合わされている。上段および下段の井戸枠上部には、それぞれ約60cm、約40cmの間隔で2列のタガが残存していた。さらに中断、下段においては、それぞれ約80cm、約60cm間隔で木釘が確認された。井戸枠の東側は砂層と土層が交互に堆積しており版築構造を有する。さらに上端においては、井戸枠を開むように組石が確認された。出土した遺物は、肥前系の小杯、丸碗、京焼風碗等である（第63図11~20）。

土 坑

S K1（第41図）

Q-24グリッドで検出された。平面の形状は円形で、断面の形状は西側が削平され不明であるが、逆台形が想定される。規模は上端の直径が約48cm、検出面から堀方底面までの深さは約12cmである。覆土中に多量の焼土を含んでおり、焼土坑と判断した。本遺構から遺物は出土していない。

S K2（第41図）

O-21グリッドで検出された。平面の形状は円形で、断面の形状は逆台形である。規模は上端の直径が約1m、下端の直径が約85cm、検出面から堀方底面までの深さは約40cmである。本遺構から遺物は出土していない。

S K3（第40図）

O-21グリッドで検出された。平面の形状はやや不整であるが円形で、断面の形状は逆台形である。規模は上端の直径が約1m、下端の直径が約84cm、検出面から堀方底面までの深さは約42cmである。本遺構から遺物は出土していない。

S K4（第41図）

Q-24グリッドで検出された。平面の形状はやや不整であるが円形で、断面の形状は逆台形である。規模は上端の直径が約80cm、下端の直径が約60cm、検出面から堀方底面までの深さは約36cmである。出土した遺物は、近世に比定される産地不明の甕である。

S K5（第41図）

M-20グリッドで検出された。北側、西側が調査区外に延びるが、平面の形状は方形、断面の形状は逆台形が想定される。規模は、下端の短軸が約52cm、検出面から堀方底面までの深さは約80cmである。本遺構から遺物は出土していない。

S K6（第41図）

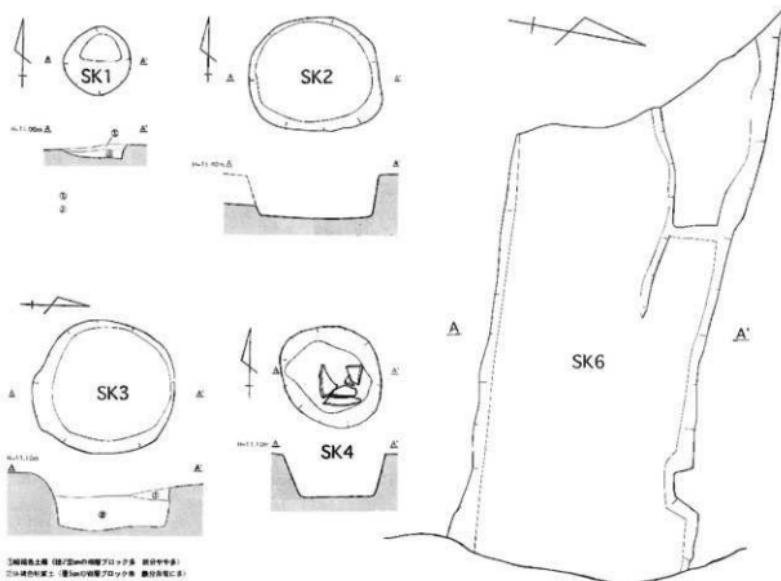
O-20グリッドで検出された。西側および東側を搅乱により失うが、平面の形状は東西に長い長方形が想定される。断面の形状は逆台形である。検出面から堀方底面までの深さは約36cmである。図示できなかったが、瀬戸美濃系の幻明皿、肥前系の丸碗が出土しており、近世後半の遺構と判断した。

S K7（第42図）

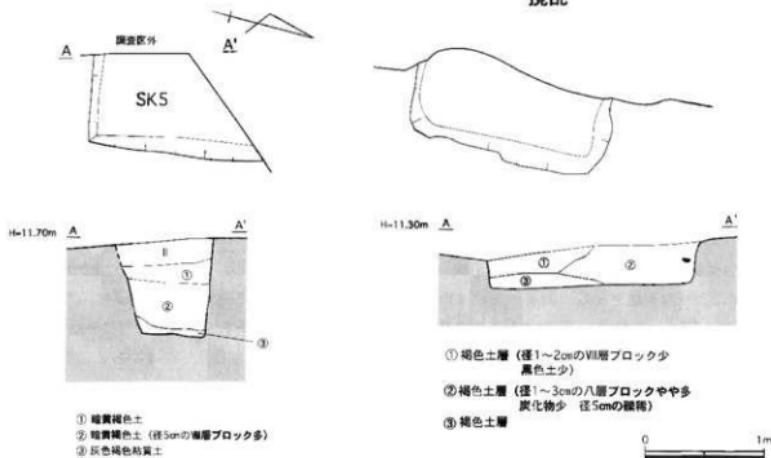
P-22グリッドで検出された。平面の形状は、南北に長い長方形であるが北西部に張り出す部分を有し逆L字のような形態となる。断面の形状は東側にテラス状の段を有する逆台形で、規模は、上端の長軸が約2.2m、短軸が1.22m、検出面から堀方底面までの深さは約44cmである。覆土は2層に分層されるが、下層に径20cm前後の礫を含んでいる。出土した遺物は、貿易陶磁、肥前系の丸碗等である（第71図5~6）。

S K8（第42図）

Q-23グリッドで検出された。平面の形状は東西に長い長方形で、断面の形状は逆台形である。規模は上端の長軸が約1.8m、短軸が約98cm、検出面から堀方底面までの深さは約12cmである。覆土中に20cm~40cm前後の礫を含む。出土した遺物は、貿易陶磁が1点含まれるが、蛸唐草文様の御神酒徳利、焼継ぎ



搅乱



第41図 SK1~6平・断面図

された土瓶、端反碗、端反碗蓋等であることから、18世紀後半から19世紀中頃の遺構と考えられる（第71図8～19）。

S K9（第42図）

P-23グリッドで検出された。東側および南側を失われているものの、平面の形状は南北に長い長方形で、断面の形状は逆台形であることが想定される。規模は、上端の長軸が約4.12m、短軸が約1.7mが想定される。検出面から堀方底面までの深さは約40cmである。底面中央部に長槽円形の土坑状の凹、南北に2基のピットが認められるが、本遺構に伴うものであるかは不明である。本遺構から遺物は出土していない。

S K10（第42図）

Q-23グリッドで検出された。平面の形状は南北に長い長方形で、東側が削平されているものの断面の形状は、逆台形が想定される。規模は、上端の長軸が約3.15m、短軸が約1.75mが想定され、検出面から堀方底面までの深さは約28cmである。覆土中に炭化物を多く含む。出土した遺物は、貿易陶磁を1点含むが、瀬戸美濃系の灯明皿、片口鉢等はいずれも18世紀後半から19世紀前半に比定され、この時期の遺構である可能性が高いと考えられる（第70図6～17）。

S K11（第43図）

Q-20グリッドで検出された。SD5を切る。平面の形状はやや隅の丸く、南北方向に長軸を有する長方形で、断面の形状はやや不整であるが逆台形である。検出された規模は、南北長約3m、東西長約2.5m、検出面から堀方底面までの深さは約30cmである。本遺構から遺物は出土していない。

S K12（第43図）

O-21・O-22グリッドで検出された。平面の形状はやや不整な方形で、断面の形状は逆台形である。規模は上端の長軸（東西）が約2.4m、短軸（南北）が約2.12m、検出面から堀方底面までの深さは約48cmである。直径約30cmの柱穴が上端に沿って検出されており、本遺構と関連する可能性が考えられる。覆土中には、約10cm～30cmの礫が多く含まれる。大窯4期前半の志戸呂窯内焼皿、18世紀後半に比定される肥前系の中皿の他、櫛の羽口（第70図1～5）の他、団化できなかったが、鉄滓が多量に出土しており、近世における鍛冶に関連した施設である可能性がある。

S K13（第43図）

Q-20グリッドで検出された。平面の形状は、東西方向に長軸を有する長方形で、断面の形状は逆台形である。検出された規模は、東西長約2m、南北長約1.1m、検出面から堀方底面までの深さは約20cmである。本遺構から遺物は出土していない。

S K14（第44図）

Q-19・Q-20グリッドで検出された。SK15を切る平面円形、断面の形状は逆台形の土坑である。検出された規模は、直径約1.2m、検出面から堀方底面までの深さは約72cmである。本遺構から遺物は出土していない。

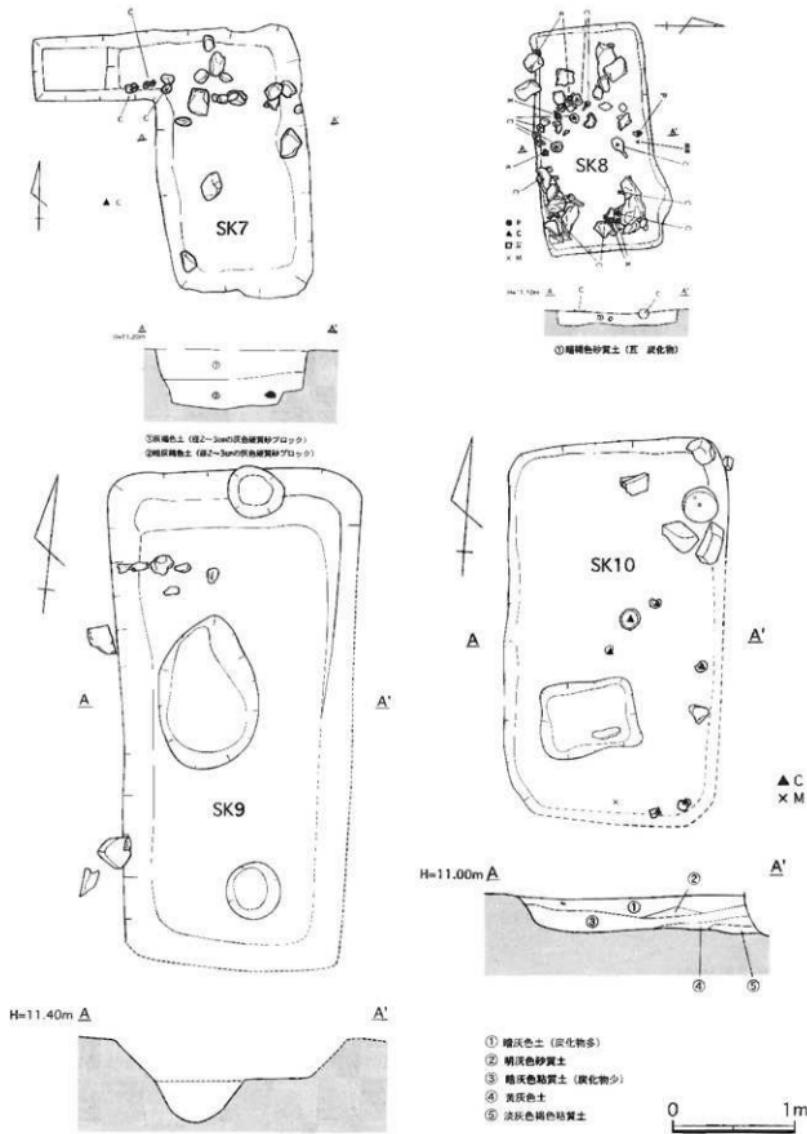
S K15（第44図）

Q-19・Q-20グリッドで検出された。東側に削平を受けるものの、平面の形状はやや隅が丸く南北に長い長方形で、断面の形状は逆台形が想定される。検出された規模は、南北長約8.4m、検出面から堀方底面までの深さは約44cmである。覆土は2層に分層されるが、下層において腐食した木屑を多量に含んでいる。本遺構から遺物は出土していない。

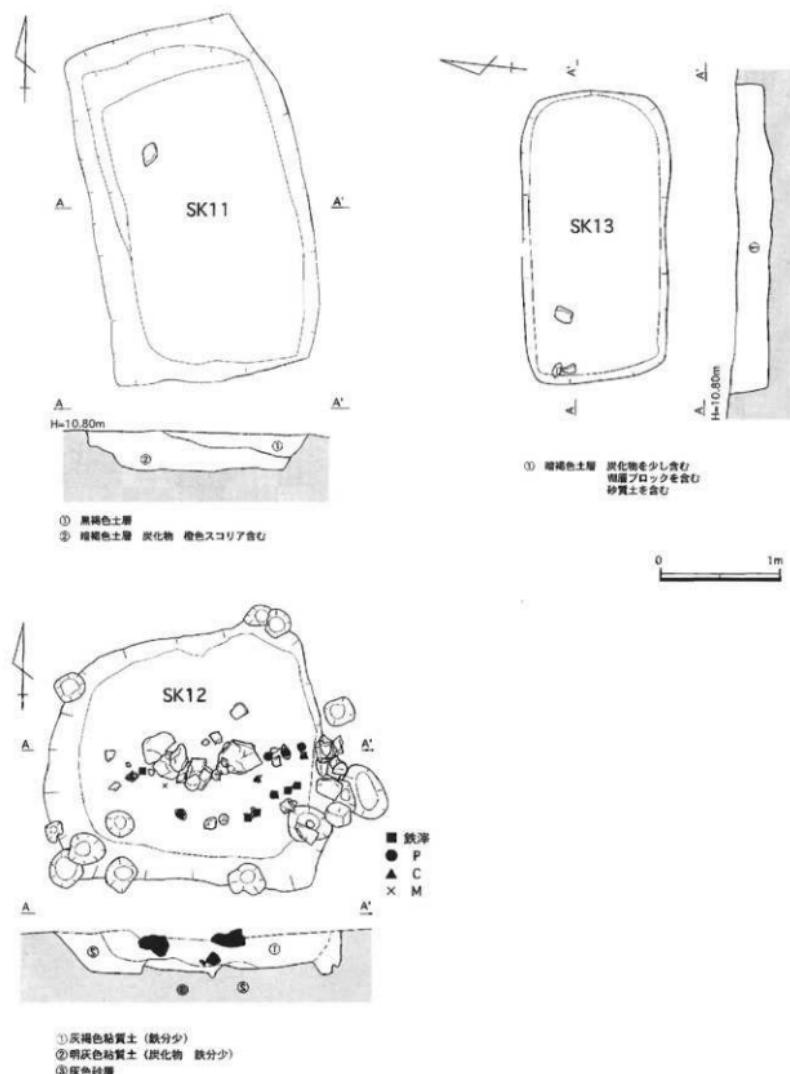
溝

S D1 堀（第45図）

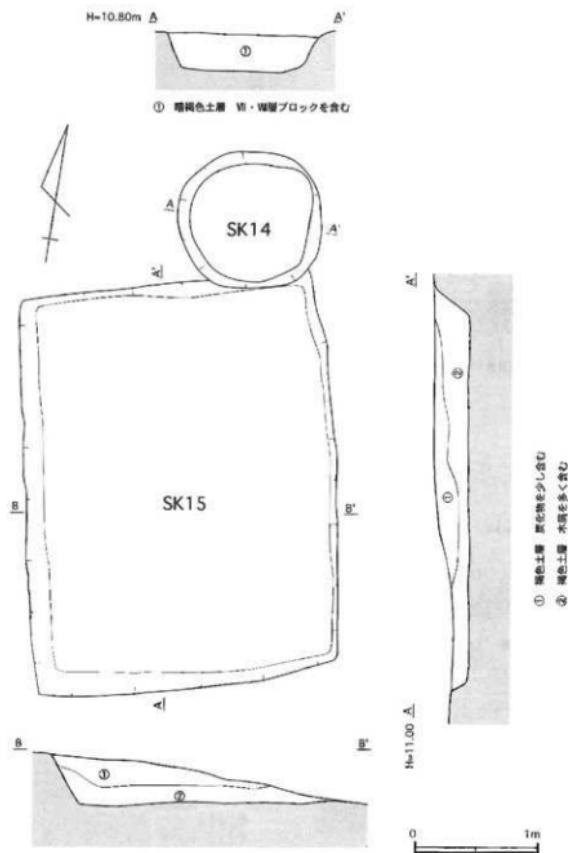
L-17・L-18・M-16・M-17グリッドで検出された堀で、底面に幅約60cm、高さ約30cmの歓状の仕切を



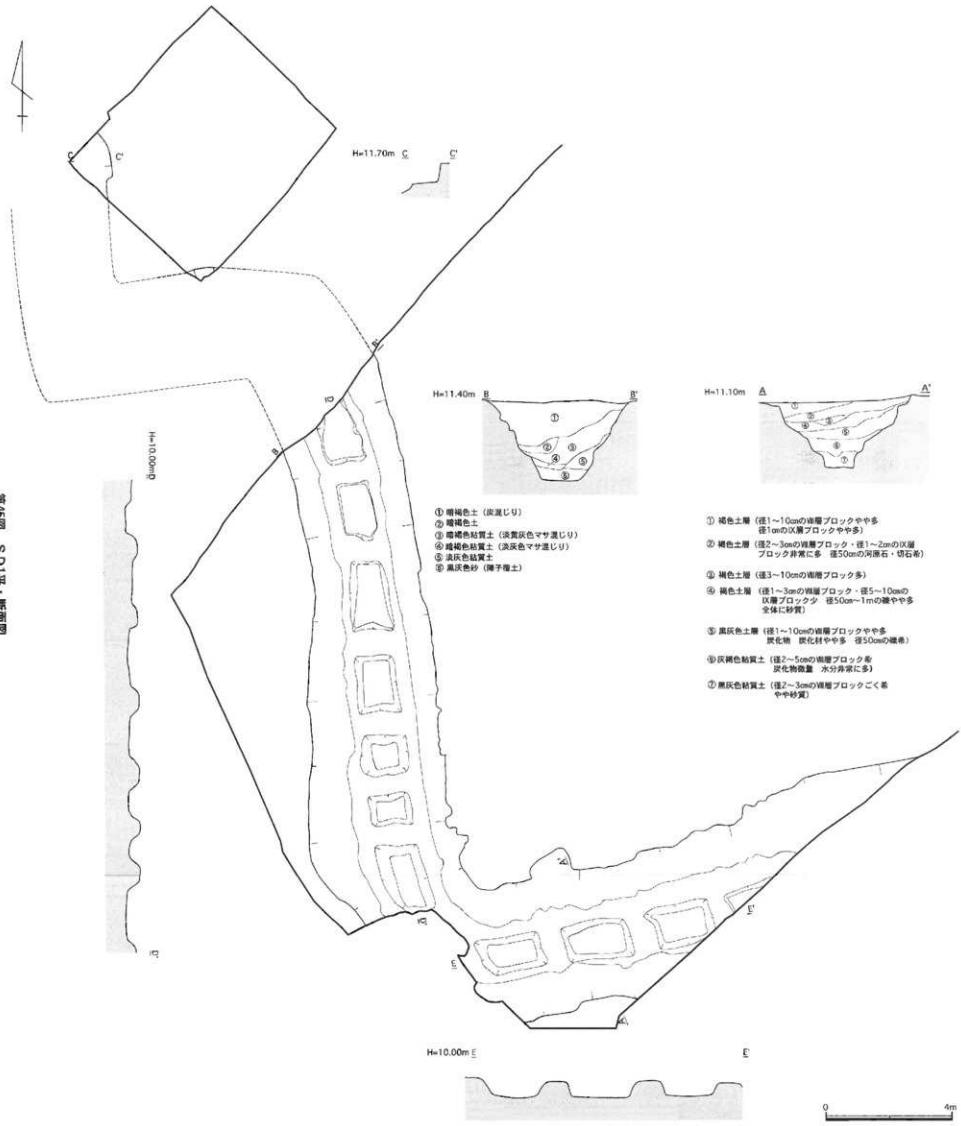
第42図 SK7~10平・断面図

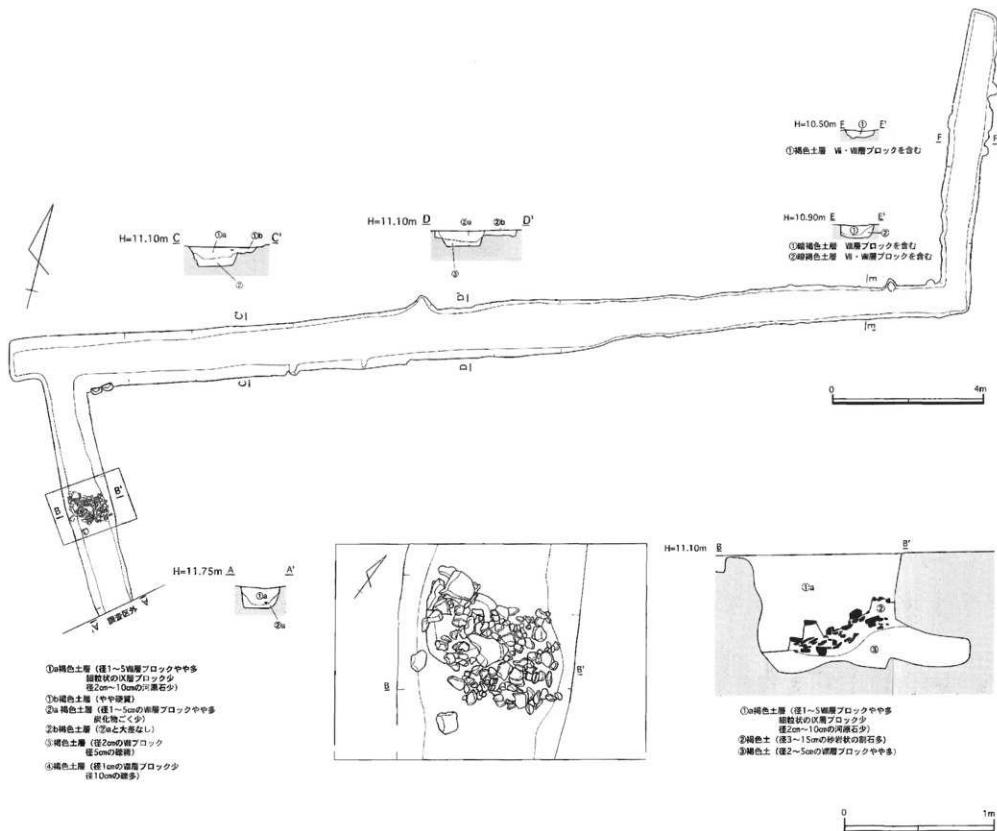


第43図 SK11~13平・断面図



第44図 SK14/15平・断面図





第46図 SD 2平・断面図

約2mおきに有する、いわゆる歓堀と呼ばれるものである。検出された部分の堀の平面の形状は、南北方向、東西方向にそれぞれN-14°-W、E-12°-Nの傾きを有し直線的に延びるが、下水区付近でクランク状に屈曲し北西方向に延びることが確認された。また、検出が予測された、調査区の中央南端付近では、基盤層である御殿場泥流層が自然地形を有していた。堀の上端のレベルが約9.8m、自然地形の上面のレベルが約10.3mであることから、堀が直線的に延びているとすれば検出が予想されるが、堀の痕跡は認められなかった。これは、北東部で検出されたSR1のように、堀が存在した時期にも、館の一部に自然地形を取り込んでいた可能性を示している。断面の形状は逆台形で、犬走状の平面を2~3段有している。検出された規模は、南北長約16.5m、東西長約14m、A-A'における上端の幅約3.72m、下端の幅約1m、B-B'における上端の幅約4.3m、下端の幅約90cmで、検出面から堀方底面までの深さは約2.1mである。覆土は6~7層に分けられる。歓堀から出土した遺物は、漆椀(第99図4)、17世紀に比定される志戸山の輪充皿(第64図11)、大窓期の志野丸皿、瀬戸美濃産描鉢等で、近世の前半に埋まり始めた可能性が高い。また、中・上層においては、堀りなおされた状況が確認でき、近世から近代前半に下る遺物が出土していることから、近世から近代前半においても堀の形態が残っていたと考えられる。

SD2(第46図)

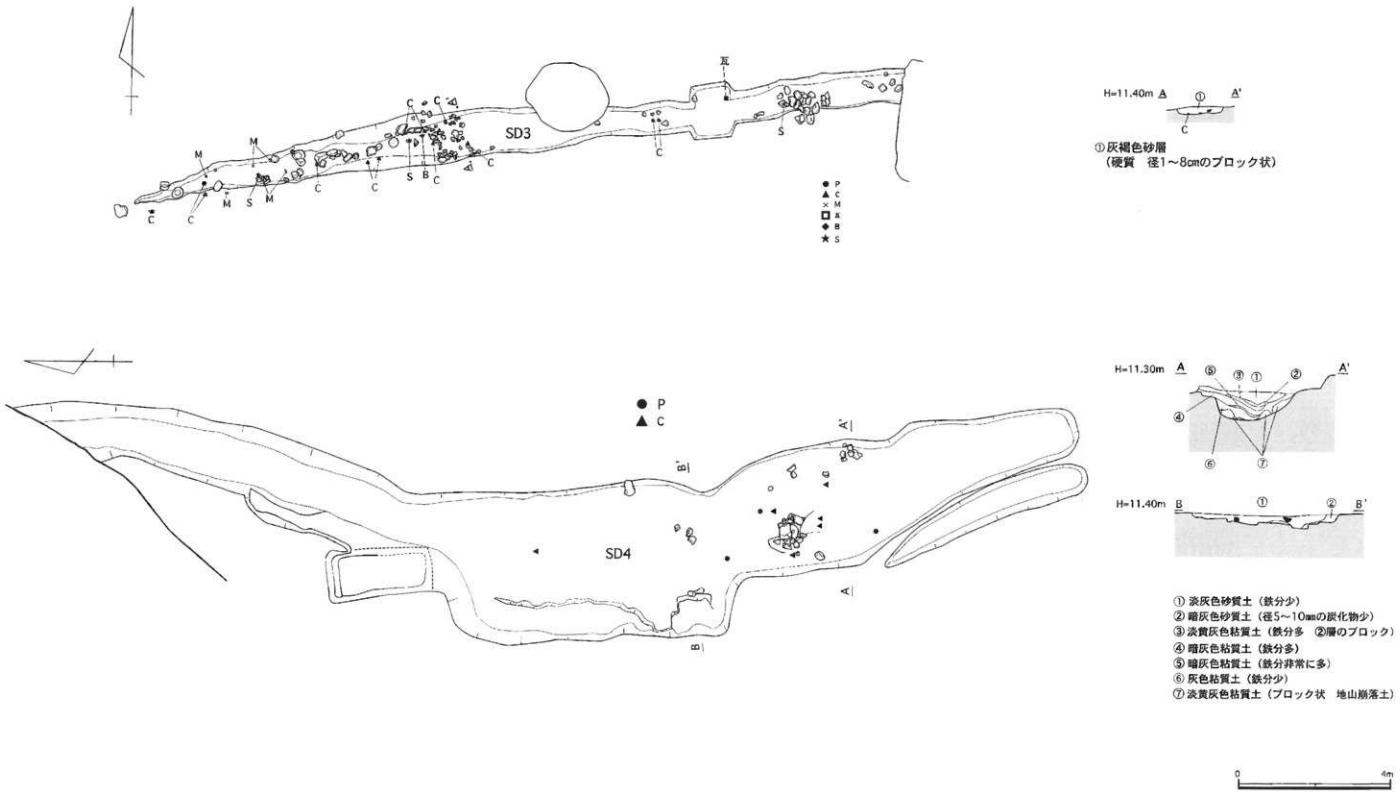
M-18・N-18・O-18グリッドで検出された。東西方向に直線的に延び、西端で南に、東端で北に屈曲するクランク状の平面の形状を有し、断面の形状は逆台形を有する。検出された規模は、東西長約13.6m、西端の南に延びる部分の南北長約6.3m、東端の北に延びる部分の南北長約7.5m、幅約1.4m、検出面から堀方底面までの深さは約60cmである。西端から南に延びる構の中央付近には、東側の壁面に掘削された直径約60cm、奥行き約1mの横穴状の掘り込みが確認され、さらに開口部に径20cm~30cm前後の川原石が配されていたことから、掘り込みを貯蔵穴、石をその閉塞石と判断した。出土した遺物は、大窓4基の志戸呂産の描鉢、19世紀代に比定される肥前系の中皿(第66図5~14)、煙管(第101図9・10)、錢貨(第113図11~13)等である。近世後半の仁田館を描いた銅版画と本遺構、現存する仁田三兄弟の墓、土塁等の位置関係の比較から、本遺構が館の南側の角に描かれる堀に関連する可能性がある。

SD3(第47図)

O-21・P-21・Q-21・Q-22グリッドで検出された。東西方向に直線的に延びる溝であるが、東端は擾乱によって切られており、全体の規模は不明である。断面の形状は皿状に近い逆台形である。検出された規模は、東西長約20.5m、幅約1.2m、検出面から堀方底面までの深さは約20cmである。本遺構の南側には、石材を組み合わせて構築した溝状の施設が検出されており、水利施設と考えられる。本遺構より時期は下るもの、方向性などは本遺構と一致しており、覆土中に径約20cmの礫が多量に含まれる点をふまえても、暗渠のような施設として機能した可能性がある。出土した遺物は、肥前系の筒型碗(第69図8)、瀬戸美濃系の灯明皿(第69図17・18)等、18世紀後半から19世紀に比定される。この時期の遺構と考えられることから、母屋であると想定されるSH1と関連する遺構になる可能性が高い。

SD4(第47図)

P-21・P-22・P-23グリッドで検出された。南北方向に延びるやや不整な平面の形状を有する溝である。中央部で幅が広くなり、北部でやや東に屈曲する。北端は調査区外に延びるため、全体の平面の形状および規模は不明である。検出された規模は、南北長約28m、B-B'における幅約4m、検出面から堀方底面までの深さは約40cmである。南端から北に約6mの地点には深さ約1mの掘り込みが認められ、北部にはSK9も位置するが、全体に他の遺構との切り合いが不明瞭であり、掘り込みが本遺構に伴うものであるか、また、新旧関係も含めて不明な点が多い。出土した遺物は、古瀬戸後I期の天日茶碗(第68図2)や大窓3期の瀬戸美濃産の天目茶碗(第68図5)等中世の遺物を多く含むが、肥前系の丸碗や



第47図 SD/4平・断面図

小広東竪（第68図14・15・24）等近世後半の遺物も含まれる。本遺構の位置する地点は、近世後半の母屋の位置する場所で、館の中央部に相当することから、あらゆる時期を通じて、頻繁に土地利用されたことが想定され、遺物が後世に混入したものであるかを含めて本遺構の時期を特定することは難しい。あるいは、平面が不整な理由として、幾つかの遺構が重複しており、その中に中世の遺構が本遺構の中に含まれている可能性がある。

S D5（第48図）

Q-20・Q-21グリッドで検出された。南北方向に直線的に延びる溝であるが、南端はSK11に切られるため、平面の形状および全体の規模は不明である。断面の形状は、やや不整であるが逆台形である。検出された規模は、南北長約10.4m、A-A'における幅約1.8m、検出面から堀方底面までの深さは約50cmである。覆土中に僅20cm前後の礫を多量に含む。大窯1～3期の瀬戸美濃産の丸皿あるいは端反皿の小破片が1点出土している。

S D6（第48図）

Q-19・R-20グリッドで検出された。東西方向に直線的に延びる溝であるが、東端は削平を受けており、平面の形状および全体の規模は不明である。断面の形状は、逆台形であるが北側にテラス状の段を有する。検出された規模は、東西長約8.3m、A-A'における幅約2.5m、検出面から堀方底面までの深さは約1.4mである。出土した遺物は、肥前系の青磁脚付盤、瀬戸美濃系の碗の底部である（第67図15・16）。

S D7（第49図）

O-19グリッドで検出された。南北方向に延びる溝で、南部においてSD2を切る。北端は搅乱に切られるため平面の形状および全体の規模は不明である。断面の形状は、逆台形であるが、東側が約10cm程高くなっている。検出された規模は、南北長約5.5m、幅約1.9m、検出面から堀方底面までの深さは約66cmである。出土した遺物は、18世紀から19世紀代の瀬戸美濃産の手炙または風呂、布袋人形が鍋の上に乗るモチーフを象った瀬戸美濃系の水差（第67図3～7）、鎌状の鉄製品（第109図18）等である。

S D8（第49図）

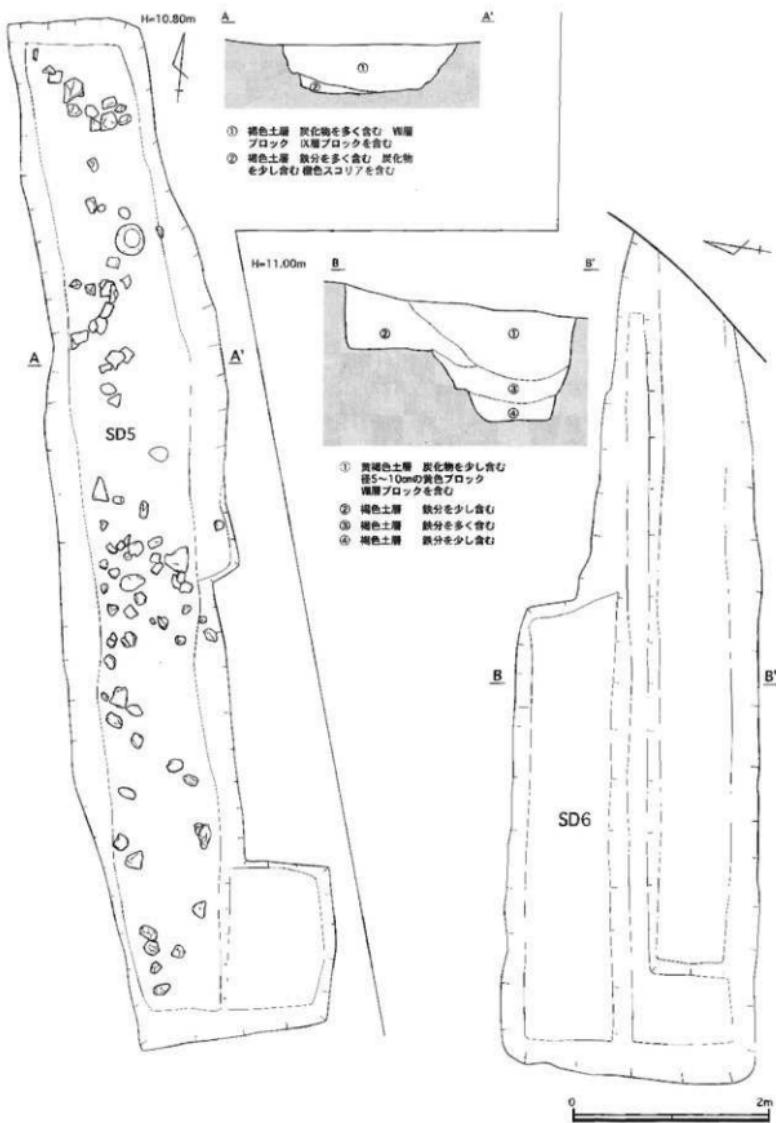
M-20・N-20グリッドで検出された。東西方向に延びる溝であるが、東端を搅乱、西端を調査区のラインに切られ、平面の形状、全体の規模は不明である。断面の形状は北側が一段高くなるが、覆土の堆積状況から同一の溝と判断できる。検出された規模は、東西長約12.8m、上端の幅約1m、約10cmの段を有する下端の幅は約40cmずつ、全体で約80cmとなる。検出面から堀方底面までの深さは約32cmである。出土した遺物は、18世紀後半から19世紀前半に位置づけられる肥前系の御神酒徳利（第67図2）等での時期の遺構と考えられる。現存する仁田三兄弟の墓、土壙と近世後半の館を描いた銅版画を比較すると、はなれ状の建物の南側に描かれている堀に関連する遺構である可能性がある。

S D9（第50図）

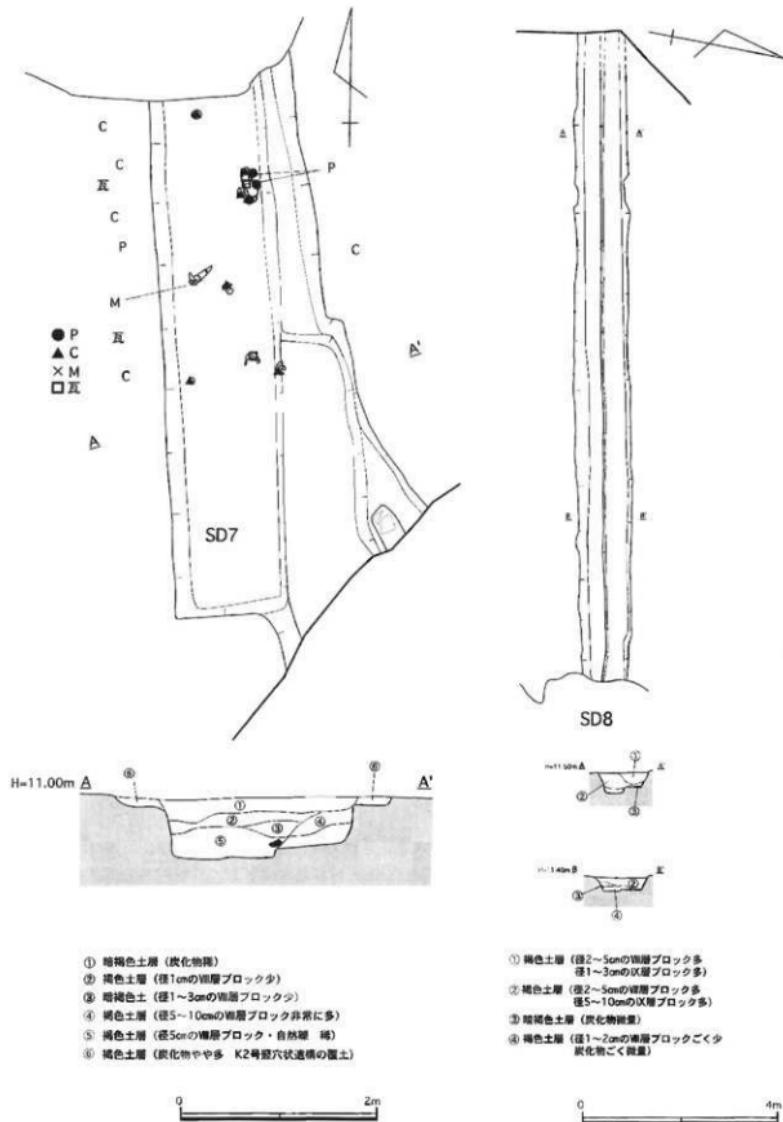
O-18・O-19グリッドで検出された。南北方向に直線的に延びる溝であるが、北側を搅乱、南側をSD2に切られ、平面の形状、全体の規模等は不明、断面の形状は皿状である。検出された規模は、南北長約8.4m、幅約4m、検出面から堀方底面までの深さは約42cmである。中央やや北側において、約1mにわたり、東にずれる様子が確認でき、断層の影響を受けた可能性がある。出土した遺物は、大窯3期後半の瀬戸美濃産擂鉢（第67図1）、錢貨（第113図1・2、第114図14・15）、また図化できなかつたが、貿易陶磁、白磁菊皿、染付端反皿等であり、中世後半から近世初頭の遺構と判断した。

S D10（第50図）

P-21・P-22・Q-21グリッドから検出された。直径約1mの柱穴が2基、約1mの間隔で並び、さらに北に約2mの間隔で、直径約50cmの柱穴が並ぶ、柱穴の並びに幅約80cm、検出面から堀方底面までの深さ約25cmの溝が掘削されており、建物に伴う溝と判断した。図化できなかつたが、大窯3期後半の瀬



第48図 SD5/6平・断面図



第49図 S D7/8平・断面図

戸美濃産鉄軸平碗、大窯4期前半の志戸呂産鉄釉内禿皿等が出土している。

S D11 (第51図)

N-18・N-19グリッドで検出された。東西方向に延びる溝であるが、東端は搅乱に切られるため、平面の形状および全体の規模については不明、断面の形状は皿状である。規模は東西長約7.5m、幅約1mで、検出面から堀方底面までの深さは約15cmである。本遺構から遺物は出土していない。

S D12 (第51図)

N-18グリッドで検出された。東西方向に延びるが、SD7・SD9に切られるため、平面の形状および全体の規模は不明、断面の形状は逆台形である。検出された規模は、東西長約12.5m、幅約60cm、検出面から堀方底面までの深さは約10cmである。図化できなかったが、大窯1期に比定される瀬戸美濃産縁釉はさみ皿が出土している。

S D13 (第52図)

P-23・P-24・Q-24グリッドで検出された。SD4およびSD16に切られる。北東方向に直線的に延びる溝で、北東の端はSR1に達する。西端は調査区外に延びるため、平面の形状および全体の規模は不明である。断面の形状は長方形あるいは逆台形である。検出された規模は、長さ約11.8m、幅約60cm、検出面から堀方までの深さは約1.2mである。覆土の堆積状況、流路につながることから、暗渠、水路等の施設が想定される。図化できなかったが、山茶碗、貿易陶磁を含むこと、方向性等から中世の遺構と判断した。

S D14 (第53図)

O-17・O-18・P-18・P-19グリッドで検出された。南北方向から北西方向に向けて2段階の屈曲するが、調査区外に延びるため、平面の形状および全体の規模は不明である。断面の形状は逆台形である。検出された規模は、長さ約20m、幅約70cm、検出面から堀方底面までの深さは約30cmである。床面から大窯4期後半の瀬戸美濃産の縁釉小皿が出土している。

S D15 (第54図)

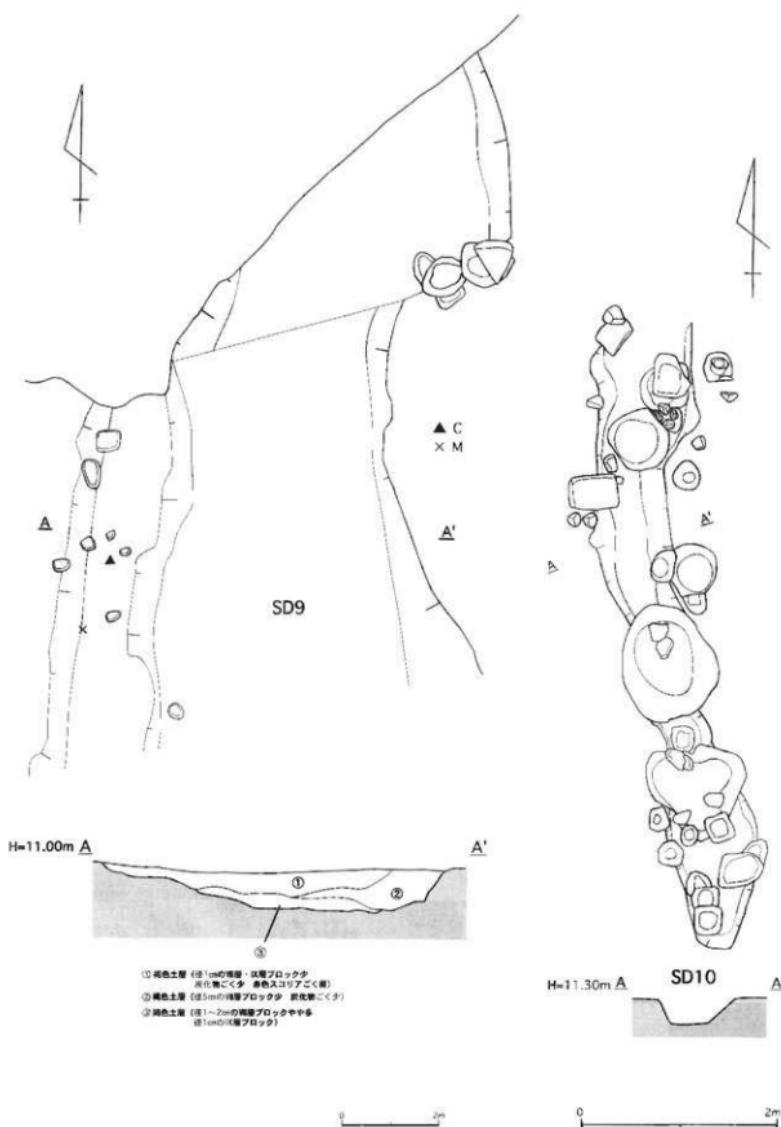
M-17・M-18・M-19グリッドで検出された。南北方向に延びる溝であるが、南端は調査区外に延びるため、平面の形状および全体の規模は不明、断面の形状は逆台形である。検出された規模は、南北長約20.8m、幅約80cm、検出面から堀方底面までの深さは約44cmで、底面には水流によって浸食を受けた痕跡が認められる。図化できなかったが、瀬戸美濃系の鉄絵皿が出土している。また、SD2との切り合いから近世前半から中頃の遺構と判断した。

S D16 (第54図)

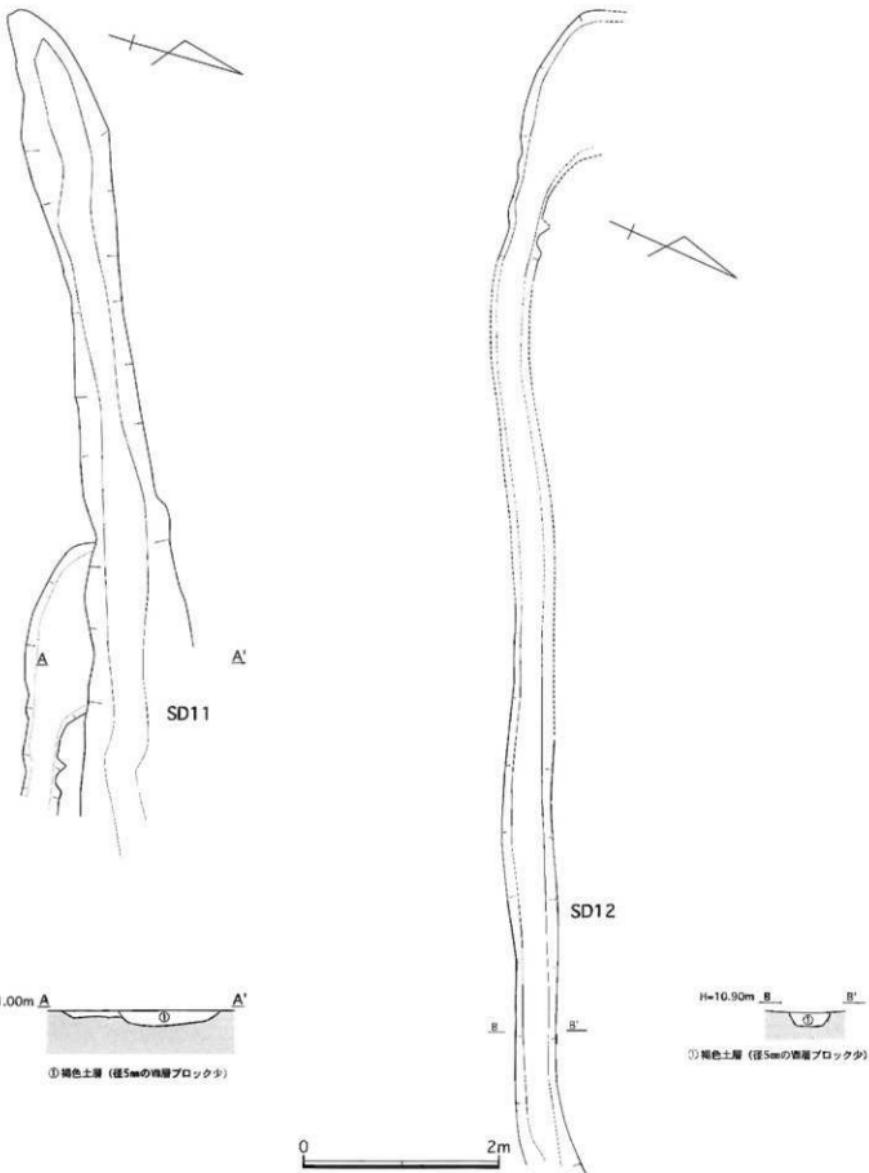
P-24・Q-12・Q-24・R-23グリッドで検出された。東西方向に延びる溝であるが、西端は調査区外に延び、東端は削平を受けており、平面の形状および全体の規模は不明である。断面の形状は逆台形であるが、南側にテラス状の段を一段有する部分を有する。検出された規模は、東西長約12.5m、幅約3.2m、検出面から堀方底面までの深さは約40cmである。出土した遺物は、大窯2期の志戸呂産の丸碗、貿易陶磁青磁碗（第67図10・12）等を含むが、近世の肥前系の白磁皿、カワラケ、志野丸皿等も出土しており、近世の遺構と判断した。

S D17 (第54図)

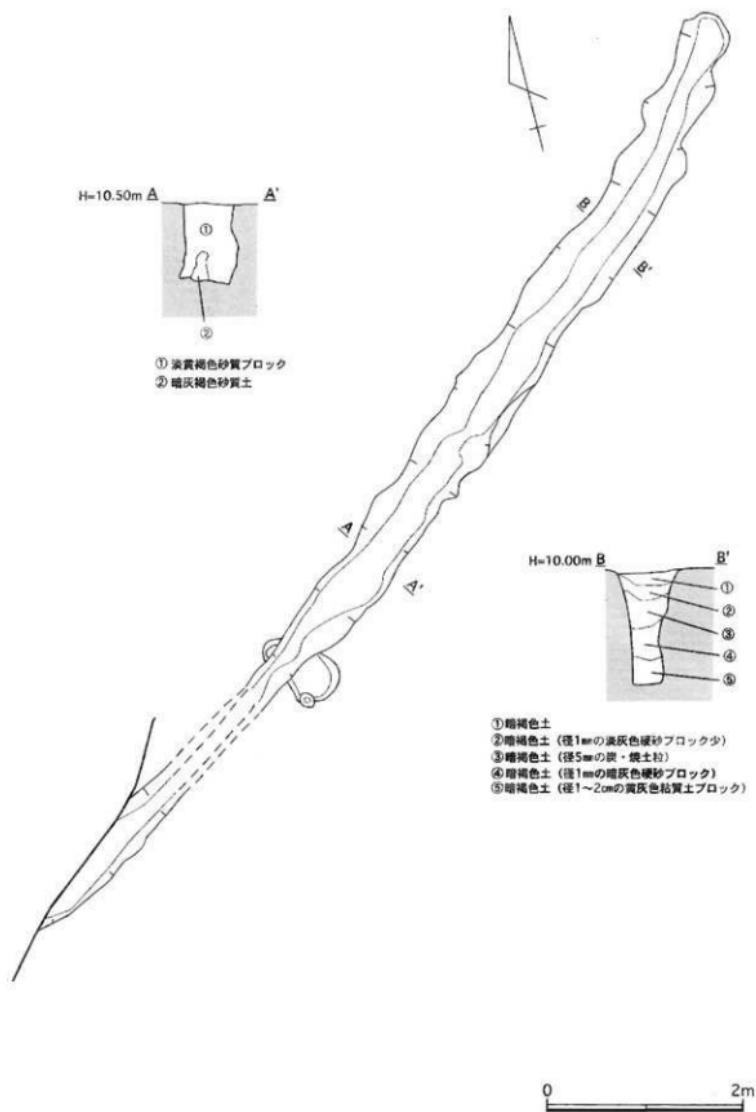
Q-21グリッドで検出された。南北方向に延びる溝であるが、南端は調査区外に延び、北側は削平を受けているため、平面の形状および全体の規模は不明である。検出された部分は浅く不明瞭であるが、断面の形状は皿状が想定される。検出された規模は、南北長約6.3m、幅約1.8m、検出面から堀方底面までの深さは約20cmである。出土した遺物は、古瀬戸後IV期新段階の擂鉢（第67図8）、また、図化できなかったが、大窯4期後半の志野丸皿、17世紀初頃の志野丸皿、瀬戸美濃系の小碗等である。中世後半か



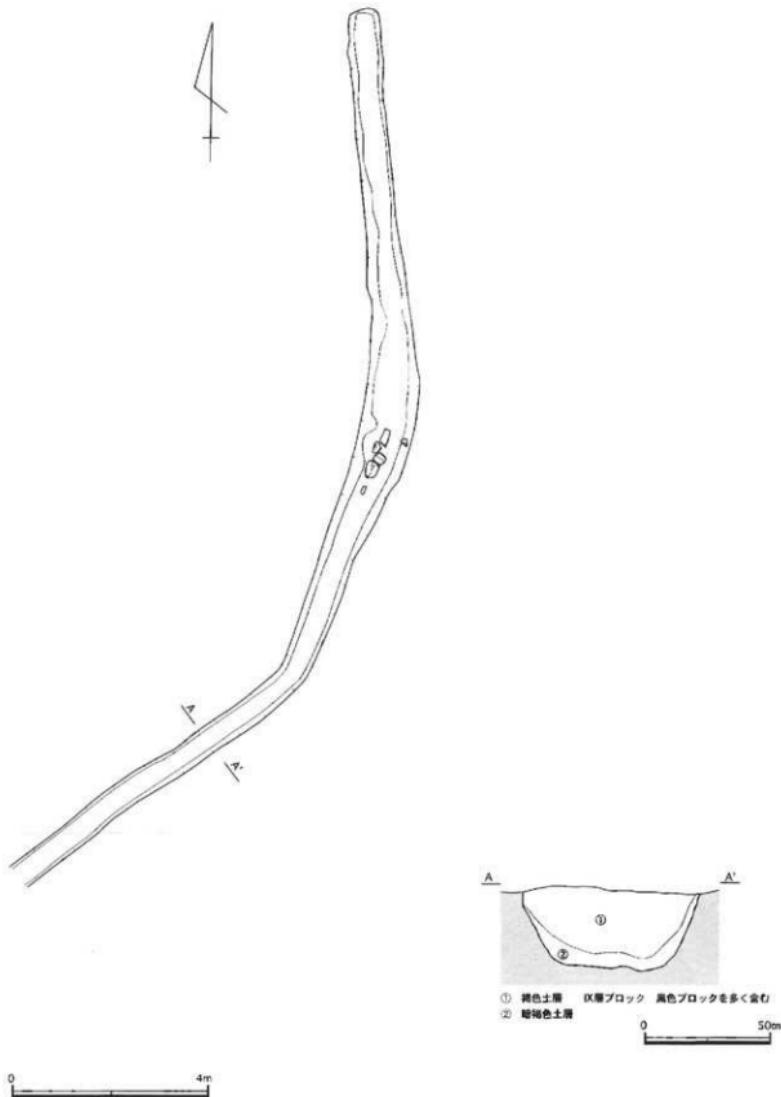
第50図 SD9/10平・断面図



第51図 SD11/12平・断面図



第52図 SD 13平・断面図



第53図 S D14平・断面図

ら近世初頭の遺構と判断した。

その他の遺構

S X1 (第35図)

P-20グリッドで検出された。長さ約80cm～1m40cm、幅約16cm、厚さ約20cmの長方形の石材を東西方向に配し区画とし、その北側に土間状に黒色の砂を敷きつめている。北側、西側は搅乱により削平を受けており、東側は調査区のラインに切られるため全体の規模は不明である。出土した遺物は、石臼（第117図1）と用途不明の環状の鉄製品（第108図11）である。

S X2 (第55図)

R-22・R-23・S-23グリッドで検出された。西側は調査区外、東端は築堤の影響により、全体の規模等は不明であるが、東西方向に直線的に延びる溝状の施設で、検出された規模は、東西長約8m、幅約1mである。小型の石を組んで平らな面を作り、その上に幅約40cmの間隔で片側を面取りした石材を向かい合わせに配置し、その下部を幅約30cm、深さ約30cmで掘り下げ溝状の空間を構築している。本遺構の北側に礎石が1基検出されており、この基礎に伴う溝状の遺構を考えられる。また、暗渠等の施設が想定されるSD3の延長線上にあることから、やや時期が下る可能性あるものの同様の施設を想定している。出土した遺物は、瀬戸内美濃産の腰錆碗、肥前系の広東碗（第78図1～6）、図化できなかったが、近代に下る遺物が出土している。

S X3 (第55図)

S-23グリッドで検出された。N-12°・W方向に主軸を有する石垣である。御殿場泥流層（第VII層・IX層）に約50cm～約75cmにわたり盛土し、整地した面上に辺が約50cmの方形の石を積み上げて石垣としている。近世後半から近代の仁田館の様子を描いた銅版画に見られる石垣に相当すると考えられる。

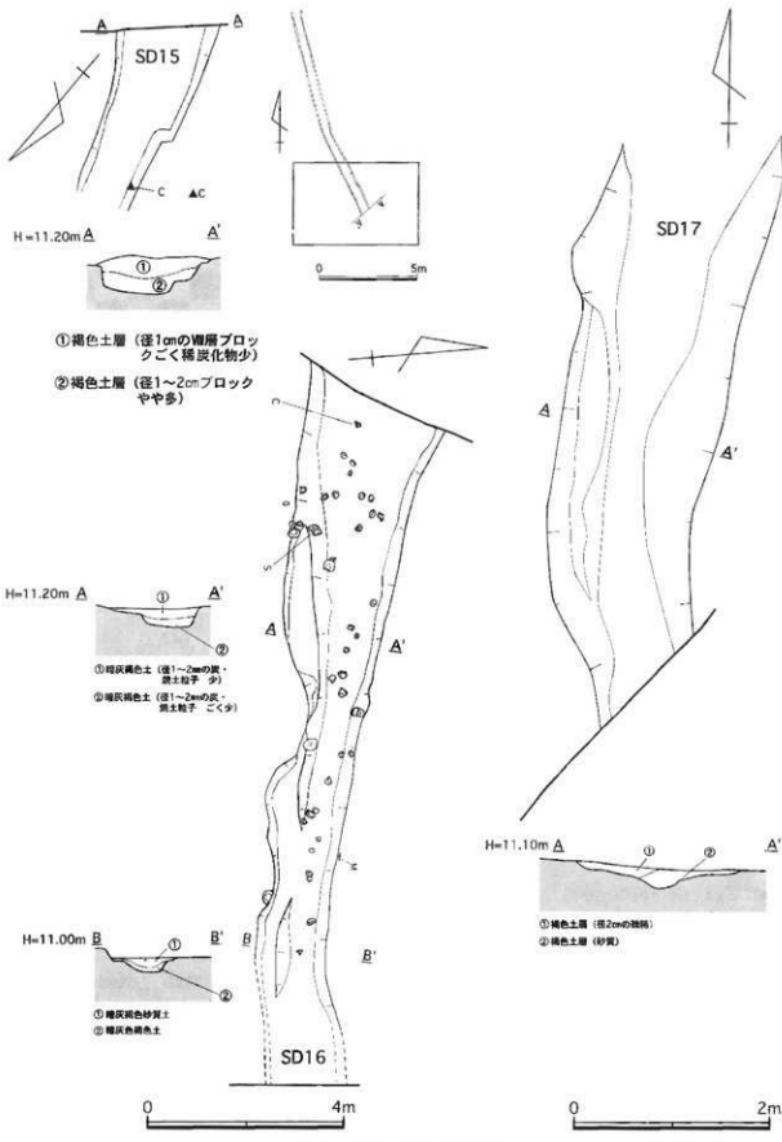
流 路

S R1 (第56図)

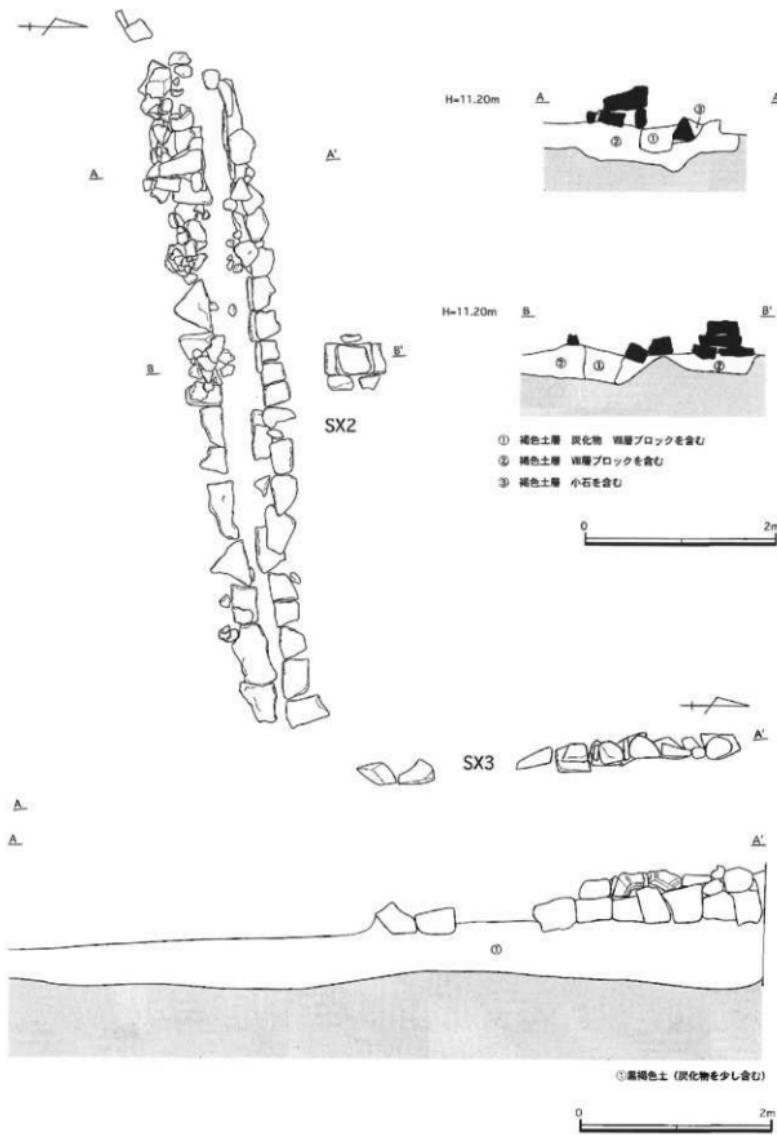
Q-24・R-24・S-24グリッドで検出された。Q-24・R-24グリッドにおいては、御殿場泥流層が、北東方向に約50°の傾斜で約3.5mの崖面を形成してた。やや東側位置するもののS-24グリッドにおいても、北側に向かって約1.4m崖面が確認され、同様の河川堆積層を検出したこと、および位置関係から同一の流路の縁辺部と判断した。流路の方向性は、南北方向から東西方向に流れを変える変換点と考えられ、西側の部分において、岸より約1mの地点で検出された護岸用の杭列（第99図7・8）から緩やかに方向を変える様子が確認できる。さらに、また、崖面中位の犬走状の平面に長さ約4m、直径50cmの大木が据えられている様子が確認され、大木を取り外したところ、867枚のこけら絃がまとめて出土した（別冊図版第1～48図）。さらに、灰釉陶器、墨書き器をはじめ、古代を中心に多くの土器類が出土した他、（第75図1～第77図29）漆椀（第99図6）等の木製品、頭頂部に円形の孔が穿たれたシカの頭蓋骨が出土している。

遺 物

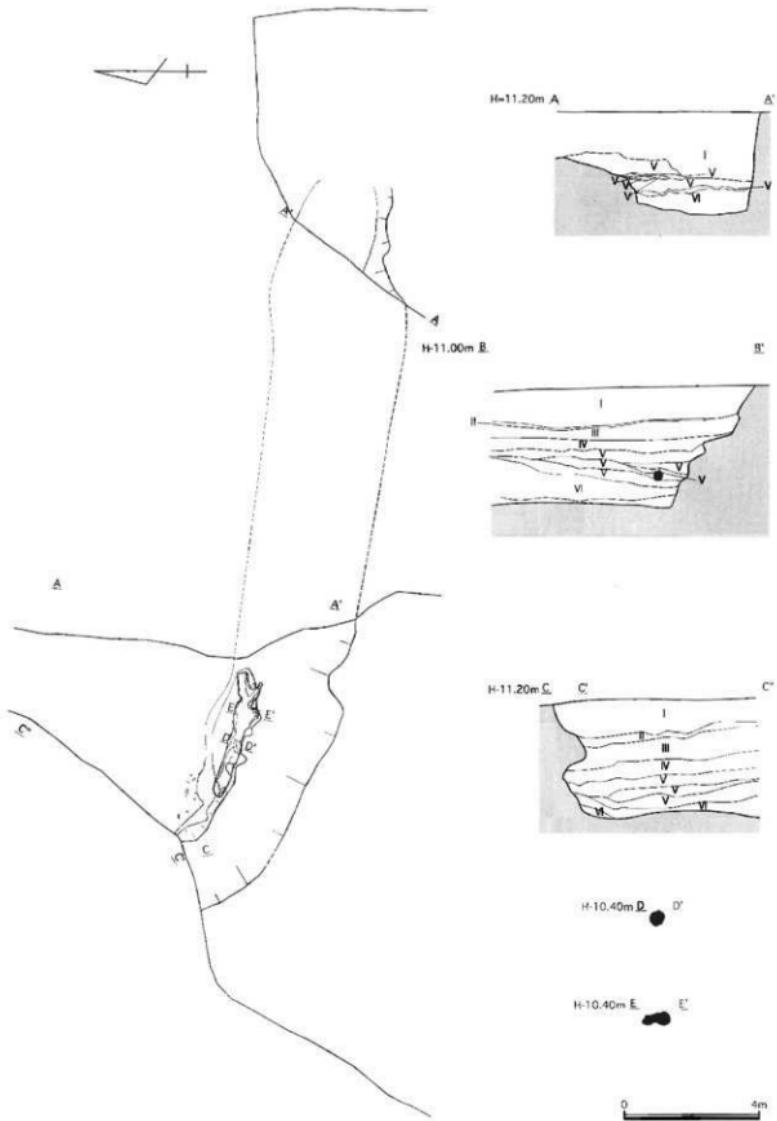
仁田館遺跡から出土した遺物は、北端に位置する流路から出土した弥生中期から古代の時期の遺物、館部から出土した中世から近世の時期の遺物に分けられる。遺物の特徴については観察表に示し、ここでは主要な遺物について報告する。



第54図 SD15～17平・断面図



第55図 S X2/3平・断面図



第56図 SR1平・断面図

遺構出土の遺物

建物跡

S H2 (第57図1~7)

1、2は瀬戸美濃系の灯明皿で、いずれも18世紀後半から19世紀の製品。5は18世紀前半に比定される肥前系の中皿、6はくらわんか碗である。中世の遺物として常滑産の甕の口縁(3)が一点出土している。

S H1 (第58図1~19・第59図1~13・第60図1~8)

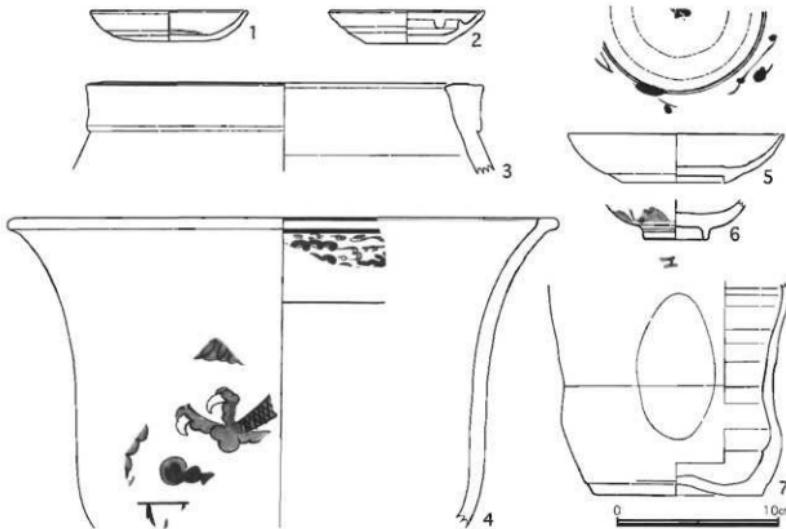
第58図1・11、第60図3・4は瀬戸美濃系の灯明皿、18世紀後半から19世紀前半の製品でSP1・SP35から出土している。第58図4・13、第59図10は18世紀後半に比定される肥前系の筒型碗でSP49・SP30・SP42の出土である。6はSP49出土の信楽産の小杉碗、7はSP34出土の瀬戸美濃系の柳茶碗、12はSP35出土の肥前系の青磁染付碗で、いずれも18世紀後半から19世紀前半の製品である。SP35出土の第58図10および瓦溜出土の第60図7は、いずれも瀬戸美濃系の擂鉢、第60図7には口縁下部に⑤の印が確認され、19世紀第3四半期に比定される。

S H4/S H6 (第60図9~12)

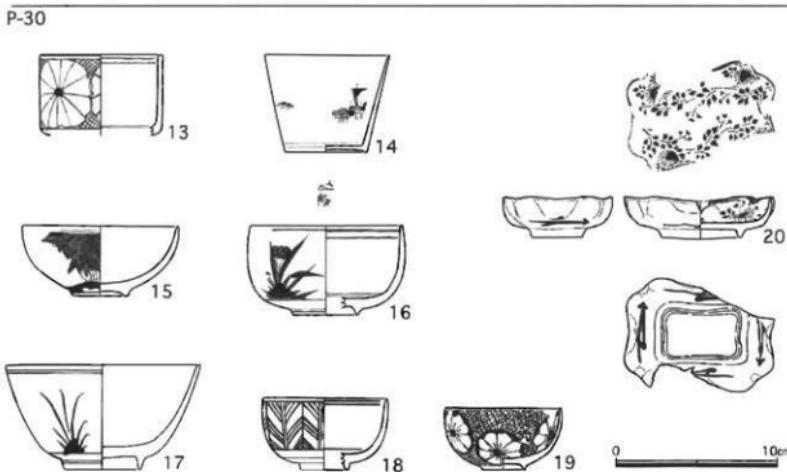
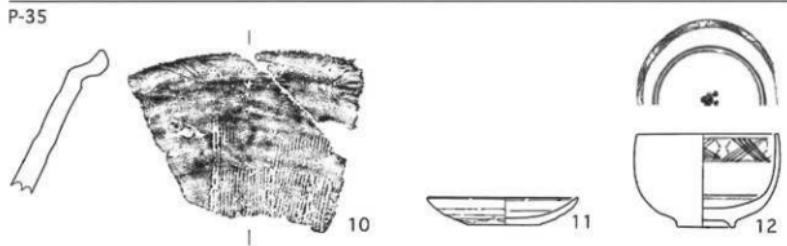
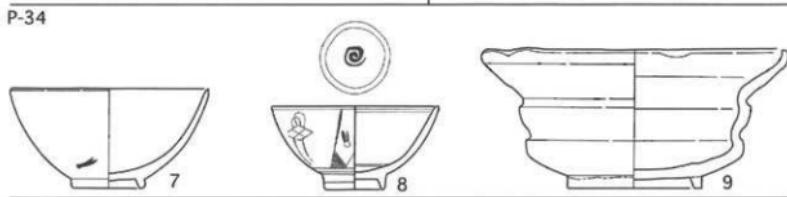
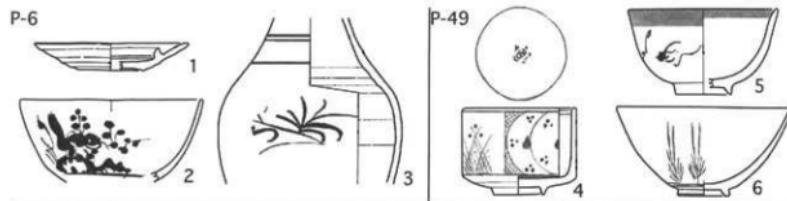
10は肥前系の筒型碗で18世紀後半の製品、11は信楽系の京焼風皿、鉄軸で「なんぜんじ」という文字が書かれる。12は瀬戸美濃系の煙硝擣で19世紀代に位置づけられる。

柱穴出土遺物 (第61図1~19)

第61図1は、SP2148から出土した貿易陶磁(中国)の端反皿で、B1類に分類される15世紀後半の製品である(註1)。2はSP74出土の瀬戸美濃産の端反皿か丸皿で、大窯1~2期に比定される。3は貿易陶磁(中国)の染付碗E群、16世紀中~後葉のものでSP2004出土。6はSP2065出土の大窯4期前半の志戸呂産の丸皿、7はSP115出土の大窯2期の瀬戸美濃産の稜皿である。8はSP7325出土の貿易陶磁(中



第57図 S H2出土遺物実測図



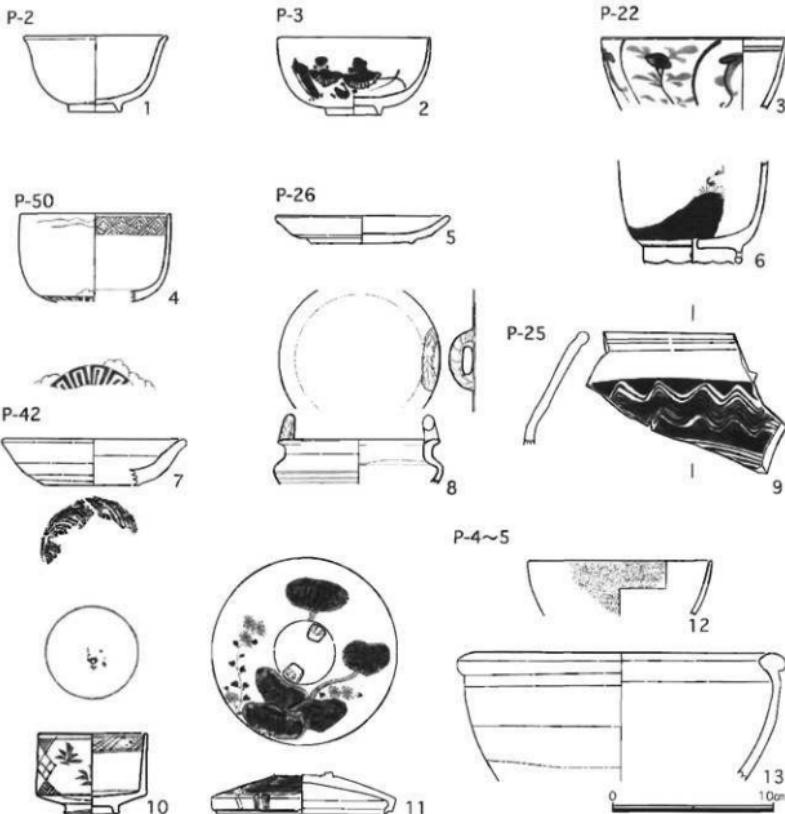
第58圖 S H1出土遺物實測圖

国)のC 2群に分類される白磁端反皿で16世紀前半に位置づけられ、9はSP2138出土の大窯1期の瀬戸美濃産の天目茶碗である。14は菊花文を有する肥前系の型作皿で18世紀代、15は五弁花を有する肥前系の中皿で18世紀後半にそれぞれ比定される。17はSP89出土の焼継ぎされた肥前系の碗、底部に「仁田一」という朱書きが認められる。18はSP2162出土の益子系の山水土瓶、双方とも19世紀代の製品であろう。

井戸

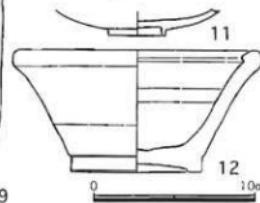
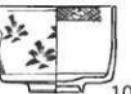
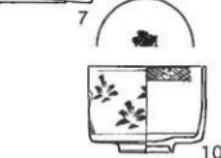
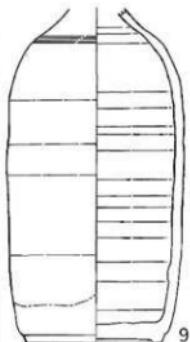
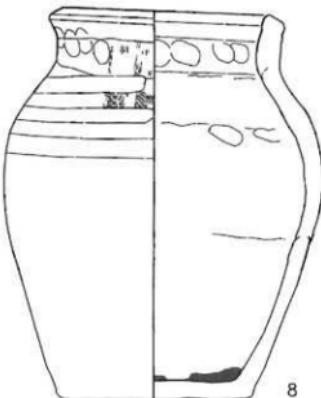
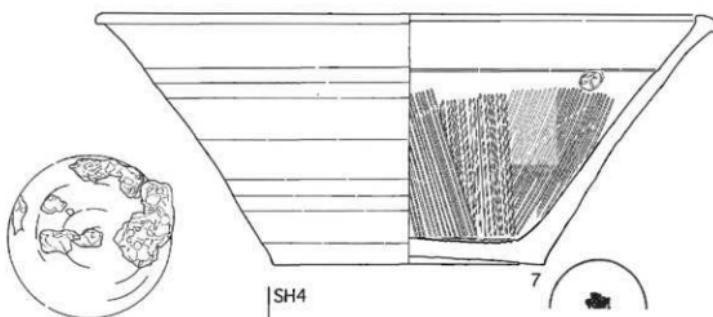
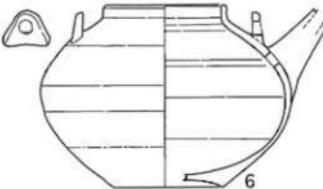
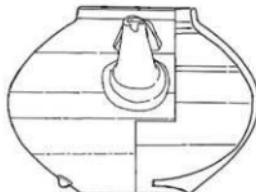
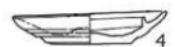
S E8 (第62図 1~14)

2・3はいずれも三河～遠江系の鉢付鍋である。8は大窯3期の瀬戸美濃産の稜皿、9は大窯4期前半の志戸呂座の内堀皿である。10・11は擂鉢で、いずれも大窯3期後半に比定され、产地はそれぞれ初山、瀬戸美濃である。13・14は中世の常滑産の壺の口縁と底部である。4～7はカワラケで中世のもの(4～6)と近世のもの(7)が出土している。



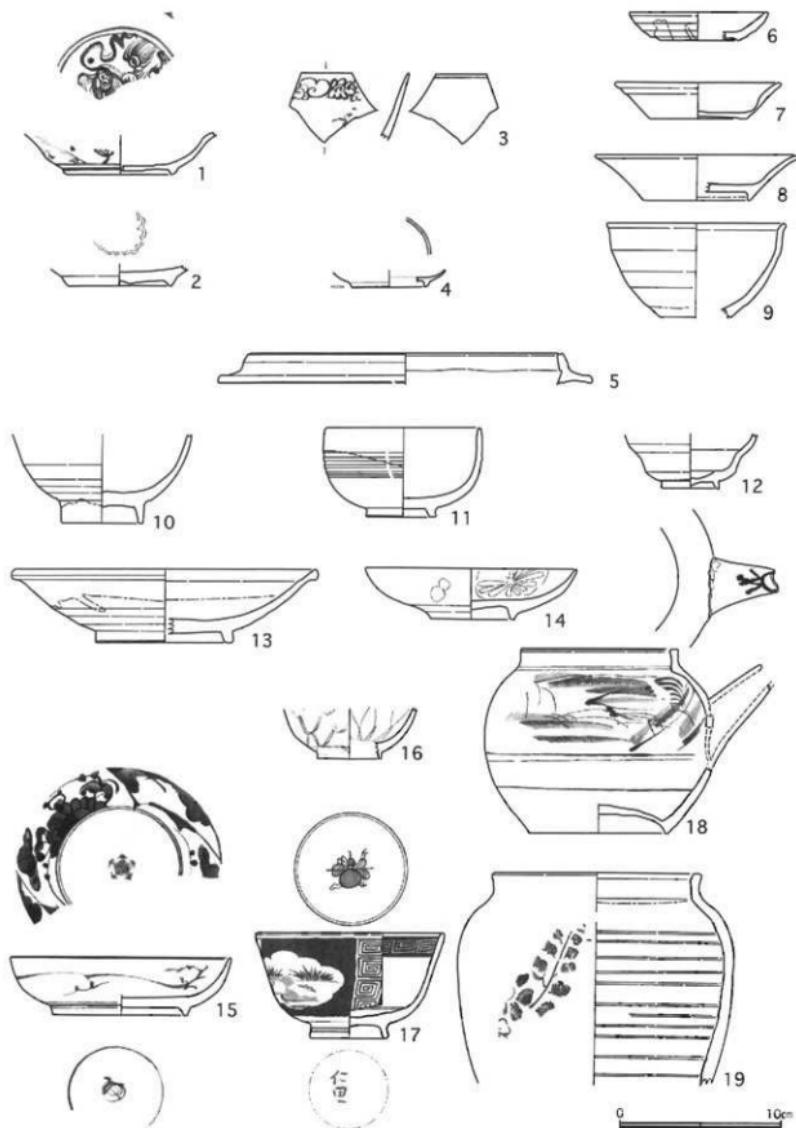
第59図 SH1出土遺物実測図

SH1瓦溜



0 10cm

第60図 SH1/SH4出土遺物実測図



第61図 柱穴出土遺物実測図

S E1 (第63図1～3)

1、2はそれぞれ内耳鉢、鉢付鉢で、3は大窯4期前半の志戸呂産の擂鉢の口縁である。

S E5 (第63図4)

4は近世のカワラケである。底部に直径約5mmの孔が開けられており、井戸の祭祀に関連するものと考えられる。

S E6 (第63図5)

5は中世のカワラケである。底部には「スノコ」の痕跡が明瞭に観察できる。

S E3 (第63図6～10)

6は瀬戸美濃系の擂鉢の胴部破片、口縁下部の形態から19世紀代と推定できる。7は瀬戸美濃産の近世の天目茶碗で、9・10はいずれも近世のカワラケである。

S E9 (第63図11～20)

6は古瀬戸の袴腰香炉で古瀬戸後II期に位置づけられるものである。15・17はいずれも肥前系のぐい呑／小杯で17世紀後半の製品、11は肥前系の丸碗で17世紀末、12は肥前系の京焼風碗である。

満

S D1 (第64図1～26・第65図1～6・第66図1～4)

中世から近世の時期の遺物が出土した。中世の遺物は、古瀬戸、貿易陶磁（中国）の白磁端反皿、大窯期の瀬戸美濃産、志戸呂産の製品、常滑産の製品、カワラケ等が出土している。古瀬戸は第64図10の古瀬戸後期の水滴が1点出土した。貿易陶磁（中国）の製品は5の白磁端反皿で、C1群に分類され15世紀から16世紀前半に比定される。瀬戸美濃産の大窯期の製品は、2の丸皿が3期、9の盤類が4期前半で、4の志野丸皿、12の擂鉢はいずれも大窯期の範疇に収まるものである。13は志戸呂の擂鉢で大窯4期の製品。7・19は常滑産の鉢と甕、18・22・23・24はカワラケである。近世の遺物は、瀬戸美濃産、志戸呂産、信楽系の製品、カワラケ等が出土している。瀬戸美濃産の製品は、15の灯明皿、第65図4・6の擂鉢、5の徳利等があげられ。いずれも19世紀代の製品である。5は「木久山 薔薇」の銘がある徳利で近代に下るものであろう。6の擂鉢は、⑧⑨の印が押されており19世紀第2四半期の製品である。第64図11は、内面に菊花文を有する17世紀前半の志戸呂産の内堀皿で、畠の覆土から出土している。第65図1は、大窯期から近世の初頭に比定される志戸呂産の甕、第64図17は大黒様をモチーフとした泥面子、25・26はカワラケである。

S D2 (第66図5～14)

5は大窯4期の志戸呂産の擂鉢の底部。11は中世のカワラケである。6は瀬戸美濃系の湯呑、13は益子系の土瓶、14は肥前系の中皿で、6・13・14はいずれも19世紀代の製品である。

S D9 (第67図1・第70図21～23)

第67図1は瀬戸美濃産の擂鉢で、大窯3期後半に比定されるものである。第70図21は中世に比定される信楽系の擂鉢、22・23はいずれも肥前系で、22は青磁碗、23は19世紀代の湯呑である。

S D8 (第67図2)

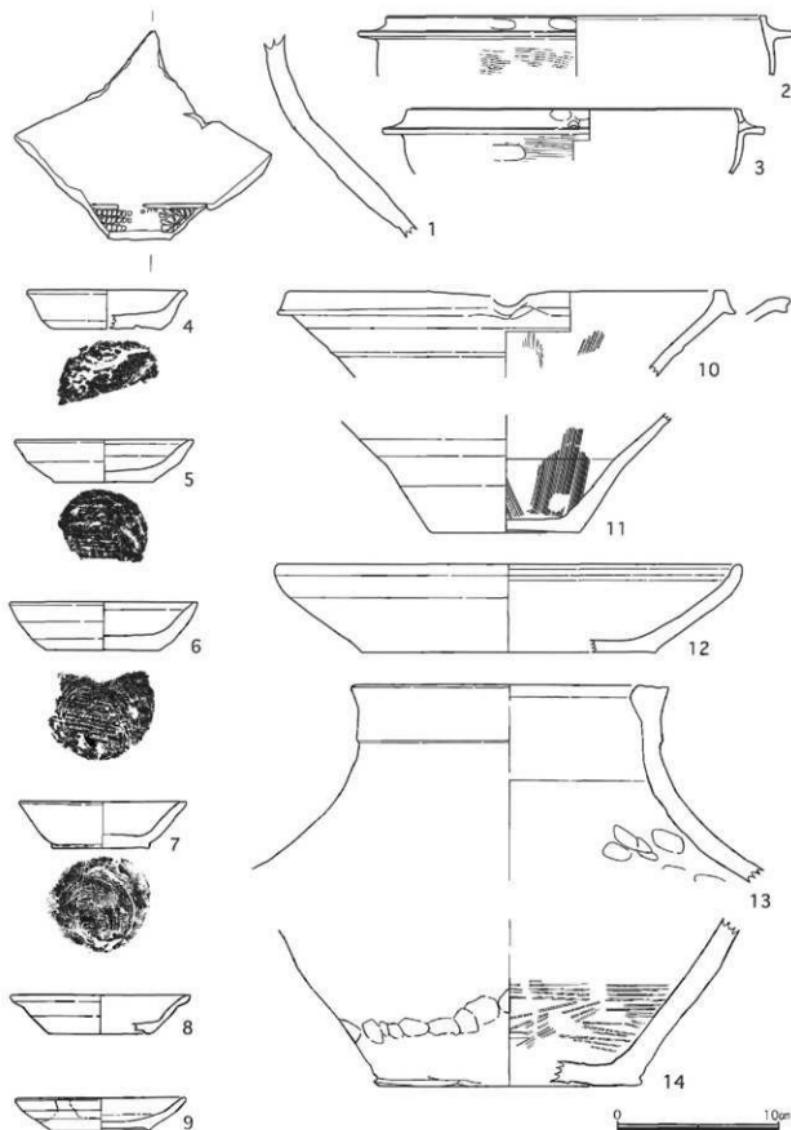
2は肥前系の蛸唐草文様の御神酒徳利で、18世紀後半から19世紀前半の製品である。

S D7 (第67図3～7)

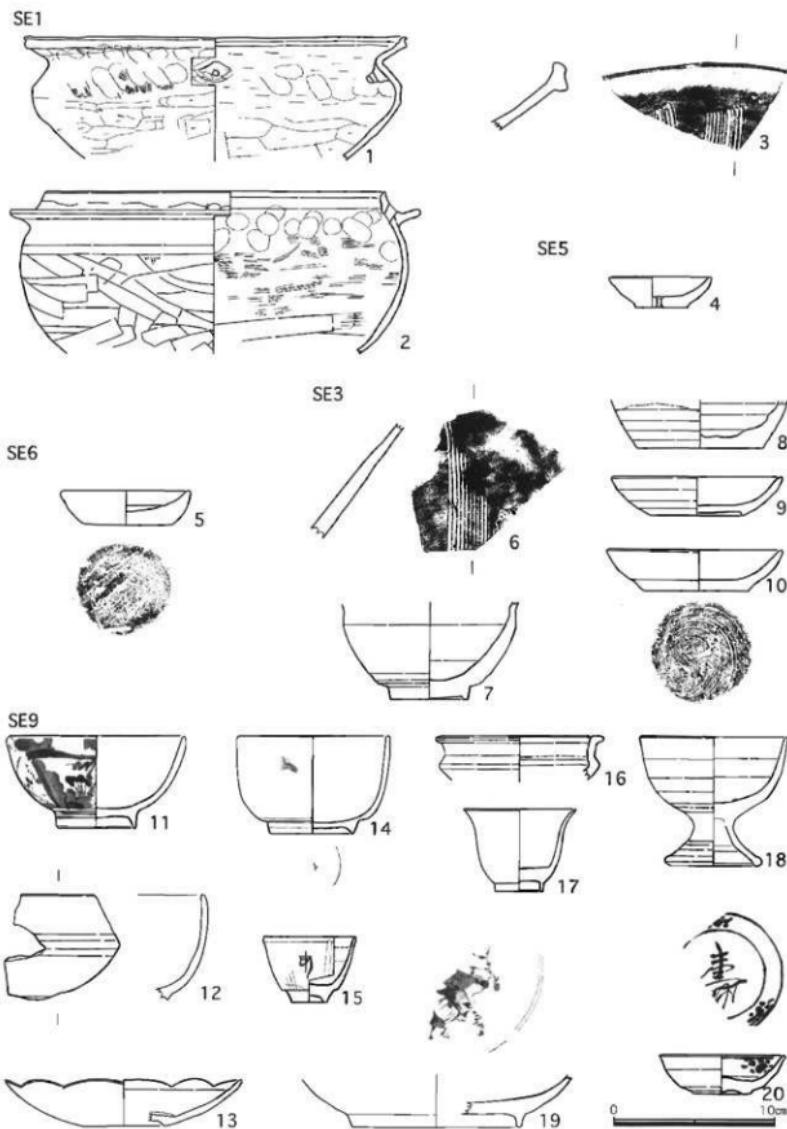
6は瀬戸美濃産の手炙または風呂で、18世紀から19世紀の製品、7は瀬戸美濃系の水差、鉢の上に布袋人形が乗る。

S D17 (第67図8)

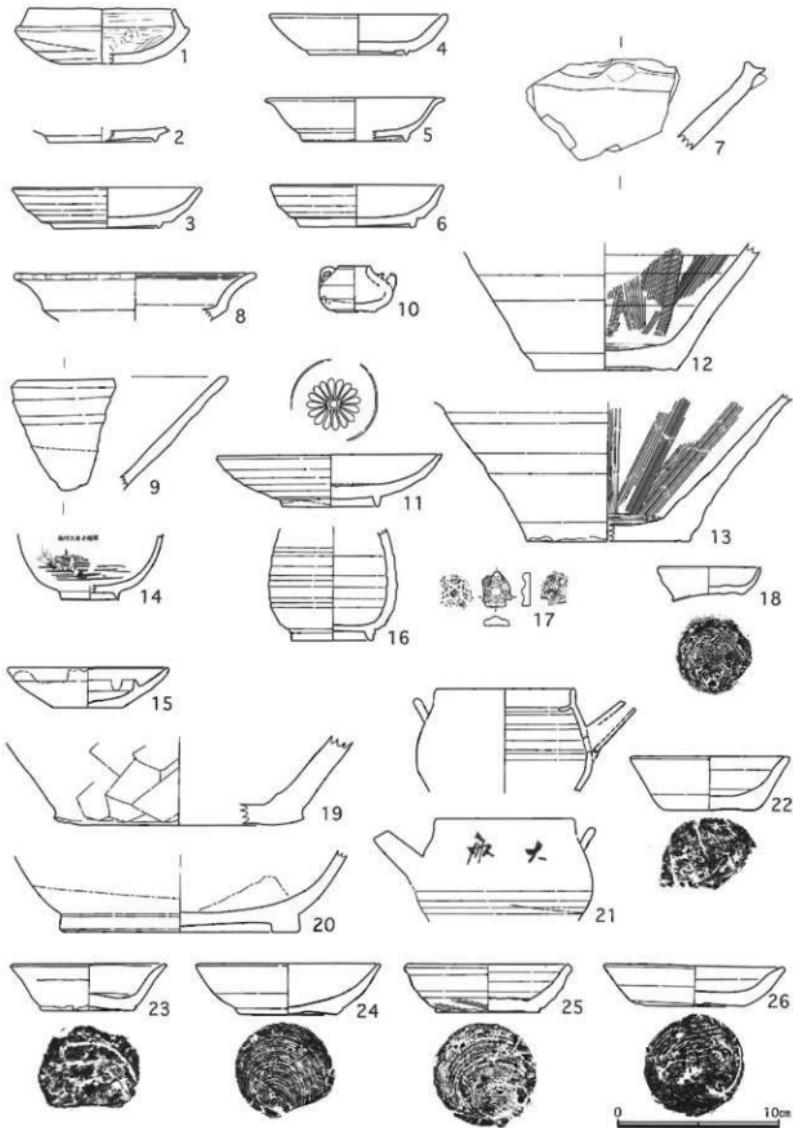
8は古瀬戸後IV期新段階の擂鉢である。



第62図 S E 8出土物実測図



第63図 S E 1/3/5/6/9出土遺物実測図



第64図 SD1出土遺物実測図



第65図 SD1出土遺物実測図

SD10 (第67図9)

9は志戸呂の鉄袖内禿皿で、大窯4期前半に位置づけられる。

SD16 (第67図10~14)

10は大窯2期の志戸呂産の丸脇。12は14世紀後半に比定される貿易陶磁(中国)青磁碗のD1類、13・14は志野丸皿で、13は大窯4期、14も大窯期の範疇に収まるものである。

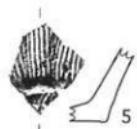
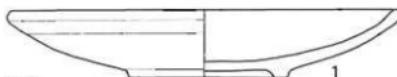
SD6 (第67図15~16)

15は瀬戸美濃系の碗の底部、19世紀前半から中頃の製品。16は、肥前・波佐見窯産の青磁脚付盤で17

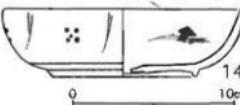
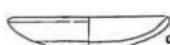
SD1



SD2

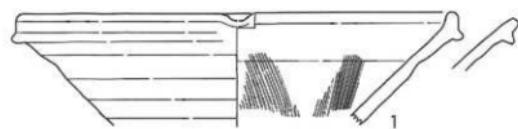


11

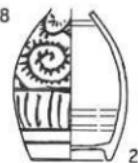


第66図 SD1/2出土遺物実測図

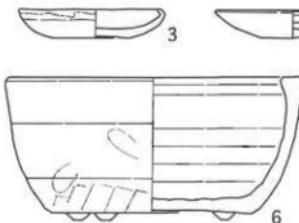
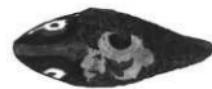
SD9



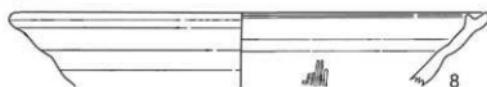
SD8



SD7



SD17



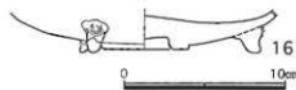
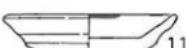
SD6



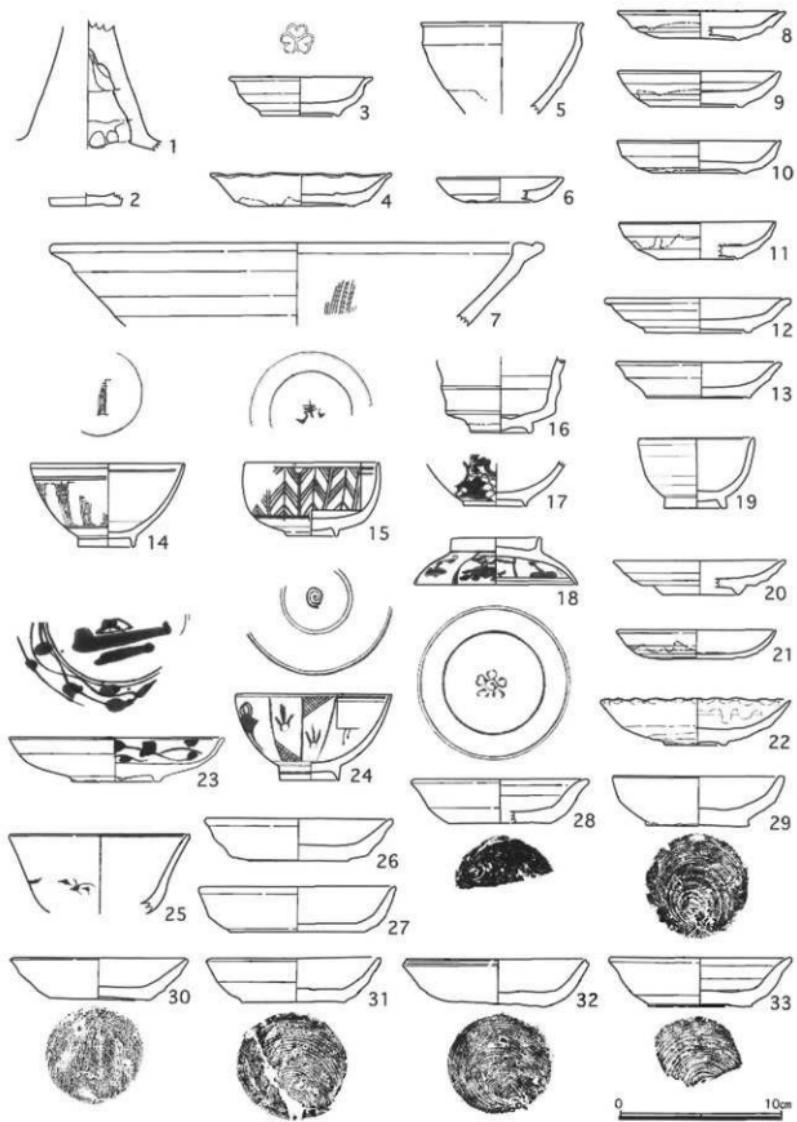
SD10



SD16



第67図 SD 6~10/16/17出土遺物実測図



第68図 S D4出土遺物実測図

世紀中頃の製品である。

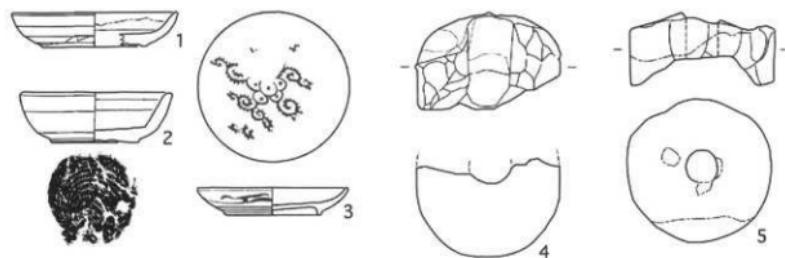
S D4 (第68図 1~33)

2は古瀬戸後1期に位置づけられる天目茶碗の底部、4は大窯3期後半の初山産の内禿皿、5は大窯3期の瀬戸美濃産の天目茶碗である。6~11はいずれも志戸呂の大窯期の製品で、6は4期前半の丸皿、7は4期の擂鉢、8・9・11は4期後半の内禿皿、10も4期の範疇に収まる内禿皿である。14・24はいずれも肥前系の小広東碗で、18世紀後半以降の製品、15は肥前系の矢羽根文を有する小型の丸碗で、18世紀後半から19世紀前半に比定される。22は肥前系の陶器のひだ皿、鼠唐津と呼ばれるもので、17世紀後半から18世紀の製品であろう。26~33はいずれも近世のカワラケである。

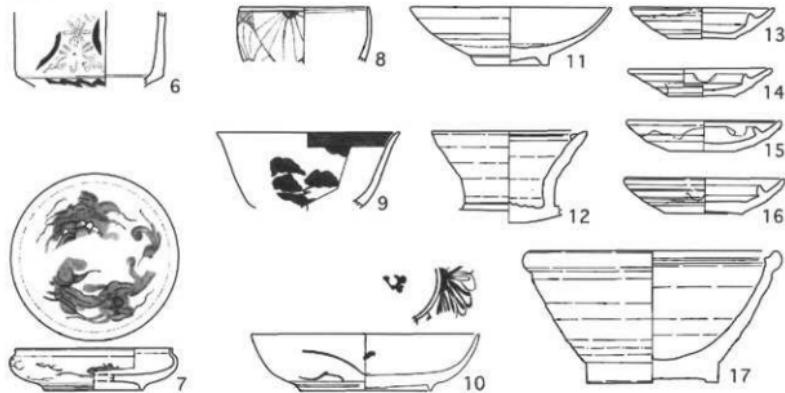


第69図 S D3出土遺物実測図

SK12



SK10



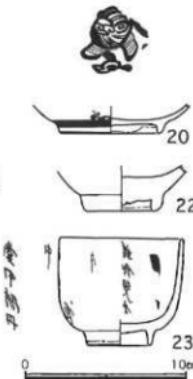
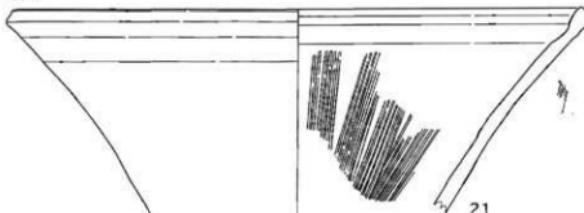
SD14



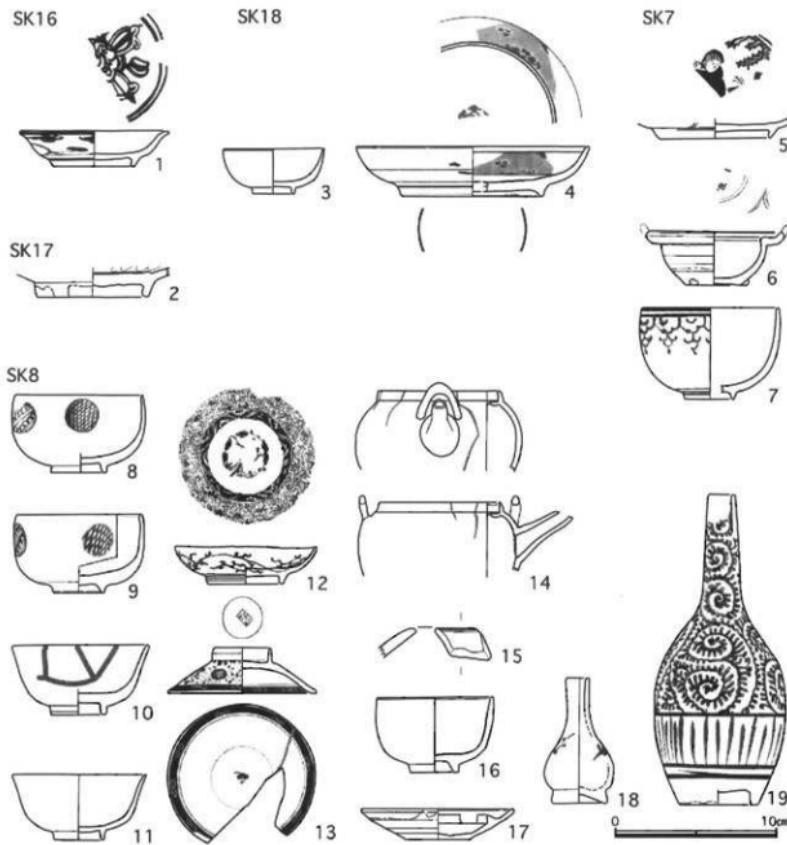
SD18



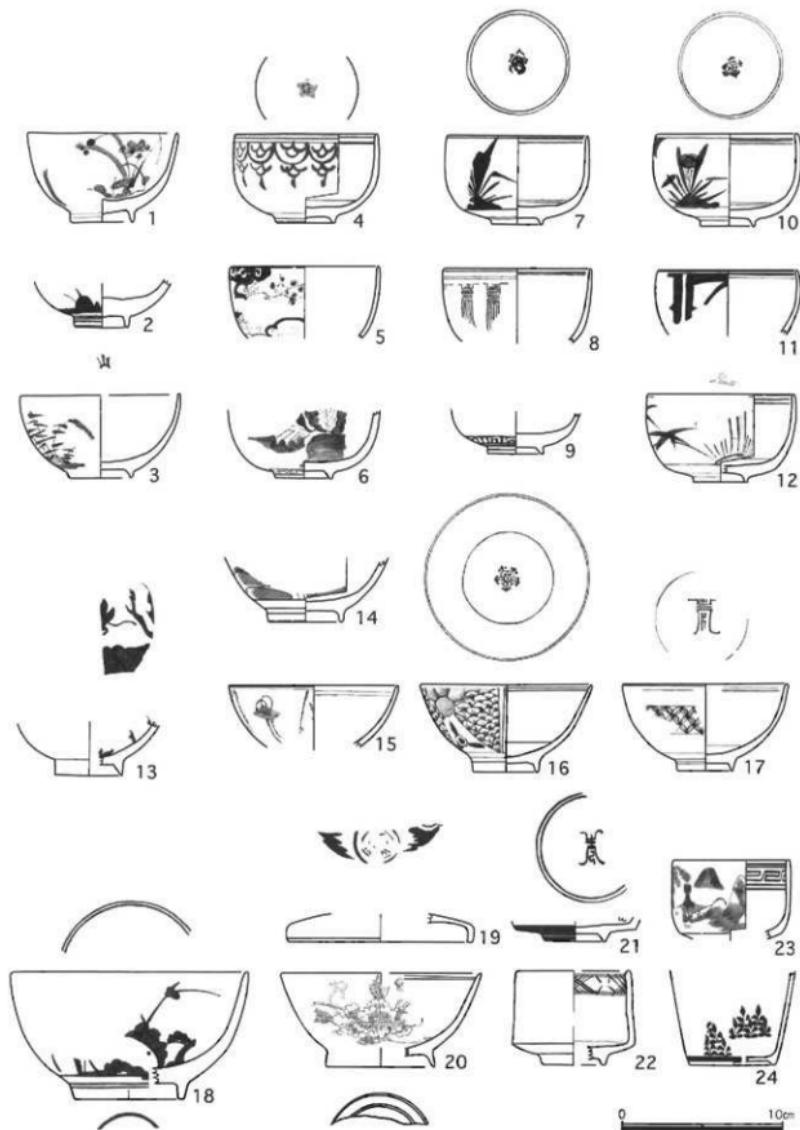
SD9



第70図 SK10/12、SD9/14/18出土物実測図



第71図 SK7/8/16~18出土遺物実測図



第72図 S X4出土遺物実測図

S D3 (第69図 1~21)

6は19世紀前半から中頃の瀬戸美濃系の端反碗の蓋、8は18世紀後半の肥前系の筒型碗、10は19世紀前半の肥前系の端反碗、16は18世紀後半~19世紀の信楽系の端反碗である。13は瀬戸美濃産の壺の蓋で18世紀後半に位置づけられる。14は瀬戸美濃産の鉢猪口で19世紀前半から中頃の製品である。17~18は瀬戸美濃系の灯明皿、いずれも18世紀後半から19世紀に比定されよう。

S K12 (第70図 1~5)

1は大窓4期前半の志戸呂産の内堀皿、3は18世紀後半に比定される肥前系の中皿である。またSK12からは、4・5の縁の羽口と併せて鉄滓が多量に出土している。

S K10 (第70図 6~17)

1~3~16はいずれも18世紀後半から19世紀中頃に比定される瀬戸美濃系の灯明皿、17は瀬戸美濃産の片口鉢で、19世紀第1四半期の製品である。

S D14 (第70図 18)

18は大窓4期後半の瀬戸美濃産の縁釉小皿である。

S D18 (第70図 19)

19は肥前系の湯呑で19世紀代の製品であろう。20は貿易陶磁(中国)の染付端反皿のB1類、15世紀後半に位置づけられる。

土 坑

S K16 (第71図 1)

1は貿易陶磁(中国)の染付端反皿のB1群、15世紀後半に位置づけられる。

S K17 (第71図 2)

2は瀬戸美濃産の菊皿で、17世紀の第三四半期に比定される。

S K18 (第71図 3~4)

3は肥前系の猪口、4は墨弾の枝法がみられる肥前系の中皿で18世紀代の製品である。

S K7 (第71図 5~6)

5は貿易陶磁(中国)染付端反皿のB2類、16世紀後半に比定される。5は信楽系のミニチュア鍋で19世紀、7は輪室模様を有する肥前系の丸碗で18世紀後半から19世紀の製品である。

S K8 (第71図 8~19)

10は肥前系の白磁碗、13は19世紀前半の瀬戸美濃系の端反碗の蓋、14は肥前系の瑠璃釉の急須で、いずれも焼継ぎがなされている。15は貿易陶磁(中国)青磁稜花皿の口縁部破片で、14世紀後半に位置づけられるものである。19は蛸唐草の御神酒利で19世紀前半の製品であろう。

その他の遺構

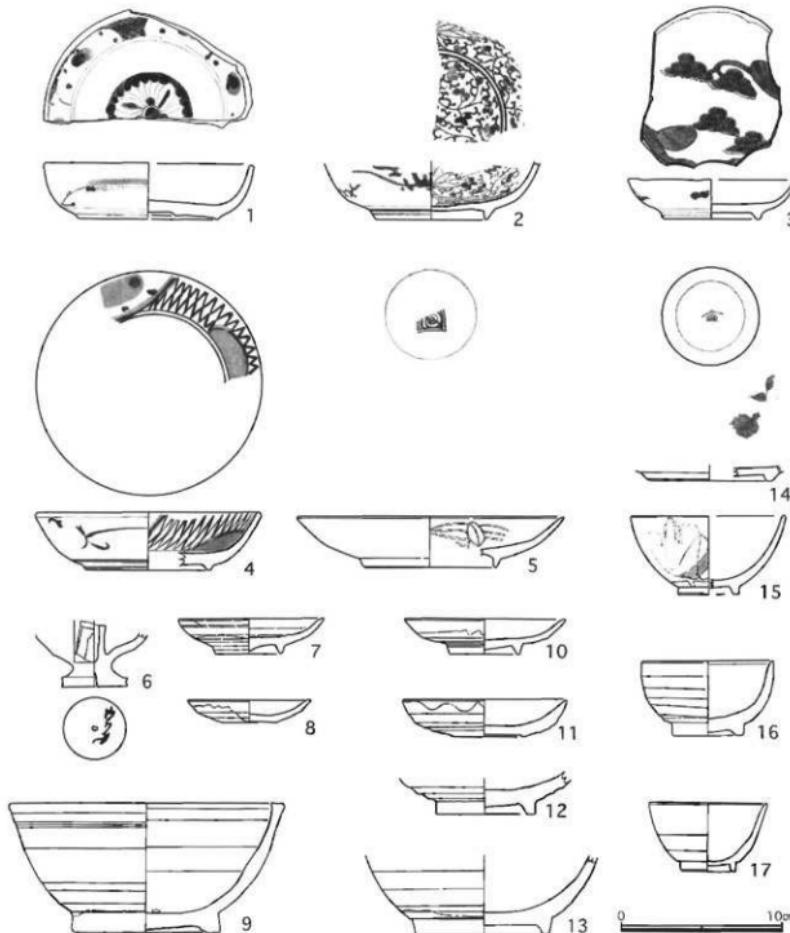
S X4 (第72図 1~24・第73図 1~17・第74図 1~8)

第72図1・2・18はくらわんか碗、3~12はいずれも肥前系の丸碗で、18世紀中頃から19世紀中頃の範疇に収まる製品である。13は肥前系の丸碗の底部で、17世紀末の製品である。15・16は18世紀後半の肥前系の小広東碗、20も肥前系のやや広東碗に近い形状の碗で、ベンシルドローイングによる描画が認められる19世紀前半から中頃の製品。22は肥前系の青磁染付の筒型碗である。第73図1は蛇目凹型高台を持つ中皿、3は形作皿、いずれも肥前系で19世紀の製品である。6は瀬戸美濃系の秉堀で底部に墨書きが認められる。第74図1は、大窓4期から17世紀前半の志戸呂産の水差、2・3は瀬戸美濃系の孫太、半銅で、2には底部に孔があげられており、植木鉢として転用された可能性がある。4~7はいずれも瀬戸美濃系の捕鉢で、6・7は19世紀代の製品であろう。8は常滑系の壺の口縁で19世紀代の製品である。

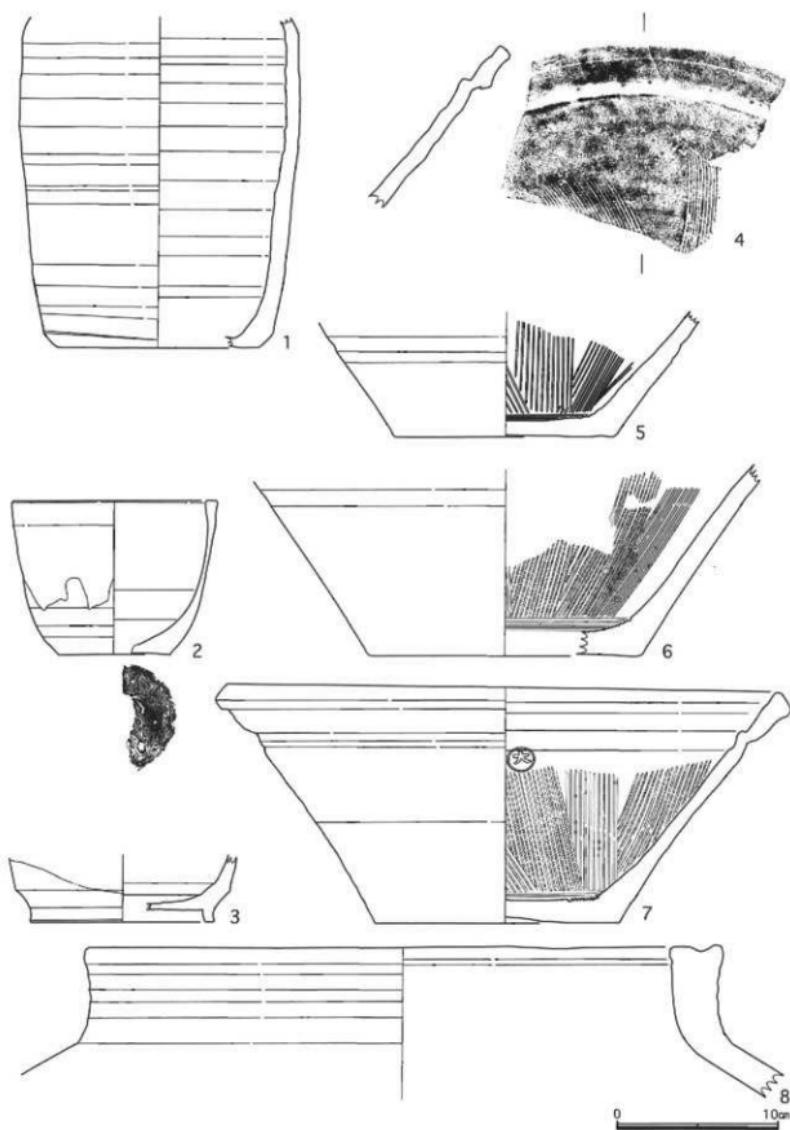
流 路

SR1(第75図1~17・第76図1~21・第77図1~29)

第75図1~6は縄文土器で、1~5は早期、6は晩期に位置づけられる。7・8は弥生中期の壺の破片、14は弥生後期の壺の底部で「カシリ」の葉の木葉痕が明瞭に観察できる。15は古墳前期の大廟式の壺の口縁、16は台接合部に粘土帯を貼り付ける県西部の特徴をもつ台付壺の台部である。第76図7は駿東型壺で9世紀中~後半に位置づけられる。墨書きは壺内面に文字列を十字に交差させるという特徴を持



第73図 SX4出土遺物実測図



第74図 S X4出土遺物実測図

つ。坏内面に墨書する点から習書とは考えにくく、文字列を十字に交差させるという点から呪術的性格を持つ墨書と考えられる。「野」と考えられる文字が確認できるが判読は困難である。8は灰釉皿で10世紀から11世紀代に比定される。篆書体の「公」と考えられる墨書が認められ、企画的に見ても初例の可能性がある（註2）。第77図5は12世紀に比定される東遠江系の片口鉢、11・12は山茶碗である。19は古瀬戸後Ⅱ期の平碗、20は大窯1期の瀬戸美濃産の御皿、21は貿易陶磁（中国）龍泉窯系の青磁碗のB1類で14世紀後半に位置づけられる。22は古瀬戸後Ⅳ期古段階の平碗である。

その他の遺構

S X2（第78図1～6）

4は18世紀後半に比定される瀬戸美濃産の腰錦碗、5は肥前系の広東碗で、18世紀後半から19世紀前半に位置づけられる。

遺構出土の遺物

試掘トレンチ（第78図7～19）

8は大窯4期前半の志戸呂産の鉄釉内彫皿、10は貿易陶磁（中国）白磁皿のIV類、14世紀後半に位置づけられる。12は焼継ぎされた瀬戸美濃系の端反碗で、底部に「仁田□」の朱書きが認められる。

表土～盛土（第79図1～20・第880図1～23）

第79図2・3はともに大窯4期の志戸呂産の製品で、2は鉄釉丸皿、3は丸碗である。8・9は相馬焼の急須で、近世あるいは近代に下る製品。20は肥前系の三島手大皿と呼ばれるもので、18世紀中頃に位置づけられる。第80図6は瀬戸美濃産の京焼風碗で17世紀末の製品。20は杜若文を描く肥前系の白磁大皿で、17世紀末から18世紀初頭に比定される。

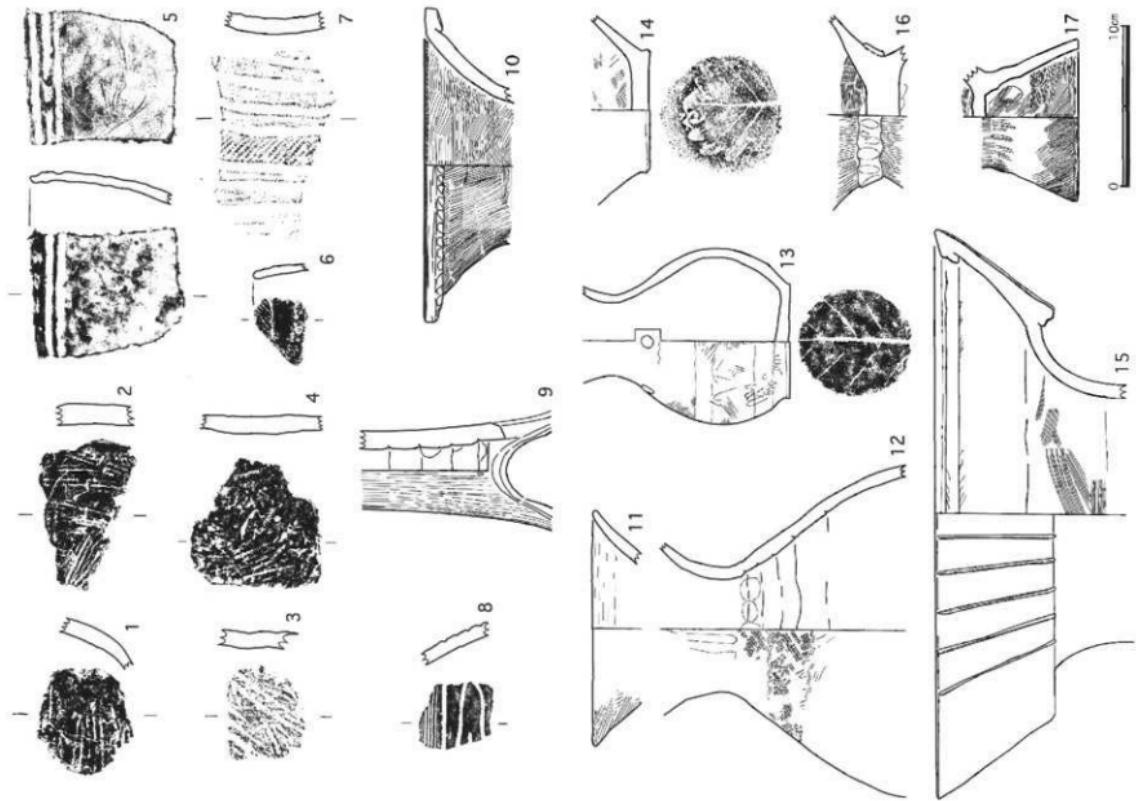
表土～地業層（第81図1～20）

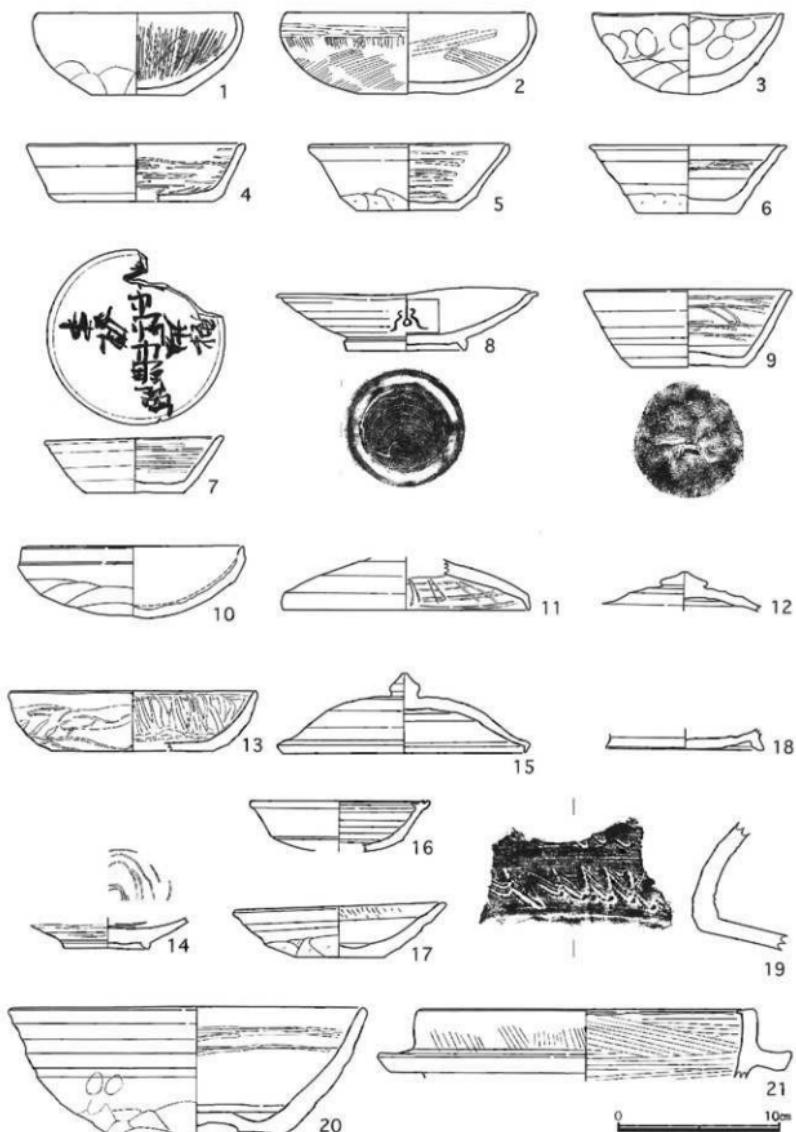
2は古瀬戸後Ⅳ新段階の腰折皿、4は貿易陶磁（中国）漳州窯系の大皿で14世紀後半に位置づけられる。7・8・9はいずれも大窯3期の瀬戸美濃産の製品で、7・9は稜皿、8は丸皿である。13は大窯1期後半の瀬戸美濃産、18は大窯4期の志戸呂産の大皿である。10・12はミニチュアの碗、片口鉢で、いずれも「ままごと道具」であろう。

II層（第82図1～第98図16）

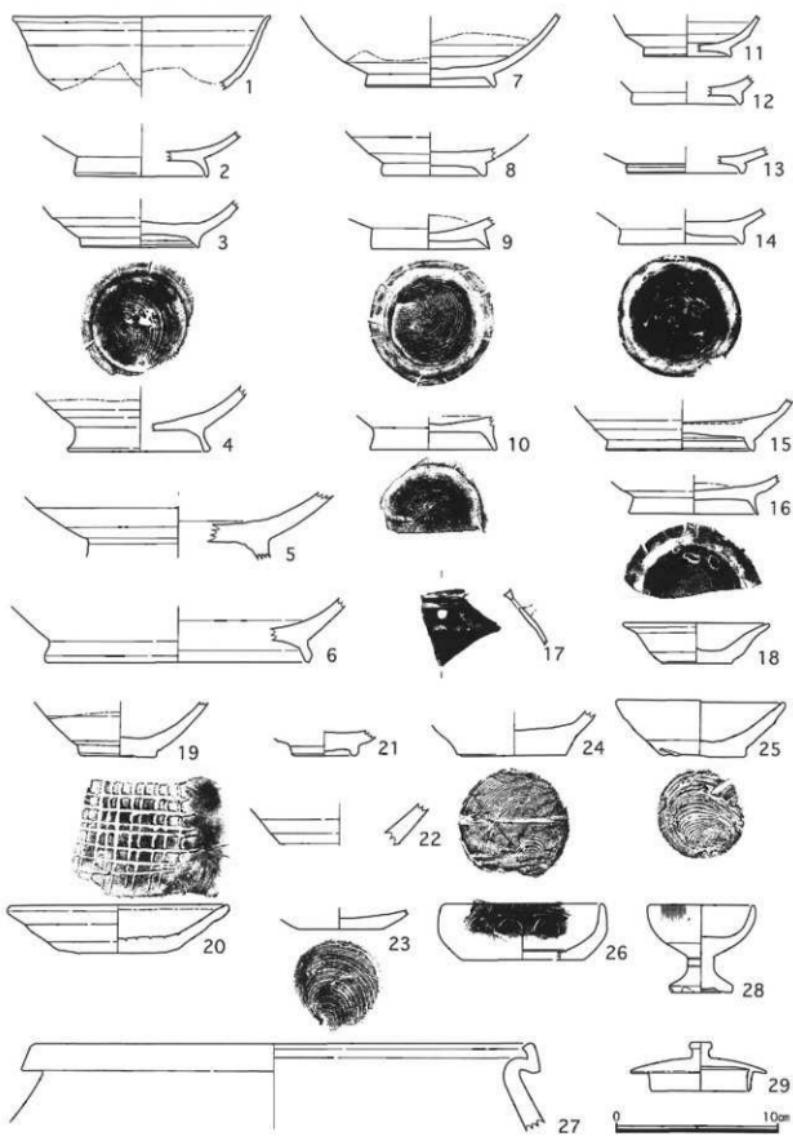
第82図7・8は古瀬戸中Ⅰ～Ⅱ期に比定されるもので、7は御皿、8は花瓶である。9は古瀬戸中期の梅瓶、11は古瀬戸後Ⅳ期新段階の節目付人皿である。12は大窯1期の瀬戸美濃産の縁釉はさみ皿、21・22はいずれも大窯4期の志戸呂産の製品で、21は筒型碗、22は丸碗である。第83図2・3は貿易陶磁（中国）の染付端反皿のB1類で15世紀後半に位置づけられる。4・9は貿易陶磁（中国）染付皿のC群で15世紀後半から16世紀中頃、12・13は中国青磁端反碗のD1類で4世紀後半、14は漳州窯系の染付碗で17世紀前半にそれぞれ位置づけられる。15～26はいずれも近世のカワラケ。第84図3は瀬戸美濃産の鈴釉の小杯で18世紀前半の製品、高台内に判読不明の墨書が認められる。11は17世紀後半から18世紀の肥前系の京焼風碗である。25～27は小杉碗で25・26は信楽産、27は瀬戸美濃産である。第85図6は志野織部の筒型碗で近世前半に位置づけられる。18は17世紀代の瀬戸美濃産の御深井釉の型作皿、19は18世紀中頃の肥前系の刷毛目大皿である。第86図14は瀬戸美濃系の灯明皿、本遺跡出土の灯明皿の中では古手のもので、18世紀の中頃から後半に比定される。16・17は瀬戸美濃産のピンクライ、いずれも18世紀の製品であろう。21は18世紀前半から中頃の美濃産の汁つぎ、22・24は19世紀前半の呂須釉の土瓶で、同一個体の可能性がある。第87図1は相馬焼の浮彫の碗で、近世あるいは近代に下る製品である。13は17世紀前半の志戸呂の鉄釉の小壺、15・16・19はいずれも19世紀初頭の瀬戸美濃産の徳利である。第88図1～3、第89図1は瀬戸美濃系の擂鉢、第88図3は底部を十文字状に切り、さらに4つの孔があけられており、植木鉢として転用された可能性がある。第89図3は18世紀後半の瀬戸美濃産の鉢である。第90

第75圖 SR1出土遺物素描圖





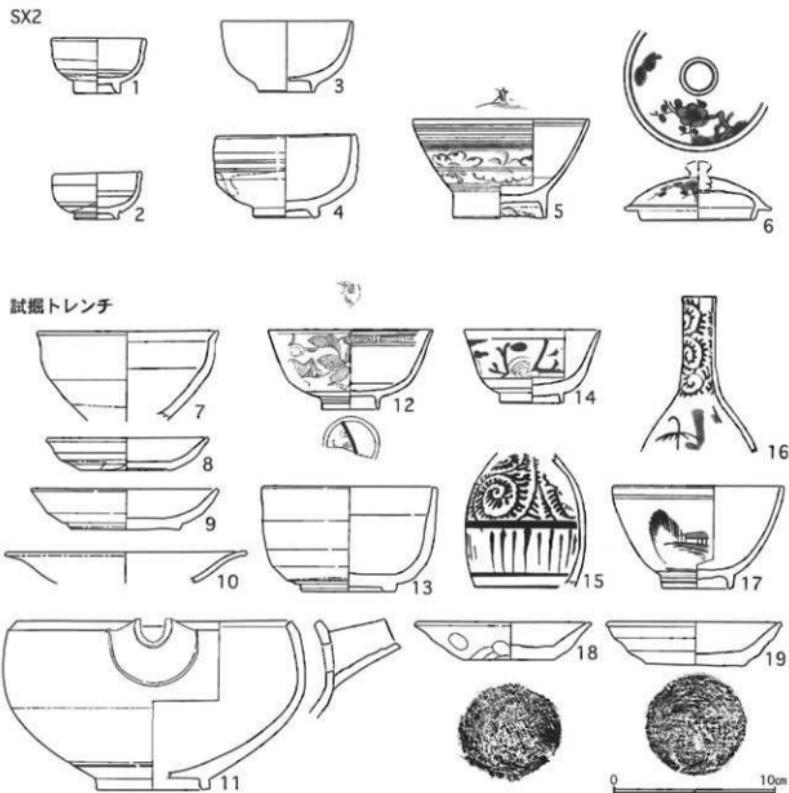
第76図 SR1出土遺物実測図



第77圖 SR1出土遺物實測圖

図1・2は19世紀の瀬戸美濃産の半銅、1は底部に孔があり、第88図3同様擂鉢として使用された可能性がある。4は幕末期の瀬戸美濃産の馬ノ皿である。第91図1・2・19はいずれも肥前系の碗で、1は17世紀後半、2は17世紀中頃、21は17世紀後半から18世紀前半にそれぞれ位置づけられる。第92図21・22は焼継ぎされた碗で、22の底部には「仁田大二」という朱書きが認められる。第93図1・2は18世紀後半から19世紀前半の肥前系の広東碗、3～13は肥前系および瀬戸美濃系の碗または端反碗である。14～20は碗蓋、20は焼継ぎされ、高台内に「仁田大」の朱書きが認められる。第94図7は、17世紀第三四半期に比定される肥前系の小杯、17は18世紀第三四半期の仏鉢具、10・12・28にはいずれも焼継ぎされた御神酒徳利、湯呑、型作皿で、28の底部には「仁」の朱書がなされる。27は瓶子型の御神酒徳利で、19世紀後半から19世紀前半のもの。第95図1・2はいずれも肥前系の大皿で17世紀に比定される。第97図8は底部に「仁田大八」の朱書きが認められる肥前系の中皿、焼継ぎされたものである。

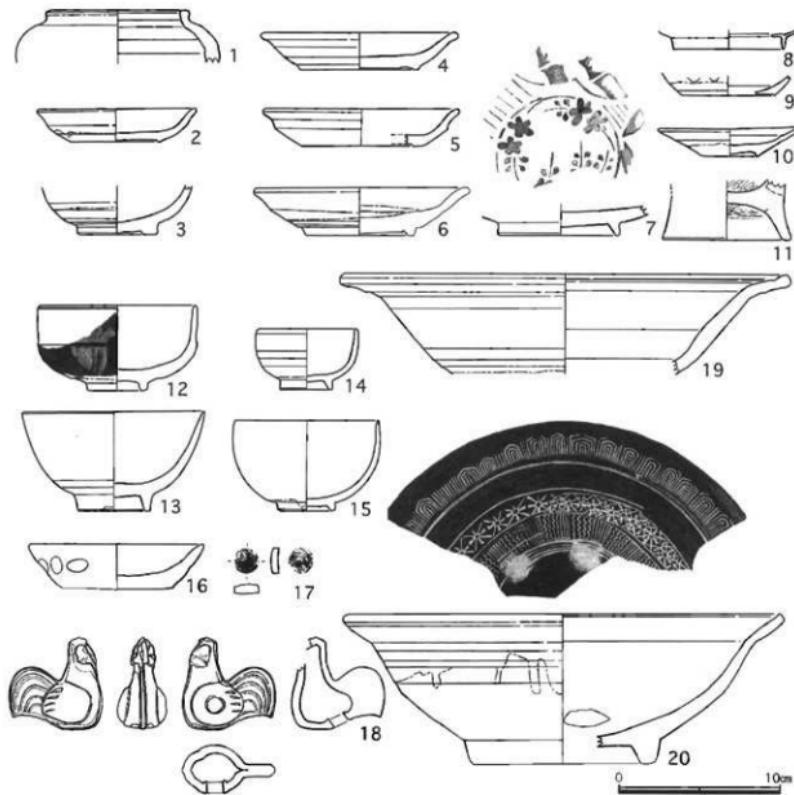
第98図1・2は箱庭道具、8・11・16はいずれも水滴、16は御深軸をかけた18世紀代の瀬戸美濃系の製品である。12～15は用途不明の石製の円形の道具で武器のようなものか。



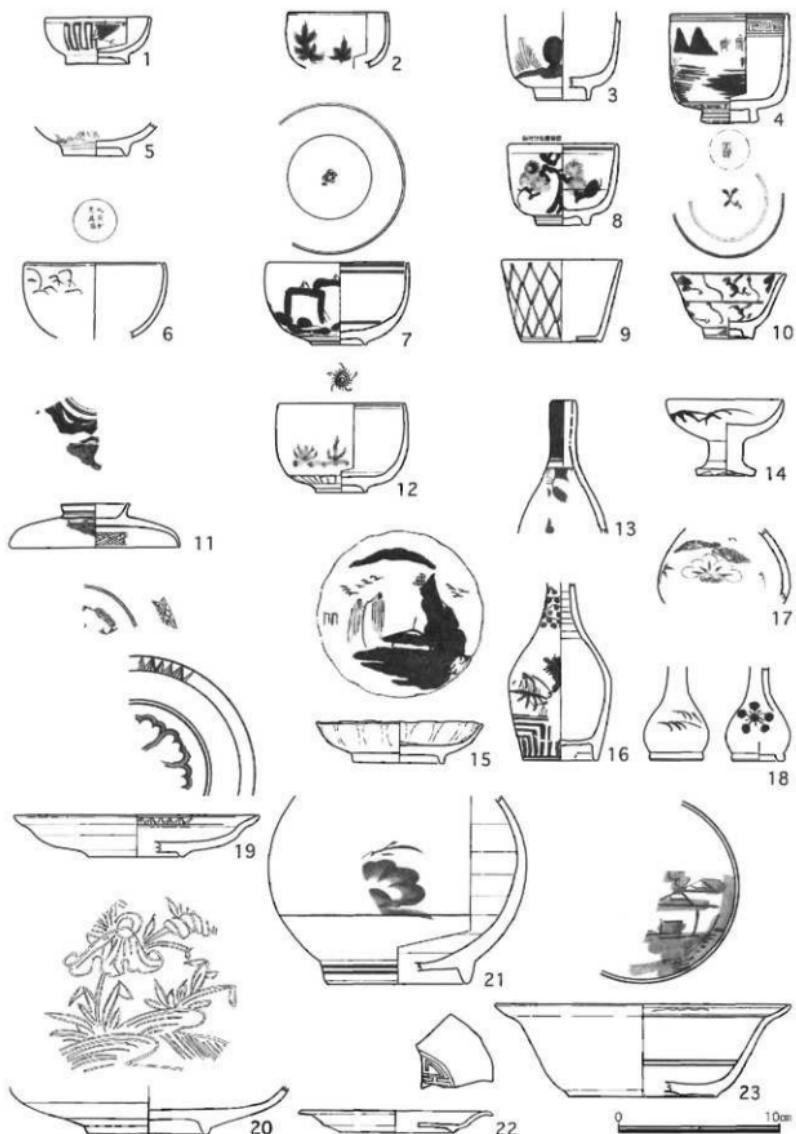
第78図 SX2/試掘トレンチ出土遺物実測図

註

- 1 1995 中世土器研究会 「概説 中世の土器・陶磁器」
- 2 墨書き器について人間文化研究機構理事 平川南氏にご教示いただいた。記して感謝申し上げる。

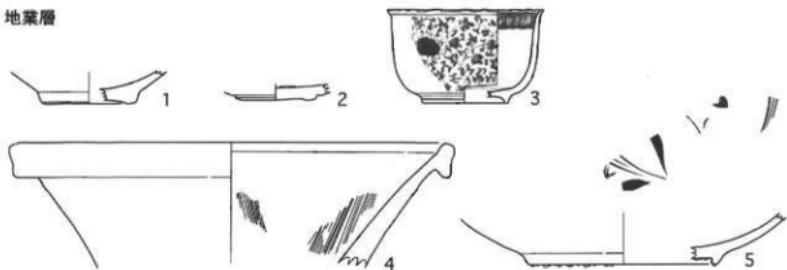


第79図 表土～盛土出土遺物実測図

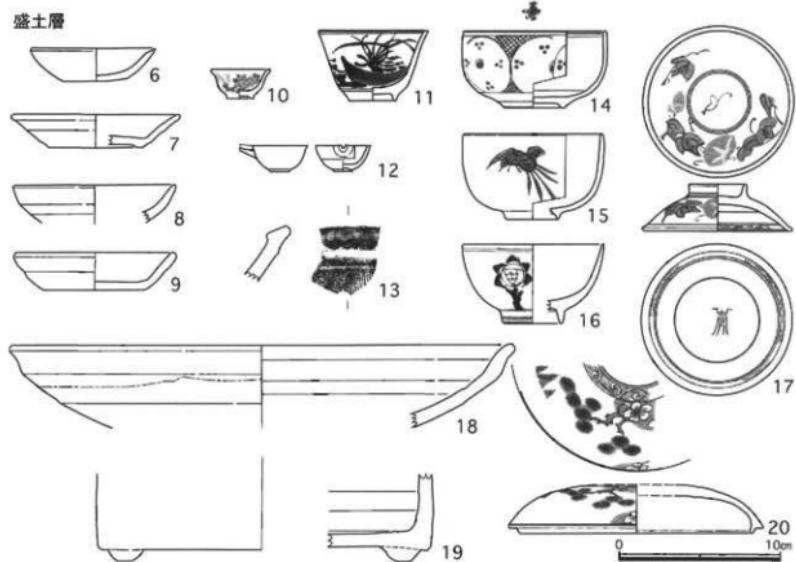


第80図 表土～盛土出土遺物実測図

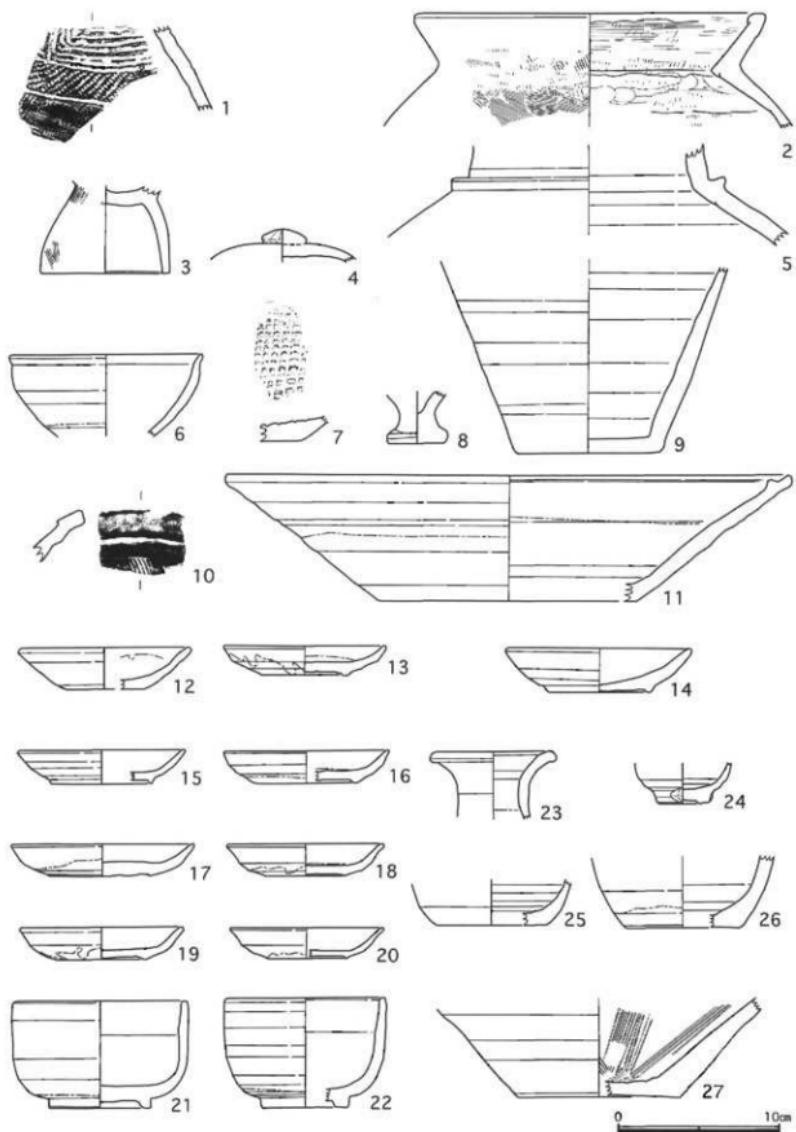
地表層



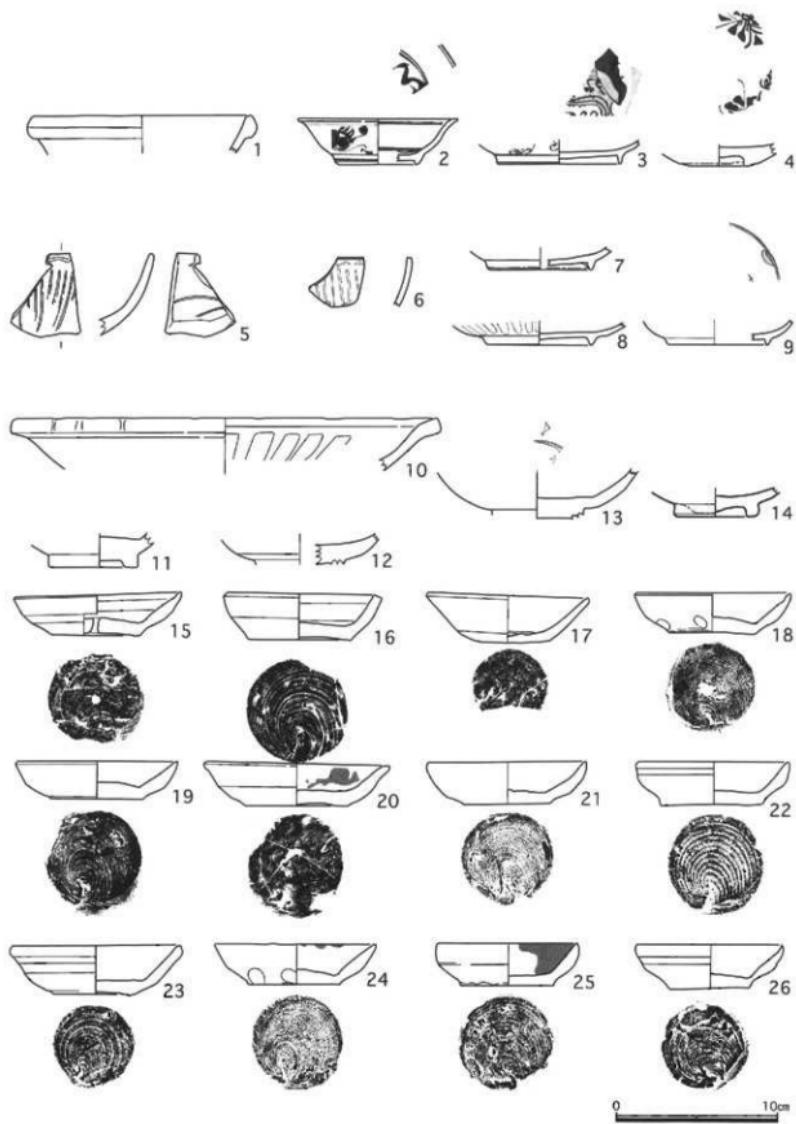
盛土層



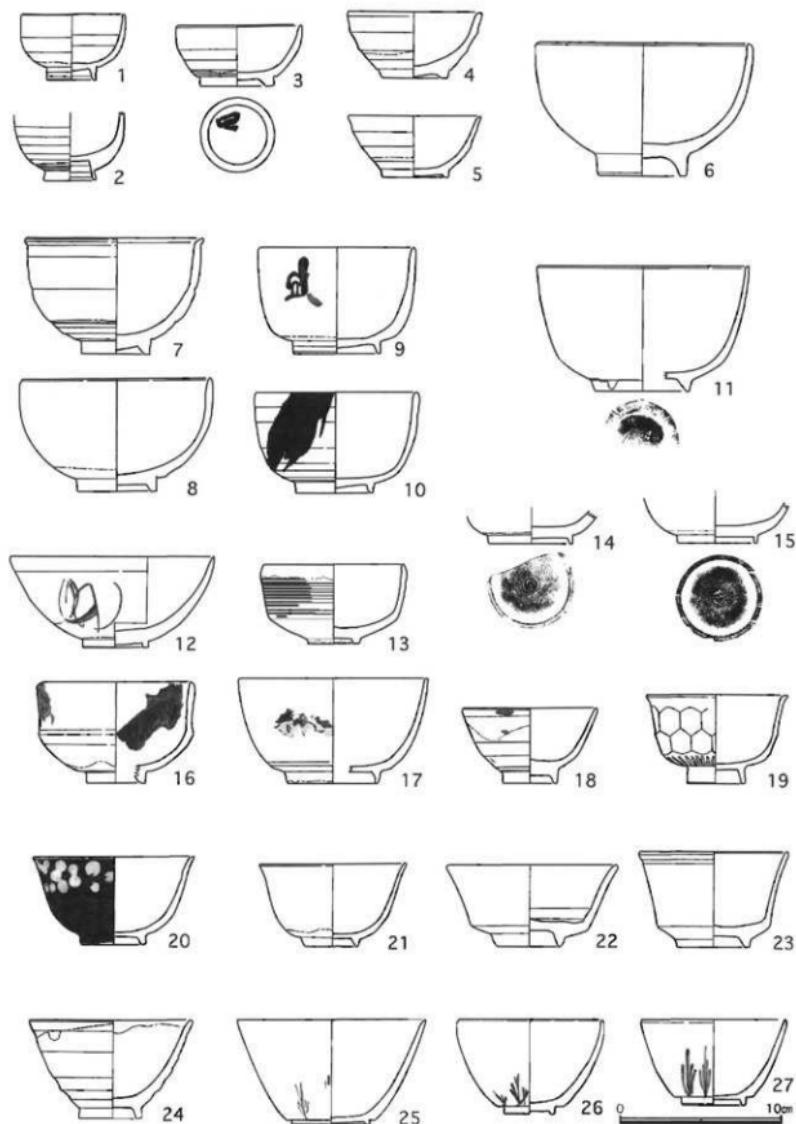
第81図 表土～地表層出土遺物実測図



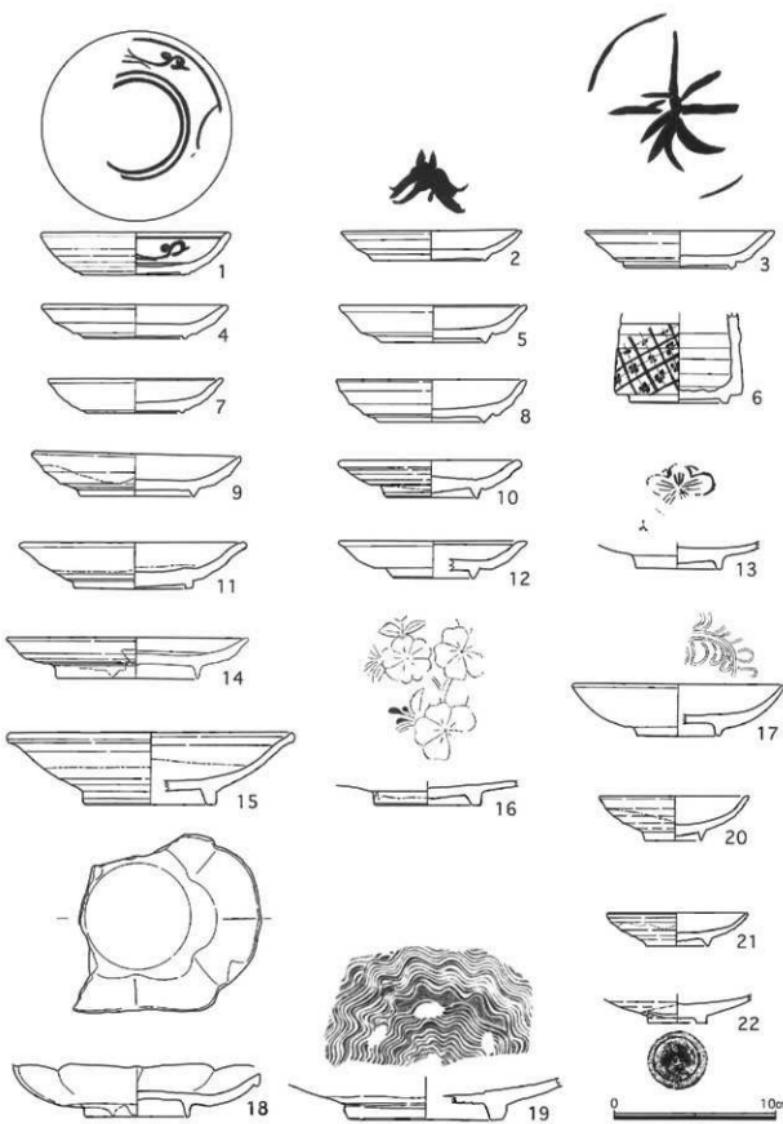
第82図 II層出土遺物実測図



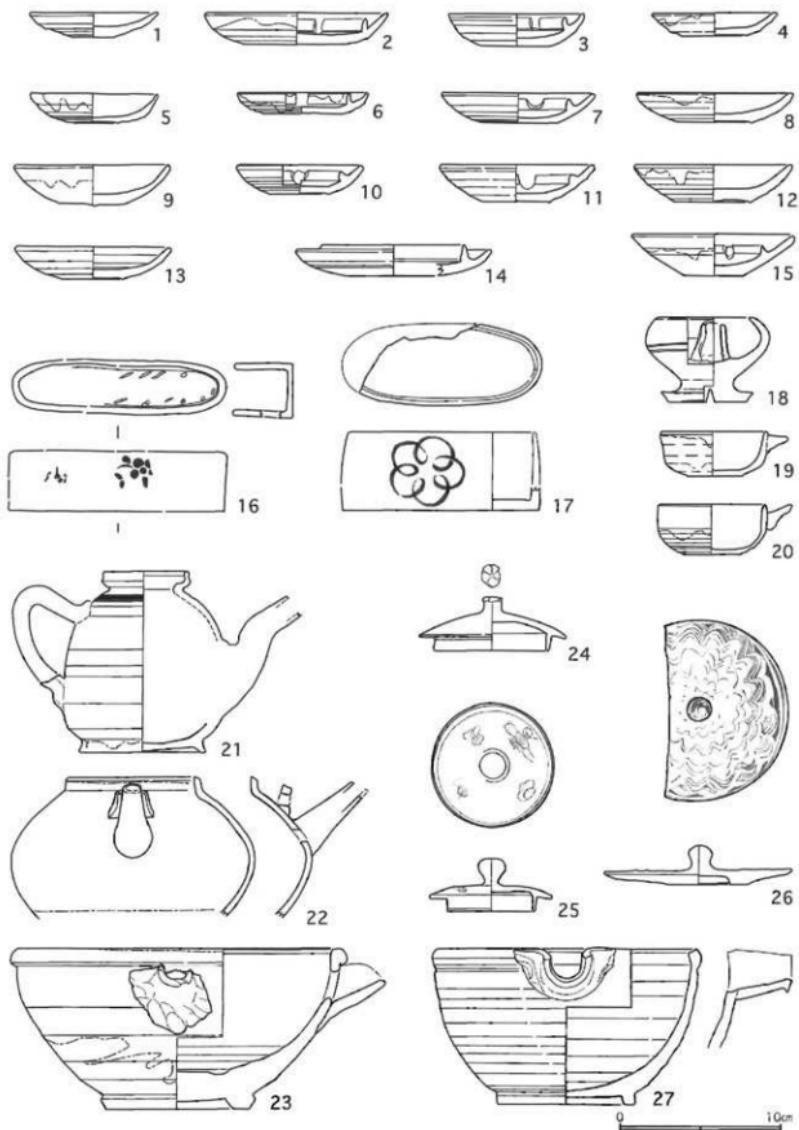
第83圖 II層出土遺物実測図



第84図 II層出土遺物実測図



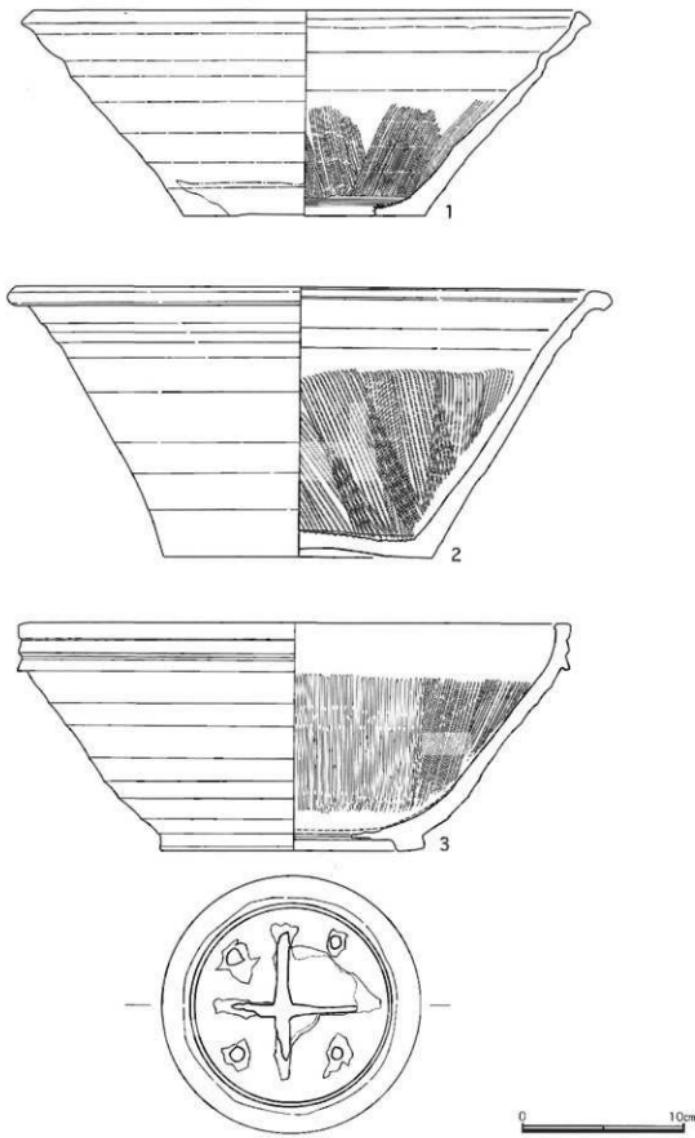
第85圖 II層出土遺物實測圖



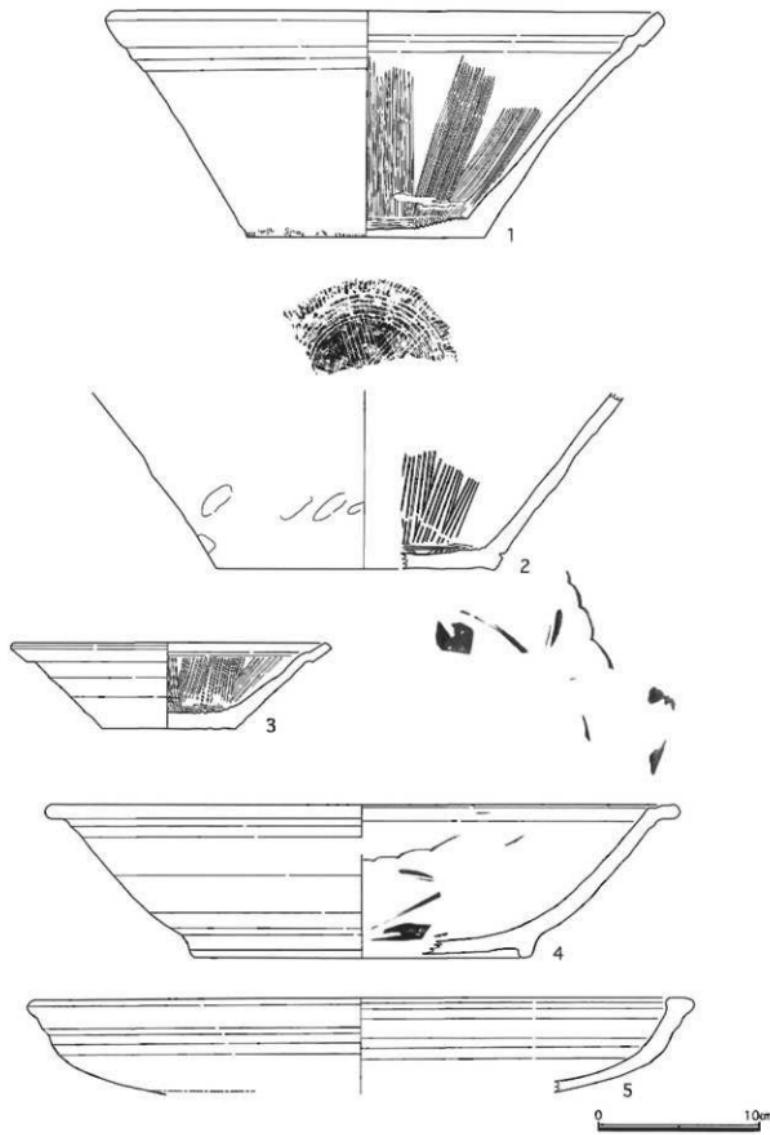
第86図 II層出土遺物実測図



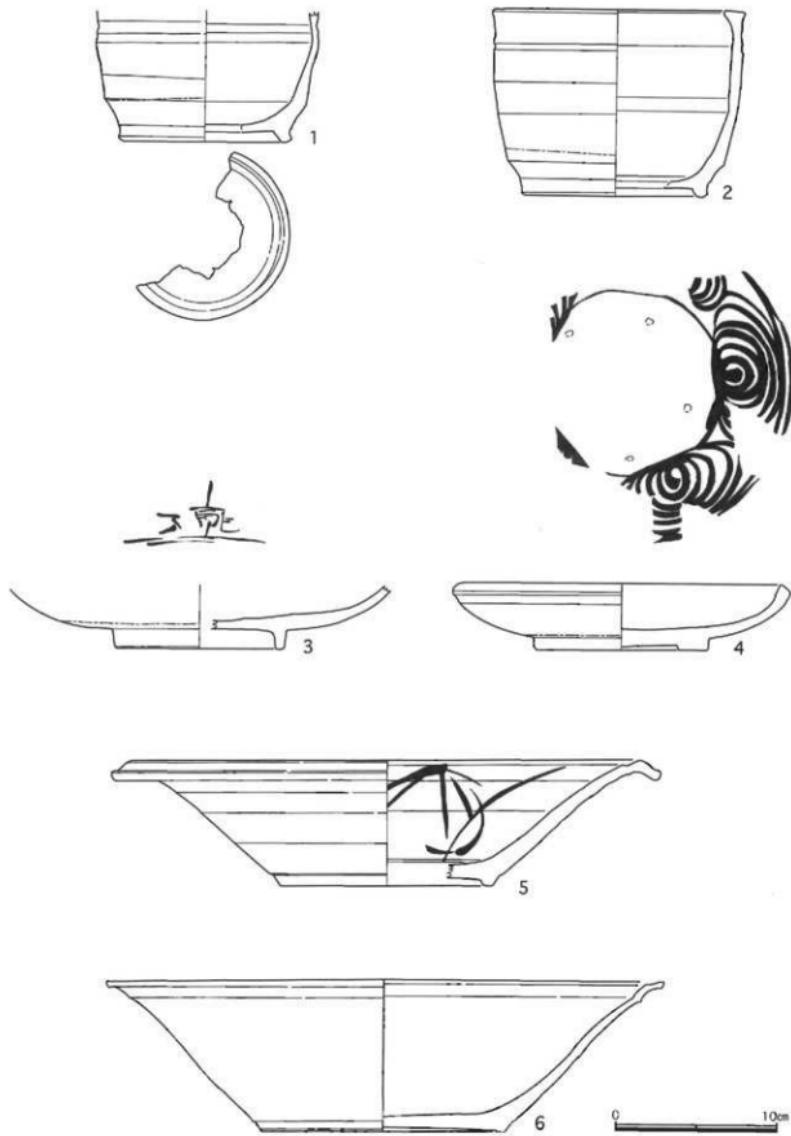
第87図 II層出土遺物実測図



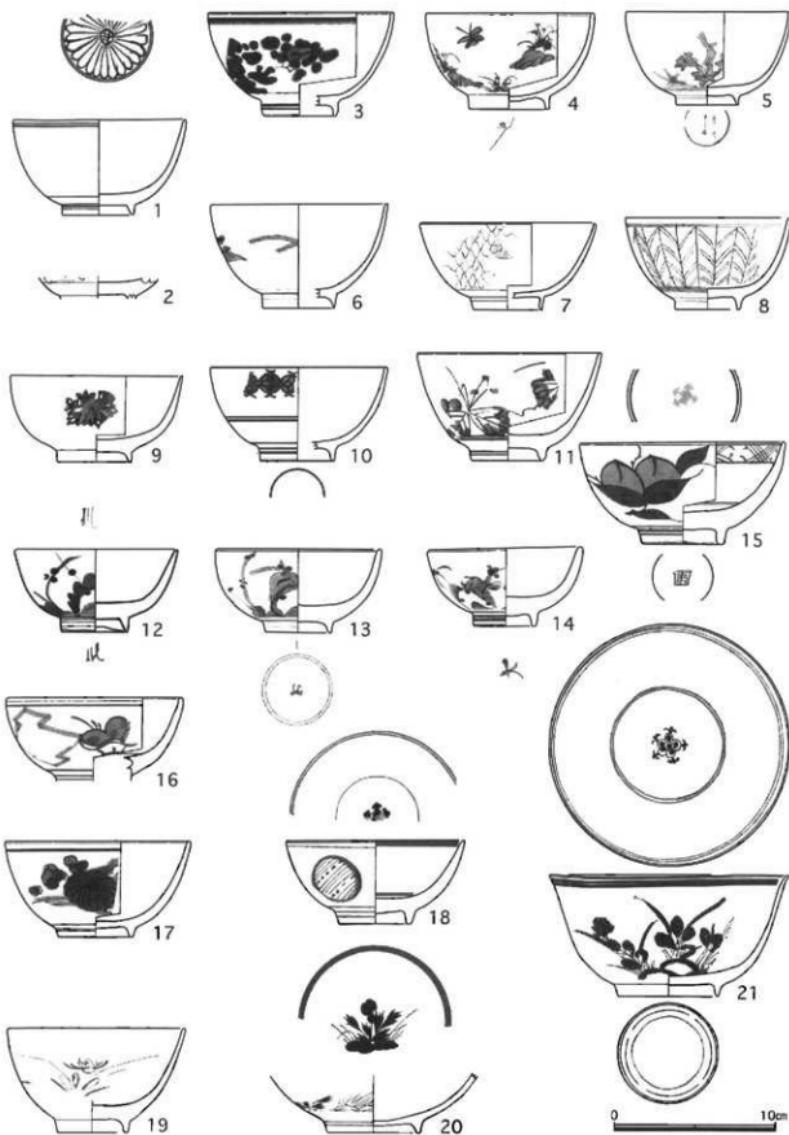
第88図 II層出土遺物実測図



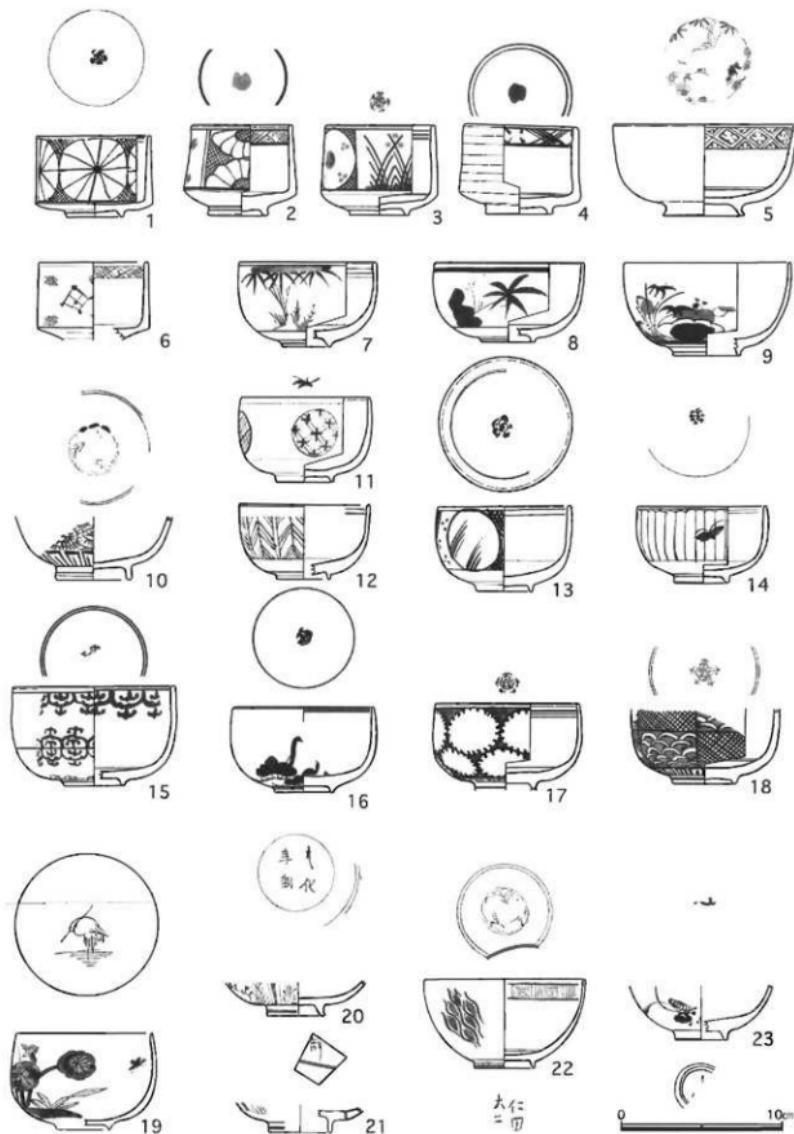
第89圖 II層出土遺物實測圖



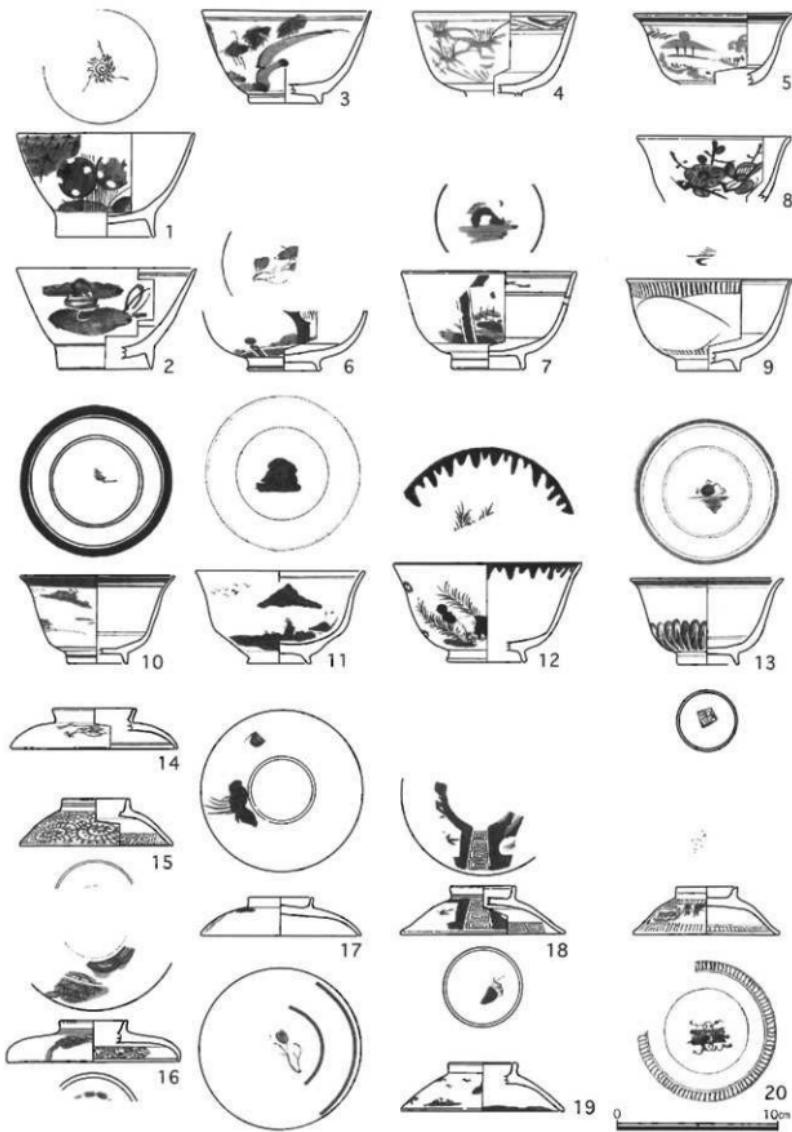
第90図 II層出土遺物実測図



第91図 II層出土遺物実測図



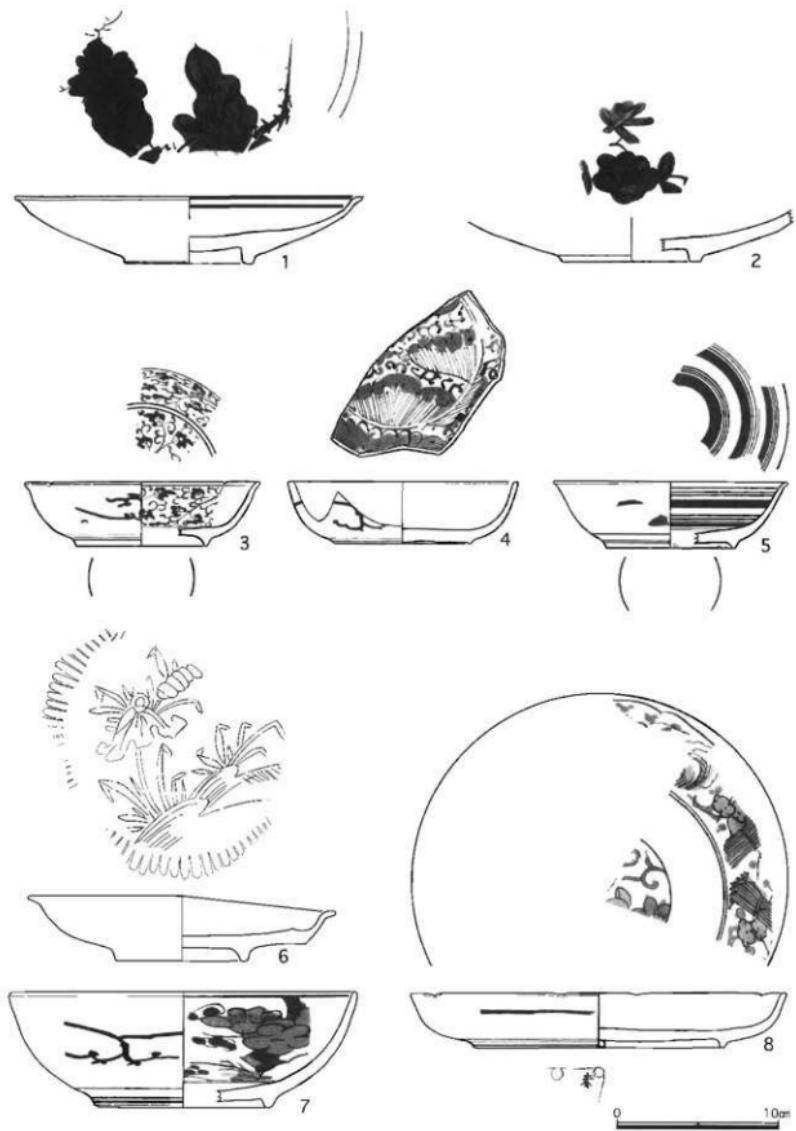
第92図 II層出土遺物実測図



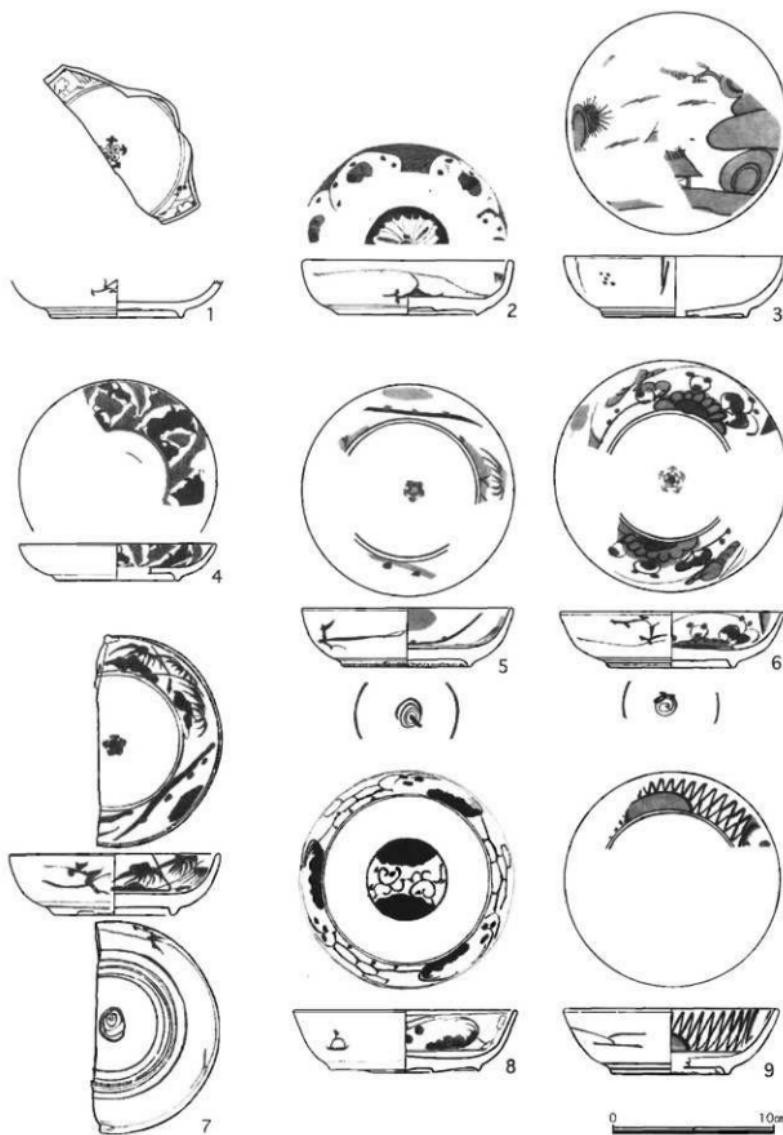
第93圖 II層出土遺物實測圖



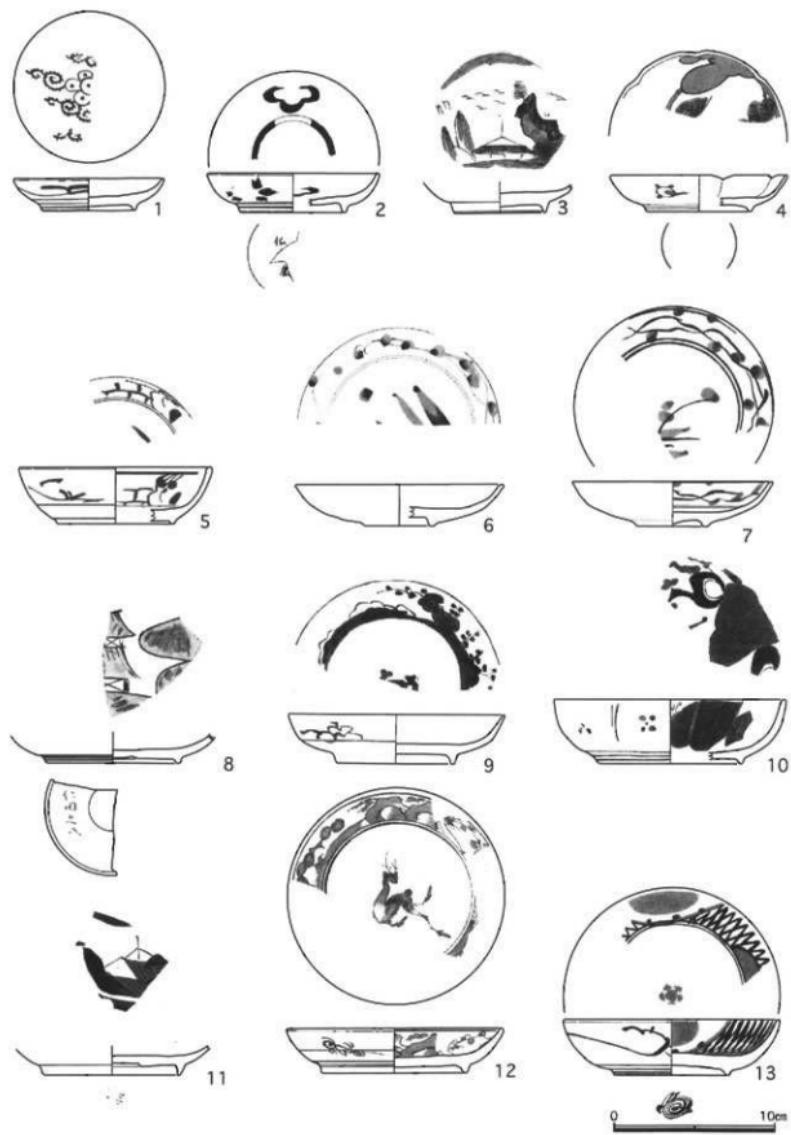
第94図 II層出土遺物実測図



第95図 II層出土遺物実測図



第96図 II層出土遺物実測図



第97図 II層出土遺物実測図



第98図 II層出土遺物実測図

木製品等

木製品、石製品の概要については一覧表に記した。木製品は漆椀、折敷、木簡（付け札）、こけら経などが出土している。また、石製品は硯、刻書礎石、印鑑などが出土している。硯にはカニなどの落書きが表裏に記されており、興味深い。18世紀以降のものと考えられ、裏面には「本高島青石」の銘が線書きされている。他方、「二十四メ」と刻書された礎石は重量が約90kgあり、尺貫法でいう24貫に相当する可能性がある。重量を示す石であったものが礎石に転用されたものであろうか。一部金は出土品としては稀な存在といえよう。

こけら経

出土状況

こけら経は、屋敷地の北東隅を流れる自然流路（SR1）の覆土（V層）から出土した（第56図）。屋敷地の北東隅は、現存する土壠、堀の状況から埋没した堀の検出が予想されたが、調査の結果、比高差3m程の崖面及び自然流路（SR1）が検出された。このことから、一定期間、自然地形（SR1）を取り込む形で屋敷が機能していた可能性が考えられる。崖面下端部には径30cmを超える長さ4m以上の自然木が径5cm程度の丸杭によって粗密はあるものの約30cm間隔で固定されていた。これは崖面の崩壊を防ぐための護岸と考えられる。こけら経は、その護岸の下部から東となって出土した。調査時には涌水等の悪

条件が重なり、出土状態の詳細を記録することは不可能であった。共伴遺物は、古瀬戸後期～大窯期の瀬戸美濃産陶器などが確認されており（第77図）、後述するこけら経の形態から推定される編年観とも齟齬は生じていない。

総点数

こけら経は経文が同定できた資料が867点（接合資料は1点として集計）、経文も同定できなかった破片資料が19点で総点数886点であった。なお、こけら経実測図の遺物番号については、経文の行数を遺物番号として使用している（別冊図版）。

形態・法量・材質

圭頭状を呈し、長さ22cm、幅1.5cm、厚さ0.3～0.5mm（いずれも平均値）を計る。個体によっては圭頭部が左右対称とならないものがある。個体差はあるものの、厚さ0.5mm以下と非常に薄く製作されていることから、いわゆる台鉢によって削り出されたものと考えられる。材質はヒノキである。

經典

写経されている經典は妙法蓮華經（法華經）である。妙法蓮華經（法華經）は、序品第一から普賢菩薩勸發品第二十八の合計28品で成り立っているが、このうち序品第一から授學無學人記品第九までが確認されている（部分的に欠落あり）。当時盛行したとされる春日版法華經の序品第一から授學無學人記品第九までの總行数は、1864行であるから、この内およそ46%（完存しないものも1行として集計）の經文（こけら経）が残存していた計算となる。

写経方法・字數

片面に經文一行を写経することを基本とする。裏面に次行の写経の転写痕が認められるものがあることから、写経したものはただちに重ねられた可能性がある。1行17字を基本とするが、偶頃の部分は16字または20字となる点は、一般的なこけら経のあり方と変わらない（ただし、脱字や加字の類が認められる場合は、この限りではない）。なお、後述するように、両面に写経するもの、1枚に經文2行を写経するものが例外的に認められる。

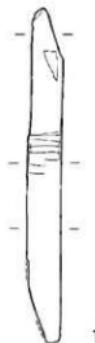
こけら経の密着状況

こけら経は、およそ50の束となって出土している（註1）。このことは出土位置がこけら経を自然流路に遺棄あるいは埋納した原位置にほぼ近いものと考えることが妥当であろう。これらは、密着して出土しているのにもかかわらず、経文の順番とならないものや、こけらの形状や長さが明らかに異なり、他の部分の経文が混在している部分も確認できる。自然流路地積層出土であることから、流水による攪乱も考慮する余地があるが、互いに密着した状態で出土している点を考慮すると、自然流路に遺棄あるいは埋納した時点ですでに経文の順番通りとならないものが含まれていた可能性がある。言い換えれば、出土状態は、こけら経が二次的に流路に遺棄あるいは埋納されたことを示していると言えよう。写経という性質上、経文が混在することは通常考えにくることから、写経を完了したこけら経が後に何らかの理由によって一部が混在し、それが束ね直された結果と推測することができる。

註

1 出土時にいくつかの束が分離した可能性は残るもの、確實に密着状態をとどめていたものを1束として数えた。

SH2堅穴覆土



1



SD1

6

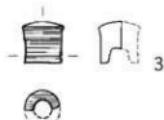
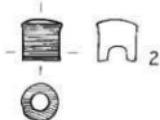


SD1覆土最下層

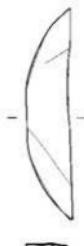


4

R-23 II層下半



R-26 VI層



5



7

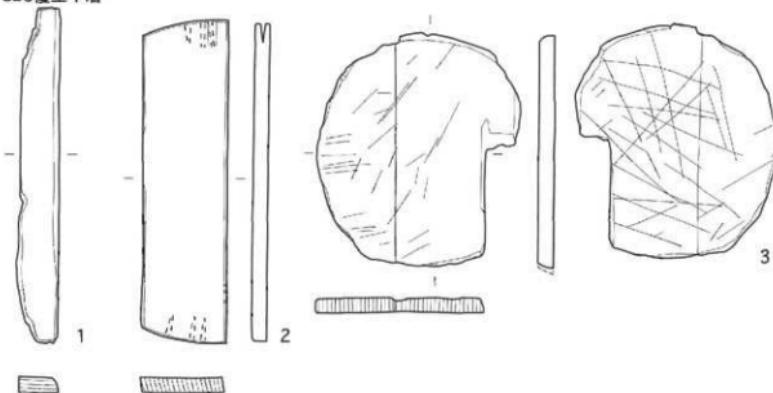


8

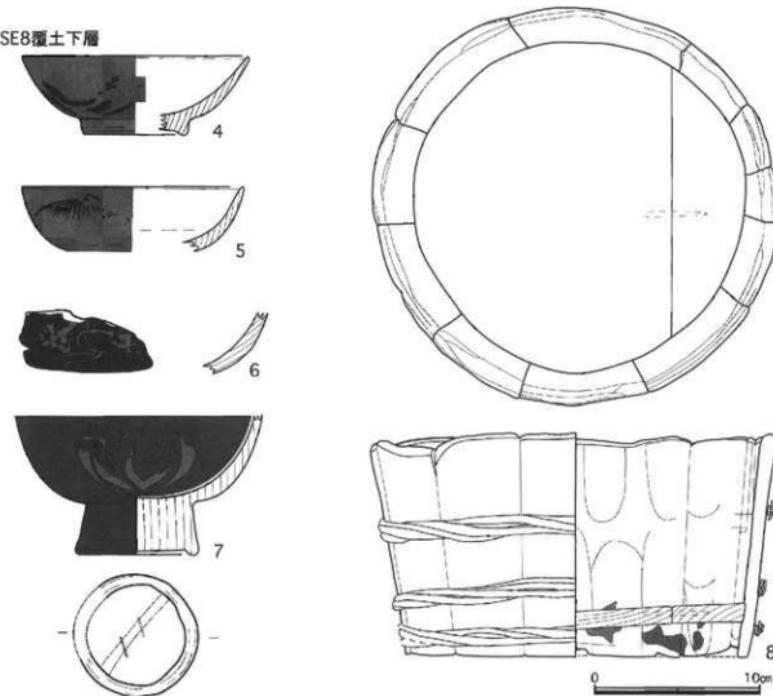
0 10cm 0 10cm

第99図 K1礎石建物他出土木製品実測図

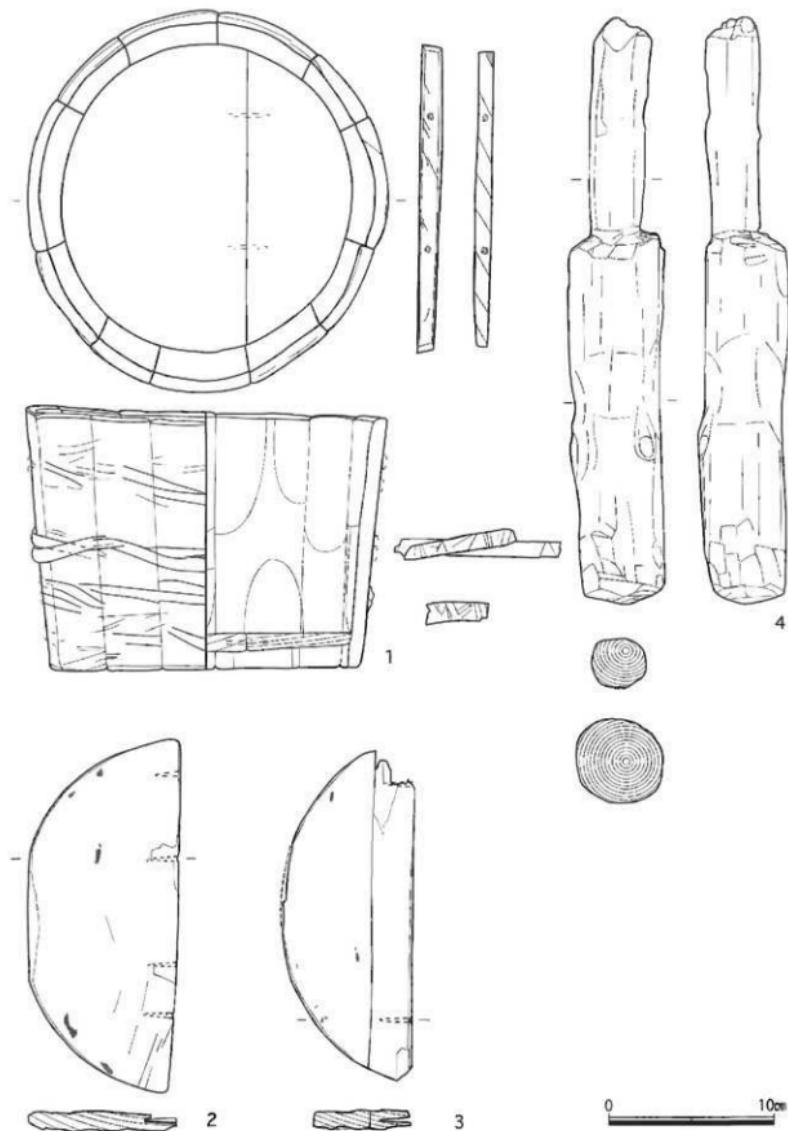
SE6覆土下層



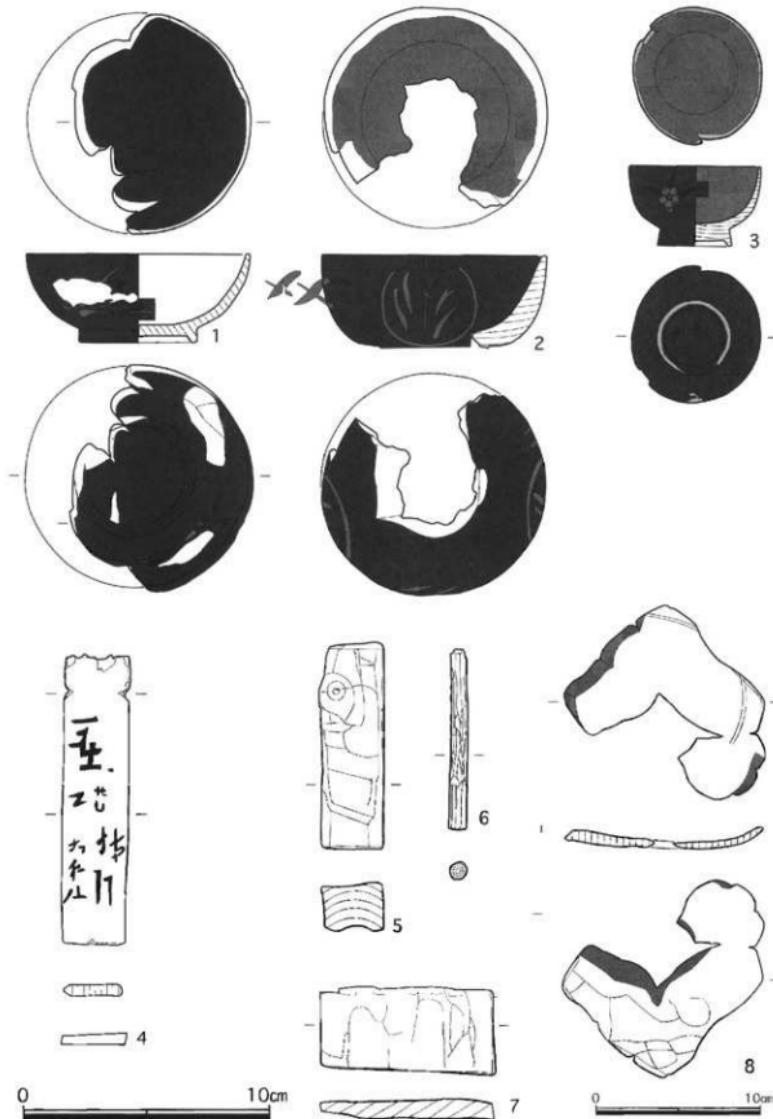
SE8覆土下層



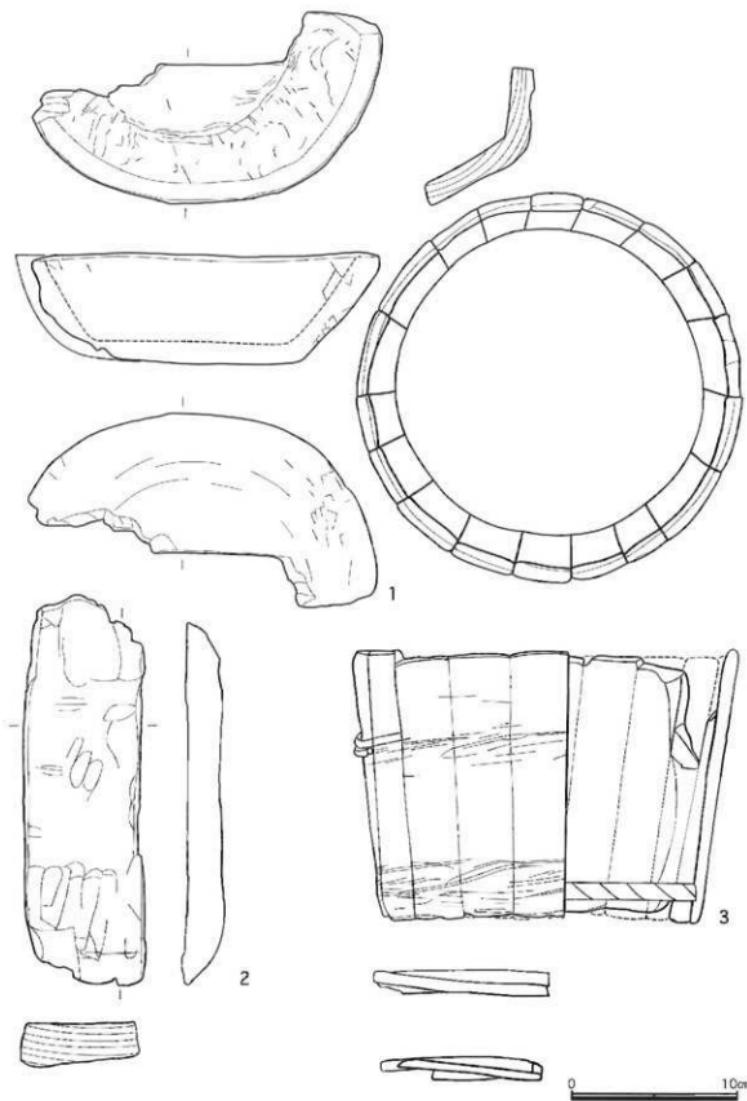
第100図 SE6/8出土木製品実測図



第101図 S E8出土木製品実測図



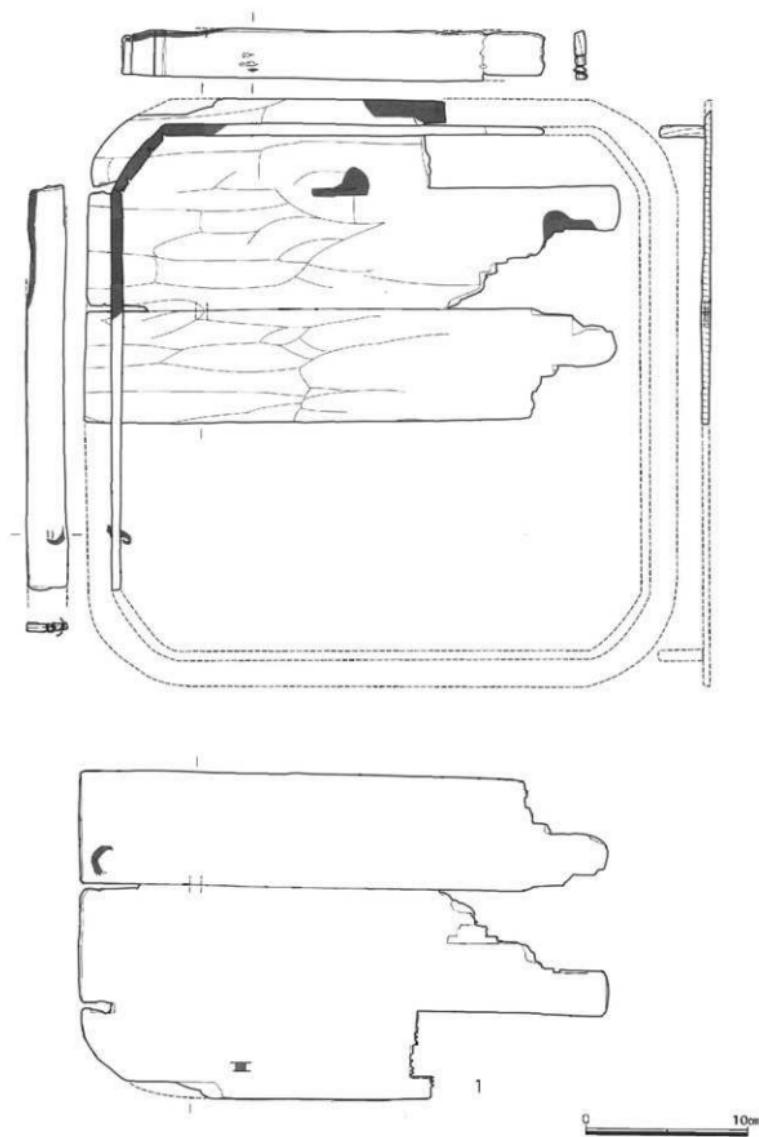
第102圖 S E3出土木製品實測圖



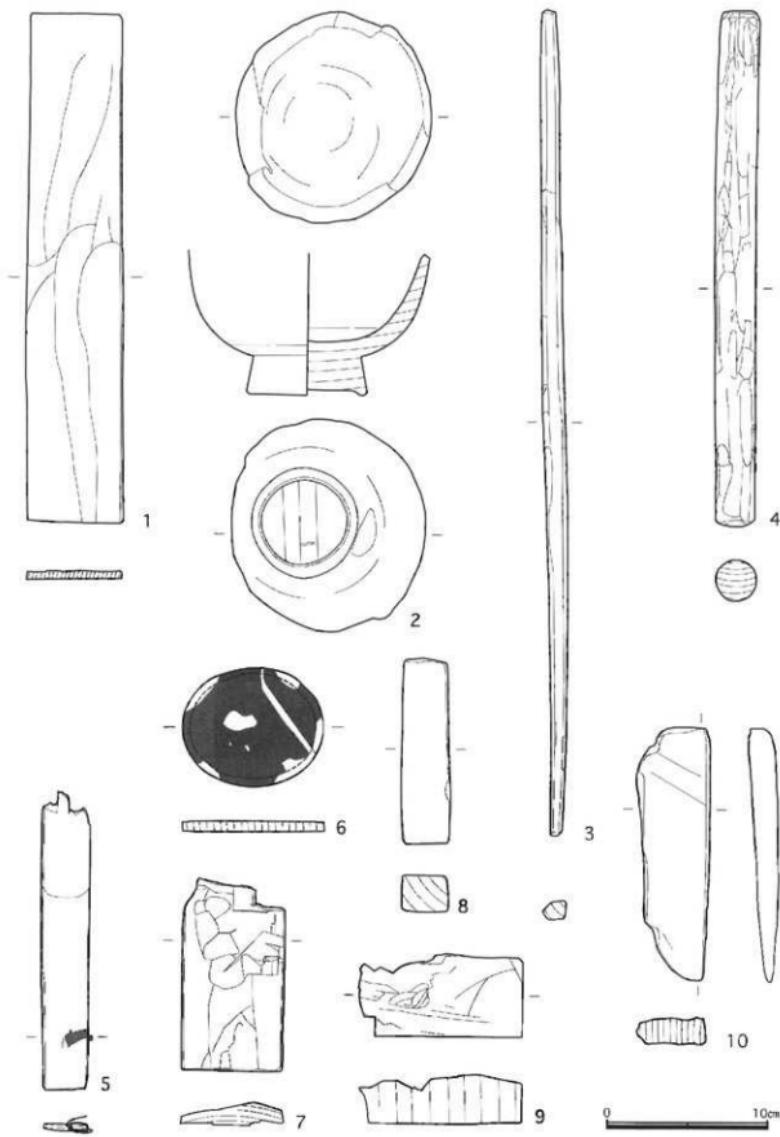
第103図 SE3出土木製品実測図



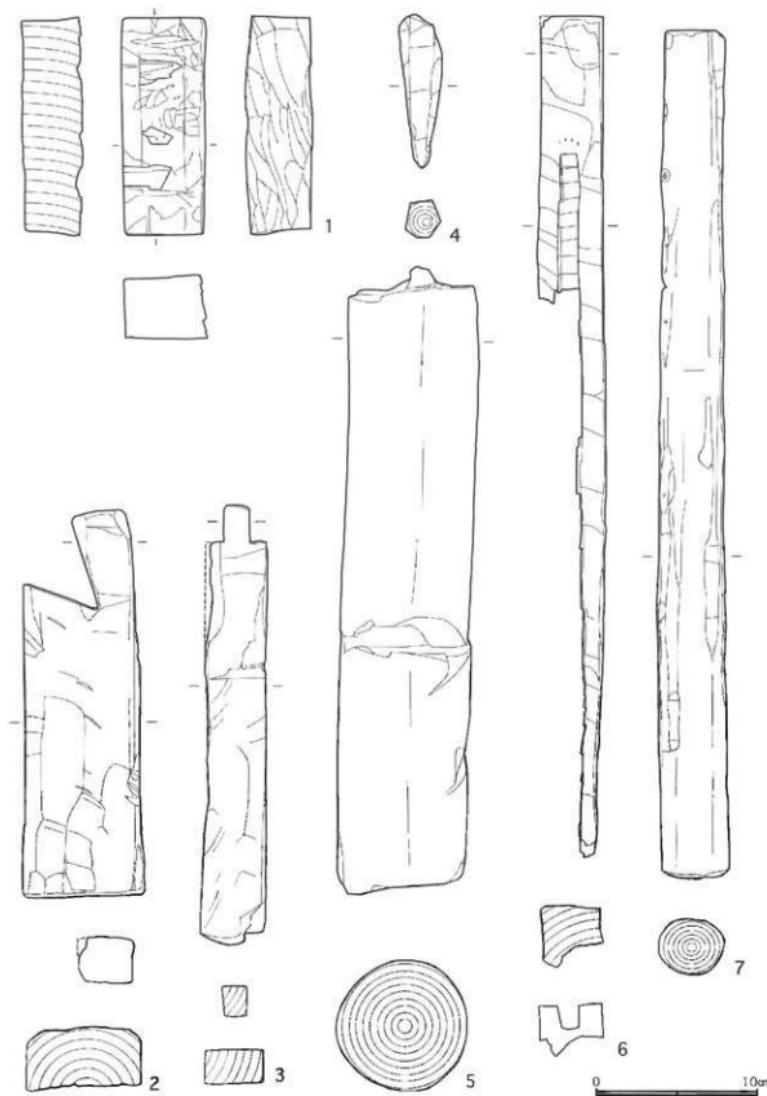
第104図 S E3出土木製品実測図



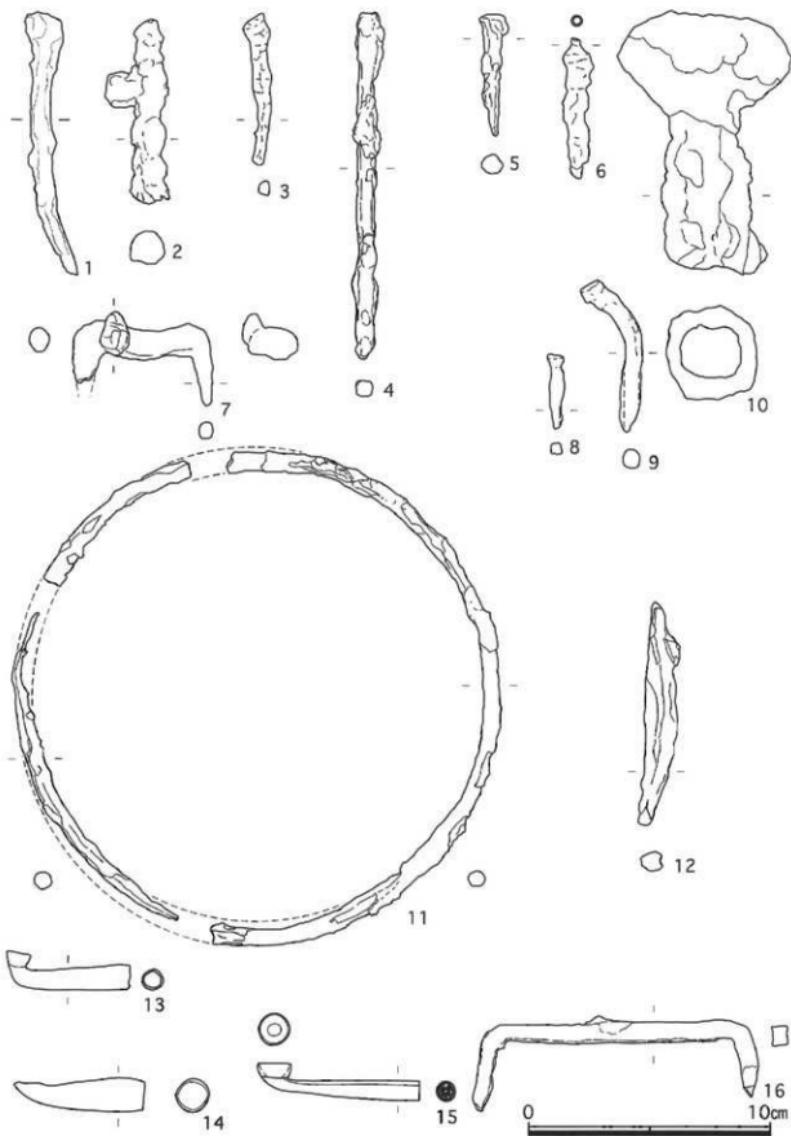
第105図 S E4出土木製品実測図



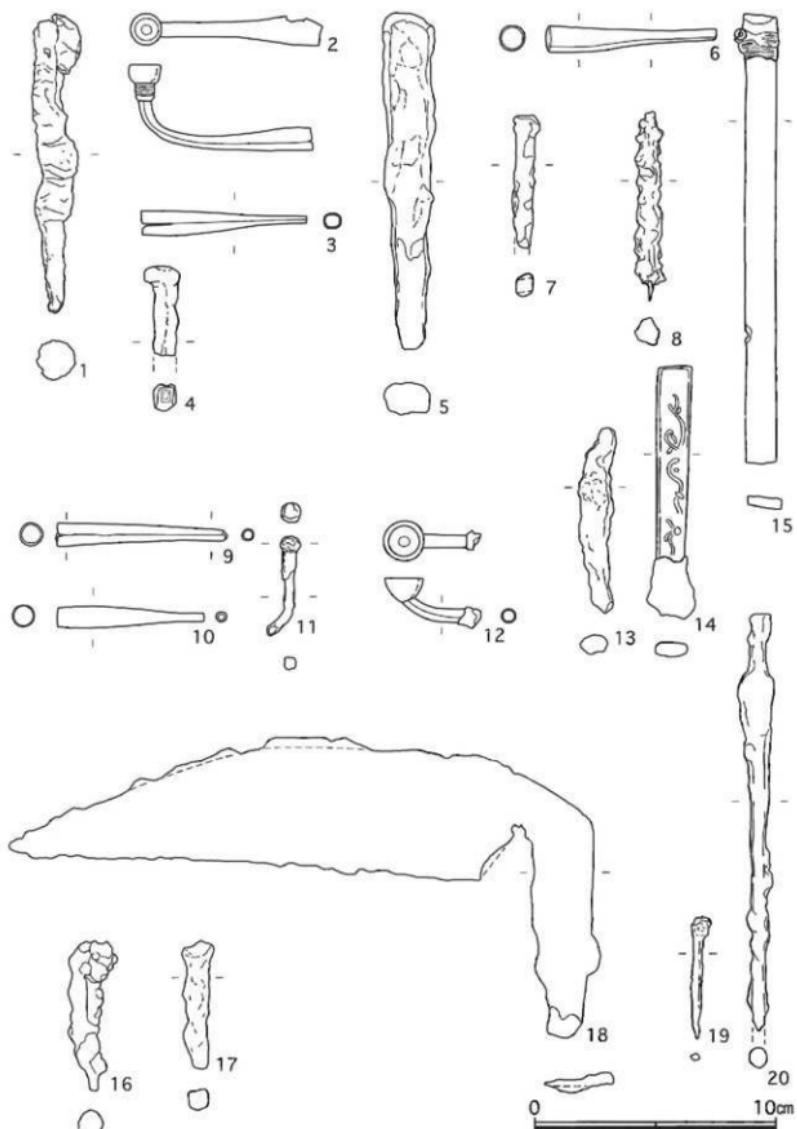
第106図 S E4出土木製品実測図



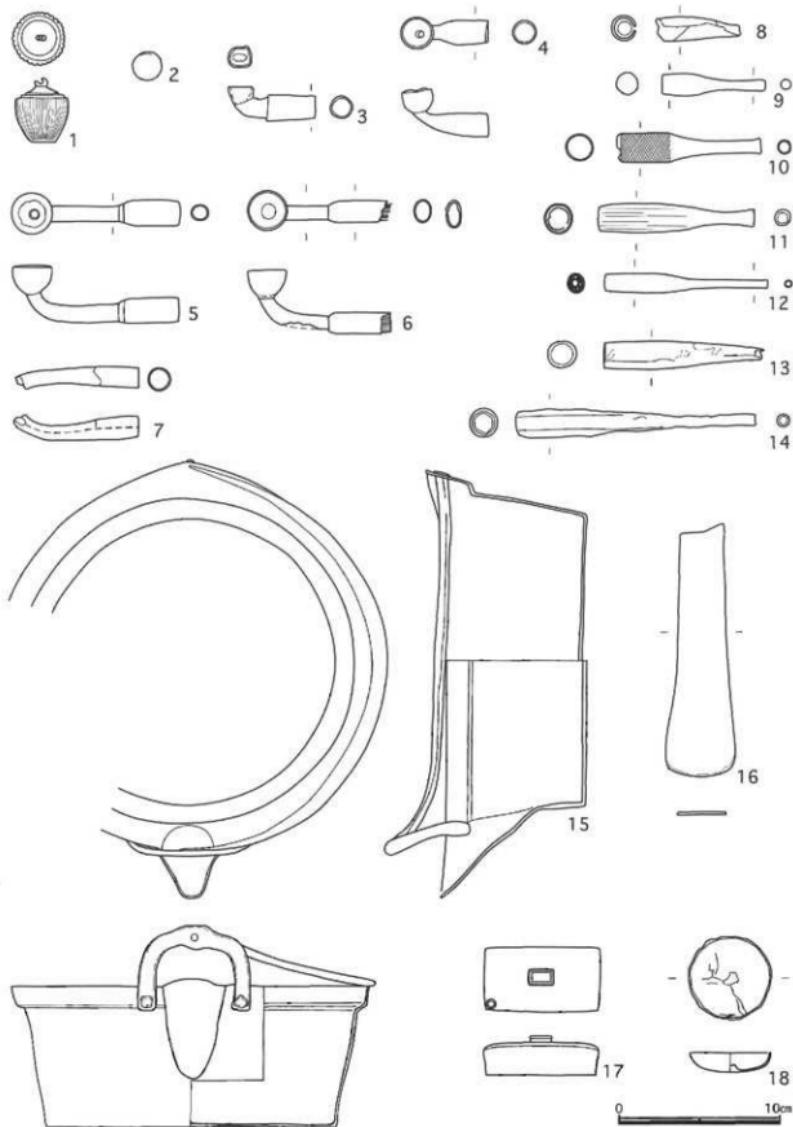
第107図 S E4出土木製品実測図



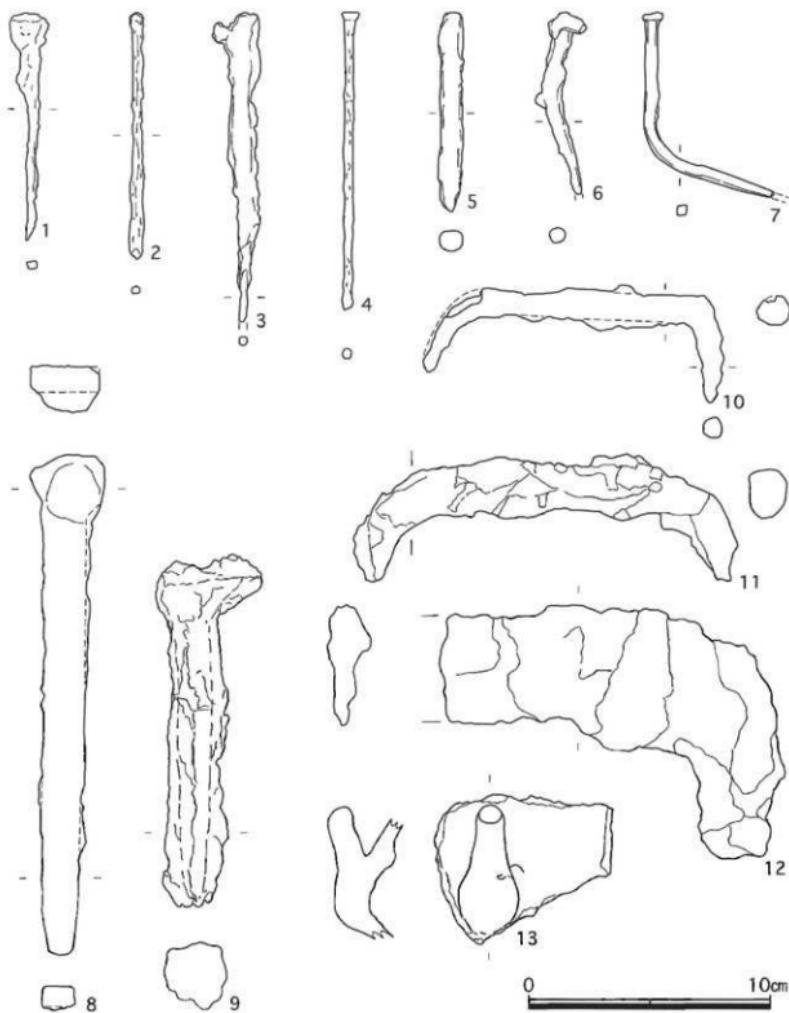
第108図 遺構出土遺物実測図（金属器）



第109図 造構出土遺物実測図（金属器）



第110図 II層出土遺物実測図（金属器）

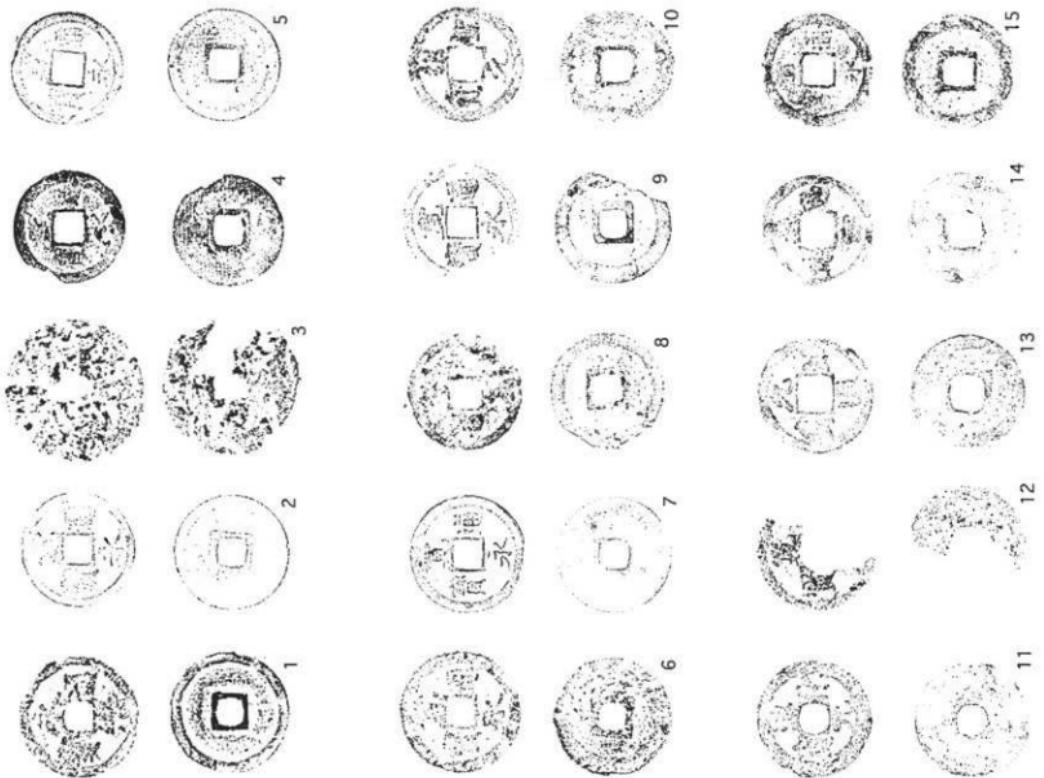


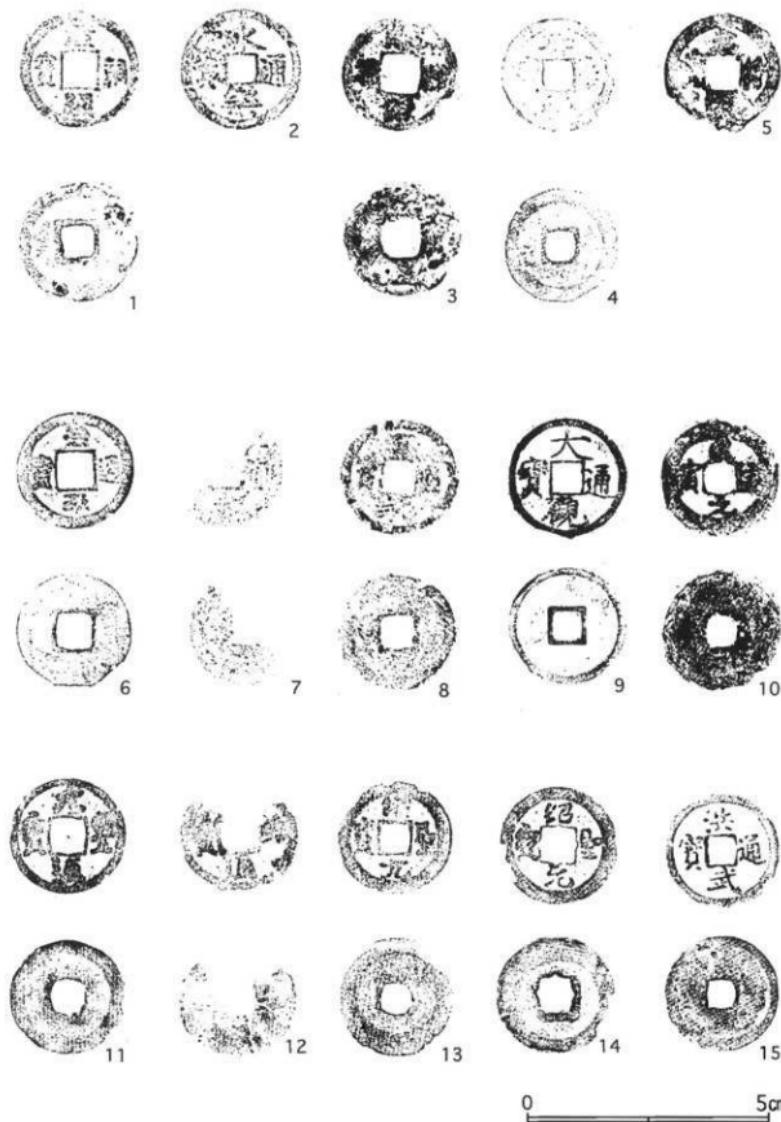
第111図 II層出土遺物実測図（金属器）

5cm

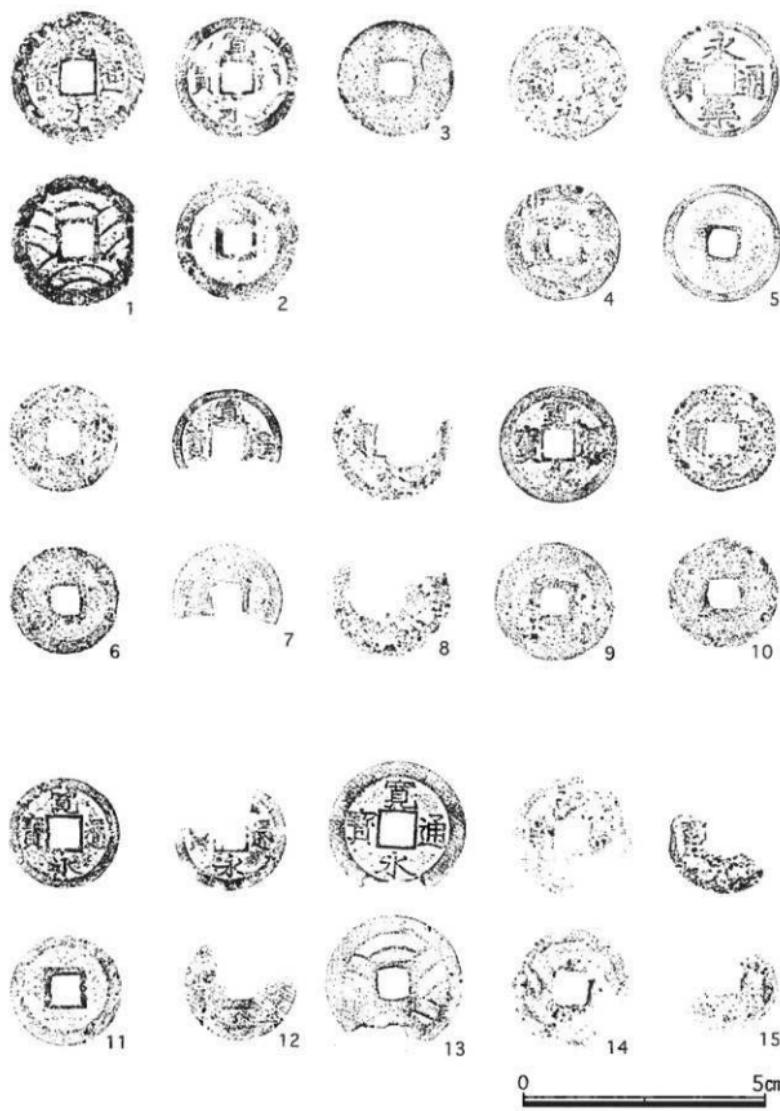
0

第112圖 仁田館遺跡 出土遺物實測圖（錢寶）

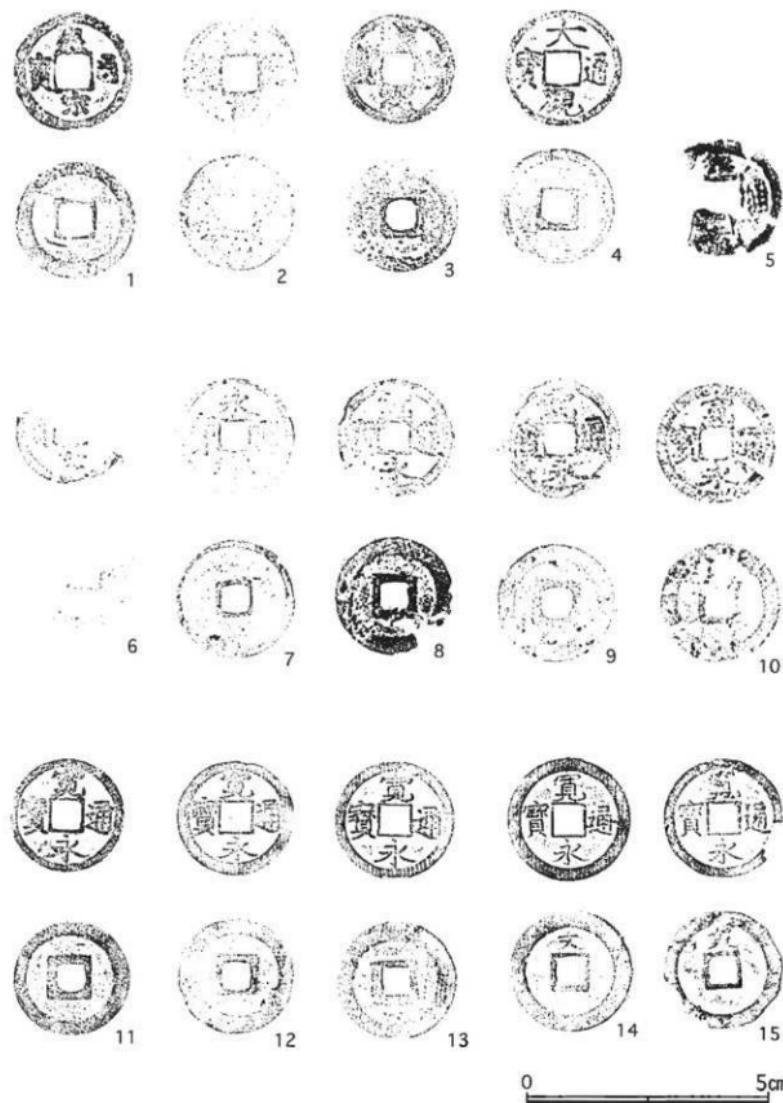




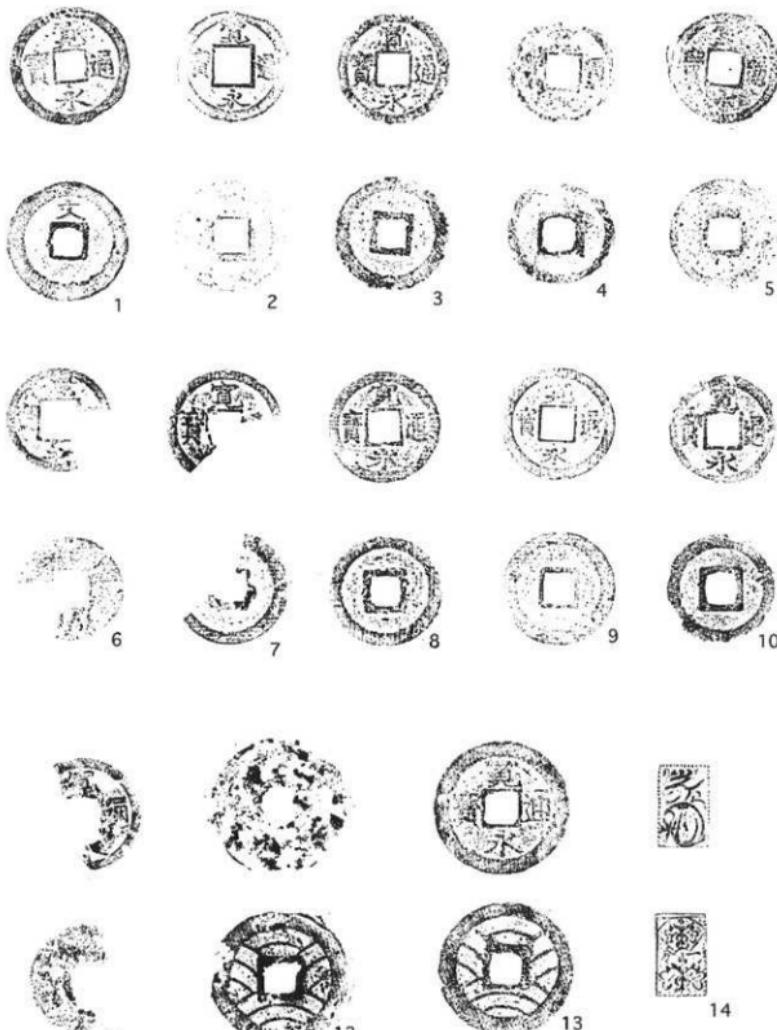
第113図 仁田館遺跡 出土遺物実測図(銭貨)



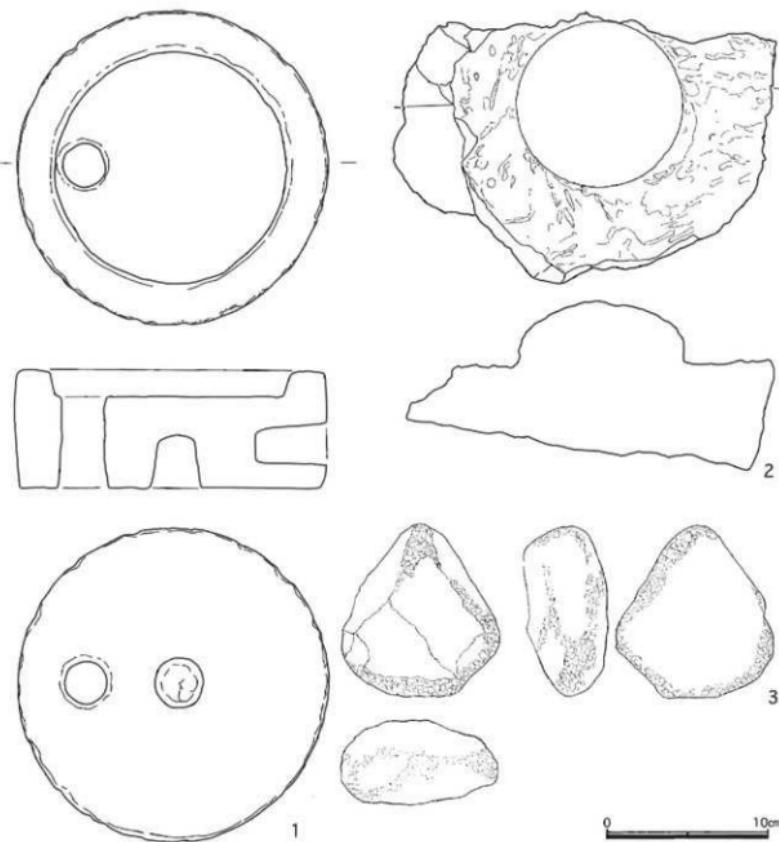
第114図 仁田館遺跡 出土遺物実測図（銭貨）



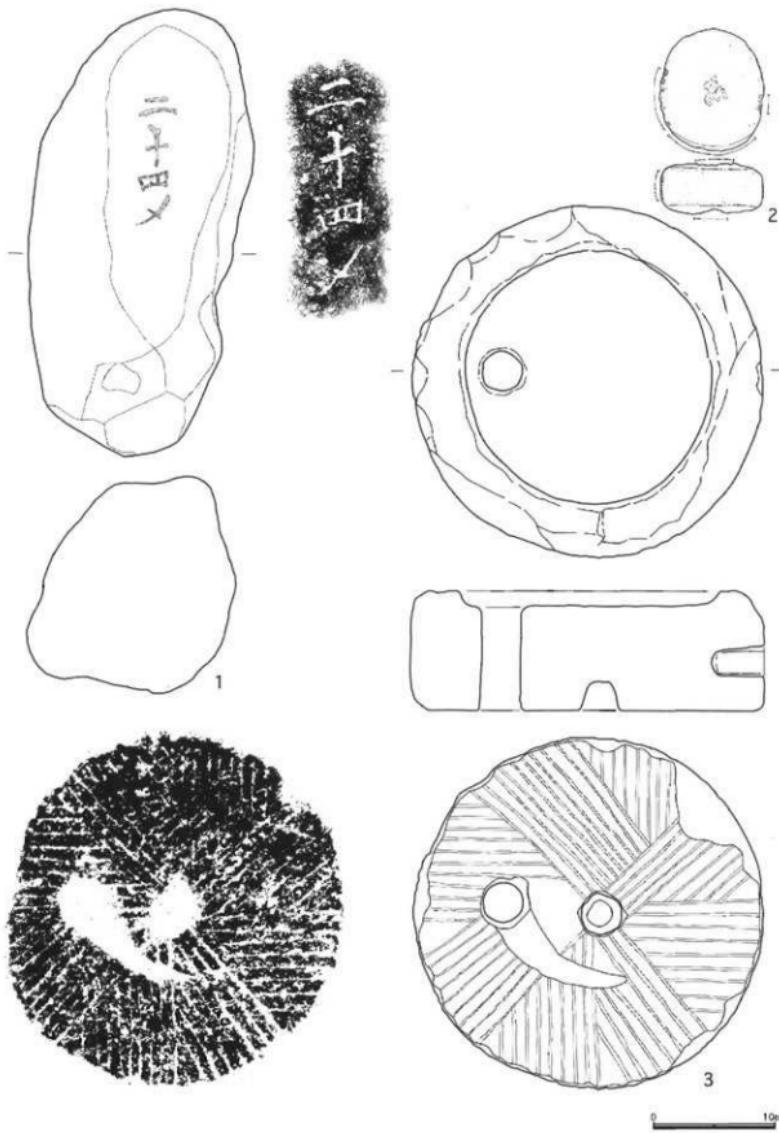
第115図 仁田館遺跡 出土遺物実測図（銭貨）



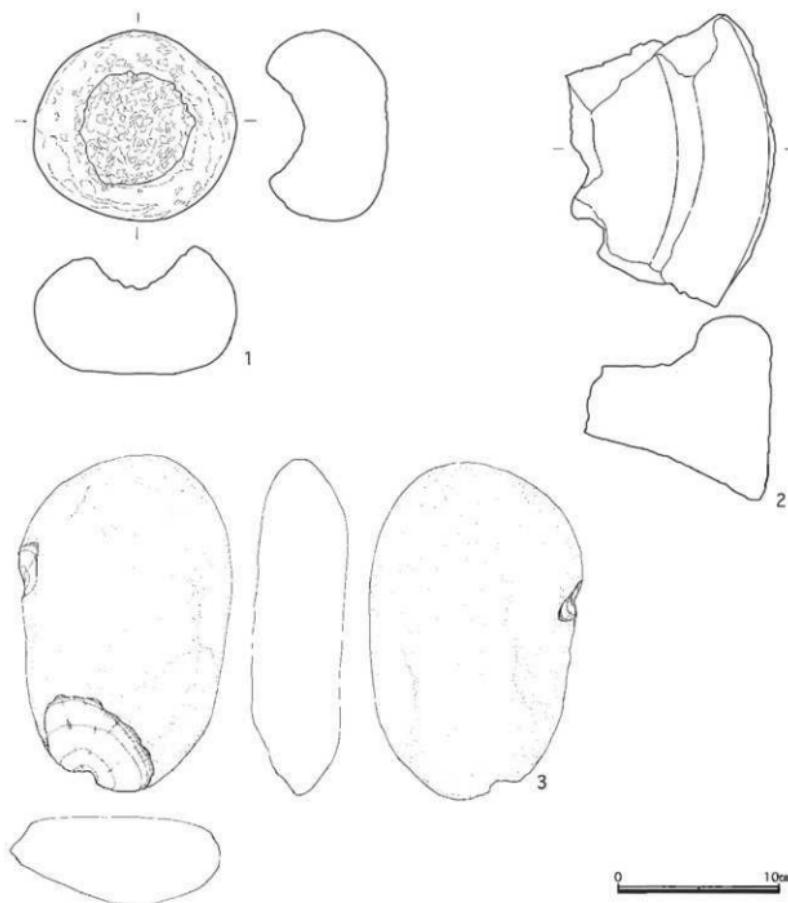
第116図 仁田館遺跡 出土遺物実測図（錢貨）



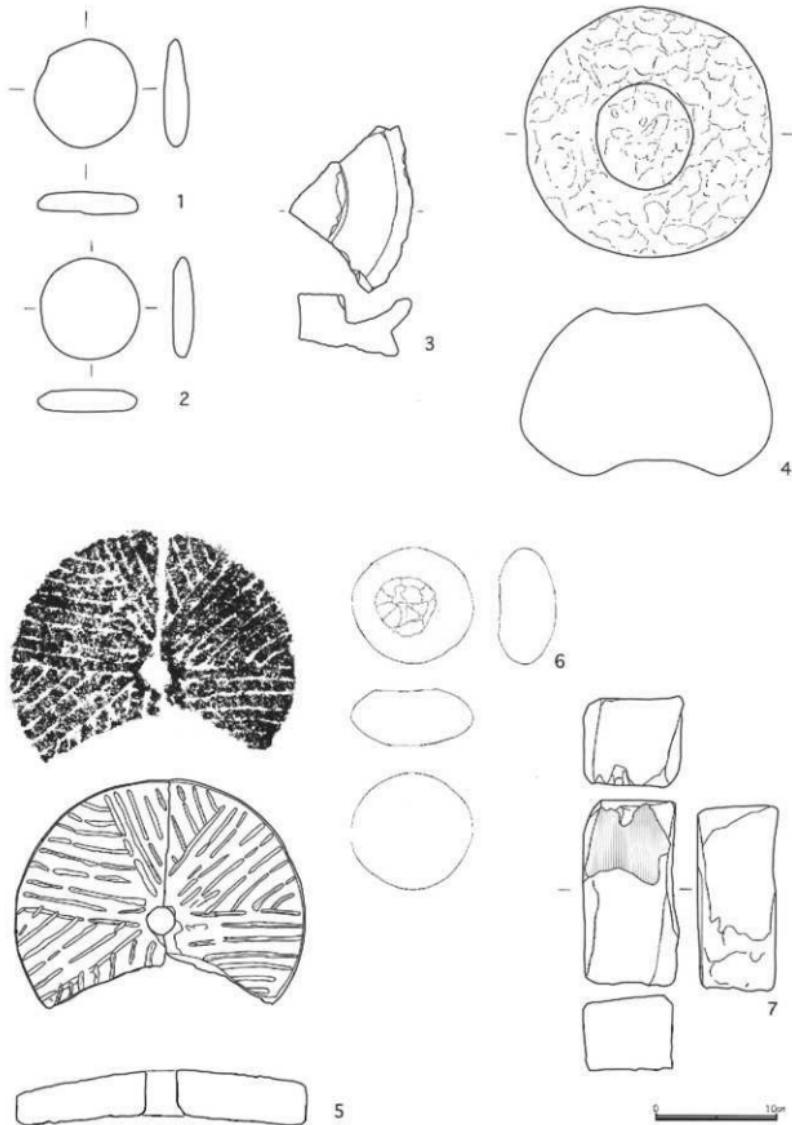
第117図 仁田館遺跡 出土遺物実測図（石器・石製品）



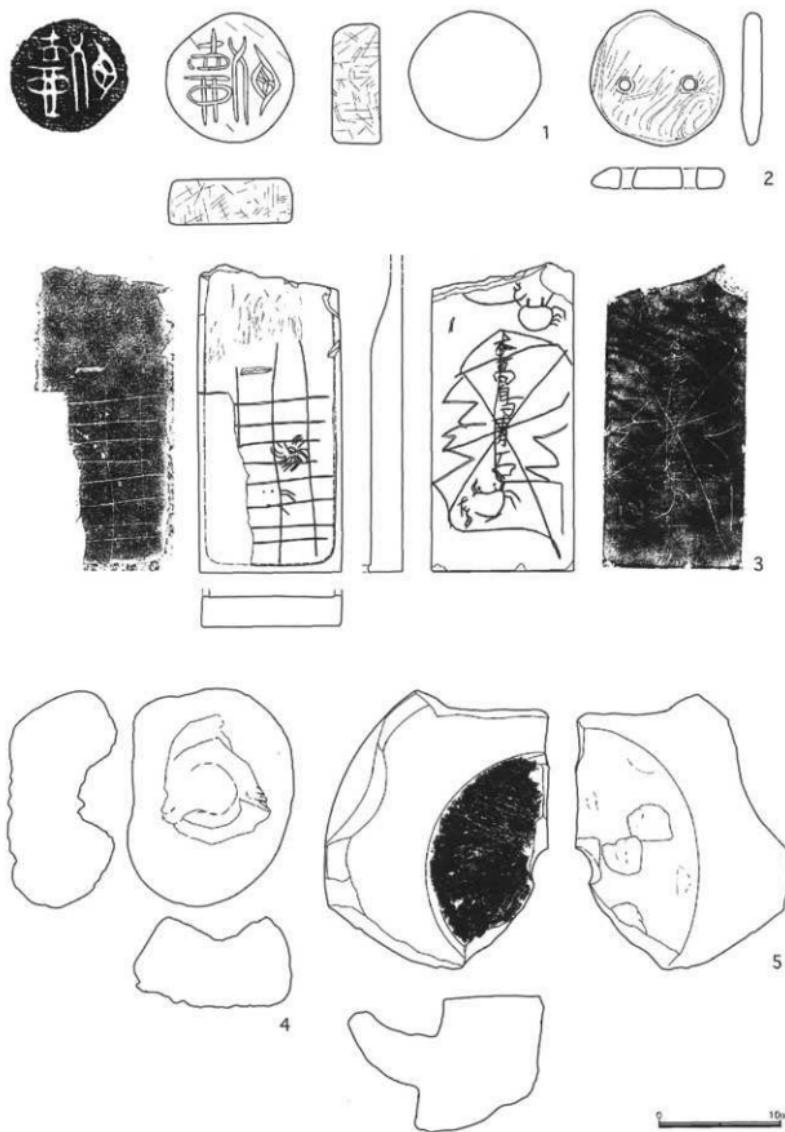
第118図 仁田館遺跡 出土遺物実測図（石器・石製品）



第119図 仁田館遺跡 出土遺物実測図（石器・石製品）



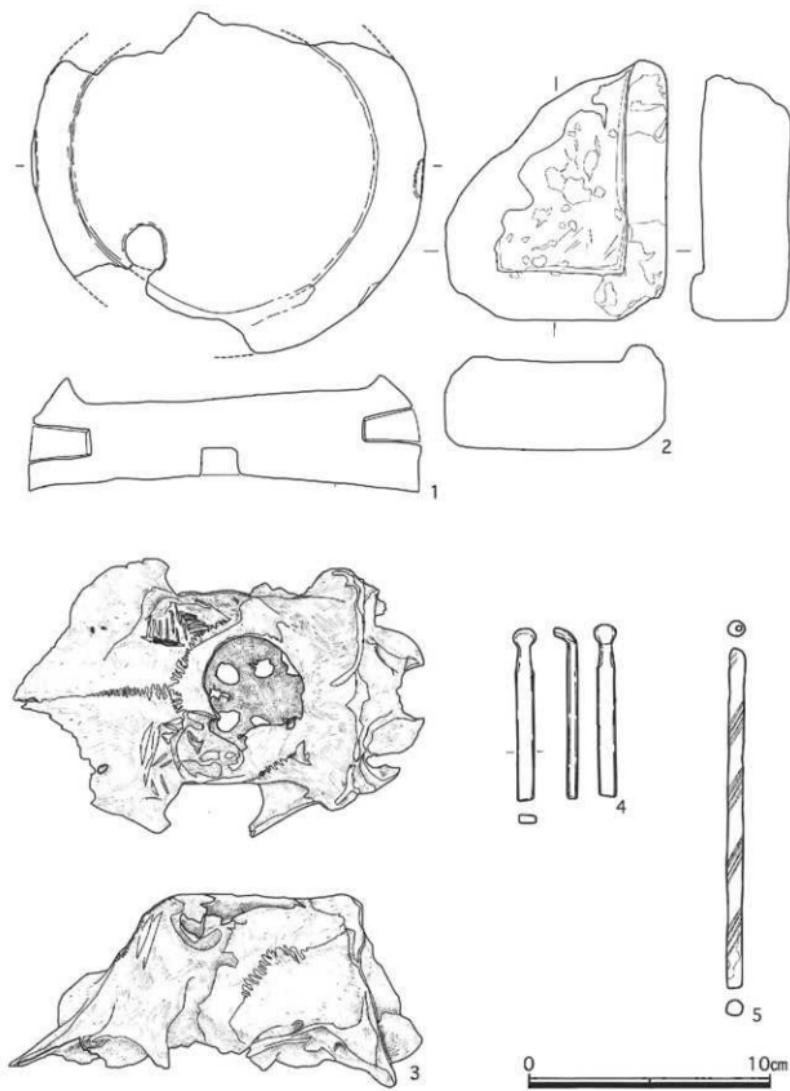
第120図 仁田館遺跡 出土遺物実測図（石器・石製品）



第121図 仁田館遺跡 出土遺物実測図（石器・石製品）



第122図 仁田館遺跡 出土遺物実測図（石器・石製品）



第123図 出土遺物実測図（石製品・骨・その他）

地番	面	種	許	細	L1	L2	最大幅	延面積	基面	E	遺構 / 確立		備考	
											面	位		
61 19 油 蔵	御	深 井 扇	(131)	(171)					A	-	SDP/北側底面/覆土	瀬戸美濃 近世		
62 1 収	束	-							A	-	SDS/覆土中	雪 清 中世		
62 2 門 村 頃	-	-	(237)	(271)					A	-	SDS/覆土中	雪 清 中世		
62 2 路 付 潟	-	-	(286)	(288)					A	-	SDS/覆土中	雪 清 中世		
62 4 カ ワ ラ ケ	1	-	(106)	(70)	24	1	A	-	SDS/覆土下	雪 清 中世				
62 5 カ ワ ラ ケ	2	-	(111)	(60)	27	1	A	-	SDS/覆土下	雪 清 中世				
62 6 カ ワ ラ ケ	3	-	(116)	(69)	30	1	A	-	SDS/覆土中	雪 清 中世				
62 7 カ ワ ラ ケ	4	-	(106)	(59)	28	1	A	-	SDS/覆土中	雪 清 中世				
62 8 乾 田	5	-	(112)	(64)	24	1	A	-	SDS/覆土中	雪 清 中世				
62 9 内 田	6	田	(107)	(81)	21	1	A	-	SDS/覆土中	雪 清 中世				
62 10 旗 脚	7	跡	(273)						A	-	SDS/SD9/覆土中	雪 清 大室3期後半		
62 11 旗 脚	8	跡			92		A	-	SDS/SD9/覆土中	雪 清 大室3期後半				
62 12 大 田	9	田	(286)	(183)	55	1	A	-	SDS/覆土下	雪 清 中世				
62 13 旗 脚	10	跡	(187)						A	-	SDS/覆土下/II	雪 清 中世		
62 14 旗 脚	11	跡							A	-	SDS/覆土 F/SD2/覆土上	雪 清 中世		
63 1 内 井 附	12	跡							A	-	SEI/覆土下	中世		
63 2 路 付 附	13	跡		233	257		A	-	SEI/覆土下	中世				
63 3 旗 脚	14	跡					A	-	SEI/覆土下	中世				
63 4 カ ワ ラ ケ	15	-	64	33	20	1	A	-	SEI/覆土下	中世				
63 5 カ ワ ラ ケ	16	-	81	67	22	1	A	-	SEI/覆土下	中世				
63 6 旗	17	跡					A	-	SEI/覆土下	中世				
63 7 天 井 附	18	跡			45		B	-	SEI/SD5	中世				
63 8 旗 附	19	跡					A	-	P-22/Q-22	瀬戸美濃 近世				
63 9 旗 附	20	跡			79		B	-	SDS/SD5	瀬戸美濃 近世				
63 10 カ ワ ラ ケ	21	跡		57	24	1	A	-	SDS/SD5	瀬戸美濃 近世				
63 11 旗 附	22	跡					A	-	SDS/SD5	瀬戸美濃 近世				
63 12 旗 附	23	跡			50	58	A	-	SDS/SD5	瀬戸美濃 近世				
63 13 旗 附	24	跡					A	-	SDS/SD5	瀬戸美濃 近世				
63 14 旗 附	25	跡					A	-	SDS/SD5	瀬戸美濃 近世				
63 15 旗 附	26	跡					A	-	SDS/SD5	瀬戸美濃 近世				
63 16 旗 附	27	跡					A	-	SDS/SD5	瀬戸美濃 近世				
63 17 旗 附	28	跡			30	43	A	-	P-23/Q-23	SDS/覆土下				
63 18 旗 附	29	跡			61	79	A	-	SDS/覆土下	瀬戸美濃 近世				
63 19 旗 附	30	跡					A	-	SDS/SD5 II F/SDX4/覆土下	瀬戸美濃 近世				
63 20 旗 附	31	跡			36	25	A	-	SDS/覆土下	瀬戸美濃 近世				
63 21 旗 附	32	跡			42	34	A	-	SDU/F	瀬戸美濃 近世				
64 1 环	33	跡			88		A	-	SDU/F	瀬戸美濃 大室3期				
64 2 环	34	跡					A	-	SDU/F	瀬戸美濃 大室3期				
64 3 石 大 旗	35	迹			68	25	A	-	SDU/F	瀬戸美濃 小朝				
64 4 石 大 旗	36	迹			63	23	A	R-25	SDU/F	瀬戸美濃 大室				
64 5 内 壁 塵 反 反 C	37	迹			(133)	65	27	A	SDU/表土～盛土	中 国 15C～16C後半				
64 6 旗 旗 旗 旗	38	迹			(106)	72	26	A	Q-26	SDU/表土～盛土	瀬戸美濃 3小郷			
64 7 旗	39	迹					A	-	SDU/覆土 F	常 陸 15C後半	10町式			
64 8 青 瓦 枝 花 一 青	40	迹			(133)		A	P-22	SDU/表土 F	常 陸 14C後半				
64 9 銀 紙	41	迹					A	N-18	SDU/表土～②	瀬戸美濃 大室4期後半				
64 10 水 溜	42	迹			19	65	25	28	A	R-24/Q-24	SDU/表土～②	瀬 戸 旗 沿岸河川		
64 11 内 花 田	43	迹			142		60	32	A	--	SDU/表土～②	古 口 旗 17C前		
64 12 旗 旗 旗	44	迹					A	Q-26	SDU/表土～Ⅲ	瀬戸美濃 大室朝				
64 13 旗 旗 旗	45	迹			100		A	-	SDU/表土～Ⅲ	常地不明 中世				
64 14 旗 旗 旗 旗	46	迹			(260)		A	R-24	SDU/表土～Ⅲ/理土	常 地 近世				
64 15 旗 旗 旗 旗	47	迹			(100)	43	25	A	SDU/表土	瀬戸美濃 19C前				
64 16 旗 旗 旗 旗	48	迹				80	31	A	SDU/表土上	常 地 近世				
64 17 旗 旗 旗 旗	49	迹			63	43	17	A	A-2	SDU/表土七	常 地 近世			
64 18 旗 旗 旗 旗	50	迹					A	-	SDU/表土上	常 地 中世				
64 19 旗 旗 旗 旗	51	迹					A	-	SDU/表土上	常 地 中世				
64 20 旗 旗 旗 旗	52	迹					A	-	SDU/表土上	常 地 中世				
64 21 旗 旗 旗 旗	53	迹			(149)		A	-	SDU/表土～中	常 地 中世				
64 22 カ ワ ラ ケ	54	迹			(101)	58	33	A	SDU/表土～	不 明 中世				
64 23 カ ワ ラ ケ	55	迹			(98)	57	29	A	N-20	SDU/表土上	不 明 中世			
64 24 カ ワ ラ ケ	56	迹			(114)	59	33	A	-	SDU/表土	不 明 中世			
64 25 カ ワ ラ ケ	57	迹			(105)	64	31	A	Q-23	SDU/表土下	不 明 中世			
64 26 カ ワ ラ ケ	58	迹			123	62	25	A	SDU/表土	不 明 中世				
65 1 庭	59	迹			(161)		78		A	O-26	SDU/表土/II	水 井 1大室～近世		
65 2 安 付 便 通	60	迹					A	-	SDU/表土上	瀬戸美濃 17C～19C				
65 3 廣 通	61	迹			324		130	22	A	-	SDU/表土上	瀬戸美濃 19C 2/4		
65 4 開 通	62	迹			36	145	112	206	A	-	SDU/表土上	瀬戸美濃 19C		
65 5 黄 色 便 通 木 久 山	63	迹			405		136	166	A	-	SDU/表土上	瀬戸美濃 19C 2/4		
65 6 油 附	64	迹			242		98	42	A	-	SDU/表土上/E	瀬戸美濃 19C		
65 7 大 通	65	迹					A	-	SDU/表土上/II	肥 肥 19C				
65 8 通 の 京 草	66	迹			68	43	33	A	SDU/表土上	肥 肥 19C				

図版番号	基種	花被子	開口性	最高	花被子	K	グリッド	遺傳	原産地	備考
66 4 中 月 椿	月 椿	141	78	36	A	Q-22	SD1/葉上/II	瀬戸美濃	18C 中~	蛇目高台
66 5 桂 茜	桂		(41)		A		SD2/葉上	瀬戸美濃	18C	
66 6 油 菖	菖		(39)	55	A		SD2/葉上	瀬戸美濃	18C	
66 7 韶 色 花	韶	(80)	(98)	11	A		SD2/葉上	瀬戸美濃	近世	
66 8 合 子 茜	合	(98)	(98)	18	A		SD2/葉上	瀬戸美濃	近世	
66 9 灯 明 旦	旦	(98)	(48)	41	A		SD2/葉上	瀬戸美濃	近世	
66 10 片 口 小 桂	桂	100	54	27	A		SD2-SP1087/葉上	在 地 中野		
66 11 カ ウ タ ケ		(109)	(157)		A		SD2/葉上	瀬戸美濃	18C	
66 12 芭 蕙	芭						SD2/葉上	瀬戸美濃	18C	
66 13 十 月 菖		(133)	(80)		A	P-22/Q-22/R-22	SD2/葉下/S3葉上/I-S3葉下/II	在 地 ?	18C	
66 14 里		(133)	(92)	41	A		SD2/葉下	肥 前	18C	佐賀円筒舟
67 1 旗 茜	旗	C2880			A		SD2/葉下	瀬戸美濃	大宝 3 期始	
67 2 脚 沢 旗	旗				A		SD2/葉下	肥 前	18C 後~19C 前	
67 3 作 小 上	上	90	47	18	A		SD2/葉上	瀬戸以外	近世	高野
67 4 吉 鞍 火 烧	吉	(43)	(43)	A			SD2/葉上	肥 前	近世	
67 5 灯 明 重 皮	重	97	40	18	A		SD2/葉下	瀬戸美濃	近世	
67 6 手 先 (流風?)		181	124	90	A		SD2/葉下	瀬戸美濃	18C~19C	
67 7 水 来 - 仁 人 男			127	73	A		SD2/葉上	瀬 戸	古瀬戸銀鏡IV新	
67 8 旗	旗	(283)			A		SD2/葉下	在 地	中世	
67 9 旗 袋 内 外 旗	旗	96	53	20	A		SD2/葉上	在 地	大宝 4 期前	
67 10 丸 旗	旗	48			A		SD2/葉上	在 地	大宝 4 期	
67 11 カ ワ タ ケ		(109)	63	23	A		SD2/葉上	中 地	14C 後	
67 12 吉 鞍 反 袋	吉	(54)	(54)	A			SD2/葉上	在 地	光明日輪用	
67 13 お 野 九 旗	旗	63			A	N-18	SD2/葉下/II	瀬戸美濃	大宝 4 期	
67 14 丸 一 旗	旗	120	59	23	A		SD2/葉上			
67 15 大 旗	旗	46			B		SD2/葉上	瀬戸美濃	18C	
67 16 丹 磨 旗	旗	1	B				SD2/葉上	瀬戸以外	17C 中	
68 1 高 环					A	--	SD2/葉上	古墳中期		
68 2 月 日 旗		43			A		SD2/葉上	瀬 戸	古瀬戸銀鏡I	
68 3 旗 反 旗		(80)	49	25	A		SD2/葉上	瀬 戸	大宝 3 期後半	
68 4 内 丸 旗	旗	113	66	20	A		SD2/葉上	新 山	大宝 3 期後半	
68 5 天 日 旗		(101)			A		SD2/葉上	瀬 戸	大宝 3 期	
68 6 丸 旗	旗	(80)	(14)	15	A		SD2/葉上	在 地	大宝 4 期前半	
68 7 旗	旗	(206)			A		SD2/葉上	在 地	大宝 4 期	
68 8 内 丸 旗	旗	(107)	(50)	17	A		SD2/葉上	在 地	大宝 4 期前半	
68 9 内 丸 旗	旗	103	39	22	A		SD2/葉上	在 地	大宝 4 期前半	
68 10 内 丸 旗	旗	99	33	23	A		SD2/葉上	在 地	大宝 4 期前半	
68 12 志 野 丸 旗	旗	118	87	21	A		SD2/葉上	I 濱美濃	大宝 4 期後半	
68 13 志 野 丸 旗	旗	104	66	22	A		SD2/葉上	瀬 戸	大宝 4 期後半	
68 14 小 木 旗	旗	96	36	5	A		SD2/葉上	肥 前	18C 後	
68 15 小 丸 旗	旗	83	32	45	A		SD2/葉上	肥 前	19C 後	
68 16 木 旗	旗	38			A		SD2/葉上	在 地	近世	
68 17 小 丸 旗 (二重側手舟形)	旗	59			A		SD2/葉上	肥 前	近世	
68 18 菖 花	花	102	35	28	A		SD2/葉上	在 地	18C	
68 19 小 旗	旗	71	(29)	45	A		SD2/葉上	在 地	18C 後	
68 20 丸 旗	旗	(106)	(98)	21	A		SD2/葉上	在 地	18C	
68 22 打 明 旗	旗	98	45	19	A		SD2/葉上	瀬 戸美濃	19C 前	
68 23 旗 沢 旗	旗	22	29	30	A		SD2/葉上	肥 前	17C 後~18C	
68 23 小 旗	旗	(124)	(52)	28	A		SD2/葉上	肥 前	近世	
68 24 小 旗 東 旗	旗	96	36	54	A		SD2/葉上	肥 前	18C 後	
68 25 旗 反 旗	旗	(120)			A		SD2/葉上	在 地	16C 後~17C 初	
68 26 カ ウ タ ケ		(117)	85	28	A		SD2/葉上	在 地	16C 後~17C 初	
68 27 カ ウ タ ケ		(121)	(95)	28	A		SD2/葉上	在 地	18C~19C ?	
68 28 カ ウ タ ケ		(111)	(63)	27	A		SD2/葉上	在 地	16C 後~17C 初	
68 29 カ ウ タ ケ		108	64	30	A		SD2/葉上	在 地	18C~19C ?	
68 30 カ ウ タ ケ		109	62	26	A		SD2/葉上	在 地	18C~19C ?	
68 31 カ ウ タ ケ		107	63	27	A		SD2/葉上	在 地	近世	
68 32 カ ウ タ ケ		117	67	27	A		SD2/葉上	在 地	18C~19C	
68 33 カ ウ タ ケ		(115)	(65)	30	A		SD2/葉上	在 地	18C~19C	
69 1 丸 旗	旗	(86)			A		SD2/葉上	肥 前	18C 後	
69 2 小 丸 旗	旗	(86)			A		SD2/葉上	肥 前	18C~19C	
69 3 旗 反 旗	旗	(85)	39	39	A		SD2/葉上	肥 前	18C	
69 4 丸 旗	旗		41		A		SD2/葉上	在 地	18C~19C 前	
69 5 旗 反 旗	旗	(90)			A		SD2/葉上		19C	
69 6 旗 反 旗	旗	(92)	(37)	22	A		SD2/葉上	瀬 戸美濃	19C 前後~中世	
69 7 舞 神 国 旗	旗	21	(55)		A	R-26	SD2/葉上/II	記	前 近世	
69 8 第 五 旗	旗	69	33	50	A		SD2/葉上	肥 前	18C	象
69 9 旗 反 旗	旗	(105)	47	62	A	R-21/Q-21	SD2/葉下/II	肥 前	18C 後~19C	

番号	名	種	計	細	口	往	最高	最	内	タリット	遺構 / 部位	備考
69	10 通 反 開	屋	106		44	58	A	—	SDB-SHI SP30 壁	肥 前 10C 前		
69	11 通 連 何 草	花	41	187	88	301	A	—	SDB-SHI SP30 壁	肥 前 近世		
69	12 中 通 風 罐	(04)		(90)	92	A	—	SDB 壁土	肥 前 19C	近日西型奈良		
69	13 中 通 菊 花			44	5	A	—	SDB 壁土	肥 前			
69	14 通 連 1 何	花	32		58	28	A	—	SDB 壁土	肥 前 10C 前		
69	15 通 利		34			—	A	—	SDB 壁土	肥 前 10C 前		
69	16 通 反 開 京	花	(98)		43	18	A	—	SDB 壁土	肥 前 10C 後～19C 末		
69	17 灯 明 通 旗	花	90		43	18	A	—	SDB 壁土	肥 前 10C 後～19C 末		
69	18 灯 明 通 旗	花	(03)	52	22	A	—	SDB 壁土	肥 前 10C 後～19C 末			
69	19 灯 明 通 旗	花	(01)	43	22	A	—	SDB 壁土	肥 前 10C 後～19C 末			
69	20 ト 通 1 明 通 旗	花		42	21	A	—	SDB 壁土	肥 前 10C 後～19C 末			
69	21 漢 評 鮎 元 1 1			42	21	A	—	SDB 壁土	肥 前 10C 後～19C 末			
70	1 内 赤 土		(03)	(64)	22	A	—	SK12/壁土	志 戸 沢 大室 4期前半			
70	2 カ フ ラ タ		(95)	54	32	A	—	SK12/壁土	高野			
70	3 小 昭 烟 菊 草	花	92	38	17	A	—	SK12-SHI 瓦織縫/壁土	肥 前 JBC 後～			
70	4 燭 の ま 1		90(8)		A	—	SK12/壁土	高野				
70	5 燭 の ま 2		90(2)		A	—	SK12/壁土	近世				
70	6 燭 斎 美 色 染 ピ リ 井		(86)	(105)	61	27	A	Q-23	SK10/壁土Ⅱ	肥 前 '3C 後～		
70	7 小 通 1 滅		(86)	(105)	61	27	A	—	SK10/壁土Ⅱ	肥 前 近世		
70	8 丸 通 反 朝 旗 子	花	(51)		A	—	SK10/壁土	肥 前				
70	9 通 反 朝 旗 子	花	(13)		A	—	SK10/壁土	肥 前 JBC				
70	10 中 通 旗 子	花	(14)	(81)	A	—	SK10/壁土	肥 前 近世				
70	11 通 1 向 器) 旗 子	花	(127)	47	36	A	—	SK10/壁土	肥 前 近世	近日付		
70	12 通 明 台		(90)		A	—	SK10/壁土	志 戸 沢 高野				
70	13 灯 明 通 旗	花	(90)	42	19	A	—	SK10/壁土	肥 前 10C 後～			
70	14 通 明 通 旗	花	91	41	16	A	—	SK10/壁土	肥 前 10C 後～			
70	15 灯 男 部 旗	花	97	27	29	A	—	SK10/壁土	肥 前 10C 後～			
70	16 丸 通 旗 旗	花	101	(99)	22	A	—	SK10/壁土	肥 前 10C 後～			
70	17 片 口 通 旗 旗	花	125	52	54	A	—	SK10/壁土	肥 前 10C 後～			
70	18 通 旗 小 旗		(95)	40	28	B	—	SK10/壁土	肥 前 10C 後～			
70	19 通 1 お 旗	花	75	27	60	B	Q-20	SDS/瓦織縫/Ⅰ 且 /瓦織縫	肥 前 10C			
70	20 炙 付 旗		(82)		A	—	SD18/壁土	中 国 不削				
70	21 通 旗		(35)		A	—	SD9/壁土	中 国 小削				
70	22 青 福 大 刀 旗	青	42		A	—	SD9/壁土	肥 前 近世				
70	23 通 1 お 文 字	字	76	49	66	A	—	SD9/壁土	肥 前 19C			
71	1 通 付 旗 反 旗 2 旗	花	(93)	(51)	22	B	—	SK10/壁土	中 国 15C 後			
71	2 通 旗		69		B	—	SK12/壁土	美 清 丹波 CTC 4/4				
71	3 通 旗 1 1		(60)	24	28	A	—	SK10/壁土	肥 前 近世			
71	4 中 通 旗 漢 漢 き 云	(144)	(86)	31	B	—	SK10/壁土	肥 前 近世				
71	5 1 通 旗 反 旗 2 2 旗		(70)	A	—	SK10/壁土	中 国 不削					
71	6 1 ニ チ ュ ア 旗 旗	旗	35	33	A	—	SK7-SD4/壁土	近 東 19C				
71	7 丸 通 旗 定 宜	(85)	(80)	57	A	—	SK7/壁土	肥 前 近世				
71	8 小 丸 通 旗	旗	61	34	49	A	—	SK9/壁土	近 東 18C 後			
71	9 丸 通 旗	旗	28	31	49	A	Q-22	SK10/壁土Ⅱ	肥 前 近世			
71	10 通 1 白 旗 7 旗	旗	96	24	43	A	—	SK8/壁土	肥 前 ? 18C	現存標子		
71	11 丸 通 1 旗 1 旗	旗	84	30	4	A	—	SK8/壁土	肥 前 ? 18C			
71	12 通 作 旗 案 の 店 作 旗 斧	旗	89	47	23	A	—	SK8/壁土	肥 前 19C	'成化剣'		
71	13 通 旗 旗 旗 旗 の 子 旗	旗	95	36	27	A	—	SK8/壁土	肥 前 19C			
71	14 通 旗 旗 旗 旗	旗	75	104	A	—	SK8/壁土	肥 前 近世				
71	15 吉 他 住 旗 青 旗	旗	—	A	—	SK8/壁土	中 国 14C 末					
71	16 小 旗 う ら い ふ 旗	旗	71	36	48	A	—	SK8/壁土	中 国 近世			
71	17 通 1 明 里 旗	旗	94	29	49	A	—	SK8/壁土	近日出張 19C 旗			
71	18 神 満 利 里 旗	草	15	43	33	B	—	SK8/壁土	肥 前 19C			
71	19 神 沢 通 旗 旗	旗	(07)	82	48	192	A	—	SK8/壁土	肥 前 18C		
72	1 くらわんか 旗	物	(90)	40	56	A	—	SK4/Ⅱ	肥 前 18C 後			
72	2 くらわんか 旗	物		33	A	—	SK4/Ⅱ	肥 前 近世				
72	3 くらわんか 旗	物	(100)	49	52	A	—	SK4/Ⅱ	肥 前 近世			
72	4 小 丸 紙	旗	87	36	56	A	Q-24	SK4/Ⅲ/I	肥 前 近世			
72	5 小 丸 紙 1 旗	旗	(92)	35	—	A	—	SK4/Ⅲ/I	肥 前 18C 中?			
72	6 小 丸 紙 植 物 (薬 介)			35	—	A	—	SK4/Ⅲ/I	肥 前 18C 後			
72	7 丸 通 1 水	白	88	22	35	A	P-23	SK4/Ⅲ/I	肥 前 18C 後			
72	8 丸 通 1 旗 1 旗	旗	(82)	A	—	SK4/Ⅲ/I	肥 前 18C 後					
72	9 小 丸 通 旗	旗	—	34	A	—	SK4/Ⅲ/I	肥 前 18C 後				
72	10 大 丸 通 1 水	白	89	—	33	58	A	—	SK4/Ⅲ/I	肥 前 18C 後		
72	11 小 丸 通 旗	旗	(88)	A	—	SK4/Ⅲ/I	肥 前 18C 末					
72	12 小 丸 通 旗	旗	(93)	54	A	—	SK4/Ⅲ/I	肥 前 18C 後				
72	13 丸 通 旗	旗	(82)	A	—	SK4/Ⅲ/I	肥 前 18C 後					
72	14 丸 通 旗 窓 月	月	(106)	65	A	—	SK4/Ⅲ/I	肥 前 19C 朝唐～中明				
72	15 小 広 月 止	月	(106)	35	A	—	SK4/Ⅲ/I	肥 前 18C 後				
72	16 小 広 旗		(106)	40	54	A	—	SK4/Ⅲ/I	肥 前 18C 後			

固有	通称	詳	細	II	法	義大往	底往	圓尚	区	グリッド	遺構 / 特徴	備考	
72 17 犬	飼	じ	家	(10)	33	54	A	—	SX4/II	肥 費 近世			
72 18 くらわんか園	城	城	市	(45)	(66)	80	A	—	SX4/II	肥 費 近世	18C後		
72 19 喜	施	施	施	(110)			A	R-24	SX4/II/II	紅 色 近世	構造跡		
72 20 瞳	—	ペニシルドローネン	—	(125)	(68)	38	A	—	SX4/II	肥 費 19C前～中			
72 21 雪	新	東	文	手	38		A	—	SX4/II	肥 費 18C後			
72 22 魚	茶	園	青	植	(72)	(39)	58	A	—	SX4/II	肥 費 18C後～19C前		
72 23 湿	石	石	風	景	(72)	33	54	A	—	SX4/II	肥 費 19C		
72 24 そ	は	宿	口	草	(54)		A	—	SX4/II	肥 費 18C中			
73 1 日	日	露	香	花	(132)	88	35	A	—	SX4/II	肥 費 19C	松日間所跡	
73 2 中	日	花	香	草	(69)		A	R-25	SX4/II/II	肥 費 18C前	二重結構		
73 3 国	牛	必	松		106		A	—	SX4/II	肥 費 19C			
73 4 くらわんか園	—	—	—	(132)	(77)	36	A	P-22/Q-22	SX4/II/II	肥 費 18C中～			
73 5 青	研	青	研	通	(62)	(80)	31	A	—	SX4/II	肥 費 近世		
73 6 東	東	園	施	施		40		A	—	SX4/II	肥 費 18C後	施書き有り	
73 7 灯	羽	園	火	施	91	41	22	A	—	SX4/II	肥 費 18C後		
73 8 灯	樹	田	施	施	77	33	13	A	—	SX4/II	肥 費 19C前		
73 9 口	口	跡	施	(172)	90	81	A	Q-24	SX4/II/II/II	肥 費 18C前	施跡		
73 10 灯	明	樹	火	施	101	43	76	A	—	SX4/II	肥 費 18C後		
73 11 灯	明	樹	火	施	202	42	23	A	—	SX4/II	肥 費 18C前		
73 12 大	施	施	施	施		63		A	—	SX4/II	肥 費 18C後		
73 13 片	口	跡	施	施	(82)		A	—	SX4/II	肥 費 18C後			
73 14 中	田	花	施	(75)		A	—	SX4/II	肥 費 近世				
73 15 伸	茶	研	施	(97)	38	48	A	—	SX4/II	肥 費 18C後～19C前			
73 16 小	伸	研	灰	施	82	43	46	A	—	SX4/II/II	肥 費 18C後		
73 17 小	伸	研	灰	施	(73)	(33)	43	A	—	SX4/II	肥 費 18C後		
74 1 水	満	し	—	(175)	(126)		A	Q-23/Q-21/P-22	SX4/II/II/F	赤 ピーク 大正4年～17C前			
74 2 伸	太	—	—	(129)	(58)	95	A	—	SX4/II	肥 費 近世			
74 3 伸	研	執	施	(113)		A	—	SX4/II	肥 費 近世	植木鉢			
74 4 推	斜	—	—			A	P-23	SX4/II/B	肥 費 18C				
74 5 推	斜	—	—		137	A	P-22/R-25/R-24	SX4/II/II/II下平置下	肥 費 18C 4/4				
74 6 推	斜	—	—		(168)	A	Q-24	SX4/II/II/表土	肥 費 18C～1/4				
74 7 橋	斜	—	—	347	153	146	A	L-12	SX4/II/II	肥 費 19C前			
74 8 実	—	(395)				A	—	SX4/II/F	金 沈 19C				
75 1 溶	溶	—	—			A	—	SR1/V	漢文早期				
75 2 溶	溶	—	—			A	—	SR1/V	漢文早期				
75 3 溶	溶	—	—			A	—	SR1/V	漢文早期				
75 4 溶	溶	—	—			A	—	SR1/V	漢文早期				
75 5 溶	溶	—	—			A	—	SR1/V	漢文中期				
75 6 亦	生	土	園	—		A	—	SK1/VI	亦生				
75 7 沢	—	—	—			A	—	SR1/V	亦生中期				
75 8 沢	—	—	—			A	—	SK1/VI	亦生中期				
75 9 甕	甕	—	—			A	—	SR1/VI	亦生中期				
75 10 甕	甕	—	—	(195)		A	—	SR1/VI	亦生中期		丸窓付		
75 11 甕	甕	—	—			A	—	SR1/VI	亦生後期				
75 12 甕	甕	—	—			A	—	SR1/VI	亦生後期				
75 13 甕	甕	—	—	111	71	A	—	SR1/VI	占塗				
75 14 甕	甕	木	施	施		71	A	—	SR1/VI	—			
75 15 大	甕	甕	施	(350)		A	—	SK1/VI	在地 古墳前期				
75 16 合	付	甕	—			A	—	SR1/VI	在地 亦生後期				
75 17 合	付	甕	—		102	A	—	SR1/VI	在地 亦生後期				
76 1 破	—	—	—	124	58	84	A	—	SR1/VI	古墳後期			
76 2 破	—	—	—	151	50	A	—	SR1/VI	古墳後期				
76 3 破	—	—	—	121	60	A	—	SR1/VI	8C後				
76 4 破	—	—	—	(54)	(95)	36	A	—	SR1/VI	9C中～後			
76 5 破	—	—	—	123	65	42	A	—	SR1/VI	10C			
76 6 破	—	—	—	124	62	42	A	—	SR1/VI	9C中～後	愚書		
76 7 破	—	—	—	111	60	33	A	—	SR1/VI	10C～11C 愚書			
76 8 破	破	壙	壙	壙	163	73	49	A	—	SR1/VI	9C中～後		
76 9 破	—	—	—	132	71	48	A	—	SR1/VI	9C中～後			
76 10 破	—	—	—			A	—	SR1/VI	占塗後期				
76 11 破	—	—	—	(153)		A	—	SR1/VI	9C後				
76 12 陶	器	壙	壙		(100)	37	A	—	SR1/VI	8C後			
76 13 破	—	—	—		52	A	—	SR1/VI	HC				
76 14 破	—	—	—			A	—	SR1/VI	古代				
76 15 破	壙	壙	壙		152	50	A	—	SR1/VI	占塗	つまみ		
76 16 破	—	—	—	(106)	1	A	—	SR1/VI	古墳後期				
76 17 破	—	—	—	133	55	32	A	—	SR1/VI	古代			
76 18 破	—	—	—		96	A	—	SR1/VI	死前				
76 19 变	—	—	—			A	—	SR1/VI	占塗				
76 20 破	—	—	—	217	100	89	A	—	SR1/VI	10C～11C			

周別番号	器種	記述	口径	底径	高さ	基部	区	タリッド	説明 / 同位	備考		
76 21 瓶	素	(280)	(257)	A	—	SRI/VI	近世			古代		
77 1 瓶	灰	破	(62)	A	—	SRI/VI	—			古代		
77 2 瓶	灰	破	(62)	A	—	SRI/VI	—			古代		
77 3 瓶	灰	破	(62)	A	—	SRI/VI	—			古代		
77 4 瓶	灰	破	(66)	A	—	SRI/VI	—			古代		
77 5 片	口	灰	—	A	—	SRI/VI	—	東浦江?	12C	—		
77 6 瓶	灰	破	(162)	A	—	SRI/VI	—			古代		
77 7 瓶	灰	破	(60)	A	—	SRI/VI	—			古代		
77 8 瓶	灰	破	—	A	—	SRI/VI	—			古代		
77 9 瓶	灰	破	—	A	—	SRI/VI	—			古代		
77 10 瓶	灰	破	(78)	A	—	SRI/VI	—			古代		
77 11 田	茶	器	(53)	A	—	SRI/面/襷土	—			中世		
77 12 山	茶	器	(67)	A	—	SRI/VI	—			中世		
77 13 伝	輪	器	(72)	A	—	SRI/VI	—			古代		
77 14 花	輪	器	—	A	—	SRI/面/襷土	—			古代		
77 15 瓶	灰	破	(93)	A	—	SRI/VI	—			古代		
77 16 瓶	灰	破	—	A	—	SRI/面/襷土	—			古代		
77 17 沢	付	硝	(218)	A	—	SRI/VI	—			中世		
77 18 カワラケ	—	(92)	44	25	A	—	SRI/VI	在地	近世	—		
77 19 平	瓶	—	—	47	A	—	SRI/VI	瀬戸	古戦国復興期	—		
77 20 鋼	正	灰	(135)	(54)	30	A	—	SRI/面/襷土	瀬戸美濃	大正1期		
77 21 古	壺	破	B	1	37	A	—	SRI/VI	明治初期	14C後		
77 22 平	瓶	—	—	—	A	—	SRI/VI	瀬戸	古戦国復興期	—		
77 23 線	盤	小皿	灰	—	62	A	—	北側面/襷土	瀬戸	古戦国復興期		
77 24 カワラケ	—	—	—	66	A	—	SRI/VI	在地	近世	—		
77 25 カワラケ	—	—	—	34	33	A	—	SRI/VI	在地	中世		
77 26 丸	質	土	器	(103)	(75)	35	A	—	SRI/面/襷土	東	港	
77 27	甕	—	(218)	—	—	—	SRI/VI	肥前	近世	—		
77 28 仏	前	目	瓦	66	36	54	A	—	SRI/VI	肥前		
77 29 丸	壺	蓋	瓦	61	35	31	A	Q-24	SRI/II F	瀬戸美濃	近世	
78 1 小	壺	瓦	瓦	58	28	33	B	P-ZZ/K-25	SX2/腹/下	瀬戸美濃	近世	
78 2 小	壺	瓦	瓦	36	28	29	B	—	SX2/腹/上	瀬戸美濃	近世	
78 3 水	器	—	(34)	44	B	Q-22	SX2/腰+下	更	碗	近世		
78 4 膜	鍋	器	—	35	42	51	B	SX2/腰+上	瀬戸美濃	近世		
78 5 広	正	束	器	—	109	57	62	B	P-22	SX2/腰+下	肥前	18C後～19C
78 6 直	直	器	—	70	92	—	B	SX2/腰+上	肥前	19C		
78 7 天	目	茶	器	(110)	—	—	A	—	試掘IIレンジ	瀬戸美濃	近世	
78 8 放	内	先	瓦	(360)	59	20	A	R-24	試掘IIトレンジ/L	志戸	大正4昭和	
78 9 在	野	丸	瓦	(117)	68	25	A	—	試掘IIトレンジ	瀬戸美濃	17C	
78 10 白	罐	丸	瓦	(251)	—	—	A	—	試掘IIトレンジ	中	伊24C後	
78 11 片	瓦	瓦	瓦	(160)	109	—	A	Q-20	試掘IIトレンジ/II	志	近世	
78 12 壁	反	瓦	瓦	(91)	45	41	A	—	試掘IIトレンジ表土埋乱	瀬戸美濃	18C後～	
78 13 丸	壺	瓦	瓦	(113)	37	66	A	—	試掘IIトレンジチリ	志戸	大正期	
78 14 壁	反	瓦	瓦	(85)	39	45	A	P-2	試掘IIトレンジ4/II	肥前	近世	
78 15 沢	洋	利	器	(75)	—	—	A	P-20	試掘IIトレンジ4/L	肥前	近世	
78 16 邪酒	利	利	器	21	—	—	A	P-22	試掘IIトレンジ4/T	肥前	近世	
78 17 売	陶	器	(108)	42	64	—	A	P-22	試掘IIトレンジ4/II	肥前	近世	
78 18 カワラケ	—	—	—	111	57	23	A	P-20	試掘IIトレンジチリ	在地	中世	
78 19 カワラケ	—	—	—	111	62	27	A	M-18	試掘IIトレンジチリ/II	在地	中世	
79 1 丸	壺	步	器	(56)	—	—	A	—	—	志戸	大正4期	
79 2 丸	壺	丸	瓦	(99)	56	21	A	理土	—	志戸	民人4死	
79 3 丸	壺	破	器	49	—	—	A	—	埋瓦	志戸	大正4期	
79 4 忠	井	鉢	器	(24)	(72)	23	A	—	埋瓦	瀬戸美濃	—	
79 5 忠	井	丸	瓦	(123)	(75)	23	A	P-22	埋瓦	瀬戸美濃	17C	
79 6 仙	井	瓦	(25)	—	67	29	A	—	II	瀬戸美濃	近世	
79 7 仙	井	瓦	瓦	—	78	—	A	—	I	瀬戸美濃	近世	
79 8 相	馬	急	瓦	(70)	—	—	A	—	II	相馬	近世～近代	
79 9 相	馬	急	瓦	(59)	—	—	A	—	II	相馬	近世～近代	
79 10 灯	胡	瓦	瓦	—	88	35	17	A	—	埋瓦	瀬戸美濃	近世
79 11 台	付	東	器	—	90	—	A-2	表土+埴上	—	—	—	
79 12 せん	七	瓦	(106)	—	37	51	A	P-21	表土	瀬戸美濃	近世	
79 13 丸	倒	深	井	(124)	44	61	A	Q-22	表土埋瓦	瀬戸美濃	近世	
79 14 小	成	成	瓦(6.1)	—	31	38	A	P-22	II	瀬戸美濃	近世	
79 15 丸	倒	深	井	(98)	(93)	56	A	Q-22	表土埋瓦	瀬戸美濃	近世	
79 16 カワラケ	—	—	—	108	71	29	A	O-8	トレンジ土建	在地	中世	
79 17 丸	四	手	—	—	A-2	—	埋瓦	—	—	近世	—	
79 18 丸	手	手	—	—	A	—	埋瓦	—	—	近世	—	
79 19 大	半	手	(284)	—	A	—	G	—	瀬戸美濃	近世	—	
79 20 丸	手	手	(268)	(114)	53	A	—	II	肥前	近世	—	
80 1 小	圓	船	(66)	41	30	A	—	—	肥前	18C中	—	

番号	部	種	詳	種	L1	種	最大径	直径	割合	区	グリッド	道構／	場位	地名
80 2 小 銀	葉	空	(62)		A							II	近	伊BC中
80 3 田 花	石	空	花	(35)	A	—						II	近	伊BC
80 4 沿	香	南	浜風	草	(74)	(37)	71	A	P-22		II	近	伊BC	
80 5 丸 圓	圓	竹				43		A	—	表探		近	伊BC前	
80 6 京 風	圓	帆	野	船	(69)						A-17	奥丸	源川美濃 17C木	
80 7 丸 圓	圓	帆	野	船	(69)		36	53	A	P-22	II	近	伊BC前	
80 8 湯 春	春	空	水	(68)		34	52	A			II	近	伊BC	
80 9 等 美 泽 口	網	日	模	縫	(72)	(68)	51	A	—				源川美濃 17C木	
80 10 小 扇	空	空	花	(72)		32	42	A		レンジ・席モ		近	伊BC前	
80 11 への弓合向葦	坐	松	竹	蘆	(108)	(98)	27	A	—	表土・塵丸		肥 利	伊BC後～19C前	
80 12 丸 圓	圓	松	竹	蘆	(108)		34	57	A	表土地丸		肥 利	源川美濃 19C	
80 13 青 神	神	酒	青	色	坐	(16)		A	—				源川美濃 19C	
80 14 弘 塵	塵	共	坐	(74)		27	58	A	—	塵丸		肥 利	源川美濃 19C	
80 15 以 来	來	束	屋	105		39	27	A	—	レンジ埋土				
80 16 般	神	酒	能	竹	等	166	88	A	S-22	II	近	肥 利	近世	
80 17 般	神	酒	能	松	等	85		A				肥 利	源川美濃 18C中～	
80 18 般	神	酒	能	梅	等	42	34	A	R-24	脚土		肥 利	源川美濃 18C後～19C初	
80 19 徒	徒	溫	蒸	等	(121)	(61)	27	A	—		II	近	源川美濃 18C末～19C初	
80 20 白 痛	人	風	人	石	若	75		A	Q-24/R-24	2		肥 利	源川美濃 18C中～	
80 21 通 利	利	坐	(161)	(96)				A					源川美濃 18C後	
80 22 朝 打	打	白	海	文	(123)	(72)	15	A	—	表土			源川美濃 木末	
80 23 朝 扇	扇	圓			(83)	(92)	58	A	—	表土		肥 利	源川美濃 19C 桜ノ山病院	
81 1 白 痛	痛	圓	苦	體	(58)			A	M-17	地筋		中 国	12C後	
81 2 通 利	利	圓	苦	體		50		A	P-20	地筋		源 川	古瀬戸後醍醐天皇	
81 3 小 穴	穴	柱	汗	草	(69)	(53)	59	A	P-22	地筋		肥 利	近世	
81 4 地 跡	跡	(279)						A	R-22	地筋		源川美濃 大室期		
81 5 大 跡	跡	西	青	蘆	(117)			A	O-22	地筋		源川美濃 14C後		
81 6 カ ワ ザ ケ		79				38	21	A	表探				源川美濃 大室期	
81 7 稲	稻				(166)	6:	22	A	—	4切			源川美濃 大室3期	
81 8 大 跡	跡				(166)			A	O-19	手形			源川美濃 大室3期	
81 9 稲 跡					102		45	24	A	—	II		源川美濃 大室3期	
81 10 ミニチュア系繩					(86)	(18)	20	A		四矢			近現代	
81 11 小 穴	穴				79		29	45	A	—	古土		源川美濃 近世	
81 12 ミニチュア糸繩					35		13	17	A	O-22	—		源川美濃 大室1期後	
81 13 指 体								A	M-17	手形			源川美濃 18C後	
81 14 穴 附	附	圓	斜格子	丸	90		29	49	A	—	II		源川美濃 近現代	
81 15 穴 角	角	(86)			(35)	55	A	O-22	—				源川美濃 近世	
81 16 穴 花	花	(89)			(38)	51	A	—	II				源川美濃 近世	
81 17 附 番	番	圓	圓	圓	95		37	30	A	O-19/P-20-21	I		肥 利	
81 18 大 穴	穴	(312)						A	N-18	II			肥 利	
81 19 穴付または手形	瓦	瓦	土	器				A	—	表土			不 壁	
81 20 通	通	通	通					B	Q-22	II			肥 利	
81 21 通	通							A	Q-22	II			先生中野後醍醐天皇	
82 2 通	通	體	東	廢	(217)			B	Q-21	II				
82 3 各 付 番	付	圓	圓	圓	(63)			A	R-25	II			在 地 佐生中野	
82 4 年 番	番							A	Q-24	II				
82 5 番	番							A	—				源 土 中世	
82 6 天 日 斧	斧	(22)						A	—	II			源 土 古瀬戸後醍醐天皇	
82 7 真 口	口							A	Q-24	II				
82 8 花 枝	枝					37		B	—	II			源 土 古瀬戸中野上	
82 9 番 番	番					91		A	—	II			源 土 古瀬戸中野	
82 10 通 附	附							A	—	II			源 土 大室4期後	
82 11 附 日 付 大 穴					(348)			A	—	II			源 土 大室4期後	
82 12 緑袖はさみ縫					102	48	25	A	Q-20	II			源 土 大室4期	
82 13 内 空 瓶					(103)	(55)	21	A	K-24	II			志 戸 山 大室4期	
82 14 お 肝 丸 瓶					115	47	28	A	Q-21	II			源 土 大室4期	
82 15 丸 瓶					(103)	(63)	21	A	K-21	II			源 土 大室4期	
82 16 内 空 瓶					(106)	(64)	22	A	R-26	II			志 戸 山 大室4期	
82 17 内 空 瓶					(116)	(62)	22	A	—	II			物 山 大室3期後半	
82 18 狹 鮎 内 瓶					101	(50)	21	A	Q-22	II			志 戸 山 大室4期	
82 19 狹 鮎 丸 瓶					(104)	(57)	21	A	Q-19	II			志 戸 山 大室4期	
82 20 狹 鮎 丸 瓶					(98)	50	23	A	P-22	II			志 戸 山 大室4期	
82 21 狹 事 瓶					(111)	(43)	67	A	P-22	II			志 戸 山 大室4期	
82 22 丸 瓶					(109)	(54)	69	A	—	II			志 戸 山 大室4期	
82 23 通 利					78			A	—	II			志 戸 山 大室4期以前	
82 24 小 瓶					32			A	—	II			源 土 大室4期	
82 25 小 瓶					(68)			A	—	II			志 戸 山 大室4期	
82 26 通 利					(72)			B	Q-21	II			志 戸 山 大室4期	
82 27 通 利					(100)			A	P-22	II			志 戸 山 大室4期	
83 1 白 瓶	白	瓶	白	瓶	N	(126)		A	N-38	II			中 国 12C後	

品目番号	器種	詳記	L	径	縦大径	底径	厚さ	K	グリット	道溝／槽溝	備考	
83 2 青白釉反口瓶	瓶	W 1 細	(100)	(56)	28	A	—	U	—	中國 15C後		
83 3 青白釉反口瓶	瓶	B 1 細	(79)	—	—	A	—	U	—	中國 15C後		
83 4 青白釉	瓶	C	(36)	—	A	N-17	3	U	—	中國 15C		
83 5 青白釉	瓶	D	(23)	—	A	P-23	0	U	—	中國 15C		
83 6 青白釉	瓶	B 4 細	(64)	—	A	—	—	U	—	中國 15C		
83 7 白磁堆反口瓶	瓶	C 1 粗	(64)	—	A	Q-33	2	U	—	中國 16C中～後期		
83 8 白磁堆反口瓶	瓶	D 1 粗	(63)	—	A	—	—	U	—	中國 小型		
83 9 青白釉	瓶	E 1 粗	(64)	—	A	Q-33	2	U	—	中國 14C後		
83 10 青白釉	瓶	F 1 粗	(260)	—	A	P-22	0下	—	中國 中国13C	明		
83 11 青白釉	瓶	G 1 粗	57	—	A	Q-24	13	U	—	中國 14C後		
83 12 青白釉反口瓶	瓶	H 1 粗	—	—	A	R-25	11	—	中國 14C後			
83 13 青白釉反口瓶	瓶	I 1 粗	—	—	A	—	—	U	—	中國 14C後		
83 14 青白釉	瓶	J 1 粗	53	—	A	P-22	11下	—	中國 17C前			
83 15 カワラケ	瓶	—	106	38	26	A	R-24	11下	—	近世	底部丸	
83 16 カワラケ	瓶	—	93	63	29	A	—	U	—	不明	近世	
83 17 カワラケ	瓶	—	102	66	30	A	R-21	11下	—	不明	近世	
83 18 カワラケ	瓶	—	(100)	58	36	A	Q-25	11	—	在地	近世	
83 19 カワラケ	瓶	—	(104)	60	24	A	Q-24	0	—	在地	近世	
83 20 カワラケ	瓶	—	116	64	27	A	Q-29	0	—	不明	近世	
83 21 カワラケ	瓶	—	100	36	27	A	Q-24	0	—	在地	近世	
83 22 カワラケ	瓶	—	96	56	27	A	N-29	0	—	在地	近世	
83 23 カワラケ	瓶	—	108	52	28	A	R-24	0	—	在地	近世	
83 24 カワラケ	瓶	—	104	60	26	A	Q-24	0	—	在地	近世	
83 25 カワラケ	瓶	—	88	60	26	A	Q-24	0	—	在地	近世	
83 26 カワラケ	瓶	—	94	52	28	A	Q-25	0	—	在地	近世	
84 1 小口瓶	瓶	—	64	34	42	A	—	0/0下	—	瀬戸美濃 近世		
84 2 ハ 風	瓶	—	38	—	A	N-18	0	—	不明	近世		
84 3 木口	瓶	—	78	47	30	A	Q-24	0	—	瀬戸美濃 18C前	露き	
84 4 小口	瓶	—	86	44	44	A	Q-22	0	—	瀬戸美濃 近世		
84 5 小口	瓶	—	86	46	41	A	Q-24	0下	—	瀬戸美濃 近世		
84 6 佐野手	手取瓶	—	122	56	75	A	Q-24	0	—	瀬戸美濃 近世		
84 7 丸	瓶	—	112	45	72	A	Q-24	0	—	瀬戸美濃 近世		
84 8 丸	瓶	—	120	52	88	A	R-21	0下	—	瀬戸美濃 近世		
84 9 前室	瓶	透明・黄褐色	(100)	56	64	A	P-22	0	—	瀬戸美濃 18C前		
84 10 丸	瓶	透明・黄褐色	102	50	64	A	R-21	0下	—	瀬戸美濃 18C前		
84 11 京焼	瓶	透明	(120)	57	77	A	Q-24	0	—	瀬戸美濃 17C後～18C前		
84 12 線	茶碗	—	128	42	56	A	P-22	0下	—	瀬戸美濃 18C後		
84 13 線	猪	—	97	33	48	A	Q-22	0	—	瀬戸美濃 18C後		
84 14 京焼	風呂	—	54	—	A	F-22	0	—	瀬戸美濃 18C前	露き		
84 15 京焼	風呂	—	52	—	A	Q-25	0	—	肥前 17C			
84 16 せんじ鉢	—	(82)	(33)	62	—	A	—	—	信楽			
84 17 丸	青	鉢	(18)	57	47	A	P-23	0/0下	—	信楽 近世		
84 18 田	青	鉢	86	36	48	A	K-24/Q-24	0下	—	肥前 近世		
84 19 田	青	鉢	(80)	38	48	A	—	0	—	肥前 19C		
84 20 陶	反	瓶	(102)	42	52	A	K-23/Q-25/Q-22	0/0下	—	信楽 18C後		
84 21 陶	反	瓶	94	36	44	A	Q-24	0	—	信楽 17C末～18C		
84 22 陶	堆	反	(108)	42	42	A	P-22	0下	—	肥前 近世		
84 23 陶	堆	反	94	45	62	A	R-24	0	—	肥前 18C		
84 24 陶	堆	11	11	54	68	A	Q-24	0	—	瀬戸美濃 17C後		
84 25 小	移	瓶	(120)	52	68	A	—	0	—	信楽 近世		
84 26 小	移	瓶	98	34	60	A	R-25	0	—	信楽 18C後～19C前		
84 27 小	移	瓶	94	42	53	A	P-22	0	—	瀬戸美濃 18C後～19C前		
85 1 志野真庭	志	野	(120)	85	28	A	—	—	瀬戸美濃 大器			
85 2 志野	志	野	115	112	20	A	R-25	0	—	瀬戸美濃 4小器		
85 3 志野	志	野	115	70	26	A	Q-24	3	—	瀬戸美濃 17C		
85 4 志野	志	野	118	68	22	A	Q-22	0	—	瀬戸美濃 17C		
85 5 志野	志	野	116	65	23	A	—	0	—	瀬戸美濃 17C		
85 6 志野	志	野	64	—	A	—	—	—	瀬戸美濃 17C			
85 7 志野	志	野	(121)	62	22	A	R-25	11	—	瀬戸美濃 17C		
85 8 志野	志	野	(119)	69	25	A	—	0	—	瀬戸美濃 17C		
85 9 丸	志	野	120	74	24	A	Q-24	0	—	瀬戸美濃 18C 3/4		
85 10 丸	志	野	112	60	22	A	—	0	—	美濃 近代(17C後)		
85 11 丸	志	野	152	78	29	A	Q-23	0下	—	瀬戸美濃 近世		
85 12 丸	志	野	(120)	32	24	A	Q-24	0下	—	瀬戸美濃 近世		
85 13 伸	口	削	—	58	—	A	P-22	0	—	瀬戸美濃 近世		
85 14 丸	志	野	(123)	89	25	A	Q-24	0	—	瀬戸美濃 近世		
85 15 丸	志	野	(174)	82	46	A	Q-20	0下	—	瀬戸美濃 近世		
85 16 伸	口	削	深井	69	—	A	R-26	0下	—	瀬戸美濃 近世		
85 17 伸	口	削	(123)	(54)	33	A	Q-24	0下	—	肥前 近世		
85 18 伸	口	削	深井	(153)	66	33	A	Q-24	0	—	瀬戸美濃 17C	

文書番号	題名	詳細	口数	枚数	最大横幅	高さ	基部	K	グリッド	遺構／部位	参考
NS_19	店津朝毛百人町	箱	(94)	—	37	29	A	Q-23	II	肥前	18C後
NS_20	右 明 月		88	—	40	20	A	P-22	II	瀬戸美濃	近世
NS_21	灯 灯 箱		88	—	44	22	A	P-23	II	瀬戸美濃	18C後 1/4
NS_22	鑑 度 津 光 盒	箱	30	—	—	—	—	—	—	巴 前	18C 3/4
NS_1	灯 灯 箱		48	—	28	17	A	R-24	II	瀬戸美濃	近世
NS_2	灯 灯 箱		(113)	—	65	21	A	Q-23	II	瀬戸美濃	18C後～19C
NS_3	灯 灯 箱		86	—	44	22	A	—	II	瀬戸美濃	近世
NS_4	灯 灯 箱	箱	(86)	—	42	15	A	P-22	II	瀬戸美濃	近世
NS_5	灯 灯 箱		78	—	36	20	A	Q-22	II	瀬戸美濃	近世
NS_6	灯 灯 箱		82	—	31	14	A	Q-22	II	瀬戸美濃	近世
NS_7	灯 灯 箱		96	—	48	20	A	R-25	II	瀬戸美濃	近世
NS_8	灯 灯 箱		101	—	50	22	A	R-24	II	瀬戸美濃	近世
NS_9	灯 男 風 箱		97	—	44	26	A	—	II	瀬戸美濃	近世
NS_10	灯 灯 箱		81	—	41	19	A	—	II	瀬戸美濃	18C後～19C
NS_11	灯 灯 箱		(89)	—	42	24	A	R-25	II	瀬戸美濃	近世
NS_12	灯 灯 箱		(102)	—	31	24	A	P-22	II	瀬戸美濃	近世
NS_13	灯 灯 箱		(95)	—	41	22	A	R-25	II	瀬戸美濃	近世
NS_14	灯 灯 箱	箱	(120)	—	—	—	A	—	II	瀬戸美濃	近世
NS_15	右 明 光 盒		101	—	39	27	A	—	II	瀬戸美濃	近世
NS_16	ビンダライ 錫環井物	箱	—	—	35	37	A	Q-23/R-25	II	瀬戸美濃	近世
NS_17	ビンダライ 錫環井物	箱	—	—	124	45	A	—	II	瀬戸美濃	18C
NS_18	朱 花 瓶		26	—	47	51	A	R-27	II	瀬戸美濃	近世
NS_19	京 瓶 口 瓶		45	—	36	30	A	Q-23	II	瀬戸美濃	18C
NS_20	京 瓶		(70)	—	36	31	A	P-23	II	瀬戸美濃	近世
NS_21	片 つ ぎ		51	—	78	114	A	P-22	II	高 滋	5～6小箱(7C後)
NS_22	上 東 兵 瓶		(78) (150)	—	—	—	A	P-23	II	猪 戸 丹 大室～近世	—
NS_23	片 口 瓶		(206)	—	82	102	A	R-25/Q-24	II～III下	猪 戸 丹 18C	特
NS_24	上 里 青 兵 瓶		89	71	33	33	A	—	II	各 地	19C後
NS_25	七 瓶 盒		—	77	57	33	A	Q-23	II	猪 戸 丹 19C	特
NS_26	上 里 盒		—	138	—	24	A	Q-22	II	猪 戸 丹 19C	—
NS_27	片 口 瓶		162	—	88	95	A	Q-24	II	瀬戸美濃	17C
NS_28	片 (洋形) 瓶		(90)	—	—	—	A	P-22	II	船 鳥	近世～近代
NS_29	小 体 瓶		—	—	A	P-23	II	—	—	船 鳥	—
NS_30	三 里 瓶		—	72	36	15	A	P-22	II	瀬戸美濃	近世
NS_31	五 里 瓶		—	75	45	17	A	—	II	瀬戸美濃	18C
NS_32	五 里 瓶		—	66	38	19	A	O-22	I	瀬戸美濃	18C
NS_33	六 里 瓶		(98) (118)	—	—	—	A	Q-24	II	瀬戸美濃	近世
NS_34	七 里 瓶		(96)	—	—	—	A	Q-25	II	志 戸 具 17C	—
NS_35	八 里 瓶		—	162	—	—	A	Q-22	II	瀬 戸 美 濃 17C 末～18C 初頭	—
NS_36	青 砂 人 人 青 瓶		(50)	—	29	42	A	O-22	II	肥 前 伊 丹 18C	—
NS_37	青 砂 人 人 青 瓶		83	83	36	50	A	—	II	肥 前 伊 丹 16C後～17C 初	—
NS_38	青 砂 人 人 青 瓶		—	(122)	86	—	A	Q-24	II	瀬戸美濃	16C後～17C 初
NS_39	青 砂 人 人 青 瓶		—	86	117	98	A	Q-24	II	瀬戸美濃	近世
NS_40	小 一 里 瓶		(43) (82)	—	—	—	A	Q-24	II	志 戸 丹 17C 初	—
NS_41	三 里 瓶		(76) (140)	—	—	—	A	Q-24	I	情 重 近世	—
NS_42	五 里 瓶		36	137	—	—	A	R-25	II	瀬戸美濃	19C 物語
NS_43	五 里 瓶		—	103	74	—	A	Q-24	II	瀬戸美濃	19C
NS_44	七 里 瓶		185	—	182	40	A	—	II～III上	瀬戸美濃	近世
NS_45	火 人 丸 瓶		(124)	—	(106)	51	A	P-22	II	瀬戸美濃	近世
NS_46	四 里 瓶		—	75	—	—	A	R-24	II	瀬戸美濃	19C 物語
NS_47	四 里 瓶		—	(226)	—	—	A	—	II	瀬戸美濃	近世
NS_48	四 里 瓶		(226)	—	—	—	A	—	II	瀬 戸 美 濃 19C	—
NS_49	五 里 瓶		(362)	—	(132)	140	A	P-22	II	瀬戸美濃	近世
NS_50	二 里 瓶		(369)	—	168	164	A	R-25	II	瀬戸美濃	19C
NS_51	三 里 瓶		(324)	—	112	132	A	P-23	II	瀬戸美濃	近世
NS_52	三 里 瓶		(340)	—	150	142	A	Q-24	II	瀬戸美濃	近世
NS_53	四 里 瓶		(122)	—	—	—	A	—	II	仁 美 丁 近世	—
NS_54	五 里 瓶		(201)	—	83	54	A	Q-24	II	瀬戸美濃	18C
NS_55	四 里 瓶		(383)	—	(211)	99	A	P-22	II	瀬戸美濃	近世
NS_56	五 石 瓶		(417)	—	—	—	A	F-23/Q-22	II～III上	瀬戸美濃	近世
NS_57	一 半 瓶		—	109	—	—	A	S-23	II	瀬戸美濃	19C
NS_58	二 半 瓶		(816)	—	115	218	A	—	II～III上	瀬戸美濃	19C
NS_59	京 律 黒 瓶		(104)	—	—	—	A	Q-24	II	記 前 近世	—
NS_60	四 里 の 口 瓶		(201)	—	111	43	A	R-21	II	瀬戸美濃	19C 中
NS_61	甚 然 人 平 瓶		(343)	—	—	—	—	—	—	瀬戸美濃	近世
NS_62	二 之 ね 瓶		(129)	—	79	A	Q-22	II	志 戸 丹 近世	—	
NS_63	大 之 ね 瓶		(116)	—	47	61	A	K-24	II	肥 前 17C 後	物語伊万里
NS_64	二 之 ね 瓶		—	—	—	—	A	R-25	II	志 戸 丹 17C 中	初開伊万里
NS_65	丸 瓶	物	(117)	—	(46)	66	A	P-22	II～III下	肥 前	近世
NS_66	丸 瓶	花 と 紺	(205)	—	(50)	63	A	O-22	II	肥 前	近世

図版番号	器種	種類	口径	底径	最大径	底形	器高	蓋	グリット	通縫	縫合	備考	
91. 5 丸	鉢	無、大柄年輪	(104)	39	60	A	Q-24	II		肥 前 近世			
91. 6 丸	鉢	草	(122)	(96)	65	A	Q-24	II		肥 前 近世			
91. 7 丸	鉢	無	(111)	(44)	56	A	—	II	II	肥 前 近世			
91. 8 丸	鉢	大	205	58	63	A	Q-24	II		肥 前 近世			
91. 9 くわんか鉢	コニニヤク判別	花	110	48	54	A	Q-24	II		肥 前 IBC中			
91. 10 丸	鉢	無	(113)	(90)	60	A	P-23	II	II	肥 前 近世			
91. 11 丸	鉢	無	G151	46	68	A	R-24	II~III		肥 前 近世			
91. 12 くわんか鉢	無	秋	(103)	42	52	A	R-25	II		肥 前 IBC中			
91. 13 くわんか鉢	無	梅	(105)	44	33	A	Q-24	II		肥 前 IBC			
91. 14 くわんか鉢	梅	文	97	40	49	A	P-25/R-24	II		肥 前 IBC中~			
91. 15 くわんか鉢	梅	桃	130	33	65	A	Q-24	II~III		肥 前 IBC中~			
91. 16 丸	鉢	松皮葉・桃	(110)	—	—	A	P-22	II~III		肥 前 近世			
91. 17 丸	鉢	梅	(116)	48	61	A	Q-24	II		肥 前 近世			
91. 18 くわんか鉢	梅	秋	(113)	46	51	A	Q-24	II		肥 前 IBC			
91. 19 丸	鉢	色	111	46	66	A	Q-24	II		肥 前 近世			
91. 20 丸	鉢	桃	60	60	60	A	R-25	II		肥 前 近世			
92. 2 大	茶碗	茶	150	63	76	A	P-22	II		肥 前 17C末~18C前	上手		
92. 1 無	茶碗	茶	75	37	52	A	Q-24	II		肥 前 IBC未			
92. 2 有	茶碗	茶	62	39	58	A	R-24/Q-24/Q-23	II~III		肥 前 IBC後			
92. 3 有	茶碗	茶	68	28	38	A	R-25/Q-22	II~III		肥 前 IBC後			
92. 4 俊	茶碗	茶	70	44	56	B	Q-19	II					
92. 5 八の字筋有	茶碗	茶	(146)	33	58	—	II	II		肥 前 IBC中~後			
92. 6 良	茶碗	茶	(69)	—	—	A	Q-24	II		肥 前 IBC後			
92. 7 丸	茶碗	竹	(87)	(31)	54	A	—	II~III		肥 前 美濃 近世			
92. 8 丸	茶碗	茶	(93)	(34)	51	A	Q-22/Q-23	II		肥 前 近世			
92. 9 丸	鉢	桃	(106)	(43)	60	A	—	II		肥 前 近世			
92. 10 丸	鉢	茶	60	49	60	A	O-22	II		肥 前 IBC中			
92. 11 丸	鉢	桃	80	55	56	A	—	II		湖戸美濃 19C			
92. 12 小	丸	茶碗	茶	(82)	34	47	A	P-22	II		肥 前 19C前		
92. 13 小	丸	茶碗	茶	(86)	37	54	A	Q-25	II		肥 前 19C後		
92. 14 小	丸	茶碗	茶	(83)	38	49	A	R-25	II		肥 前 近世		
92. 12 丸	碗	桃	(162)	37	63	A	P-22	II		肥 前 近世			
92. 16 丸	碗	松	(89)	38	54	A	—	II	II	肥 前 茶土			
92. 17 小	丸	茶碗	茶	(91)	—	—	A	P-22/Q-24	II	II	肥 前 IBC後		
92. 18 丸	茶碗	青海波と格子	—	42	—	A	O-22/P-22	II~III		肥 前 IBC中?			
92. 19 小	丸	茶碗	茶	87	35	62	A	P-22	II		肥 前 近世		
92. 20 丸	茶碗	茶	—	36	—	A	R-25	I		湖戸美濃 19C	「大化年制」		
92. 21 丸	茶碗	茶	—	(51)	4	A	—	II		肥 前 IBC第一	拂顔		
92. 22 丸	茶碗	茶	(102)	39	56	A	P-23	II		肥 前 IBC後~	拂顔		
92. 23 丸	茶碗	茶	(83)	—	—	A	Q-25	II		肥 前 IBC後~	拂顔		
93. 1 広	東	茶碗	茶	(114)	61	64	A	—	II	肥 前 IBC後~19C			
93. 2 広	東	茶碗	茶	(111)	(59)	63	A	—	II	肥 前 IBC後~19C			
93. 3 有	茶碗	茶	108	46	60	A	Q-24	II		肥 前 近世			
93. 4 丸	茶碗	茶	(101)	—	—	A	O-19	II		肥 前 19C			
93. 5 滅	反	茶碗	茶	(96)	—	—	A	Q-22	II F		肥 前 19C		
93. 6 丸	茶碗	茶	(97)	—	—	A	P-22	II		肥 前 近世			
93. 7 丸	茶碗	茶	(109)	48	63	A	—	II		肥 前 19C後~19C			
93. 8 朝	反	茶碗	茶	(65)	—	—	A	Q-25	II		肥 前 19C		
93. 9 朝	反	茶碗	茶	(104)	39	56	A	Q-24	II		肥 前 19C後~19C		
93. 10 朝	反	茶碗	茶	(98)	(40)	56	A	Q-22	II		肥 前 19C		
93. 11 朝	反	茶碗	茶	(106)	42	59	A	Q-25	II		肥 前 19C		
93. 12 朝	反	茶碗	茶	(120)	(52)	63	A	R-25	II F		湖戸美濃 19C 初頭		
93. 13 朝	反	茶碗	茶	95	37	53	A	P-22	F		湖戸美濃 19C		
93. 14 朝	反	茶碗	茶	(106)	(52)	27	A	O-22	II F		肥 前 19C		
93. 15 朝	茶碗	茶	(97)	(42)	31	A	N-18	II~III		湖戸美濃 19C			
93. 16 朝	茶碗	茶	(110)	(42)	27	B	Q-24	II F		肥 前 19C			
93. 17 朝	反	茶碗	茶	(100)	(42)	25	A	Q-22	II		肥 前 19C		
93. 18 朝	反	茶碗	茶	(105)	(42)	33	A	Q-24/R-24	II		肥 前 19C		
93. 19 朝	反	茶碗	茶	(104)	(44)	32	A	O-19	II F		肥 前 19C		
93. 20 朝	反	茶碗	茶	94	29	33	A	K-24	II		肥 前 19C	拂顔	仁田館
94. 1 小坪	茶碗	茶	(68)	(25)	58	A	O-22	II		肥 前 19C		紅目に細用	
94. 2 ぐい呑	茶碗	白	58	24	—	A	Q-24	II		肥 前 19C			
94. 3 有	口	草	(38)	(39)	32	A	H-24	II F		肥 前 17C後半?			
94. 4 小	茶碗	茶	65	38	34	A	P-20/21	II		肥 前 近世			
94. 5 有	茶碗	茶	(76)	35	54	A	Q-23	II		肥 前 19C			
94. 6 有	茶碗	茶	72	41	63	A	R-25	II		肥 前 19C			
94. 7 小	茶碗	茶	(70)	37	48	A	S-22	II		肥 前 17C 3/4			
94. 8 小	茶碗	茶	65	26	43	A	Q-25	II		肥 前 19C		山口寺寺大師	
94. 9 有	茶碗	茶	55	20	28	A	Q-24	II		肥 前 18C後~			
94. 10 茶碗	茶	55	—	—	—	A	P-22	F		肥 前 19C後~	拂顔		

回数	番号	品種	詳細	14	株	最大径	茎径	高さ	色	グリーン	選抜／特徴			備考	
94	11	アサガホ	(77)	27	36	A	Q-21	下	■	下	肥前	近世			
94	12	アサガホ	大			A	—	上	■	下	肥前	19C	後継ぎ		
94	13	アサガホ	花	77		38	63	A	—	上	肥前	19C前			
94	14	アサガホ	草花(ベンシルドローリング)		32	A	Q-22	下	■	下	湘南美濃	19C			
94	15	アサガホ	(62)			A	—	上	■	下	肥前	19C	後継ぎ		
94	16	アサガホ	秋	(100)		A	—	上	■	下	肥前	19C			
94	17	アサガホ	貝珊瑚草	草花(853)	45	67	A	P-22	上	■	肥前	18C 3/4			
94	18	アサガホ	花	草(57)	(65)	A	Q-22	下	■	下	肥前	18C			
94	19	アサガホ	子			A	—	上	■	下	肥前	近世			
94	20	アサガホ	三	C-16	C-25		A	R-24	上	■	肥前	近世			
94	21	アサガホ	色絵、松、梅	17	72	49	A	Q-21	上	■	肥前	19C			
94	22	アサガホ	新宿草・梅	草花(240)	73		A	O-22	上～下	■	肥前	同	近世		
94	23	アサガホ	花	26	72	47	124	A	P-22	上	■	肥前	近世		
94	24	アサガホ	色絵	42			A	Q-24	上	■	肥前	近世			
94	25	アサガホ	草花(127)			A	—	上	■	下	肥前	近世			
94	26	アサガホ	花の子	草花(88)	84	53	A	R-25	上	■	肥前	19C			
94	27	アサガホ	新宿草(花)	三平	57	49	119	A	R-25	上	■	肥前	19C～19C前		
94	28	アサガホ	花	(88)	40	26	A	P-25	上	■	肥前	19C	後継ぎ		
94	29	アサガホ	反皿	(120)	84	28	A	P-23	上	■	肥前	近世			
94	30	アサガホ	花	(124)			A	—	上	■	肥前	近世			
94	31	アサガホ	花室	草花(99)	75	72	A	Q-24	上	■	肥前	19C	松田四郎兵右		
94	32	アサガホ	山	水(135)	(75)	50	A	O-22	上	■	肥前	17C本			
94	33	アサガホ	花	(226)	79	42	A	R-24	上	■	肥前	17C後			
95	2	アサガホ	花	(85)			A	—	上	■	肥前	17C	初期伊万里		
95	3	アサガホ	花	草(144)	(81)	41	A	O-22	上	■	肥前	19C			
95	4	アサガホ	花	(145)	88	49	A	Q-22	上	■	肥前	18C～19C	船岡郡共兵		
95	5	アサガホ	花	(145)	(81)	43	A	Q-20	上	■	肥前	19C			
95	6	アサガホ	花	石(194)	83	42	A	—	上	■	肥前	17C末～18C初			
95	7	アサガホ	花	(224)	(105)	74	A	O-22	上	■	肥前	近世			
95	8	アサガホ	花	宝貴春草(草)	(154)	36	A	P-23	上～下	■	肥前	近世			
96	1	アサガホ	花		84		A	Q-23	上	■	肥前	19C初頭			
96	2	アサガホ	花	草(153)	90	35	A	—	上	■	肥前	18C末～19C	松田四郎兵右		
96	3	アサガホ	花	草(150)	92	39	A	P-22	上	■	肥前	近世			
96	4	アサガホ	花	(124)	(60)	26	A	P-22/P-23	上	■	肥前	近世			
96	5	アサガホ	花	(121)	88	38	A	Q-22	上	■	肥前	18C末～			
96	6	アサガホ	花	151	81	36	A	—	上～下	■	肥前	18C末～			
96	7	アサガホ	花	150	75	38	A	Q-23	上	■	肥前	18C 3/4	「調絃」		
96	8	アサガホ	花	甲(129)	93	29	A	P-23	上	■	肥前	18C 3/4			
96	9	アサガホ	花	(132)	(72)	41	A	Q-22	上	■	肥前	18C 3/4			
97	1	アサガホ	花	草(94)	(62)	24	A	R-21/R-22	上	■	肥前	18C後～			
97	2	アサガホ	花	(105)	(66)	26	A	R-21	上	■	肥前	近世			
97	3	アサガホ	花	山	水(69)		A	—	上	■	肥前	18C後～19C前			
97	4	アサガホ	花	(113)	(68)	24	A	R-25	上	■	肥前	近世			
97	5	アサガホ	花	山(126)	(74)	37	A	—	上	■	肥前	近世			
97	6	アサガホ	花	(130)	(64)	28	A	R-24	上	■	肥前	17C中	初期伊万里		
97	7	アサガホ	花	(126)	45	37	A	P-22	上	■	肥前	17C中	初期伊万里		
97	8	アサガホ	花	山	水(68)		A	—	上	■	肥前	近世	御器所方面の目録		
97	9	アサガホ	花	(130)	76	32	A	Q-24	上	■	肥前	18C中			
97	10	アサガホ	花	山	水(65)		A	R-26	上	■	肥前	18C中			
97	11	アサガホ	花	(96)	89	49	A	R-22	上	■	肥前	19C	蛇の目形		
97	12	アサガホ	花	(133)	92	29	A	R-21	上	■	肥前	近世			
97	13	アサガホ	花	(136)	74	36	A	P-21	上	■	肥前	18C中～			
98	1	ミニチュア家	前庭造具				A	O-21	上	■	肥前	近世			
98	2	ミニチュア家	庭造具				A	P-23	上	■	肥前	近世	施設用		
98	3	ミニチュア花瓶					A	—	上	■	肥前	近世			
98	4	ミニチュア製品					A	O-19	上	■	肥前	近世			
98	5	ミニチュア茶碗					A	Q-24	上	■	肥前	近世			
98	6	ミニチュア茶器					A	P-22	上	■	肥前	近世			
98	7	ミニチュア盆	中央に穿孔				A	O-22	上	■	肥前	近世			
98	8	ミニチュア盆	赤				A	—	上	■	肥前	近世	私の園		
98	9	ナトリウム	前庭造具				A	P-22	上	■	肥前	近世			
98	10	ナトリウム	花瓶				A	—	上	■	肥前	近世			
98	11	水滴・鳥					A	—	上	■	肥前	近世			
98	12	石	玉				A	O-20	上	■	肥前	近世			
98	13	石	玉				A	—	上	■	肥前	近世			
98	14	石	玉				A	O-19	上	■	肥前	近世			
98	15	石	玉				A	P-22	上	■	肥前	近世			
98	16	水滴・東御原井輪					A	Q-24	上	■	肥前	19C			

第5表 遺物観察表(木製品)

登録番号	長さ	幅	厚さ	K	遺物名	クリット	遺構/層位	層	種	備考
99 1	206	22	6	A	用途不明品	SH2脚穴/覆土	竹or葦			
99 2	24	24	-	A	用途不明品	P-23	II下	不明		
99 3	25	26	-	A	用途不明品	P-23	II下	不明		
99 4	-	62	-	A	漆 檀	-	SD1/覆土疊下	ケヤキ		
99 5	-	4	A	曲物 底板	R-26	VI	スギ			
99 6	-	9	A	漆 檀	-	SR1/VI	未分析			
99 7	569	45	-	A	楕	-	SRI/VI	數孔材		
99 8	311	18	-	A	楕	-	SRI/VI	イヌマキ		
100 1	206	24	10	A	曲物 底板	-	SE6/覆土下	スギ		
100 2	200	52	9	A	曲物 底板	-	SE6/覆土下	スギ		
100 3	144	122	10	A	円 板	-	SE6/覆土下	スギ		
100 4	(49) (140)	-	A	漆 檀	-	SE8/覆土下	ケヤキ			
100 5	(137)	-	A	漆 檀	-	SE8/覆土下	イタヤカエデ			
100 6	-	-	A	漆 檀	-	SE8/覆土下	ケヤキ			
100 7	-	-	A	漆 檀	-	SE8/覆土下	ケヤキ			
100 8	139	251	-	A	楕	-	SE9/覆土下	底板:ホウオキ、側板:スギ		
101 1	158	222	-	A	楕	-	SE8/覆土下	底板:モミ、側板:ヒノキ		
101 2	218	93	12	A	楕 底板	-	SE8/覆土下	ツガ		
101 3	-	81	12	A	楕 底板	-	SE8/覆土下	ツガ		
101 4	360	57	-	A	楕 檀	-	SE8/覆土下	イスガヤ		
102 1	55	139	-	B	漆 檀	-	SE3/③	ケヤキ		
102 2	-	139	-	B	漆 檀	-	SE3/③	ブナ		
102 3	56	81	-	B	漆 檀	-	SE3/③	ケヤキ		
102 4	118	27	5	B	木 筒	-	SE3/③	ツガ	文字判読不能、付け札か	
102 5	125	39	30	B	部 材	-	SE3/③	ヒノキ		
102 6	111	11	-	B	神狀木製品	-	SE3/③	-		
102 7	52	107	12	B	漆 板 狹	-	SE3/③	モミ		
102 8	-	-	8	B	漆 物	-	SE3/③	ケヤキ		
103 1	67	(213)	14	B	楕	-	SE3/③	ホウオキ		
103 2	(239)	(72)	27	B	漆 物	-	SE3/③	カツラ		
103 3	163	238	-	B	楕	-	SE3/③	底板:キリ、側板:ヒノキ、スキ、ツガ:竹or葦		
104 1	66	29	17	B	部 材	-	SE3/③	数孔材		
104 2	54	39	29	B	部 材	-	SE3/③	スギ		
104 3	86	43	9	B	有 孔 板	-	SE3/③	モミ		
104 4	46	49	25	B	部 材	-	SE3/③	クリ		
104 5	65	59	7	B	部 材	-	SE3/③	モミ		
104 6	85	77	28	B	漆 板 狹	-	SE3/③	モミ		
104 7	85	39	48	B	部 材	-	SE3/③	ヒノキ		
104 8	90	36	11	B	漆 板 狹	-	SE3/③	モミ		
104 9	57	57	47	B	部 材	-	SE3/③	マツ		
104 10	150	42	24	B	漆 材	-	SE3/③	クリ		
104 11	147	53	47	B	漆 材	-	SE3/覆土	クロマツ	ホゾ孔あり	
104 12	120	67	36	B	漆 材	-	SE3/③	ヒノキ		
104 13	135	97	16	B	漆 材	-	SE3/③	モミ		
105 1	-	-	B	折	數	-	SE4/③	スギ		
106 1	313	59	5	B	折 斜 斜 板	-	SE4/③	モミ		
106 2	-	-	B	楕	-	-	SE4/③	ブナ		
106 3	509	14	-	B	漆	-	SE4/③	ツガ		
106 4	318	26	-	B	漆 粉木	-	SE4/③	ヒノキ		
106 5	174	31	5	B	折 敷 例 板	-	SE4/③	スギ		
106 6	73	87	7	B	円 板	-	SE4/③	カラマツ	漆塗横残存	
106 7	119	63	15	B	部 材	-	SE4/③	ヒノキ		
106 8	112	30	23	B	漆 材	-	SE4/③	ヒノキ		
106 9	52	101	31	B	漆 材	-	SE4/③	スギ		
106 10	150	46	18	B	漆 先	-	SE4/③	広葉樹		
107 1	135	51	37	B	漆 材	-	SE4/③	イヌマキorイスガヤ		
107 2	237	71	37	B	漆 材	-	SE4/③	ヒサカキ		
107 3	271	37	21	B	漆 材	-	SE4/③	スギ		
107 4	96	25	-	B	楕	-	SE4/③	クリ		
107 5	370	79	-	B	楕	-	SE4/③	エノキ		
107 6	518	41	38	B	漆 材	-	SE4/③	ヒノキ		
107 7	522	41	-	B	楕	-	SE4/③	クリ		

第6表 遺物観察表（金属製品・鉄貨）

固版番号	器種	全長	幅	厚さ	区	グリット	遺構/覆土	備考
108 1	釘	112	9	A	—	SP796/覆土	—	—
108 2	釘	7.7	14	A	—	SP2145/覆土	—	—
108 3	釘	64	6	A	—	SK6/覆土	—	—
108 4	釘	144	7	A	—	SK6/覆土	—	—
108 5	釘	51	9	A	—	SK6/覆土	—	—
108 6	釘	58	11	A	—	SK12覆土	—	—
108 7	かすがい	36	57	11	A	—	SP2001/覆土	—
108 8	釘	31	5	A	—	SK12覆土	—	—
108 9	釘	63	7	A	—	SK12覆土	—	—
108 10	用途不明	103	37	A	—	SK12覆土	—	—
108 11	環状製品	198	8	A	—	SX1/覆土上	—	—
108 12	釘	92	8	A	—	SX4/覆土	—	—
108 13	煙管雁首	50	9	A	2	SD1/覆土	—	—
108 14	煙管雁首	55	15	A	2	SD1/覆土	—	—
108 15	煙管雁首	57	9	A	—	SD1/覆土下	—	—
108 16	かすがい	37	112	8	A	2	SD1/埋土～②	—
109 1	釘	123	16	A	Q-21	地業	—	—
109 2	煙管雁首	78	112	A	P-20	地業	—	—
109 3	煙管吸口	68	7	A	P-20	地業	—	—
109 4	釘	(38)	12	A	P-20	地業	—	—
109 5	用途不明	138	19	A	O-22	II	—	—
109 6	煙管吸口	11	71	A	—	試掘17トレンチ	—	—
109 7	釘	(55)	1	A	—	SD9/覆土上	—	—
109 8	釘	78	16	A	—	試掘17トレンチ	—	—
109 9	煙管吸口	72	15	A	—	SD2/覆土上	—	—
109 10	煙管吸口	60	9	A	—	SD2/覆土上	—	—
109 11	釘	42	8	A	—	SD2/覆土上	—	—
109 12	煙管雁首	40	6	A	—	SD4/覆土上	—	—
109 13	釘	76	12	A	—	SD8/覆土	—	—
109 14	用途不明	104	14	A	—	SD3/覆土	—	—
109 15	用途不明	185	14	A	—	試掘17トレンチ	—	—
109 16	釘	62	11	A	—	SD7/覆土上	—	—
109 17	釘	54	8	A	—	SD7/覆土下	—	—
109 18	鍼	239	114	29	A	—	SD7/覆土下	—
109 19	釘	51	4	A	—	SD16/覆土	—	—
109 20	棒状製品	171	7	A	—	SD16/覆土	—	—
110 1	分釘	42	32	A	R-24	II	—	—
110 2	釘	玉	18	A	R-24	II下半	—	—
110 3	煙管雁首	54	16	A	P-19	II	—	—
110 4	煙管雁首	54	13	A	O-19	II	—	—
110 5	煙管雁首	106	18	A	R-26	II	—	—
110 6	煙管雁首	(88)	16	A	R-24	II下半	—	—
110 7	煙管雁首	(78)	16	A	R-24	II下半	—	—
110 8	煙管吸口	(52)	16	A	P-22	II	—	—
110 9	煙管吸口	65	15	A	P-22	II下半	—	—
110 10	煙管吸口	90	17	A	Q-22	II下半	—	—
110 11	煙管吸口	97	10	A	O-19	II	—	—
110 12	煙管吸口	102	14	A	P-21	II	—	—
110 13	煙管吸口	101	18	A	Q-24	II下半	—	—
110 14	煙管吸口	99	19	A	O-22	II下半	—	—
110 15	せんじ鉄瓶	126	149	34	A	Q-22	II	—
110 16	ヘラ状製品	152	43	A	R-26	II上半	—	—
110 17	水滴	24	72	A	Q-24	II	—	—
110 18	棒状製品	13	53	4	A	P-23	II	—
111 1	釘	94	60	A	R-24	II上半	—	—
111 2	釘	102	4	A	P-21	II	—	—
111 3	釘	127	4	A	P-22	II下半	—	—
111 4	釘	124	4	A	Q-22	II	—	—
111 5	釘	83	9	A	Q-22	—	—	—
111 6	釘	76	6	A	P-23	II下半	—	—
111 7	釘	76	4	A	P-23	II	—	—
111 8	棒状製品	206	13	A	Q-24	II下半	—	—
111 9	棒状製品	146	28	A	P-19	II	—	—
111 10	かすがい	45	112	7	A	Q-23	II下半	—
111 11	かすがい	(51)	(156)	15	A	Q-24	II	—
111 12	鍼	(53)	(136)	50	A	P-21	II下半	—
111 13	鉄魚?		(71)	A	R-24	II上半	—	—

図版番号	銘文名	詳細	発掘国・王朝	初鏡年	区	グリッド	遺構	層位
112_1	水永通貢	古寛永	日本/近世	1408年	A	-	SH2/覆土上	
112_2	寛永通貢	古寛永	日本/近世	1636年	A	-	SH1/SP50/覆土	
112_3	不	明			A	-	SH1/SP22/覆土	
112_4	寛永通貢	新寛永	日本/近世	1687年	A	-	SH1/SP35/覆土	
112_5	寛永通貢	新寛永	日本/近世	1687年	A	-	SH1/SP42/覆土	
112_6	寛永通貢	古寛永	日本/近世	1636年	A	-	SH1/SP42/覆土	
112_7	寛永通貢	新寛永	日本/近世	1697年	A	-	SH1/SP42/覆土	
112_8	-	通貢			A	-	SP1103/覆土	
112_9	寛永通貢	古寛永	日本/近世	1636年	A	-	SP2006/覆土	
112_10	紹聖元通貢		北宋	1094年	A	-	SP2008/覆土	
112_11	淳化元通貢	行書	北宋	990年	A	-	SP2015/覆土	
112_12	寛永通貢	新宣永	日本/近世	1697年	A	-	SP2015/覆土	
112_13	元祐通貢	真書	北宋	1086年	A	-	SP2020/覆土	
112_14	皇宋通貢	真書	北宋	1038年	A	-	SP2063/覆土	
112_15	熙寧通貢	新寛永	日本/近世	1697年	A	-	SP2063/覆土	
113_1	元祐通貢	篆書	北宋	1086年	A	-	SP2080/覆土	
113_2	水永通貢	2枚縦着	明	1408年	A	-	SP2117/覆土	
113_3	祥符通貢		北宋	1009年	A	-	SP29/覆土	
113_4	聖宋通貢	行書	北宋	1101年	A	-	SP552/覆土	
113_5	祥符通貢	真書	北宋	1009年	B	-	SP92/覆土	
113_6	治平通貢	真書	北宋	1064年	A	-	SK12/覆土	
113_7	寛永通貢	新寛永	日本/近世	1697年	A	-	SK8/覆土	
113_8	寛永通貢	新寛永	日本/近世	1697年	A	-	SK3/覆土	
113_9	大觀通貢		北宋	1107年	A	-	SD1/覆土	
113_10	重道元通貢?	篆書	北宋	995年	A	-	SD1/覆土	
113_11	元豐通貢	真書	北宋	1078年	A	-	SD2/覆土上	
113_12	元祐通貢	真書	北宋	1086年	A	-	SD2/覆土上	
113_13	紹聖元通貢	真書	北宋	1094年	A	-	SD2/覆土下	
113_14	紹聖元通貢	真書	北宋	1094年	A	-	SD9/覆土下	
113_15	洪武通貢		明	1368年	A	-	SD9/覆土上	
114_1	寛永通貢	四文錢(背十一波)	日本/近世	1769年	A	-	SD9/覆土上	
114_2	寛永通貢	文錢	日本/近世		A	-	SD9/覆土上	
114_3	不	明			A	-	SD4/覆土	
114_4	寛永通貢	古寛永?	日本/近世	1636年	A	-	SD4/覆土	
114_5	水永通貢		明	1408年	A	-	SD4/覆土	
114_6	不	明			A	-	SD4/覆土	
114_7	寛永通貢	新寛永	日本/近世	1697年	A	-	SD4/覆土上	
114_8	寛永通貢		日本/近世		A	-	SD4/覆土上	
114_9	寛永通貢	新寛永	日本/近世	1697年	A	-	SD4/覆土上	
114_10	寛永通貢	古寛永	日本/近世	1636年	A	-	SD4/覆土下	
114_11	寛永通貢	新寛永	日本/近世	1697年	A	-	SD3/覆土	
114_12	寛永通貢				A	-	SD3/覆土	
114_13	寛永通貢	四文錢(背十一波)	日本/近世	1769年	A	-	SD3/覆土	
114_14	不	明			A	-	SD3/覆土	
114_15	開元通貢		唐	621年	A	O-21	擾乱	
115_1	聖宋通貢	真書	北宋	1038年	A	Q-24	II	
115_2	聖宋元通貢	篆書	北宋	1065年	A	Q-21	II	
115_3	聖宋元通貢	篆書	北宋	1068年	A	-	試掘17トレンチ	
115_4	大觀通貢		北宋	1107年	A	P-22	II	
115_5	-	通貢			A	-	SD10/覆土	
115_6	洪武通貢		明	1368年	A	P-23	I	
115_7	永樂通貢		明	1408年	A	21TR		
115_8	寛永通貢	古寛永	日本/近世	1636年	A	P-23	II	
115_9	寛永通貢	古寛永	日本/近世	1636年	A	P-23	II	
115_10	寛永通貢	古寛永	日本/近世	1636年	A	O-21	II	
115_11	寛永通貢	古寛永	日本/近世	1636年	A	P-21	II	
115_12	寛永通貢	六寛永	日本/近世	1636年	A	Q-24	II	
115_13	寛永通貢	古寛永	日本/近世	1636年	A	O-21	II	
115_14	寛永通貢	文錢	日本/近世	1668年	A	O-21	II	
115_15	寛永通貢	文錢	日本/近世	1668年	A	-	表上擾亂	
116_1	寛永通貢	文錢	日本/近世	1668年	A	-	表土	
116_2	寛永通貢	古寛永	日本/近世	1697年	A	O-22	II	
116_3	寛永通貢	新寛永	日本/近世	1697年	A	-		
116_4	寛永通貢	新寛永	日本/近世	1697年	A	-	表様	
116_5	寛永通貢	新寛永	日本/近世	1697年	A	Q-21	II	
116_6	寛永通貢	新寛永	日本/近世	1697年	A	P-22	II	
116_7	寛永通貢	新寛永	日本/近世	1697年	A	P-22	II	
116_8	寛永通貢	新寛永	日本/近世	1697年	A	P-22	トレンチ埋立	
116_9	寛永通貢	新寛永	日本/近世	1697年	A	P-22	II	
116_10	寛永通貢	新寛永	日本/近世	1697年	A	P-21	II	
116_11	寛永通貢	新寛永	日本/近世	1697年	A	O-22	II下半	
116_12	寛永通貢	四文錢(背十一波)	日本/近世	1769年	A	-		
116_13	寛永通貢	四文錢(背十一波)	日本/近世	1769年	A	X-19	II	
116_14	一分金		日本/近世		A	N-21	II	

第7表 遺物観察表(石器・石製品)

図版番号	器種	石材	全長	幅	厚さ	重量	区分	判定	遺構/覆土	備考
117 1	石臼		21.1	25.1	9.5	8,750	A	-	SX1/覆土上	
117 2	石臼			24.8	9.3	2,900	A	-	SH2/確認面	
117 3	火打ち石	玉髓	3.6	3.3	1.75	27	A	-	SD2/覆土上	
118 1	礎石		60.8	28.0	29.6	86,000	A	-	SH1 磚石12/覆土 「二十四メ」の線刻	
118 2	磨石	多孔質安山岩	10.0	8.4	4.0	385.0	B	-	SE4/覆土	
118 3	石臼		28.8	28.8	9.6	1,190	A	-	SK10/覆土	
119 1	凹みがある石	軽石	7.7	8.3	5.2	214.4	A-2	-	SD1/②	
119 2	石臼				11.3	2,210	A-2	-	SD1/②	
119 3	鍬斧	硬質砂岩	21.0	12.6	5.4	647.4	A	-	SD1/底土～②	
120 1	鎌石	粘板岩	2.2	2.1	0.5	2.7	A	-	SD4/覆土	
120 2	鎌石	粘板岩	2.1	2.0	0.5	3.0	A	-	SD4/覆土	
120 3	石臼				7.5	1,600	A	-	SD4/覆土上	
120 4	不明		20.8	20.0	14.0	8,100	A	-	SD4/覆土上	
120 5	石臼				35.7	4.9	9,100	A	-	SD3/覆土
120 6	磨石	中粒砂岩	10.8	11.4	5.1	915.8	A	-	SD3/覆土	
120 7	砥石				7.5	3.6	3.0	150	A	- SD3/覆土上
121 1	印鑑	葉鱗石	2.7	2.7	1.0	14.0	A	Q23 II		
121 2	有孔円板	滑石	2.7	2.7	0.4	5.3	A	-	SP2119/覆土	
121 3	硯	粘板岩	12.4		5.7	196.3	A	Q24 II下半		本島青石路、蟹等の落書き
121 4	凹みがある石		17.6	12.8	7.2	1,000	A-2	-	SD1/②	
121' 5	石臼				11.0	4,100	A	-	SD10/覆土	
122 1	砥石	粘板岩	8.8	4.4	1.4	89.6	A	Q24 II		
122 2	砥石	流紋岩	10.7	3.5	1.4	108.4	A-2	Q22 II		
122 3	不明				(15.2)	850	A	Q24 II下		
122 4	基石	粘板岩	2.3	2.3	0.7	4.3	A	Q23 II		
122 5	砥石	流紋岩	10.4	2.7	3.2	101.7	A-2	Q22 II		
122 6	砥石	流紋岩	11.1	3.7	2.9	262.8	A-2	Q22 II		
123 1	石臼				32.2	9.4	9,800	A	R24 II	
123 2	硯か?	流紋岩	(10.8)		4.0	371.7	B	Q20 II		
123 3	頭蓋骨	シカ頭蓋骨					A	-	SR1/VI	頭頂部、角基部に人為的加工痕あり
123 4	こうがい	ベッコウ					A	-	SH1/覆土	
123 5	筆の柄か?						A	-	SD3/覆土	

図版番号	器種	種類	細長さ	幅	厚さ	区分	判定	遺構/層位	備考	
19 1	石讃木製品	黒耀石(信州系)	3.4	2.4	1.1	3.4	B	-	XI	
19 2	石鎌	ガラス質黒色安山岩	2.7	1.6	0.4	0.4	B	-	XI	
19 3	石鎌	チャート	2.2	1.6	3.0	0.6	B	-	表上	
19 4	剥片	墨縞石	4.6	2.2	1.2	8.6	A	Q22 II下		調整底あり
19 5	石錐	中粒砂岩	6.1	5.7	1.5	100	B	-	XI	
19 6	石斧	凝灰岩	9.4	4.8	2.0	110	B	-	XI	
19 7	石斧	硬質砂岩	13.4	6.2	3.0	343.3	A	P21 II下		
19 8	石斧	頁岩	7.4	5.4	2.1	120	B	-	XI	
19 9	垂飾	滑石	(2.2)	1.5	1.3	7.5	B	-	XII	
20 1	石皿	多孔質安山岩		(10.4)	5.2	1,400	B	-	XII	
20 2	石皿	多孔質安山岩		(12.0)	5.6	840	B	-	XII	
20 3	磨石	多孔質安山岩	9.6	7.2	3.8	365.0	B	-	XII	

第IV章 総括

第1節 仁田館の礎石建物と平面構造について

仁田館遺跡の近世の礎石建物について

仁田館遺跡の調査では、調査区の中央部に近世後半の仁田家の母屋と考えられる礎石建物を検出した。同家では、近世後半の館の様子を描いた銅版画（第127図）および近代前半に撮影した母屋の写真（第128図～第129図 写真1・2・4）を所有しており（註1）、これは検出された礎石建物を検討する上で貴重な視覚的資料である。ここでは、銅版画および写真的建物と、調査で得られた建物のデータを比較することにより、近世後半から近代前半の仁田館の母屋の構造について検討していく。

銅版画には、「仁田大八郎宅邸」とあり、後方の富士山の位置からして、南東から館の概観を描いたものようである。画の右上には「仁田四郎忠常之傳」として、仁田忠常に関する伝来があり、文末に嘉永六年（1854）七月三日の日付と三十六世孫当主仁田大八郎の名が記されている（第127図(1)）。写真は、明治の前半に撮影されたものであるが、銅版画とほぼ同じ角度から撮影されており、建物の構造を比較することが可能である（写真1）。建物の概観や東側に付属する小型の建物がある点、中央部やや西側に南方向に延びる塀がある点など、銅版画と共に通する点が多く、銅版画と写真的建物は同一のものである可能性が高いと考えられる。

調査において検出された礎石建物は全部で5棟であるが、調査区の中央部では大型のSH1が検出された。現在も仁田館の敷地内には、仁田三兄弟（忠常、忠正、忠時）の墓、北部と西部の一部に土塁（第127図(2)～(3)）、塀が現存しているが、これらの位置を銅版画に描かれた位置と比較してみると、SH1（第127図(1)～(1)）が銅版画および写真的建物に相当するものと考えられる。しかし、実際に調査で検出された礎石建物は、複数回に渡り立て替えられたことを示しており、正確に礎石の組み合わせを復原することは難しいと言わざるをえない。しかしながら、同様の建物が同じ場所に建て替えられ、ある期間存在したことを見ると考えれば、検出されたSH1が、銅版画および写真的母屋（第127図(1)・第127図(2)～(1)・第128図～(1)・写真1・2）である可能性は高いと考えられる。

検出された礎石建物の規模は、南北が約16m、東西が約17mで、柱間は約1.8mである。礎石の地業として、直径が約50cmのやや隅の丸い方形の土坑が23基、南北7列、東西に8列に並んでいる状態で検出された。土坑は、御殿場泥流層（Ⅶ層・Ⅷ層）と呼ばれる硬質の地盤に達しており、栗石を埋め込み柱石を据えている。これは、「根切」の「壺堀」に類似するもので、さらに銅版画および写真でも地表面と並行に横木が渡っている様子がみてとれることから、基礎については石場立基礎のような形態が想定されると考えられる（註2）。

銅版画および写真にみる母屋は東西に長軸を有する建物であり、規模は間口12間、奥行き6間程度であることが読みとれる（第128図～(1)・写真1・2）、調査において検出された建物は、母屋の東側の部分に相当すると考えられる（第127図(2)～(1)）。銅版画から読みとれる建物の構造は、正面からみると総二階造に近い建物となるが、東側および北東部分に出した建物が付属することがわかる。また、一階の南東の角に土間状の空間を配することから、東側の付属する建物は水回り関係の施設が推測され、さらに南西に客間があり、それを用むように縁側を有すること、客間と南西に位置する「はなれ」をつなぐ通路状の構造物を有することがあげられる（第128図～(1)）。実際に調査においても大型の柱穴を取り開むように配置された小型の柱穴が検出されており、これらが庇や縁側の柱穴に相当する可能性が高いと考えられる。

本遺跡の調査で検出された柱穴は大小併せて2,000基を越えるものであり、その全ての建物を復原することは非常に困難である。しかし、銅版画と写真にある母屋の概観と、実際の調査において検出された大型の礎石建物の大枠が一致することが確認され、これは近世後半に当地域に多大な影響力を持ったとされてきた仁田家の伝承に沿うものである。

註

- 1 銅版画・写真については、仁田家第40代当主仁田昇氏に提供及び掲載許可を頂いた。記して感謝申し上げる。
- 2 「図解家屋造作雑形」7版 1956

仁田館の平面構造について

仁田館遺跡の調査は、現在も同地に居を構える仁田家の屋敷の南東部を対象として行われ、その調査面積は、屋敷の全体の約1/2程度である。調査で検出された遺構は、先述の大型の礎石建物、柱穴群、井戸、溝、土坑など様々である。しかし、これらの遺構は、互いが濃密に重なりあうこと、検出面が一様に御殿場泥流層の上面で、本来の遺構の掘り込み開始面の状況が判断し難いこと、遺構の覆土内の遺物に混入品が多く認められること、近代以降の搅乱が数多く認められることにより、遺構の正確な年代、時期別の建物の配置状況を特定することは難しいと言わざるをない。しかし、遺構の検出状況は、方形居館と考えられてきた仁田館の平面構造を明らかにする上で重要なデータを提供するものである。ここでは、前出の銅版画、写真をふまえて、仁田館の平面プランについて考察する。

現在、仁田館の北東部には、仁山三兄弟の墓が残されている。また、館の北部および北西部には土壘が残存し（第127図(2)-③）、さらに館の北側に立地する慶音寺との境界には堀の痕跡（第127図(2)-④・写真3）が確認できる。調査で検出された大型の礎石建物が、銅版画の中央に描かれる母屋に相当する可能性が高いことは既に考察したが、現存する仁山三兄弟の墓の位置と土壘の位置を、調査で得られた図面と照らし併せると（第127図(2)-①・②・③）、銅版画に描かれる墓（第127図(1)・第128図-②）、西側の土壘（第127図(1)・第128図-③）、母屋（第127図(1)・第128図-①）の位置関係と良く一致することがわかる。また、銅版画には、母屋の北側に堀が描かれているが（第127図(1)・第129図-⑤）、写真4の建物が、建物の概観、壁の模様、推測される規模から同一の建物であると考えられる。写真の上部には昭和4年十二月二十五日の日付があることを考えると、仁田館の建物の配置が、近世後半から昭和の前半において維持されていた可能性が考えられる。

また、礎石建物だけでなく溝、土坑などの遺構に注目すると、SD2、SD8、SD5、SD6、SD15、SK15といった遺構（第127図(2)-⑥・⑨・⑯・⑰・⑯・⑯）は、概してW-15°-NあるいはN-15°-Wに主軸を有しており、これは土壘、堀と対応する関係にあると考えられる。したがって、土壘、堀の存在する時期の館全体の主軸はこの方向である可能性が高いと推測される。ここで特にSD2に注目し、調査で得られた図面と銅版画を検証していくと、SD2はその形態、規模から銅版画左下に描かれる東西に延びる堀の基礎（第127図(2)・第129図-⑥）に相当する可能性が高いと考えられ。さらに、SD2と他の建物の位置関係を検証すると、P-19・20グリッドにおいて東西方向に列状に検出された柱穴群が表門（第127図(2)・第129図-⑦）に相当し、その東側のSD5付近で検出された南北に延びる柱穴群が、館の東端に建つ南北に長い建物（第127図(2)・第130図-⑧）、さらに、SD2の北側に並行に延びるSD8が、居住区域との境の堀に隣接する基礎または溝（第127図(2)・第129図-⑨）、SH2・SH3が、北側に位置する「はなれ」状の建物（第127図(2)・第129図-⑩）、調査区北東で検出された南北に軸を有する石が、館の東側の石垣（SX3）（第127図(2)・第130図-⑪）に相当することになり、図面と銅版画での位置関係が一致する。さらに、SD2が館南西の堀と仮定するならば、その外側で検出された、堀、柱穴群、井戸等の遺構は、少なく

も近世後半以前の遺構となる可能性が高いだろう。

調査区の南西の角で検出された堀（第127図(2)-⑪）は、その特徴的な形態から、仁田家の歴史を明らかにする上で非常に貴重な発見である。さらにこの遺構は、館の南西の角を確定させるのみならず、館全体の平面を復原する上でも重要な意味を持っている。東西方向に延びる堀は、一部が検出されたのみであるが、館の南側の様子を復原することを可能にする。堀がそのまま東に向かって直線的に延びると仮定すると、O-17グリッドでの検出が予想されたが、実際には堀は検出されなかった。調査区の東は一部近代以降の築堤の影響を受けていたが、調査区の南東部、O-17グリッド付近は、御殿堀泥流層が、湾曲しながら削られている様子（第127図(2)-⑫）が確認でき、これは、築堤によって削平されたというよりも、流路による影響が高いと考えられる。

調査区の北東部でこけら経が出土した自然流路（SR1）（第127図(2)-⑬）が確認され、銅版画においても、館の東部に水車が（第127図(1)・第130図-⑭）、また、南部にも流路が描かれることから、仁田館の南東部において一部自然地形を取り込んでいた可能性が指摘できる。

南北方向に延びる堀は、そのまま北に延びれば、K-17グリッドに位置する下水区の中央部での検出が予想されたが、西および南の角において堀の一部を確認する結果となった。堀は、調査区の間でクランク状に屈曲しており、（第127図(2)-⑮）堀の存在した時期における平面を考える上で重要な発見となつた。本調査で検出された仁田館の平面プランは、銅版画に描かれる仁田館の概観と良く一致するものであり、その主軸はやや西に振れていることが推測される。そしてこれは、少なくとも、近世後半から明治の前半においての仁田館の姿を示すものである。

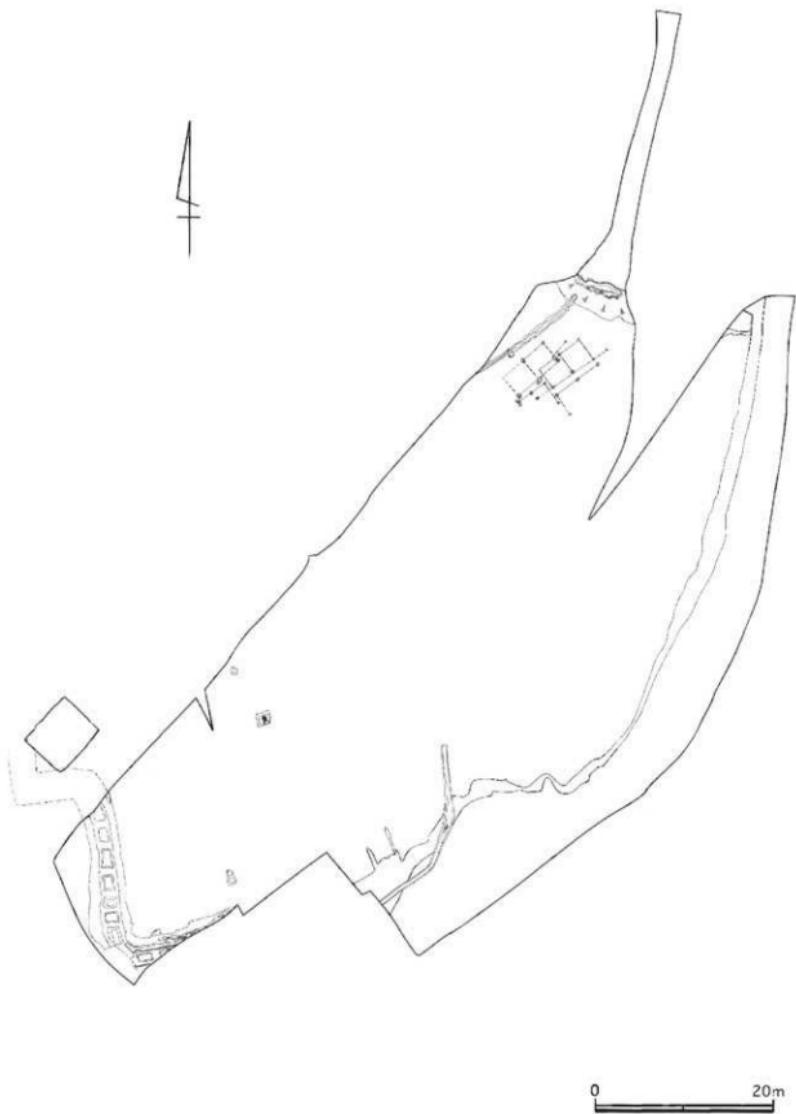
館の周間に堀が存在していた時期の平面プランは、調査以前、堀が館の周囲を方形に囲むと予測されたのに対し、クランク状に屈曲する平面を有することが確認された。中世の遺構と明確に判断できる遺構は数基の井戸と、北端のSR1につながるSD13のみであるが、SD13周辺の柱穴群は、構および流路の方向に対応する軸を有しており、該期の遺構となる可能性がある。

さらに堀の存在した時期に一部自然地形を取り込んでいた可能性は既に指摘したが、近世後半に比定されるSD16はSR1（第127図(2)-⑯）の方向を意識して掘削されたことが推測され、また、現存する北側の土星がP-26グリッド付近で途切れ、堀の痕跡も同様の地点で不明確になることから、流路によって形成された地形が近世後半の段階においても意識されていた可能性が考えられる。これは中世のみならず、近世においても筋の区画に自然地形を一部取り込んでいた可能性を示すものであり、仁田館の平面構造を考える上で重要な問題となろう。

近世後半の館の規模については、先述のSD2を南側の堀とした場合、SD2から北側の上屋根部までの距離は約80m、さらに西側の土壁の崩落から石垣（SX3）までの距離も約80mとなり、1辺が約80mの方形の居館であることを示唆している。そしてこれは、1辺が100mを超えるというこれまでの館のイメージに新しい視点を与えるものである。しかし、SD2と堀との間に約10mの距離をはかることから、堀が存在した時期の館の規模については、従来通り1辺が約100mの規模が想定できるであろう。

先に指摘したように、中世から近世後半の時点で、一部に自然地形を取り込んでいたとするならば、近世後半のある時点で、自然地形を取り込まない形に規模を縮小したり、造成を行うなど、完全な方形にするというプラン変更がなされた可能性が考えられよう。

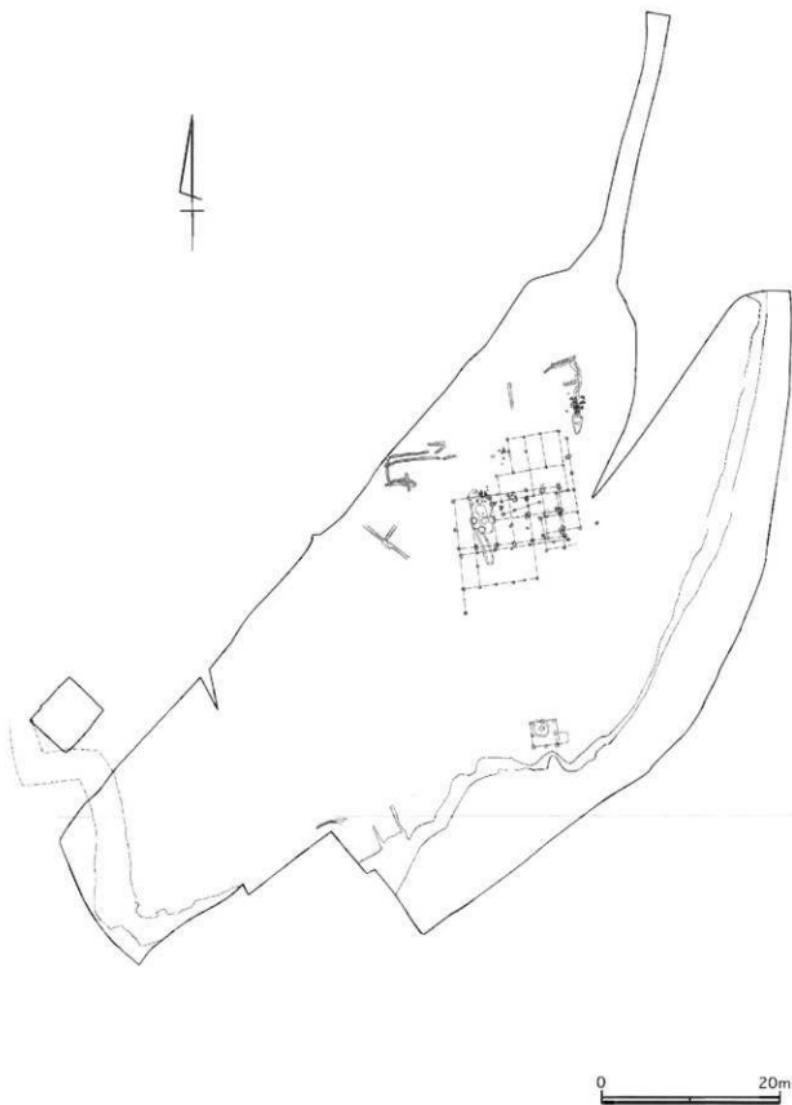
現地調査で得られた図面と仁田家所有の銅版画および写真を比較、検討することによって、仁田館の礎石建物と平面構造について若干の考察を行った。先述したように、現地調査の状況のみで建物を完全に復原することは難しいと言わざるを得ない。しかしながら、銅版画や写真という視覚的な資料を検討することで、近世後半の館の全体像とそれ以前の館の一部を復原することができたと考えている。中世において頼朝の御家人として活躍し、また、近世後半から近代にかけて、当地域に大きな影響力を持つ



第124図 中世遺構分布図



第125図 近世遺構分布図



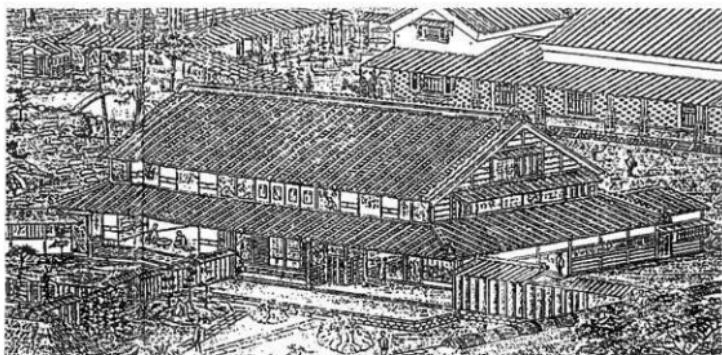
第126図 時期不明遺構分布図



(1)「仁田大八郎邸」銅版面



(2)仁田館遺跡復原全体図
第127図 仁田館建物状況図①



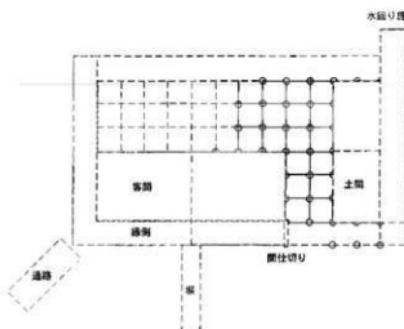
母屋拡大図（①）



写真1 仁田館母屋（①）



写真2 仁田館母屋（①）（明治10年当時）



仁田館母屋（①）復原模式図
(銅版画・写真・調査図面より復原)



仁田三兄弟の墓（②）拡大図

第128図 仁田館遺物状況図②

41 仁田
方 田
田 二
—
KUNI
A NITA



西側の土塁 (4) 拡大図



写真3 館北部に現存する堀状の遺構



母屋北側の蔵 (5) 拡大図

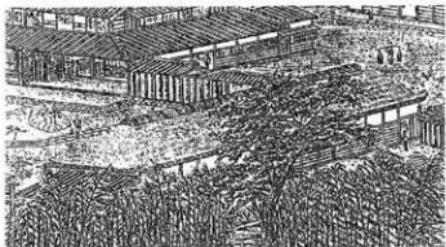


写真4 母屋北側の蔵 (5) (昭和4年当時)



K1SDIに相当する堀 (6)・表門 (7)・居住区との堀の堀 (9)・はなれ状の建物 (10) 拡大図

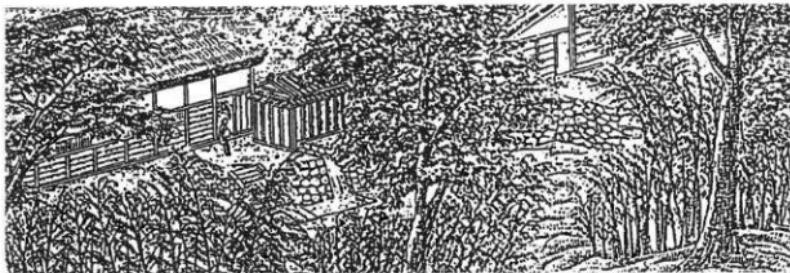
第129図 仁田館建物状況図③



東端の建物（⑧）拡大図



水車（⑩）拡大図



館東側の石垣（⑨）拡大図

第130図 仁田館建物状況図④

た仁田家の屋敷の構造を明らかにすることは、中世の地方武士、近世の名主の生活、そして当地域の近代化の歴史を考える上でも重要な意味を持つであろう。

第2節 仁田館遺跡で検出された堀（SD1）について

今回の調査では、調査区の南西部において、南北長約16.5m、東西長約14mにわたって堀（SD1）（以下堀とする）を調査することができた。これは館の南西の角の部分と考えられ、上面で幅約4m、下面で幅約1mをはかり、底面には堀主軸と直交する幅約60cm～80cm、高さ約40cm～60cm程度の畝状の仕切が約2mおきに確認された。その形状からいわゆる畝堀に分類されるものである。

堀は、下水区付近でクランク状に屈折して北西方向に延びていくことが明らかとなった。調査によって検出された堀の位置は、クランク部を経由することにより、現在、屋敷内面及び北面の地表面において確認される上堀、堀の位置関係と整合している。しかし、検出が予想された館の南部においては、基盤層である御殿場泥流層（第VII層・第VIII層）の自然地形を確認した。堀の下端のレベルが約8.7m、自然地形の上面のレベルが約10.3mであることから、堀が直線的に延びているとすれば、検出が予想されたが、堀の痕跡は認められなかった。これは、館北東部で検出されたSR1のように、堀が存在した時期においても、館の一部に自然地形を取り込んでいた可能性を示しており、館の周辺に堀が全周していたという、これまで想定されてきた仁田館のイメージに一石を投じるものである。

堀が最初に構築された年代については判然としないが、畝の覆土から出土した遺物は、15世紀末から16世紀に比定される貿易陶磁の白磁端反皿、大窯期の志野丸皿・瀬戸美濃産擂鉢、17世紀前半に比定される志戸呂産の輪禪皿等で、堀の年代の一端を示すものと考えられる。また、覆土中層・上層においては、近世から近代に下る遺物が出土しており、覆土の埋没状況から、堀が数回にわたり掘りなおされて機能を維持していたことが推測され、近世から近代前半においても、ある程度堀の形態を留めていたものと考えられる。

敵堀の機能としては、堀底における敵兵の通行を妨げる等の防御用の目的が第一にあげられる（註2）。しかし、本遺構の規模からは、その機能を十分に果たしたとは考えにくい。本遺跡の立地する地域は、地下水脈が豊富な土地柄にある。実際現地調査においては、湧水に悩まされ、半日程度で畝の上面ぎりぎりの所まで水位が達してしまうため、調査時は常に電動ポンプで排水を行っていた。現在と当時の湧水量を比較することはできないが、堀は南西の角が最も深く、それに対応して畝が高いという形状をしており、このことは、少なくとも、機能の一つとして水位調節を行い、水流によって堀が破壊されるのを防いでいた可能性を示すと推測される。

伊豆地域において、敵堀から想起されるのは、後北条氏の築城術である。本遺跡の周辺においては、三島市山中城、蘿山町蘿山城をはじめ後北条氏の手による城郭で検出されている。それ故に、堀が防御用の目的を有するか否かは、本遺構の評価にとどまらず、仁田家の歴史を考察する上で重要な問題となるであろう。仁田家と後北条氏との関係や堀の掘削年代にも関わることになるからである。

仁田家と後北条氏の関係を想起させる史料としては、天正16年（1590）の豊臣秀吉による小田原平定の頃に、仁田家の外戚とされる西原源太が後北条氏から書状を受け取っていること（「北条家朱印状」西原文書）、仁田家第二十一代当主、仁田五兵衛が元山城主松田尾張守の娘と婚姻関係にあったとする説があり（註3）、実際後北条氏の所領役帳に松田康長の所領として「仁田堀内分」とあること（註4）、仁田表において豊臣軍と後北条軍の間で小競り合いがあり、北条氏直が宇津木下總守氏久の戰功を賞していること（「北条氏直感状」宇津木文書）等がある。そしてこれらは、堀覆土最下面から出土した陶磁器の年代観とほぼ一致している。

ここで、簡単に豊臣軍の進軍経路を追ってみたい。駿府城からの家康軍を先発隊として、秀吉軍は清水港から上陸、現在の沼津市の三枚橋城、長泉町の長崖城で軍議を開き、山中城、蘿山城を視察している。実際に蘿山城については織田信雄が攻撃を行っているし、山中城の陥落も周知の通りである。特に蘿山城に向かう岐路に仁田館は位置しており、仮に仁田家が後北条氏と深い関係にあったとするならば、豊臣軍が仁田館を素通りすることは考えにくいであろう。後北条方が豊臣軍の状況をどの程度把握していたのにもよるが、仮に仁田館が後北条軍の何らかの軍事的施設としての役割を担ったと考えた場合、山中城がわずか半日で落城した状況を見ると、仁田館は豊臣軍の圧倒的軍事力に対しては無力だったはずである。また、現地調査においては、該期の焼土面などの戦闘の痕跡は認められなかった。

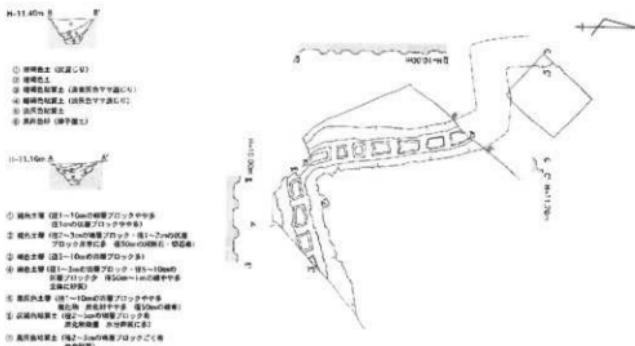
さらに、規模、企画性の相違からも本遺跡の堀を即北条氏と結びつける積極的な根拠は示しがたいと言わざるをえない。小田原城、山中城など城の周囲を巡る大型の堀と本遺跡のような居館で検出された堀とでは、規模、規格に根本的な相違があるため、直接比較することは難しいが、ここでは山中城の本丸西堀例を参考にしてみたい。山中城本丸西堀の堀は、幅約10m、深さ約4mの堀内に、高さ約1~2m、幅約2mの敵が、約4mおきに認められる（註3）。山中城本丸西堀を約半分のサイズにしたのが仁田館の堀ということになる。仁田館の敵の方が、高さ、幅ともにやや小規模であるが、全体的には類似していると言えるだろう。しかし、山城に掘削された防御用の堀を、規模を縮小して館に採用しても、同様の機能は成し得ないであろうし、後北条氏との関係を堀の外見上の一致のみで決定することは難しい。

この外見上の一貫については、以下の可能性をあげておきたい。徳川家康の関東封入後、家康は大久保氏を小田原に入城させている。家康は独自の建築・土木集団を持っていなかったため、武田氏、後北条氏などの技術集団をそのまま抱え込み、部分ごとに特色ある技術を築城に採用したという例が確認されているという。本遺跡で確認された堀は、大久保氏が小田原城を改修した際の堀に形態が類似（註5）、遺物の年代とも齟齬がない。もう一つの可能性として、大久保氏が堀の掘削に何らかの形で関与していたとすれば、非常に興味深いと言えよう。

いずれにしても、今回の調査において戸塚が検出されたことは大変貴重な成果である。この特殊な形態の堀は、これまで不明な点が多くた中世後半から近世前半における仁田家の歴史を考察する上で、非常に重要な問題を提起することになるであろう。先述したように、仁田家と後北条氏を関連づける間接的な史料はあるが、本遺構の評価が非常に重要であるからこそ、その評価は慎重に成らざるを得ない。現在、仁田家では同家所蔵の文書の整理を進めており、その研究の如何によっては、本遺構の正確な評価が可能になるはずである。

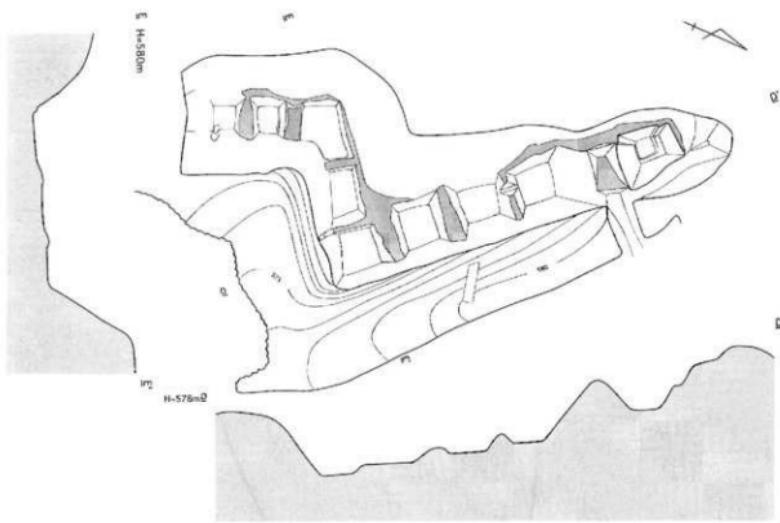
註

- 1 佐野小一郎 1894 『静岡縣家歴鑑』
- 2 小和田哲男 2002 『中世城郭跡の研究』
- 3 静岡新聞社出版局 1991 『静岡県歴史人物事典』
- 4 三島市教育委員会 1989 『史跡山中城跡VI』
- 5 加藤理文氏の御教授による。記して感謝申し上げる。



仁田館遺跡の堀

0 10m



山中城本丸西堀 (三島市教育委員会『史跡山中城跡VI』 1989より作成) 0 10m

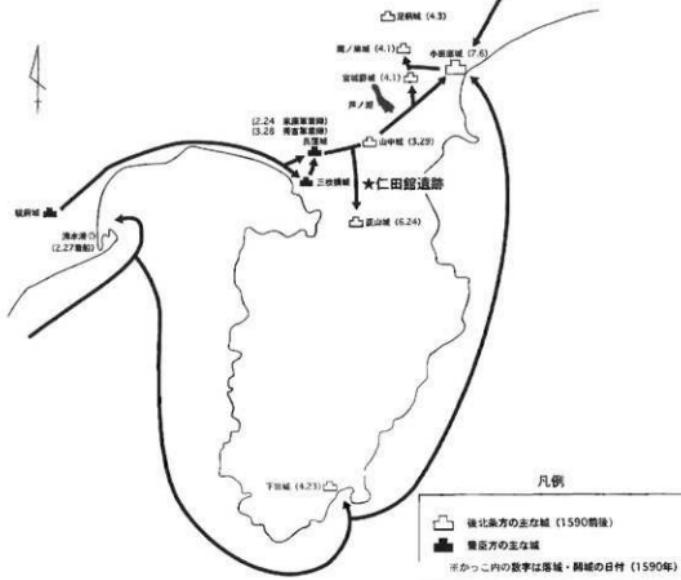
第131図 仁田館遺跡の堀と山中城の堀 比較図

略年表

年号・年月日	西暦	事項	年号・年月日	西暦	事項
天正13.3	1585	氏直、小田原城の首旗を命じる 豊山城の首旗を命じる		2.24	家康、長篠城に着陣 鍋田信雄、沼津に着陣
14.10.27	1586	京廻上洛		2.27	この頃秀吉、京を出発
15.11.8	1587	中山城を襲撃		3.19.21	豊臣方水軍、湊水港に進駐
16.1.18	1588	中山城を襲撃		3.22	中山城主、松田豊長、敵情を報告
7.14		家康、北条氏郷の上洛を促す			氏直、仁田義方に騎兵を送らえた
8.22		氏直、秀吉に説きする			宇津木義久に感状を与える
17.7.20	1589	秀吉、沼田城を北条に譲りしめる 徳川義宣が城主となる		3.27	秀吉、三枚橋城に在陣
10		氏直、中山城の修築を命ぜられる		3.28	秀吉、長篠城で本陣 中山城、豊山城を視察
10		徳川義宣、上野を駿府城を奪取、 秀吉を攻撃する		3.29	中山城主城 鍋田信雄、豊山城攻撃
11.24		秀吉、後北条に駿府城布告状を送る		4.1	家康軍、膳ノ里城、宮城野城を 略し、小田原へ
12.5		氏政上洛、名顕城の件で弁明する		4.3	秀吉、輪姫を経て湊の陣を 足柄郡に進む
12.8		氏直、家康に秀吉との とりなしを頼む		4.23	下田城布城
12.10		家康上洛、秀吉らと小田原取めの 作戦を練る		6.7	家康軍、膳ノ里城、宮城野城を 略し、小田原へ
12~		中山城の堀、郭をつくる		6.24	豊山城を築城、 豊山城和闌成立
18.1.17	1590	小田原城中で駿遊、種籠をせめる		7.2	道山城を始め部隊小田原攻めへ 後北条に合流
2.10		家康、膳府城を出発		7.5	小田原城開城
2.12		氏直、伊豆から下田の浜崎の舟特に 兵糧輸送を命じる		7.6	徳川義臣大久保忠世、小田原に入封
2.17		氏直、伊豆東浦に陸戦を発する		8	

八王子城
津久井城

(三島市教育委員会 「山中城関係略年表」『史跡山中城 第二分冊』1985) をもとに作成



第132図 豊臣軍の進軍経路

第3節 仁田館遺跡出土の遺物について

縄文時代の遺物

仁田館遺跡では、御殿場泥流層（第Ⅳ層・第Ⅴ層）下部に堆積する黒色土層（第X層～第XII層）から縄文時代の遺物が出土している。この黒色土層は、来光川遺跡群に所収される各遺跡の中でも、仁田館と対岸に位置する五反田遺跡においてのみ確認されたものであり、これは、当遺跡群が埋没丘陵の縁辺部の立地することに起因するものと考えられる。出土した遺物は、土器、石器で、土器は早期後半のいわゆる東海系条痕文土器と呼ばれる一群である。これらの土器の中には、いわゆる高師小僧が付着する個体が数多く認められ、これは、当地域の該期の環境を考える上で参考になるであろう。また、本遺跡出土の土器群の特徴として、該期の土器としては、比較的保存状態が良いことがあげられる。出土した土器の中心は粕烟I式土器であるが、酒杯状突起を有する口縁部が多量に含まれる他、生爪による刺突列等が明瞭に観察しうる個体が出土している。低温地帯に立地する本遺跡において、縄文時代の遺物が多量に出土したことは、遺物個々の評価にとどまらず、該期の生活環境や土地利用等を復原する上でも貴重な発見であると言つてよい。また、本遺跡では、調査区の北東部でしか黒色土層を確認できず、その他の地点では、御殿場泥流層が深く堆積している様子が明らかとなった。さらに、本遺跡から出土した遺物の量、種類は、対岸の五反田遺跡と比して少ない。これは、仁田館遺跡がより埋没丘陵の縁辺部に立地していることに起因するものと考えられ、周辺に該期の集落を想定するとすれば、五反田遺跡の東側ということができよう。

弥生～古代の遺物

調査区の北東部で検出されたSR1から弥生から古代の遺物が多量に出土している。中でも、墨書が確認された灰釉皿・駿東型坏は貴重な資料である。灰釉皿は10世紀から11世紀代に比定されるもので、篆書体の「公」の墨書きが確認され、全国的に見ても初例の可能性がある。また、9世紀中頃～後半に位置づけられる駿東型坏の内面に書かれた墨書きは、文字列を十字に交差させるという特徴を持つ。坏内面に墨書きする点から習書とは考えにくく、文字列を十字に交差させるという点から呪術的性格を持つ墨書きと考えられる。「野」と考えられる文字が確認できるが判読は困難である（註1）。その他、10世紀から11世紀代の灰釉陶器、12世紀代の山茶碗が田方平野の他の遺跡と比してやまとまって出土する傾向にある。これは、本遺跡群に所収される仁田館以外の遺跡でも同様に認められる傾向である。中世前半において、当地域は本遺跡の主である仁田四郎忠常をはじめとして、源賴朝の家臣として鎌倉幕府成立に貢献した武士を数多く輩出した地である。本遺跡群出土の古代の遺物は、古代末における有力者の存在を予期させるものであり、武士の形成と發展の過程を探る上で重要な意味を持つであろう。

中世の遺物について

中世の陶磁器は、古瀬戸、大窯期の瀬戸美濃、志戸呂、初山の製品、貿易陶磁が対岸の五反田遺跡に比してある程度まとまって出土している。古瀬戸の製品については、前期のものは皆無で、中期に入つて数点出土するようになり、後IV期あたりから多く出土する傾向にある。天目茶碗や灰釉平碗がやや多く出土する傾向にあるものの、碗類、皿類が平均的に出土しているようである（第136図）。続く大窯期に入ると、瀬戸美濃産の製品は大窯1期から2期にかけて、丸皿、端反皿、天目茶碗を多く出土する傾向に入る。3期以降は丸皿、端反皿の出土数は減少し、かわって稜皿が多く出土する。大窯3期後半から4期以降、瀬戸美濃産の製品、特に天目茶碗以外の碗類と皿類の出土量が目に見えて減少する傾向にある。一方で、3期後半に初山産の天目茶碗、内禿皿、大皿、撞鉢が出土するようになり、4期には志戸呂産の製品が大量に出土するようになるが、特に、丸皿と内禿皿に集中する傾向がある（第137図）。

貿易陶磁は、青磁、白磁、染付がバランスよく出土している。青磁碗B・1類、白磁端反皿のC群、染付端反皿のB1群にそれぞれ出土のピークがあり、その他の器種を踏まえても、15世紀後半以降の製品が多く出土しているようである（第136図）（註2）。

天目茶碗に関しては、瀬戸美濃産が時期を問わず多く出土する傾向にあること、初山産の天目茶碗の出土がある程度認められる一方で、志戸呂産の天目茶碗がほとんど出土していない状況にあることは（第139図）、器種により产地を還別するという配慮があったものか、あるいは、流通形態によるものかは不明であるが、注目される出土傾向にあると言えよう。

また、瀬戸美濃産の皿類、天目茶碗以外の物類が大窯期の前半から減少する傾向にあるのは、初山産、志戸呂産の製品に置換された状況を良く示すものであり、また、貿易陶磁も少なからず影響を与えていたことが考えられる。こうした、瀬戸美濃産と初山産、志戸呂産、貿易陶磁の時期別、器種別の出土量の相関関係は、当地域の該期の陶磁器の流通・消費を考える上で貴重な意味を持つと考えられる。

中世の遺物の出土は、M 17・N 18・O 20・P 22・Q 24グリッドで多く検出される傾向にある。Q-24グリッドについては、中世の遺構であるSR1・SD13、そしてその方向性の類似から中世の建物と判断した掘立柱建物群が検出されたグリッドであり、遺構と遺物の分布状況に齟齬をきたしていない。また、M 17・N 18グリッドで中世の遺物を多く出土する傾向にあるのは、「仁山館の平面構造について」で後述する、SD2が近世後半における館南端の扉となる可能性と関連し、注目できる傾向といえるであろう。さらに、近世後半の母屋と考えられる大型の礎石建物が検出された、調査区の中央付近で、中世の遺物が多く出土しているのは、中世においても館の中央部が中心的に利用されてきたことを想起させるものであり、館の空間利用を考える際に重要な意味を持つと考えられる。

近世の遺物

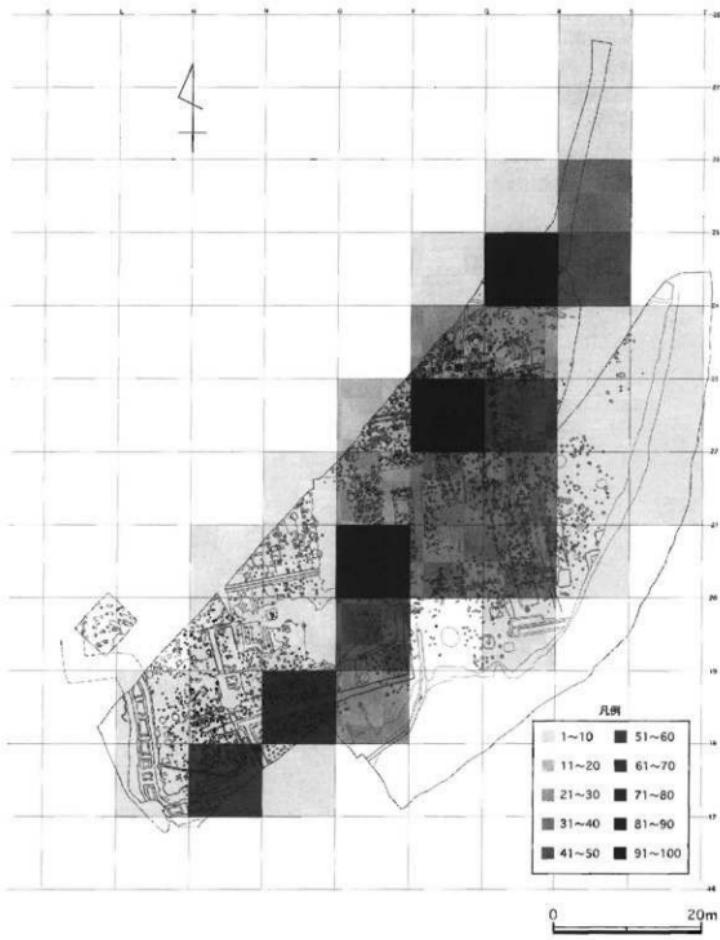
近世の遺物は、近世前半から後半にわたる各時期の遺物を数多く出土した。対岸の五反山遺跡からは出土していない、初期伊万里や、近世前半に比定される肥前系の陶器は、近世前半においても本遺跡が仁田家にとって中心的な役割を担っていたことを裏付ける資料となろう。また、肥前系の青磁染付の碗、底部に五弁花を有する碗、蛇の目高台を有する皿、くらわんか手の碗や皿、広東碗、肥前系・瀬戸美濃系の京焼風の碗、端反碗、信楽産の小杉碗、瀬戸美濃産の柳茶碗、馬の目皿など、近世の各時期に盛行する器種が揃って出土したこと、さらに碗や皿といった器種に加え、擂鉢、灯明具、御神酒徳利、水差、片口鉢、砥石、石臼などの生活道具が多量に出土したことは、当地域の近世における名主の生活を復原する上で貴重な資料である。また、煙管、ままごと道具、箱庭道具、泥面子、碁石、植木鉢に転用されたと考えられる孔が穿たれた半胴、擂鉢といった資料は、当時の仁田家の趣味、嗜好を想起させると同時に江戸で流行した文化が当地域でも流行していたことを示すものとなろう。江戸での流行が当地域にも及んだことを想起させる遺物としては、その他に本高島青石と線書きされた硯と焼継ぎされた磁器があげられる。「高島硯」は江戸時代に大きな販路をもった硯であるが、本遺跡出土の硯に認められる線書きは、文字の形態から使用者・販売者が二次的に書いた可能性を含んでおり、類例は東京都の内藤町遺跡で認められる（註3）。さらに、本遺跡出土の硯には、小さい蟹の絵が描かれており注目される。本遺跡の北部に現存する空堀には、現在も体長5cm前後の蟹が生息しており、硯に描かれた蟹との関係は不明であるものの、本高島青石の線が期と併せて、江戸時代の人々の遊戯心が伺われる貴重な資料となるであろう。

焼継ぎは、破損した磁器を修復する技法で、江戸においては寛政2年（1790）にはじまり、18世紀後半から19世紀前半に流行したと伝えられ（註4）、本遺跡周辺では、三島市の接待茶屋遺跡などで出土が報告されている（註5）。焼継ぎされた磁器の底部には朱書きで、所有者の名前等を書く場合があるが、本遺跡出土の焼継ぎ資料には、「仁田大」「仁田大八」といった朱書きが確認された。近世の仁田家では、

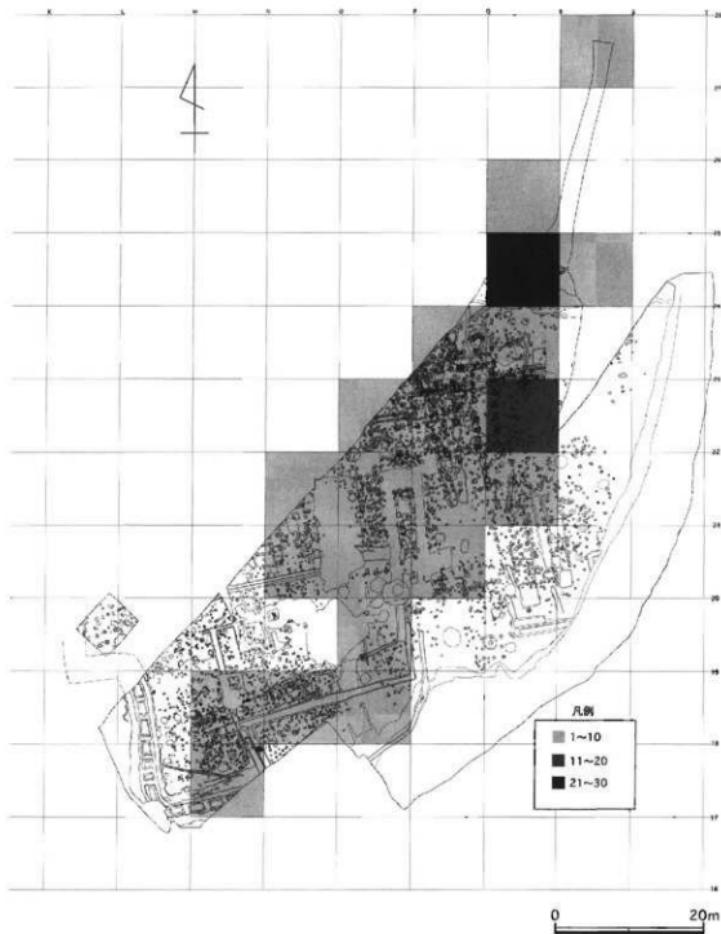
当主が仁田大八郎を名乗ることが多く、この朱書を有する資料は、仁田大八郎に関連する遺物として評価でき、家系図との関連（註6）、磁器の年代観からさらに第33代、第35代の仁田大八郎の時期の資料である可能性を指摘できるものである。さらに、焼継ぎ資料は当時の磁器の生産と流通を考える上で貴重な資料である。仁田館遺跡出土からは、近世の遺物が量、種類ともにまとまって出土しており、これは、当地域における近世の個人あるいは名主の生活、さらに本地域と江戸との文化交流等を考える上で貴重な資料となるものである。

註

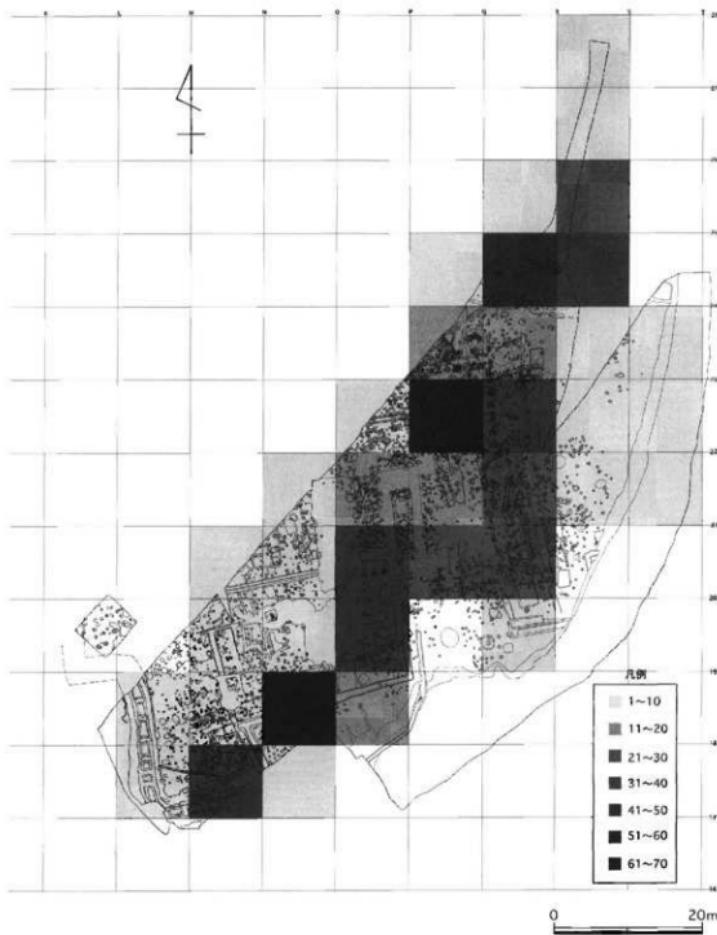
- 1 人間文化研究機構理事 平川南氏にご教示いただいた。記して感謝申し上げる。
- 2 中世時土器研究会 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』
- 3 新宿区内藤町遺跡調査会 1992 『内藤町遺跡』
- 4 江戸遺跡研究会 2001 『江戸考古学研究事典』
- 5 三島市教育委員会 1996 『接待茶屋遺跡』
- 6 小野眞一 1986 『伊豆武将物語』



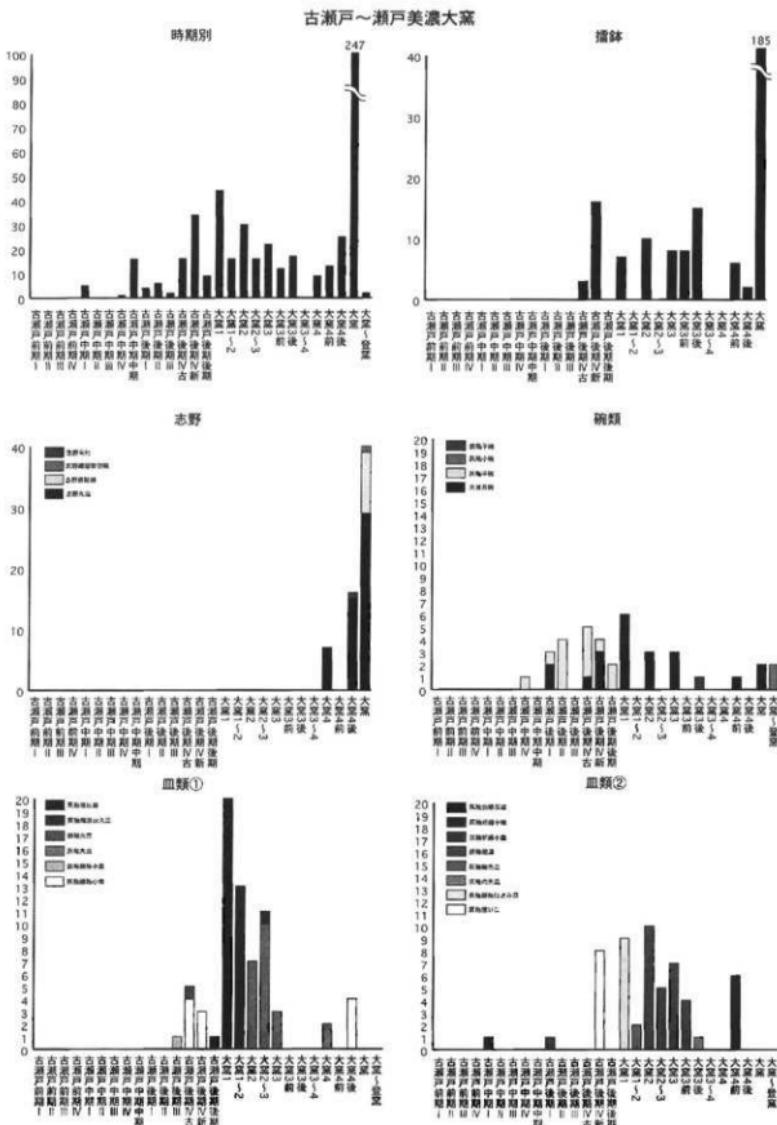
第133図 中世遺物分布図



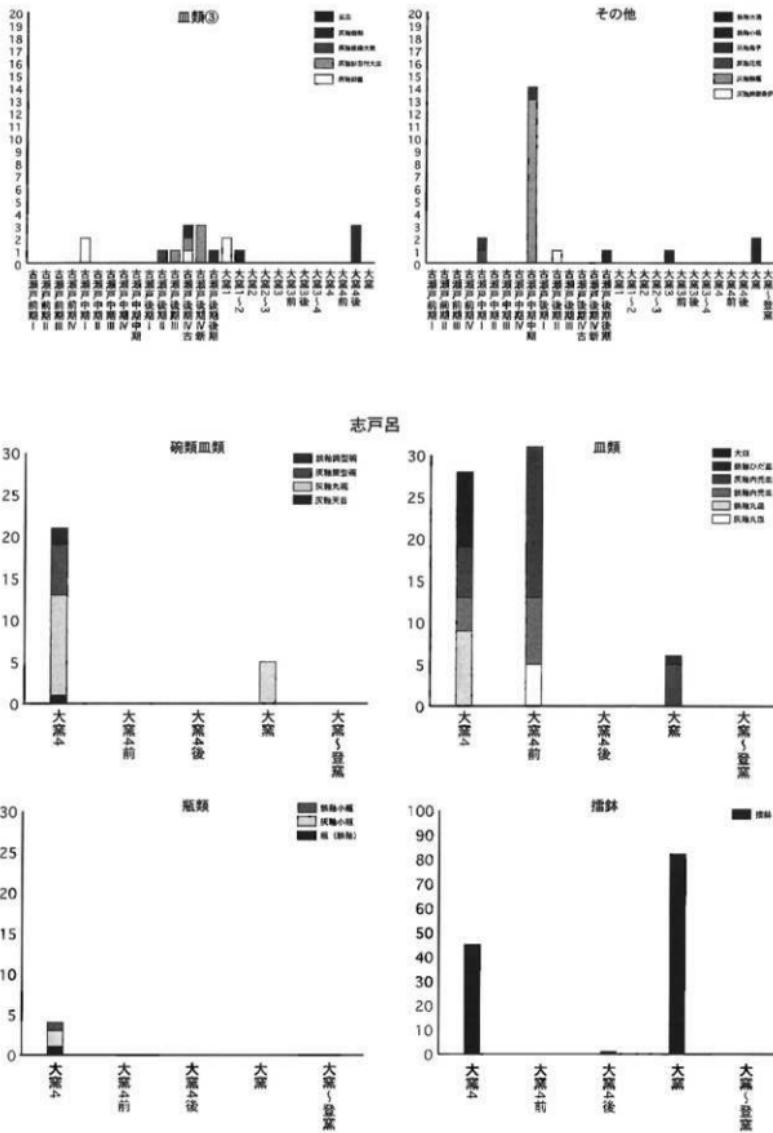
第134図 中世遺物分布図（古瀬戸）



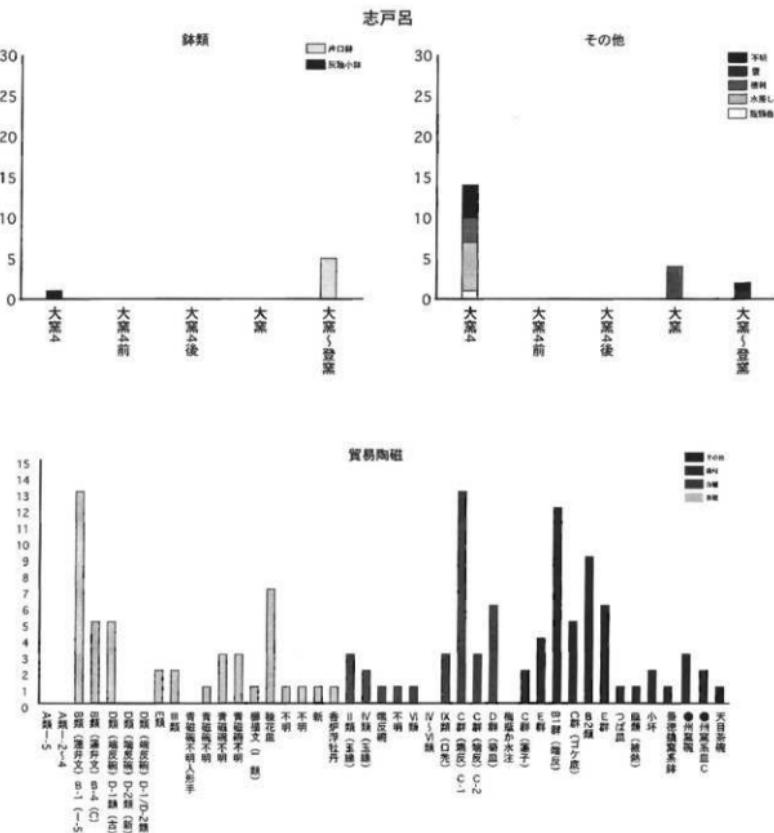
第135図 中世遺物分布図（大庭）



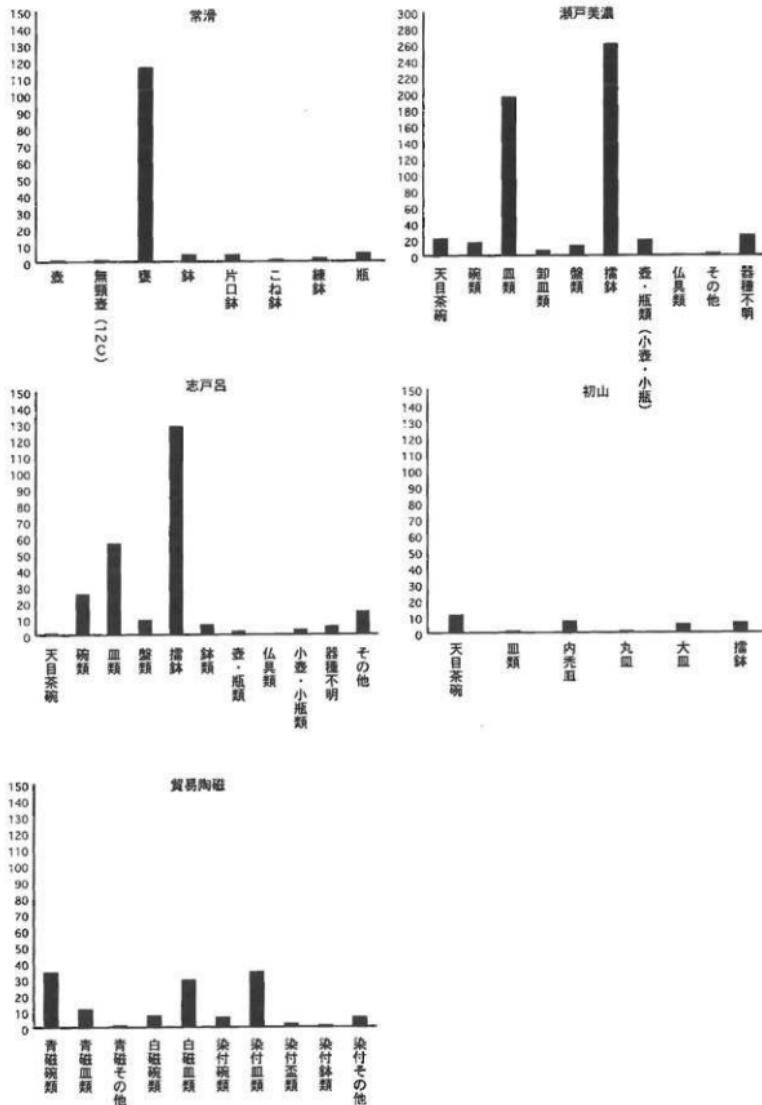
第136図 仁田館遺跡 中世遺物出土量①



第137図 仁田館遺跡 中世遺物出土量②



第138図 仁田館遺跡 中世遺物出土量③

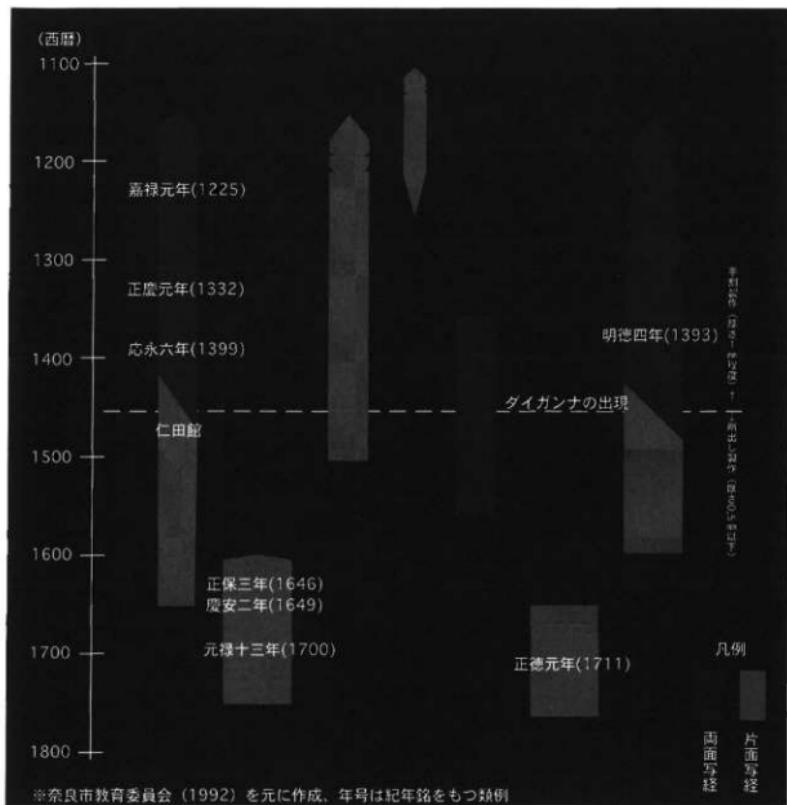


第139図 仁田館遺跡 中世遺物出土量④

第4節 こけら経について

こけら経の年代

こけら経は、板の形状及び製作技法、写経方法等によってその年代をある程度推測することが可能となっている。両面写経から片面写経への切り替わりが15世紀中頃と考えられており、これをひとつの指標とすることができる。また、圭頭状を呈するものは近世以降に幅が広いものが登場するようになる点を考慮すると（松浦 原田1992）、本遺跡から出土したこけら経は15世紀中葉～16世紀の時間幅の中などでとらえることができよう（第140図）。



第140図 こけら経編年表

第8表 こけら経誤字脱字類一覧

行	辞	文	こけら 経原文	品	20枚単位	備考
9	陀羅經陀	富羅那多羅尼子道書提阿難	陀羅經陀 富羅那多羅尼子道書提阿難	1	1	'羅經'の'羅'は増字
11	無事二千人摩訶闍羅因比丘尼與佛		無事二千人摩訶闍羅因比丘尼與佛	1	1	'与佛'の'參'は増字
19	阿苦羅經共吉善教大勢音常樂地評		阿苦羅經共吉善教大勢音常樂地評	1	1	'歡武音常'の'音'は加字
26	不休息音常樂家音常樂音常樂音常		不休息音常樂家音常樂音常樂音常	1	1	利諦の'苦'は増字(衍行末)。'休'は'休'の誤字
21	微月菩薩月光菩薩滿月菩薩大力菩薩		微月菩薩月光菩薩滿月菩薩大力菩薩	1	1	'一ノ二'
22	無量力菩薩越三界菩薩陀羅尼音常		無量力菩薩越三界菩薩陀羅尼音常	1	1	'無量力'の'力'が脱字。
26	子天大天與其佛萬万天子俱自在天子		子天大天與其佛萬万天子俱自在天子	1	1	西天大天と其佛萬万天子俱自在天子の'天子'は脱字。日本より
34	持法華經師王各持千百千華俱有俱		持法華經師王各持千百千華俱有俱	1	1	老子子が五字が脱字。有四百十ヶ持子は原字で、日本に脱字
35	羅之各持千百千華俱有俱海陸橫王		羅之各持千百千華俱有俱海陸橫王	1	1	'若王'の'若'は増字。
41	王祖如意經羅王各持千百千華俱有		王祖如意經羅王各持千百千華俱有	1	1	'經'の'聖'が脱字。末尾の'羅'は校正。二ノ三。
43	禮佛追足這一而時世尊四重座統供養		禮佛追足這一而時世尊四重座統供養	1	1	'四重'の'坐'は脱字
56	無盡諸佛大慈能見此彼比丘比丘尼		無盡諸佛大慈能見此彼比丘比丘尼	1	1	'比丘'の'比'は誤字
61	今令者世尊成身覺度以何因緣而此現		今令者世尊成身覺度以何因緣而此現	1	1	'因'?
65	應此此奉之而後大眾聞時比丘比丘		應此此奉之而後大眾聞時比丘比丘	1	1	末尾の'尼'は増字(衍行頭)
66	尼羅華華敷坐敷坐敷坐敷坐敷坐敷		尼羅華華敷坐敷坐敷坐敷坐敷坐敷	1	1	'作敷'の'敷'は増字
78	初開光明 便十方 万八千 般若金色		初開光明 东方万八千普照金色	1	1	'悉照'の'悉'は増字
81	又觀諸佛 皆是持子 滅諸經 繼妙經		又觀諸佛 皆是持子 滅諸經 繼妙經	1	1	'無 三上'
93	三折第一 摺佛所載 或有首齊 頭馬車		三折第一 摋佛所載或有首齊頭馬車	1	1	'行馬'は増字
101	修摩拏定 得五通又見悉欵 安得實掌		修摩拏定得五通又見悉欵安得實掌	1	1	'六 二下'
104	以無能為能 施無能為能 慈無能為能		以無能為能 施無能為能 慈無能為能	1	1	'濟'の'能'が脱字
113	及見舍者 舍者飲食 百種過禮 施佛及僧		及見舍者 舍者飲食百種過禮施佛及僧	1	1	末尾の'數'は訂正
117	如是等諸種般若經說無能為能無不遺		如是等諸種般若經說無能為能無不遺	1	1	'如'は増字
121	文殊師利 又有菩薩 梵威度 供養舍利		文殊師利又有菩薩 梵威度供養舍利	1	1	'梵威'は増字
126	佛說一光 我及衆會 見此國界 繼妙經妙		佛說一光我及衆會見此國界繼妙經妙	1	1	'此衆會'の'衆會'は増字
135	文殊當世 四處神護 國體仁者 馬祖等		文殊當世四處神護國體仁者馬祖等	1	1	'文殊師利'の'稱利'は増字
138	兩時住大法華學大法華源大法華經		兩時住大法華學大法華源大法華經	1	1	'演說'の'說'は増字
141	今乘生滅開知一切財聞經之故現		今乘生滅開知一切財聞經之故現	1	1	'八 內'?'編'を書き換じている
150	「藏三菩薩說 一切種智復次有佛名曰		「藏三菩薩說 一切種智復次有佛名曰	1	1	'恭敬復'の'復'は増字
153	聖慳勤劫如初後後佛同一名日燈		聖慳勤劫如初後後佛同一名日燈	1	1	'月燈'の'燈'は増字
155	未來佛向八王子 一名有二名焉		未來佛向八王子一名有二名焉	1	1	'名'は増字(衍行頭)
156	未來盡得四名實五名增六名極疑		未來盡得四名實五名增六名極疑	1	1	'五名實'は増字
157	七寶香名底是八十上威德在各		七寶香名底是八十上威德在各	1	1	'碧八'は'碧八'の誤字
161	是時日 目燈明暗大乘名義廣度		是時日 目燈明暗大乘名義廣度	1	1	'九 五上'?'義成數'の'義'は増字
166	六種圓滿時會中比丘比丘優勝後		六種圓滿時會中比丘比丘優勝後	1	1	末尾の'會'は増字(衍行頭)
167	喪夫失火又從阿難陀羅尼經說		喪夫失火又從阿難陀羅尼經說	1	1	'喪'?'喪'の'喪'を書きかけている
168	摩羅鳩槃陀人非人五詔小王轉持上導		摩羅鳩槃陀人非人五詔小王轉持上導	1	1	'人身等'の'等'は増字
170	如來放光明照相和光照方八千佛		如來放光明照相和光照方八千佛	1	1	'方八千'の'方'は脱字
171	上難不識謂如今是見是諸佛上難當知		上難不識謂如今是見是諸佛上難當知	1	1	'佛上難'の'佛'は増字(衍行末)
173	是事已明昔問淨土得未曾有破疑此先		是事已明昔問淨土得未曾有破疑此先	1	1	'光明普'の'問昔'を書き忘れ、「昔」だけ校正している。
175	時是日燈明滅三種說因妙光華滅		時是日燈明滅因妙光華滅	1	1	末尾の'滅'は増字
176	大乘經妙法蓮華經菩薩法華所盡六		大乘經妙法蓮華經菩薩法華所盡六	1	1	'妙'?'妙'の'妙'は増字。校正あり。
177	十九佛不起十佛菩薩者中第六十		十九佛不起十佛菩薩者中第六十	1	1	'會中體'の'中'は増字
181	閻門及人阿難陀羅尼中宣此經音聲		閻門及人阿難陀羅尼中宣此經音聲	1	1	'？」?'中'は増字。今日中は増字(衍行頭)
185	阿三體 陀羅經記已從於中夜人歸		阿三體 陀羅經記已從於中夜人歸	1	1	'三藏三菩提'の'菩薩'は'陀羅'の誤り
198	爾時文師師歸於中夜人歸		爾時文師師歸於中夜人歸	1	1	'說'の'說'は次行のもの
251	詒諭佛但教化善根所有所作爲一		詒諭佛但教化善根所有所作爲一	1	2	'教化'の'化'が脱字
353	以一佛攝故爲衆生說法無有餘乘者二莖		以一佛攝故爲衆生說法無有餘乘者二莖	1	2	'三莖'は'二莖'の誤字
357	致諸佛從諸經法度說得一切種		致諸佛從諸經法度說得一切種	1	2	'佛說'は'諸佛'の誤字
441	般若波羅蜜經白觀音妙見 與水乳照		般若波羅蜜經白觀音妙見 與水乳照	1	2	-----
450	老人無心力 乃至一章 供養於金像 並見勸進		老人無心力 乃至一章 供養於金像 並見勸進	1	2	'於供養'の'於'が脱字。表面に次行(?)まで)を写し経し手續
590	詒教師經 善惡問題 如是大士 願生淨化		詒教師經善惡問題如是大士願生淨化	2	3	裏面'三藏三菩提'の'菩薩'は'金像'
592	幸天佛御前 善十二小劫 金闇人眾身 命布淨化		幸天佛御前 善十二小劫 金闇人眾身 命布淨化	2	3	'元華'の'元'は増字
616	淨財前受阿難陀羅尼三藏書記述經		淨財前受阿難陀羅尼三藏書記述經	2	3	'前記'の'記'は増字
619	自以離見且有無見得謂因禪而今		自以離見且有無見得謂因禪而今	2	3	'見'?'見'の'見'は増字
521	第四欲界其因以離離欲爾時佛告舍利		第四欲界其因以離離欲爾時佛告舍利	2	3	'二十一'?'下'。
628	「參多華一乘二百五百人坐於其		「參多華一乘二百五人为坐於其	2	3	'中'の'中'は次行のもの
632	觀圓法部人即師而作是念我願離於此		觀圓法部人即師而作是念我願離於此	2	3	'是空念'の'空'は増字
637	舍出之更思是舍合唯一門後復小		舍出之復思是舍合唯一門後復小	2	3	'思惟是舍'の'思'は合唯。'思'は脱字
640	俄令舍無火之所燃舍作是念已知無思		俄令舍無火之所燃舍作是念已知無思	2	3	本末から飛ばされたか?

行	釋文	こけら底譜文	書	品目・改教単位	傳考
641	惟良吉子等造出火蟲供御言説歌	惟良吉子等造出火蟲供御言説歌	2	3 33	「舟」:」
644	鶴佐良吉子等造出火蟲供御言説歌	鶴佐良吉子等造出火蟲供御言説歌	2	3 1	「走」は増字
647	斯内父娘詩子心各有所好雅樂妙音各	斯内父娘詩子心各有所好雅樂妙音各	2	3	「有」は「好」の誤字
655	無視難興心參意然數音頭難歌子等各	無視難興心參意然數音頭難歌子等各	2	3	我國に「斯内」
657	難時難興心參意然數音頭難歌子等	難時難興心參意然數音頭難歌子等	2	3	「各」以下は不明歌
661	就以白牛膚色光澤絢爛有大勢力	就以白牛膚色光澤絢爛有大勢力	2	3 34	「牛」は「牛」
675	不處何以是詠其君其作是詠我以之便	不處何以是詠其君其作是詠我以之便	2	3	「是」の「是」は増字、校正直あり
676	子今出以是詠難無家也何說長者自	子今出以是詠難無家也何說長者自	2	3	「棄利」の「何」は増字
679	如是詠一則世間之父詠詩難貴機難	如是詠一則世間之父詠詩難貴機難	2	3	一枚に 21 行歌
680	赤無難歌水曲無難歌成無難星成	赤無難歌水曲無難歌成無難星成	2	3	一枚に 21 行歌、「力」は次行の推字
681	力無所貴有大神力及智體力具是方便寫	力無所貴有大神力及智體力具是方便寫	2	3 35	「星五」
689	已便作是念我難歌之父詠詩難貴機難	已便作是念我難歌之父詠詩難貴機難	2	3	「以施」の「以」は増字
695	獨足是念玄歌以復及智體力欲於方	獨足是念玄歌以復及智體力欲於方	2	3	「真足」は増字
697	不能以是得度所貴者是詠生來免生	不能以是得度所貴者是詠生來免生	2	3	「不能否」の「爲」は増字
701	乞也難然後亦與難大失知亦難歌始	乞也難然後亦與難大失知亦難歌始	2	3 36	「失」六
705	貪財物色聲極化若食生愛則因	貪財物色聲極化若食生愛則因	2	3	「貪食盡」の「他」は増字
708	動難進道如意以是方便説難身復作是	動難進道如意以是方便説難身復作是	2	3	「説」は「作」の「は」は増字
709	眾也當知此三乘法是難稱歌大在	眾也當知此三乘法是難稱歌大在	2	3	「聖」の「衆」は増字
720	空安樂難樂生利身天人復說一切是名	空安樂難樂生利身天人復說一切是名	2	3	美術に「四」?
721	大善益氣衣能故爲難歌即刻被子	大善益氣衣能故爲難歌即刻被子	2	3 37	「卅七」
722	病也難然後亦與難大失知亦難歌始	病也難然後亦與難大失知亦難歌始	2	3	「難者」の「病」は増字
723	之參詠利希如長者別上詠詩引題	之參詠利希如長者別上詠詩引題	2	3	「難者」の「病」は増字
724	焉無難進也其從來亦難歌有難家	焉無難進也其從來亦難歌有難家	2	3	「也」は増字(校正點入り)。
735	初詔三乘引導生後復以大乘由度經	初詔三乘引導生後復以大乘由度經	2	3	「說」の「初」は増字(次行頭)
741	發合難歌往觀經更難歌基經難歌	發合難歌往觀經更難歌基經難歌	2	3 38	「見」八、「廣」は「廣」の誤字?
742	唯難記近 見難歌 見難記近 隨裕那那	唯難記近 見難歌 見難記近 隨裕那那	2	3	「地」は「祇」の誤字?
754	或財難地 一尺一尺 住遂行 遍造地	或財難地 一尺一尺 住遂行 遍造地	2	3	「使」は「祇」の誤字
759	道難進 賴難進 賴難進所 召鳴鹿走	道難進 賴難進 賴難進所 召鳴鹿走	2	3	「漏」の「は」は「」になっている。
761	如是詠難 息負難歌 死歌對歌 等十人一	如是詠難 息負難歌 死歌對歌 等十人一	2	3 39	「舟九」
765	難歌詠 氣歌對歌 等十人一	難歌詠 氣歌對歌 等十人一	2	3 1	「氣」の「鬼」は増字
766	難歌詠 氣歌對歌 等十人一	難歌詠 氣歌對歌 等十人一	2	3	「鬼」は増字
774	先供進歌 入久其歌 小無加 歌歌難歌樂者	先供進歌 入久其歌 小無加 歌歌難歌樂者	2	3	「如也」は「也」の増字(訂正有り?)
776	奇詠難歌 見歌對歌 痘也難歌	奇詠難歌 見歌對歌 痘也難歌	2	3	「難」は増字
779	威威煩惱 壓威煩惱 壓威煩惱	威威煩惱 壓威煩惱 壓威煩惱	2	3	1枚に 2 行字跡、「壓煩」は「壓倒大火」の誤り
780	導子難歌 遊戲難歌 無歌對歌 無歌對歌	導子難歌 遊戲難歌 無歌對歌 無歌對歌	2	3	1枚に 2 行字跡
781	尼是持歌 徒作歌子 雖子如歌	尼是持歌 徒作歌子 雖子如歌	2	3 40	「四」?
782	今此舍命 無一可取 空耳歌子著難歌	今此舍命 無一可取 空耳歌子著難歌	2	3	「今此三界」の「三界」は増字
801	少難歌 僧少歌 僧少歌	少難歌 僧少歌 僧少歌	2	3 41	「因」一
812	唯我一人 能爲難歌 般若歌	唯我一人 能爲難歌 般若歌	2	3	「救苦」の「貳」(二んべん)は「渡」の誤字
817	以此譬喻 談 楠木 欲等老歌 仁受歌	以此譬喻 談 楠木 欲等老歌 仁受歌	2	3	「難」は増字
821	萬寔定歌 雅拂歌 雅拂歌	萬寔定歌 雅拂歌 雅拂歌	2	3 42	「四十二」
831	生心毒心 皆有病歌苦歌 莫實無病	生心毒心 皆有病歌苦歌 莫實無病	2	3	「毒等因苦」は増字
835	福禪詳歌 徒行歌 雜難歌詩	福禪詳歌 徒行歌 雜難歌詩	2	3	「多事」は「名舟」の誤字
837	其實未得 一切解脫 說是人 実未得 一切解脫 說是人 是人実滅	其實未得 一切解脫 説是人 実未得 一切解脫 説是人 是人実滅	2	3	「苦」は「增字
841	在所造方 甚安樂事 有若聞者 隨喜受歌	在所造方 甚安樂事 有若聞者 隨喜受歌	2	3 43	「列國不樂」
857	如是難歌 雜難歌詩 地獄難歌 生難歌	如是難歌 雜難歌詩 地獄難歌 生難歌	2	3	「尋根」の「尋」は増字
861	若作歌証 从牛中 身常負責 加註持	若作歌証 从牛中 身常負責 加註持	2	3 44	「四十 四」
868	若得人 謹耕田園 謹耕田園 自勞耕種	若得人 謹耕田園 謹耕田園 自勞耕種	2	3	「南」は「勞」の誤字
881	水難歌 水難歌 水難歌 水難歌	水難歌 水難歌 水難歌 水難歌	2	3 45	「四十五」
884	告合利角 通新經 石若其持 羽劍不面	告合利角 通新經 石若其持 羽劍不面	2	3	「族」は「者」の誤字
1100	勿隨難歌 植難歌樂 及其志力 隨所持在 加註生難歌樂及其志力隨所持在	勿隨難歌 植難歌樂 及其志力 隨所持在 加註生難歌樂及其志力隨所持在	2	4	「勤」は「增字
1141	甚善何唯如來此生難歌難歌念何	甚善何唯如來此生難歌難歌念何	3	3 58	「？」
1201	難歌空空 心大歡歌 欲樂歌空 欲歌樂生	難歌空空 心大歡歌 欲樂歌空 欲歌樂生	3	5 61	「六十一？」
1202	是弘大悲歌 甚而能歌 佛歌所詠	是弘大悲歌 甚而能歌 佛歌所詠	3	5	「待」は「待」の誤字
1220	難歌聞聞復無難歌有魔難歌有魔及魔	難歌聞聞復無難歌有魔難歌有魔及魔	3	5	「觀」は「見」の「見」は増字
1221	度難歌佛爾時難歌飲食宣此義而濟酒	度難歌佛爾時難歌飲食宣此義而濟酒	3	6 62	「六十」一?
1229	難歌研香 研歌名香 種種妙奇 以爲花酒	難歌研香 研歌名香 種種妙奇 以爲花酒	3	6	「第」の「さへ」が誤り
1230	其地平手 無有百首 諸歌難歌 不可稱計	其地平手 無有百首 諸歌難歌 不可稱計	3	6	「土」は「地」の誤字
1241	如是難歌 通大主歌 心猶難歌 大主猶歌	如是難歌 通大主歌 心猶難歌 大主猶歌	3	6 63	「六十三」

行	語文	こけら経文	品	20枚単位	備考
1242	若我重三君 然後乃前也 貴亦勿如也 每擇小乘者	若我重丁然後挑乃貴我亦勿如也每擇小乘者	3	6	「唐淨寺」は「小乘通」の誤り
1243	不知雲山何 得非上是 錦拂舟昔 吾等作舟者	不知雲云何得非上是錦拂舟昔吾等作舟者	3	6	「佛」は「塔」
1247	最優提於貴我並坐觀三石方阿彌陀山	最優提於貴我並坐觀三石方阿彌陀山	3	6	「於未盡」の「未」は增字
1261	我大弟子 或普提者 徒得作舟 仰名相	我大弟子張阿祇者得作舟仰名相	3	6 64	「六十」四
1281	大丈人佛說彼其土平正離諸地實相	大丈人佛說彼其土平正離諸地實相	3	6 65	「六十五」
1286	小妙法車在二十小妙爾時眾歡喜宣	小妙法車在二十小妙爾時眾歡喜宣	3	6	「此」は増字(次行頭)
1290	謹禮後後 起七寶塔亦以華光供合利	謹禮後後七寶塔亦以華光供合利	3	6	「香」は「元」の誤字
1291	其無後身 神淨成正覺 國土廣大	其無後身得智慧成正覺國土廣大	3	6	「威德」は「威」等の誤字
1296	當以種福供具百千種福供尊母詔	當以種福供具百千種福供尊母詔	3	6	「供具供養」の「供具」が誤字
1301	亦敬禮當得持仰多摩羅敷詔理齊	赤帝當得持仰多摩羅敷詔理齊	3	6 66	「六十」六
1318	佛滅之後 正法住世 四十八劫 佛滅法住	佛滅之後正法住世四十八劫佛滅法住	3	6	「赤使」の「住」は「年」の誤字
1319	我佛弟子 繼續其教五百皆普被起	我佛弟子繼續其教五百皆普被起	3	6	「後」に誤字
1321	予今說汝等聲難	予今說汝等聲難	3	6 67	「六十」七
1326	大丈人佛說彼其土好成劫者大相應	大丈人佛說彼其土好成劫者大相應	3	7	「相應」の「費」は「半」
1328	千伎所有地所施使他人以爲過誚	千伎所有地所施使他人以爲過誚	3	7	「能」は「愚」の誤字
1329	東方國土下 則人如意欲過千種	東方國土下則人如意欲過千種	3	7	「國土」の「土」は應字(次行頭)
1330	七復下一指而願佛始益無極於汝等者	上復下 指而願佛始益無極於汝等者	3	7	「導傳」の「導」は摩字
1335	給我如來知見法身被拔久遠猶如今日	給我如來知見法身被拔久遠猶如今日	3	7	「已」は「以」の誤字
1341	此經應數 異劫滿度 世間難度 似是無量數	此經應數其功德滿度是無量數	3	7 68	「六十」八
1346	神多羅三藏三世普陀遊佛不現在前劫	神多羅三藏三世普陀遊佛不現在前劫	3	7	「不」は加字
1347	是一小劫乃至一小劫臨度身心不動	是一小劫乃至一小劫臨度身心不動	3	7	「底」は「體」の誤字
1357	觀三藏圓具佛本末家有十六子其第一	觀三藏圓具佛本末家有十六子其第一	3	7	「其家本末」の「本」は增字
1360	住諸國諸侯國臣民諸侯之祖禮釋	住諸國諸侯國臣民諸侯之祖禮釋	3	7	「所附」の「附」は「道」の誤字
1361	上萬一大百姓百萬人庶民皆英國	平焉一百姓凡萬人千萬人庶民皆英國	3	7 69	「六十」、「万」を「億」と書き誤りかけている。
1371	復歸我門 未可聞聽者今得復上 安樂無無	復歸我門不可聞聽者今得復上安樂無無	3	7	「佛傳」の「傳」は摩字
1372	我等五人 空齋大士 是滅度般若無上無	我等五人空齋大士是滅度般若無上無	3	7	「證」の「證」が「曾」になっている。
1399	等恭敬瞻禮及見十六王子請佛轉法輪印	等恭敬瞻禮及見十六王子請佛轉法輪印	3	7	「證」が誤字
1404	時建天王塔而造佛像百千尊以度人華	時建天王塔而造佛像百千尊以度人華	3	7	「尼羅」の「尼」は增字
1405	而敬上其妙敬事如淨土山以供養	而敬上其妙敬事如淨土山以供養	3	7 71	「七十」
1500	尔五百万諸經梵天王佛讚佛已各自得	尔五百万諸經梵天王佛讚佛已各自得	3	7	「五百人」の「人」は增字
1501	宣實應尋尊律法於所安多所深觀	己既應尋尊律法於所安多所深觀	3	7 76	「六十？」
1505	時大通財地和諧愛身造佛天王十	大通財地和諧愛身造佛天王十	3	7	「斯」は「斯」、「十」は「十」の誤字
1508	造苦若苦而苦若苦而造樂十二因緣	造苦若苦而苦若苦而造樂十二因緣	3	7	「造苦威」は「造苦」、「誠道」の「誠」が誤字(本尾に正直あり)
1601	度生者別引 修業者別不見梯不收	度生者別引 修業者別不見梯不收	3	7 81	「八十」一
1603	成佛知能心柱圓下受方力圓中通	成佛知能心柱圓下受方力圓中通	3	7	「佛道」の「道」は增字
1609	實觀在近此城非實觀化作東都寺等	實觀在近此城非實觀化作東都寺等	3	7	「處」は「所」の誤字
1645	我今舍身 願求道場 慈願是 並盡惡業	我今舍身願求道場慈願是並盡惡業	3	8	「願」は「願」か「誓願」か「願」の「願」は增字
1696	一準七寶地點半大學無有山河洲嶼	一準七寶地點半大學無有山河洲嶼	4	8	「正」は增字
1697	濟濟七寶圓滿充滿足諸天寶近虛處	濟濟七寶圓滿充滿足諸天寶近虛處	4	8	「諸天寶圓滿」の「天」が誤字
1732	爾時三千百阿彌陀心自在作是念我等	爾時三千百阿彌陀心自在作是念我等	4	8	「是」を書き間違いそりになっている。
1741	海會諸菩薩應要隨我優曇波羅迦梨	海會諸菩薩應要隨我優曇波羅迦梨	4	8 88	「八十」八
1742	願多劫實忍蘆蘆蘆蘆陀陀陀等皆當	願多劫實忍蘆蘆蘆蘆陀陀陀等皆當	4	8	「實」が誤字、「蘆蘆」の「蘆」が増字、「等」の「等」を訂正
1748	或辟經解 造達十方 無上無上 參禪於佛體	或辟經解造達十方無上無上參禪於佛體	4	8	「威形」の「形」が誤字
1749	者是然已 心大歡樂 願先度衆 有足趁神力	者是然已心大歡樂願先度衆有足趁神力	4	8	「足」は「度」、「神」は「神」
1750	佛毒九劫 路往在詔 徒復應是 法藏天人那	佛毒九劫路往在詔徒復應是法藏天人那	4	8	「法藏」の「住」を加字、「滅法」は「出滅」の誤字、「命」は「懈」
1751	其五劫在定 次作諸行 旁引日明 諸天西北	其五劫在定次作諸行旁引日明諸天西北	4	8	「電」は「懈」
1760	智無所從自以小智發此號稱有人人	智無所從自以小智是世界賢節人坐	4	8	「謂」は「將」
1761	現友師酒酒瓶 是時友參事行應	現友師酒酒瓶是時友參事行應	4	8 89	「八十」九
1781	如無愚人 住於以溪 曾無窮人 往來無家	如無愚人住於以溪曾無窮人往來無家	4	8 90	「九」：
1783	愚周而詣去 條不覺覺 他人生起 薦而問他	愚周而詣去時不覺覺他人生起而問他	4	8	「化」は「他」の誤字か？
1794	尔時阿難陀羅羅作是詔我等白愚應	尔時阿難陀羅羅作是詔我等白愚應	4	9	「旨」は「急」の誤字
1799	唯行來我等所願我等為一切歡慶天	唯行來我等所願我等為一切歡慶天	4	9	2行に同一文字を写経
1797	人阿修羅所見知識可難為時者據持法	人阿修羅所見知識可難為時者據持法	4	9	「法」は「所」の誤字
1800	無能闇闇者二千人皆從我願取報御持經	無能闇闇者二千人皆從我願取報御持經	4	9	「度」は「程」が誤字
1807	十方無盡沙沙薩薩等乞阿彌陀	十方無盡沙沙薩薩等乞阿彌陀	4	9	「全」の「全」を書き間違いそりになっている。
1811	界教統計不絕待知正法住於壽命佛	界教統計不絕待知正法住於壽命佛	4	9	「校」の「兼」がゴンベンになっている。
1814	所共樂取兩功德爾時欲度安宜此義	所共樂取兩功德爾時欲度安宜此義	4	9	「武」の「度」は用字

第9表 文献、絵巻に見られるこけら經写経

年 代	文献・絵巻の名称	記 述 等 把 幹
12世紀	百鍊称	第九 義和元年(1181)十月十一日の条 十一日。於レ院書二柿葉於心經千巻一供養。納三依十二。爲レ被入二東海西海一也。是依二資賀朝臣夢想一也。
13世紀	稚兒觀音經起絵巻	写経をしている2名の僧が描かれている。いずれも机上で写経を行っているが、手本経は描かれていらない。1名は背面のため観察が困難であるが、2名ともこけら板を束で持ちながら写経をしているものと考えられる。机上には硯、写経前あるいは後の束ねられたこけら経が2束程度確認できる。
	道成寺絵起	写経を担当していると考えられる僧が6名描かれている。筆と板を手に持ち、まさにこけら経を写経している僧3名、机上にこけら経の束を置き、まさにこけら経の写経を終えた(画面進行から判断)僧2名、束ねられたこけら経を手にする僧1名が描かれている。 次の場面では、須弥壇の前にある駒机の上に施物の袈裟とこけら経が置かれている。施物の中に紙本経は確認されないため、前場面に登場した紙本経は手本経であろうか。また、紙本経を目の前にしない僧は絶文を誦んじることができる者がいる。
	勝尾寺文書	延慶二年(1309) ※第11表参照
14世紀	師守記	康永四年(1345)五月十七日の頃 供養條々 一、金剛大日如來繪像一鋪空一房被隨身之一鋪内、奉戴詔尊如來陀羅 一、君御書寫法華經十一卷願先人御運事令書給、但未被終功、先書題目給、軸、表 紙、縞等有之、銘向書之給。 、摺寫法華經一部十一卷代錄一貫五百文、 一、率都婆面准々書寫法華經一部十一卷家君已下公達、書侍書寫了、 、二十五昧并別時念佛、去夜被修之。 此外、白東隣拂部頭師香被送法華經一部具經等、率都婆面、 又少外記師豹(中原)率都婆面法華經一部十一卷漸々書寫了、經土在之、
		文和三年(1354)兼日容易の項 「經木一部率都婆用意分可有之墨十挺(マハ)。筆十管。」 「抑率都婆被為善種子。經木頭可刻頤五輪形之山御氣色之間。如然可用意旨仰合了。」
15世紀	大乘院寺社雜事記	文明七年(1475)二月廿九日の頃。 正月廿日、極樂坊逆修奉公事同申造、雖小事可有御沙汰云々、 二月五日、時極樂坊十三部經入日共注進、悉皆百餘貫文云々、 十九日、極樂坊一部經事相尋注進之、十三部經逆修日記 經木三十四部、代四員西四部文、一部別百州文ツ、此内州ハ五輪刻質、 率都婆十三本、板代一貫八百文、一寸三分。 同前本尊代一貫三百文、僧衆四十人布施四十貫人別一貫、 導師布施一貫文、十種供養衆人十人二貫人別一貫文、 油二斗五升百當至原五貫文、炭七荷一貫四百 糸十斤 二貫文、筆八十巻(管) 四百文 灰 咸百文、十三部外四部經四貫文以合十七部、可八萬四千基率都婆用倅。
		明応元年(1492)八月十八日の頃 春菊經爲稿(追)善、率都婆五千六百七十造立供養了、此内五千五百五十本ハ、自文明九年正月廿四日誕生日、至當年子丑七月廿五日入滅日、在日之日率都婆也、百二十本ハ白去三月廿五日入滅日、病中平臥百廿日間分也、則率都婆文字者、法花經八卷、地藏本願經三卷、隨求タラニ、阿ミタ經、文殊經、十一面經、錫杖、父母成佛真言、決定性生真言、舍利禮等也、以上令延供養了、率都婆ハ曾木二百枚余、六切ニ五本宛取之。

文献・絵巻に見られるこけら経

こけら経写経に関する記述、表現が見られる文献、絵画は古くからその存在が指摘されており（柴田：1975）、こけら経研究の指標となっている。百駢抄では柿葉（こけら経か）を袋に詰めて海上におさめるという行為が存在していた可能性が考えられる（第9表）。また、御守記及び門葉記では亡者の追善供養として率都婆の分担写経、紙本経の手配等、こけら経写経に必要な物品の数量、代金等が記され、門葉記の記述からは頭部が五輪形に刻んだ率都婆の存在もうかがえる。さらに、大乗院寺社雜事記の明応元年（1492）8月18日の項では追善供養に際し、亡者の生前の存命日数分のこけら経を写経し、200枚余りの繪板を6枚に分け、それをさらに25枚に分けて板を作ったという記述から、こけら板の製作技法までもうかがい知ることができる。

こけら経写経の方法

こけら経の中には、誤字・脱字のあり方や写経の方法などから、どのような手順・方法で写経が行われたかを示す資料が確認されている。ここでは、それら特徴的なこけら経を個別に検討し、写経方法を復原する上で基本となる情報について整理することとした。

こけら経は、誤字・脱字をはじめとして経文が正確に写経されていない部分が少なからず確認されている（第8表）。それらの中には、同様の誤りや同様の修正を行ったものもあり、写経した人数や方法を推定する上に参考となる場合がある。用語については井柏田C遺跡の例（福岡市：1988）を参考とした。

第10表 こけら経写経教典配巻表

経巻名	二中層（）紙数	勝尾寺文書	勝尾寺文書による 把数（）巻行数	極楽坊本
法華経卷1	(5)1~1-133 (7)1-134~2-78 (7)2-79~2-266	1~1-170 1-171~2-96 2-97~2-266	170行ずつ 1組 4把5本 合計3組で12把15本 (510)	
法華経卷2	(6)3-1~3-169 (6)3-161~3-375 (6)3-376~4-203	3-1~3-199 3-200~4-2 4-3~4-203	198行ずつ 1組 4把19本 合計14組17本 (594)	
法華経卷3	(6)5-1~6-57 (7)6-58~7-132 (7)7-133~7-340	5-1~6-83 6-84~7-155 7-156~7-340	186行ずつ 最後が185行 4把33本 合計13組19本 (557)	
法華経卷4	(4)8-1~9-3 (7)9-4~10-92 (7)10-93~11-161	8-1~9-32 9-33~10-121 10-122~11-161	162行および63行ずつ 4把1本と4把2本 合計1把4本 (487)	
法華経卷5	(5)12-1~13-29 (7)13-30~14-176 (8)14-177~15-162	12-1~14-4 14-5~14-181 14-182~15-162	177行ずつ 4把9本 合計13組6本 (531)	
法華経卷6	(5)16-1~17-17 (7)17-18~18-56 (7)18-57~19-172	16-1~17-55 17-56~18-76 19-1~19-172	171行および172行 4把6本 合計12把17本 (514)	17-53~18-76 4把7本
法華経卷7	(5)20-1~21-42 (7)21-43~23-111 (7)23-112~24-124	20-1~22-3 22-4~23-133 23-134~24-124	159行および158行 4把および3把18本 合計11把18本 (476)	
法華経卷8	(5)25-1~25-106 (7)25-107~27-56 (7)27-57~28-104	25-1~26-16 26-17~27-66 27-67~28-104	139行および41行 3把10本ずつ 合計10把10本 (420)	
無量寿經	(5)1~133 (7)134~294 (7)295~463	1~154 155~307 308~463	154行および155行 3把17本および3把18本 合計11把12本 (463)	
般若經	(6)1~? (6)7~225 (6)226~415	1~138 139~276 277~415	139行および138行 3把9本および3把10本 合計10把8本 (416)	

誤字

経文を書写する際、誤って他の文字を書いたもの。文字が上下入れ替わったものもこれに含める。同音の文字や、類似した別の部分の文字列を書き誤ったものもあり、書き手の経文に対する認知度等を知る上で興味深いと言えよう。また、完全な誤字とは言えないものの、筆にためらいがあるもの、やや複雑な漢字では「へん」や「つくり」だけを記しているものがある（第141図）。筆にためらいがあるものは該当文字の次の文字に連筆が類似することがうかがえる（第141図）。

脱字

経文を書写する際、るべき文字を抜かしているもの。写経後脱字に気がつき字間などに脱字を補足しているものは、後述する「加字」に含める。

増字

経文を書写する際、経文と関係がない文字を書き込んでいるもの。なお、行頭や行末に、前行または次行の文字を誤って書いたものもこれに含める。行末に次行頭の文字を誤記したものが圧倒的に多い。ただし、次行頭は誤りなく書写されていることから、書き手が経文をある程度理解した人物であったことがうかがえよう。

訂正

誤字・脱字・増字に抹消線や点、○、レ点などを付しているものがあり、写経後に校正が行われた可能性が考えられる。これらは訂正の度合いによっても異なるであろうが、訂正箇所にレ点や抹消線を付し、板下端に訂正するもの（第142図）、字間や字間間に訂正するもの（第141図）など訂正方法が統一されていないことが指摘できる。これが写経時における写経を行った本人の校正であるか、写経後に別人によって校正が行われたか検証は困難であるが校正方法が不統一であることがわかる。

加字

訂正の部類に入るが、写経した後、脱字を発見したが、脱字を記入する余地がないために、文字の横や文字間、あるいは行末に脱字を無理矢理補足したもの（第141図）がある。文字の位置や大きさ、字間が不自然なものがこれに該当する。これらは、前述した「訂正」と同様に、写経後に校正を行った根拠となるが、校正の方法が異なることから、校正が複数人で行なわれたことの具体的な傍証となる可能性があろう。

その他

写経を行った人数は、二中層、勝尾寺文書の例では法華経を一日で写経するために僧約30名で10～13巻（法華経、開経、結経を含む）の写経を分担したとされている（第10表、柴田他：1975）。その内訳は、各巻を3分割して写経する三分書写法によって行われており、僧1名当たりの写経分担は170行前後となっている。これを一般的な写経分担の日安とすれば、20行片面写経ではおよそ8～9束（160～180行前後）が妥当な分量ということになろう。

偈頃の部分の五語を明確に区切る場合とこれを区切らない場合があり、写経人物を分別する有効な判断基準となる可能性があろう。

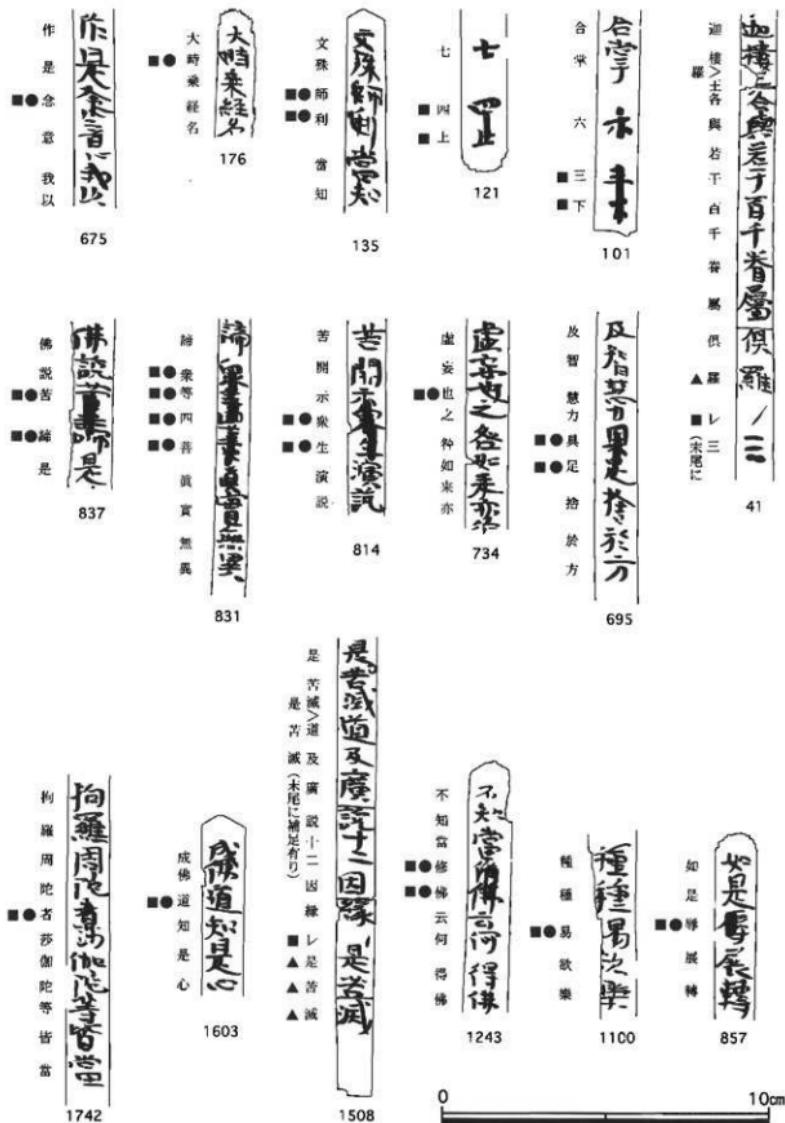
両面に写経するもの

板の片面に写経することを基本とするが、両面に写経されているものが3点確認された（第144図）。これを出土時の東の順番で検証すると、両面に写経されたものは一面に誤字・脱字を含む次行、あるいは別の箇所の経文が書かれており、もう一面に写経された経文は東となっていた前後の板の経文の順番と整合している。これは、書き損じによって一面が使用不能になったため、正しい経文をもう一面にあらためて写経し直したものと考えられる。写経を両面に行なうか否かは時期差の一つの指標とされているが、本例は時期的な特徴を示していないことは明らかであり、一般的な両面写経とは性格を全く異にす

<p>正法傳壽命像</p> <p>王法住僧壽命像</p> <p>● 法住僧壽命像</p>	<p>善須摩本國有</p> <p>喜須摩本國有</p> <p>▲ 喜須摩本國有</p>	<p>而諸佛現覆在前</p> <p>而諸佛不現在前如</p> <p>▲ 而諸佛不現在前如</p>	<p>已成佛道者於諸過去</p> <p>已成佛道者於諸過去</p> <p>▲ 已成佛道者於諸過去</p>	<p>薩見此光照世</p> <p>薩見此光照世</p> <p>▲ 薩見此光照世</p>
1750	1749	1346	454	173
<p>爲教書護聖像</p> <p>爲教書護聖像</p> <p>○ 教書護聖像</p>	<p>夜叉乾闥婆阿脩</p> <p>夜叉乾闥婆阿脩</p> <p>○ 夜叉乾闥婆阿脩</p>	<p>名日月火</p> <p>名日月火</p> <p>○ 日月火</p>	<p>知一切世間苦難信之法</p> <p>知一切世間苦難信之法</p> <p>○ 知一切世間苦難信之法</p>	<p>瑞金釤剛請珍奴</p> <p>瑞金釤剛請珍奴</p> <p>○ 瑞金釤剛請珍奴</p>
812	167	153	141	91
<p>菩薩等今成阿耨多羅</p> <p>菩薩等今成阿耨多羅</p> <p>○ 合成阿耨多羅</p>	<p>在著作是念我等</p> <p>在著作是念我等</p> <p>○ 在著作是念我等</p>	<p>餘百千萬億人民</p> <p>餘百千萬億人民</p> <p>○ 百千萬億人民</p>	<p>散衆乞塞華種種</p> <p>散衆乞塞華種種</p> <p>○ 散衆乞塞華種種</p>	
1807	1732	1361	1229	



第141図 加字、不完全な文字、筆にためらいがあるもの



第142図 訂正痕があるもの

菩薩不休自喜寶掌三摩耶王三摩耶力陀菩

●菩薩不休息菩薩寶掌菩薩藥王菩薩勇施菩

ト一菩薩勇施菩

菩薩不休息菩薩寶掌菩薩藥王菩薩勇施菩

有業誓所歸又我等爲一切世間天

唯有如來我等所歸又我等爲一切世間天

唯有如來我等所歸又我等爲一切世間天

唯有如來我等所歸又我等爲一切世間天

惱急甚可怖畏凡苦難處復方便
無知鑑聞父海猶故樂著嬉戲而已

飢渴惱急甚可怖畏此苦難處況復方便

諸子無知雖聞父誨猶故樂著嬉戲不已

779/780

1796・重複

1796・重複

20重複

20重複

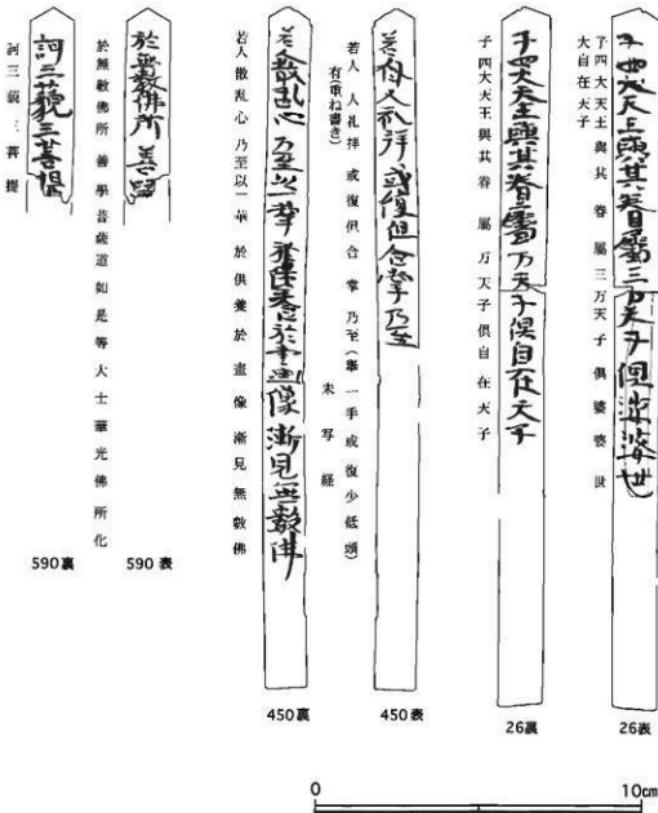


第143図 重複して写經するもの、1枚に2行写經するもの

るものと判断すべきであろう。

同じ行を写経するもの

同じ行を写経する個体が2枚確認されている(第143図)。これは別個体(別写経)のこけら経の1枚が混在したと考えるよりも單に同じ行を重複して写経してしまったと考えるのが妥当であろう。1796は、次の東の1枚目に相当する1801の巻束番号の部分が欠損しているため検証不可能であるが、20の重複はこれ以降の写経および後述する巻束番号の法則に影響を及ぼしていない。これは写経の方法を知る上で大いに参考になる。重複した個体を含む20枚の東は、東の冒頭の3枚の状況が不明であるため検証は困難であるものの、冒頭の3枚(行)のいずれかが書き忘れたか、板がこの東については1枚多い21枚存在していたかのいずれかであろう。この重複がそれ以降の巻束番号の法則を崩していないことから、巻束番号は写経前に既に記されていた可能性があろう。



第144図 両面に写経するもの

1枚に2行写経するもの

こけら経は通常1枚に経文1行を写経することが基本であるが、今回、1枚に2行の写経を行ったものが2枚確認された（第143図）。そのいずれもが、後述する巻束番号によって判明する20枚1束のまとまりから見た場合、19枚目の板に相当している。この資料の存在によって、経文の20行目を写経するための20枚目の板が何らかの理由によって存在していなかったと推測できる。しかも、これ以降の巻束番号には狂いが生じていない。この資料の存在から、板があらかじめ20枚を1束として分割してあり、写経時手本經と板との対応関係（割り当て）は容易であったものの、その分割時に枚数が元々1枚欠けていたか、写経中にこけら1枚が使用不能となった（書き損じや破損など）状況において、不足の1枚（20枚目）を補充することができない状態にあったことは明らかである。

巻束番号をもつもの

資料の中には経文の順番を示す数字や文字（以下、巻束番号とする）を記すものがあり、当時の写経の方法を復原する上で興味深い情報を提供している。巻束番号は、20枚ないし、40枚単位に記される例が圧倒的に多く、手本經となる折本切断經（折本装）の中にこれに対応するものがあることが指摘されている（柴田他：1975）。

仁田館遺跡から出土した板の下端部にも巻束番号が確認されている。巻束番号は20行おきに記されている。このことから、写経の際の手本とする手本經が20行単位のいわゆる折本經であったと推測することができよう。巻束番号には「一ノ二」、「三上」、「三下」、「六十五」、「六十六」などが認められ、その書式に統一性がない。これは、伝世品に見られる手本經の表紙あるいは、経文の行肩に記された巻束を示す書き込み（元興寺極楽坊例など）が不統一であったことに起因すると考えられる。換言すれば、手本經が伝世する過程で、その時々で利便性を考慮した様々な表記が追加されていった結果、今回の写経の際に生じたこけら経の巻束番号にも不統一が生じたと推測することができよう。なお、他の発見例、出土例などでは法華經の品単位で20行単位とする例（福井県一乗谷遺跡など）が一般的であり、品に無関係に20行単位が貫徹される事例はないようである。

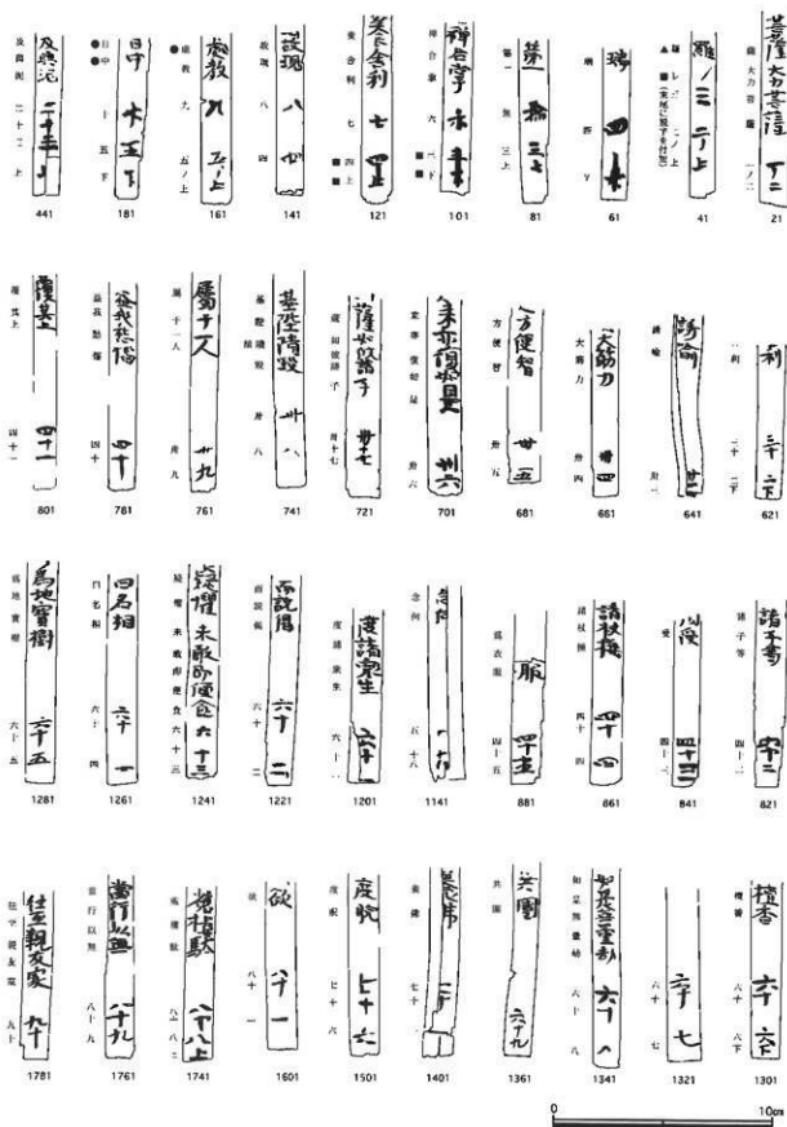
さらに興味深い点は、巻束番号の書式が不統一であるのにもかかわらず、残存するこけら経すべてが経文を20行づつ区切る手法が貫徹され、全く狂いが生じていないことである。これは、巻束番号が写経する人物にとって手本經と板の組み合わせを認識するための一種の記号に過ぎなかったことを示していると言えよう。また換言すれば、巻束番号を記した人物（註1）はその番号の意味を十分に理解していないかった可能性を示唆するものと言えよう。

巻束番号の記入位置・手順

巻束番号は板下端部に記されるが、下端部の特定部分を避けるように、不自然な字間で記されているものが比較的多く認められる。これは、20枚1束の板の下部を伝世品にあるような「こより」等で括った状態のままで巻束番号を記したことを示している可能性があり興味深い（第145図）。巻束番号は、必要枚数に整え、こよりがかけられた後に記された可能性が高いと言えよう。巻束番号を記したのが写経前か、写経後かを厳密に検証することは困難であるが、記された巻束番号の書式が不統一で写経後のこけら経の管理には適さないこと、経文と巻束番号の筆跡が別人のものと判断されることなどから、巻束番号を事前に記し、複数人による写経の分担を明確化し、かつ効率化をはかる目的で記したと考えることがより自然であると考えられる。

こけら經写経の手順

以上のこけら経に残された手がかりをもとに、仁田館出土こけら経がどのような手順で写経されたのかをある程度明らかにすることができるよう。ここでは仁田館こけら経の写経の手順について若干の推測を含め検討を行うこととしたい。



第145図 卷東番号をもつもの

「板を20枚1束に整える」

こけら経20枚1束のうち19枚目の板に2行を写経するもののが存在から何らかの理由によって不足した20枚目の板の補充が不可能であったと推測されること、またそれ以降の巻束番号に齟齬はきたしていないことなどから、板は写経前に20枚1束として整えられていた可能性が高い。

「下端部を「こより」等で縛った後に巻束番号を記す」

巻束番号の中には文字間に不自然な空白が認められるものがあることから、伝世品（戸潤：1992）に認められるような「こより」によって縛った後に巻束番号の記入を行った可能性が高い。なお、写経後「こより」によって縛った上で巻束番号を記入する可能性も考えられるが、書式が不統一であることから、巻束番号がこけら経写経後に束を管理する通し番号のような目的で記されたとは考えにくい。したがって、写経後に巻束番号が記される意義、可能性は低いと言える。また、巻束番号は経文とは異なる人物の筆跡である可能性が指摘されており（註）、写経と巻束番号の作業には個人差と同時に時間差を内包している。巻束番号は手本経に記された書式が不統一なものを機械的に書き写したものと推測される。

「こより」を解き写経を行う

20枚1束に整えられ、下端を「こより」等で縛った上で巻束番号を記した板は、いよいよ写経の作業に入る。「こより」が解かれ、巻束番号をたよりに該当する手本経を開き、写経が開始される。写経は、裏面に次の板（経文）が転写されているものが存在することから、絵巻等に認められる扇状に板を広げ手に持ちながら写経したと考えるよりも、一旦「こより」を解き、一枚写経するたびに机上に置かれた写経を終えた板に重ね合わせて行くという方法が採られたと推測される。

「写経の校正」

写経後に校正が行われた痕跡が認められる。その方法は訂正の度合いによっても異なるであろうが、訂正箇所にレ点や抹消線を付し、板下端に訂正するもの（第142図）、字間や字間脇に訂正するもの（第141図）などがあり、訂正方法が統一されていないことが指摘できる。これが写経中の本人の訂正であるか、写経後に別人によって校正が行われたか検証は困難であるが校正方法が不統一であることから前者と同時に後者の存在も否定することはできないであろう。

「写経の完了」

写経を終えたこけら経は絵巻等に認められる仏事に供されたと推測される。

「別所に保管」

20枚1束を基本単位とする状態で密着して出土しているのにもかかわらず、一部に経文が連続していない部分が確認されていることから出土位置である自然流路（SR1）に至る以前に一定時間保管されたと推測される。

「こけら経の遺棄」

今回の出土は妙法蓮華經序品第一から妙法蓮華經授學無學人記品第九までの4割強であり、それ以降の経文を一切含んでいない。法華經二十八品を写経したことを前提とすればこのような限定された部分の出土は自然流路に遺棄された時点ですでに前半部分だけであった可能性を考える必要があろう。なお、こけら経出土資料の大半が流路や井戸など「水」に関連した遺構から出土することから、百練抄に見られる入水供養との関連を想定することがあるが、木製品の大半が低湿地で発見されることを考慮し、文献等の記述との関連については、より詳細な検討が必要であることが指摘されている（松浦原田：1992）。

註

1 岩崎文書鑑定研究所所長岩崎六三郎氏によれば、経文と巻束番号の筆者は別人の可能性が高いとの所見が山

されている。なお、経文については筆跡にいくつかの違いが確認されるが、同一人物の筆跡であっても写經時の精神状態等によって文字が異なる場合もあることから写經に携わった人数の特定については慎重になる必要がある、との所見を得ることができた。

引用参考文献

- 足利市教育委員会文化財保護課 1995 「法界寺発掘調査概要」
- 石川県立埋蔵文化財センター 1984 「普正寺遺跡」
- 戸瀬幹夫 1992 「加賀出土のこけら経」『石川県立博物館紀要 5』 石川県立歴史博物館
- 石川考古学研究会 1997 「祭祀具Ⅱ」石川考古学資料調査・集成事業報告書
- 石田茂作 1977 「佛教考古學論叢 三 経典編」
- 石田茂作 1984 「仏教考古学講座」第6巻 経典・經塚
- 岩倉市教育委員会 1976 「大山寺祐経」岩倉文化財調査報告 I
- 元興寺文化財研究所 1994 「中世庶民信仰資料」
- 京都市文化観光局 財団法人 京都市埋蔵文化財調査研究所 1987 「鳥羽離宮跡発掘調査概報」
- 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター 1994 「清洲城下町遺跡IV」(資料編)
- 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター 1994 「清洲城下町遺跡IV」(本文編)
- 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1998 「平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要」
- 田中信清 1980 「経木 ものと人間の文化史37」
- 柴田 實 1975 「こけら経」『日本仏教民俗基礎資料集成 第六巻』元興寺極楽坊VI 中央公論美術出版
- 奈良県立橿原考古学研究所 1984 「三郷町 平隆寺」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第47冊
- 奈良県立橿原考古学研究所 1994 「奈良県遺跡調査概報 1993年度(1分冊)」
- 奈良市教育委員会 1992 「奈良市埋蔵文化財調査センター紀要」
- 奈良市教育委員会 1993 「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書」
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1983 「草戸千軒町遺跡 一第32次発掘調査概要一」
- 福井県立朝倉氏遺跡資料館 1983 「特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡XV」
- 福井県立朝倉氏遺跡資料館 1984 「朝倉氏遺跡資料館紀要」
- 福岡市教育委員会 1988 「井相山C遺跡II」
- 本田奈都子 1995 「池島・福万寺遺跡出土のこけら経について」『大阪文化財研究』第8号 財団法人 大阪文化財センター
- 松浦五輪美・原田憲二郎 1992 「祐経の考察—分類と編年について—」『奈良市埋蔵文化財センター紀要』 奈良市教育委員会
- 木簡学会 1987 『木簡研究』第9号
- 木簡学会 1990 『木簡研究』第12号
- 木簡学会 1991 『木簡研究』第13号
- 木簡学会 2000 『木簡研究』第22号

第5節 こけら経保存処理のための予備実験と処理の実際

1 はじめに

平成13年度に静岡県田方郡函南町仁田館遺跡から多量のこけら経が出土した。材質はヒノキの柾目板で（板目板64点を含む）、長さ22cm、幅1.5cm、厚さ0.5mm（いずれも平均値）の法量を有し、虫頭状を呈している。片面に法華経が写経されており、経文（墨書）は鮮やかに遺存しているものが多いが、木製遺物の腐朽程度を示すこけら経の含水率（表1）は600～753%であり、極めて脆弱といえる。

総出土点数は1,014点、うち完形品が632点、下端部欠損品が150点、上端部欠損品が124点、両端部欠損等の破片が108点である（写真1）。また、経文が同定できた枚数は865枚である。

今回、このこけら経全点を保存処理したので報告する。

2 木製遺物の保存処理

遺跡から出土する木製遺物などの木材および川や湖に沈んでいた木材を一般の木材と区別するため、出土木材または水浸出土木材（Waterlogged Wood）と呼んでいる。

木製遺物は、地下水位以下に埋没した遺跡から出土することが一般的で、乾燥や湿潤を繰り返す丘陵上に位置する遺跡から出土することは稀である。乾湿を繰り返す埋没環境では、木材を腐らせる微生物（木材腐朽菌）が活動するための十分な酸素と水が供給されるため、木製遺物は土壤中で分解され消滅してしまう。木製遺物が遺存するためには、水分を適量含む粘土で真空パックされた状態に近い埋没環境が必要である。しかしながら、長い年月土中に埋没している間に木材の主要な成分の樹脂分やセルロースなどは溶け出て、そのかわりに多量の水が木製遺物に染み込んでいる。外見上は強固に見えるものでも、指で容易に押しつぶれるほど軟らかくスponジ状態で、そのまま乾燥させるとひび割れや収縮を起こし、最終的には元の形をとどめないと変形してしまう。そのような危機的状況から遺物を守り、考古資料として、あるいは博物館資料として活用できる状態を維持、回復させることが保存処理の第一義的目的である。

木製遺物の保存処理の方法は、大きく分けて二つある。そのひとつは、多量に含まれている水分を他の安定した物質であるポリエチレンゴム（以下、PEG）や高級アルコール、天然樹脂、糖アルコールなどの薬剤に置き換える薬剤含浸法。もう一つは、不安定な水分を、木材の形状を変えることなく強制的に除去する真空凍結乾燥法である。

PEGは、石油から精製される高分子化合物で、木製遺物の保存処理以外では、化粧品などの原材料として広く利用されている人体に無害な物質である。

真空凍結乾燥法は、インスタント食品や医薬品の製造に幅広く利用されている技術である。木製遺物の収縮・変形は、木材から水分が蒸発するときの水の表面張力が原因とされているため、その表面張力の影響なく乾燥させることができることでそれが可能となる。



写真1 こけら経の破片

3 こけら経保存処理のための予備実験

3-1 目的

予備実験の目的は、こけら経を保存処理するための最良の処理法を明らかにすることである。また、処理後の状態として、①色調と質感の保存、②形状と寸法の安定性、③材質の機械的強度、また、遺物の状態とは別に④作業性と安全性の確保、を評価の項目として追加し、優先順位とした。①は墨書の鮮明化と木材色の回復により、経文を肉眼で判読可能とする状態の維持回復である。こけら経=経文のもつ特異な考古学的資料価値の保存である。PEG含浸法のデメリットのひとつは処理後の木材の黒色化であるが、こけら経の場合、致命的な情報の損失となる。②は木製遺物の保存処理法評価の基本となるものである。③は材質の機械的強度の維持強化であるが、今回は展示保管用に専用のアクリルケースが準備されているため、処理後に標本の単品を素手で取り扱う機会は想定されていない。移動や展示は常に20枚が1セットのケース毎に行われる。研究家による再調査に耐えうる強度は最低限必要となるが、水分を除去した後の木製遺物の再強化は、アクリル樹脂の塗布、和紙による裏打ち等、必要に応じて再処置が可能である。

3-2 含水率と樹種同定

含水率は木材に含まれる水分量を表し、木製遺物の腐朽程度の目安としている。現生木の含水率は、100%内外で、木質部1kgに対して1kgの水分を含んでいる状態である。製材された木材は約15%。これに対し、出土木材の含水率は、概ね針葉樹材が150~600%、広葉樹材が400~1000%である。一般的に針葉樹材より広葉樹材が高く、腐朽が進行している場合が多い。

こけら経の含水率を表1に示す。測定に用いた試料は、両端部欠損、無墨痕で接合不可能な破片5点である。針葉樹材の出土木材としては極めて高い含水率である。試料の乾燥前と乾燥後の状態を写真2、3に示すが、保存処理を実施しなければ、こけら経はすべてこのように収縮・変形してしまう。

こけら経の材質はヒノキの柾目板がほとんどで板目板は64点である。年輪幅は非常に狭く、0.5~1.0mmで、糸柾目と呼ばれる材である。板の厚さは、薄いもので0.2mm、厚いもので1.0mmである。また、一枚の板の厚さは一定ではなく、部分的に裏側が透けて見えるほどに薄い部位がある。

樹種同定は、こけら経の破片10点から直接、ハンドセクション法でブレバラート標本を作製し、生物顕微鏡で検鏡することで行った(写真4、5、6)。なお、作製した標本は当研究所清水整理事務所保存処理室で保管している。以下に同定に利用した材の解剖学的特徴を示す。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科

仮導管、樹脂細胞および放射柔細胞の3種の構成からなる。

早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅および年輪幅が狭く均質な材である。樹脂細胞は晩材部に散在し、ときに接線状を呈する。樹脂細胞の内容物は赤褐色を呈することが多く、樹脂細胞の水平

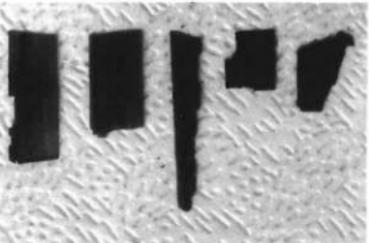


写真2 含水率測定試料 乾燥前

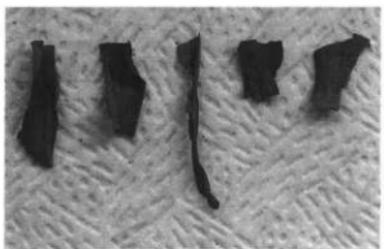


写真3 同 乾燥後

壁は通常肥厚し、結節状となることが多い。分野壁孔は円形で、開孔部は幅の狭いレンズ状で垂直～斜めに開いたトウヒ～ヒノキ型で、通常1分野に2個存在する。放射組織は単列で、細胞高は1～15である。以上の形質によりヒノキと同定した。

ヒノキは日本産の針葉樹ではコウヤマキに次いで優秀な木材で、あらゆる用途に使用される。

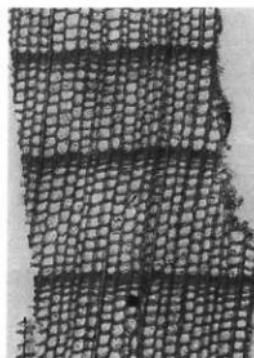


写真4 ヒノキ 木口 50×

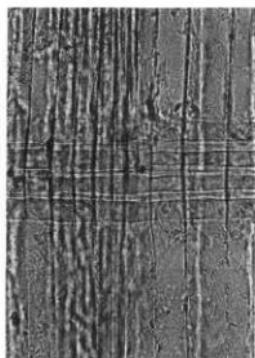


写真5 樋目 200×

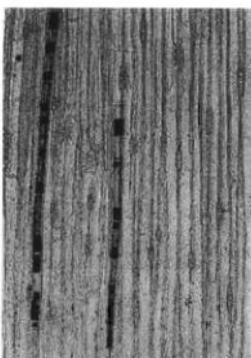


写真6 板目 50×

表1 こけら経保存処理のための予備実験 含水率

試料No.	幅(mm)	長さ(mm)	厚さ(mm)	含水重量(g)	絶乾重量(g)	含水率(%)
1	13.0	34.0	0.4	0.128	0.015	753.33
2	14.0	26.0	0.5	0.125	0.017	635.29
3	8.0	45.0	0.5	0.127	0.015	746.67
4	13.5	15.0	0.3	0.049	0.007	600.00
5	15.0	20.0	0.7	0.122	0.017	617.65

絶乾重量:105°Cで乾燥させ、恒量に達したときの重量

$$\text{含水率(%)} = \frac{W - w}{w} \times 100$$

W=含水重量 w=絶乾重量

3-3 試料

予備実験に用いた試料は後述する理由で墨書のある実物を使用したが、予備実験に先行する先行予備実験を両端部欠損、無墨痕で接合不可能な破片で実施した。先行予備実験の方法と内容は予備実験とはほぼ同じである。実施した理由は、尖際のこけら経の処理では、ある程度のルーチンワークが想定されていたため、経験が少なく慣れていない処理法や薬剤の取り扱い等の安全性と作業性を考慮したためである。結果的に、先行予備実験では糖アルコール含浸法を試行したが、高濃度での薬剤のべとつきや含浸後の表面処理において、薄い板材であるこけら経には作業性という点で不適切な処理法と判断し、予備実験の処理法の選択肢から除外した。

予備実験に使用した試料は、下端部が2/3～3/4欠損している経文が遺存するこけら経である。妙法蓮華経譬喻品第三(578～583行目)6枚、妙法蓮華経譬喻品第三(586～589、591、593行目)6枚、妙

法蓮草経信解品第四(1073~1078、1080行目)7枚の計19枚である。実験試料として、实物を使用した理由は、最優先の評価項目を墨書の鮮明化と木材色の回復により、経文を肉眼で判読可能とする状態の維持回復と位置付けたからである。墨書のない部位を試料とした場合、処理による墨痕損傷の可能性を実験段階で把握することが困難となるからである。実際、予備実験でV系の試料No.582の墨痕が、レーヨン紙に転写された状態を、真空凍結乾燥直後に確認することができた(写真7)。また、こけら経と同様な物性をもつ別材の試料を新たに作製することは極めて困難である。

表2に試料の一覧を示す。試料の法量は、平均値で長さ6.07cm、幅1.31cm、厚さ0.55mm、重量は0.35gである。木取りは2点が板目でそれ以外は柾目である。年輪幅は0.5~1.0mm。また、表には処理後の寸法および重量変化率を併記した。

3-4 実験方法

試料がこけら経そのものであるため、木筋等の処理で実績のある処理法を選択した。処理法は表3のとおり真空凍結乾燥法・高級アルコール含浸法およびアルコール・キシレン樹脂法である。薬剤含浸の期間は各段階1週間程度であり、II、IV、IX系の薬剤含浸工程は常温で行い、I、III、V~VII系は60°Cに加温した。真空凍結乾燥は-40°Cで予備凍結した後、CT温度を-45°Cに保ちながら庫内温度を徐々に

表2 こけら経保存処理のための予備実験 試料一覧

処理法	試料No.		寸法変化率(%)			処理前 重量(g)	処理後 重量(g)	重量変化 率(%)	木取り
	系	(行)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)				
真空凍結乾燥法									
I	578	4.65	1.50	0.50	2.90	1.30	0.27	0.16	40.74 柾目
I	586	5.60	1.35	0.70	1.80	2.10	1.88	0.45	0.25
	1073	6.60	1.20	0.60	1.70	1.50	0.36	0.21	41.67 柾目
	579	4.95	1.25	0.50	0.80	※1.40	0.22	0.16	27.27 板目
II	587	5.80	1.30	0.70	2.00	4.30	1.75	0.44	0.24
	1074	6.65	1.20	0.60	1.20	0.80	0.30	0.17	43.33 柾目
	580	5.00	1.20	0.40	0.60	0.70	0.26	0.17	34.62 柾目
III	588	6.00	1.30	0.50	1.20	2.90	1.00	0.30	0.22
	1075	6.80	1.30	1.00	0.60	0.00	0.57	0.38	33.33 柾目
	581	5.10	1.30	0.30	3.30	※5.00	0.14	0.08	42.86 板目
IV	589	6.00	1.30	0.70	1.90	4.30	2.80	0.50	0.20
	1076	7.00	1.35	0.50	1.60	0.70	0.40	0.17	57.50 柾目
	582	5.20	1.45	0.80	2.40	3.30	0.40	0.23	42.50 柾目
V	593	6.45	1.35	0.40	1.30	3.60	2.12	0.28	0.18
	1077	7.15	1.30	0.50	1.40	0.70	0.38	0.24	36.84 柾目
VI	583	5.15	1.20	0.30	3.30	4.30	3.80	0.14	0.05
VII	591	6.20	1.35	0.40	2.00	1.40	1.70	0.30	0.12
VII	1078	7.40	1.30	0.50	1.10	0.70	0.90	0.39	0.20
IX	1080	7.70	1.35	0.60	5.40	2.00	3.70	0.47	0.12

※接線方向

$$\text{寸法変化率(%)} = \frac{L - l}{L} \times 100 \quad \text{重量変化率(%)} = \frac{W - w}{W} \times 100$$

L = 処理前寸法 l = 処理後寸法

W = 処理前重量 w = 処理後重量

表3 こけら経保存処理のための予備実験 処理工程

処理法系	処理工程
真空凍結乾燥法	I メチルアルコール40%→80%→100%→セチルアルコール40%→60%→FD
	II PEG20%→40%+TBA30%→FD
	III PEG20%→40%→60%+TBA30%→FD
	IV マンニトール20%→PEG40%→FD
	V PEG20%→40%→60%→FD
高級アルコール含浸法	VI メチルアルコール40%→80%→100%→セチルアルコール40%→60%→自然乾燥
	VII メチルアルコール40%→80%→100%→セチルアルコール40%→60%→80%→自然乾燥
	VIII メチルアルコール40%→80%→100%→セチルアルコール40%→60%→80%→100%→自然乾燥
アルコール・キシレン樹脂法	IX メチルアルコール40%→80%→100%→パラロイドBT2,10%→自然乾燥
FD=真空凍結乾燥(Freeze-drying) TBA=タータリブチノール(tert-butyl alcohol)	

上げながら重量が安定したところで乾燥工程を終了した。乾燥に要した期間は3日間である。自然乾燥は作業室内に放置することで行う。また、共通の前処理として、EDTA 1%水溶液に24時間浸漬後、流水洗浄を4時間行い内部洗浄を行なったほか、後処理として、熱風あるいは薬剤数%を含むキシレン溶液で表面に残る余分な薬剤の除去を行う。含浸用の保護材として、不織布、レーヨン紙、ステンレス製パンチングボード等を使用した。作業手順等については、実際の処理の項で述べる。

3-5 実験結果

表2に試料の寸法変化率および重量変化率、表4に処理系の評価、写真8に予備実験後の試料の状態を掲載した。

試料の寸法安定性は、概ね良好であるが、VI系の高級アルコール60%含浸が3.80%、IX系のアルコール・キシレン樹脂法が3.70%とやや高い。重量変化は、すべての試料で減少しており、処理前の約1/2程度の重量となっている。重量減少が少なかったのは、II系のNo579とIII系のNo588で30%以下である。

木製品保存処理の基本理念である文化財としての形状維持、強度、処理法の可逆性、遺物表面の情報維持、処理後の環境変化に対する安定性、分析試料としての価値を失わない等の6つの理念は、処理法の評価項目の基本的な条件である。各処理法の結果はそれらの条件をほぼクリアしているといえる。

今回の予備実験では、遺物の特性から①色調と質感の保存、②形状と寸法の安定性、③材質の機械的強度、また、遺物の状態とは別に④作業性と安全性の確保、を評価の項目として設定したことは先に述べた。①の墨書の鮮明化と木材色の回復については、高級アルコール含浸法のVI、VII、VIII系と真空凍結乾燥法のI系の試料にやや黒色化する無彩色化がみられ、III系は木材色を保ちながら滲色となり、いずれも墨書はやや不鮮明となる。質感で不自然としたのは、無彩色化と表面に薄くワックスが塗られたような状態を評価したものであり、自然としたものは、木材色の回復と同時に乾燥した木材の表情が認められたためである。特に、II系、IX系の試料は、木材色の回復に伴う墨書の鮮明化が顕著である。

②形状と寸法の安定性では、VI系、IX系で、寸法安定性にやや不安を残す結果となり、形状についても、わずかであるが前後にやや波状を呈する変形がI系、III系、VI系、VII系、VIII系で認められる。

③材質の機械的強度は、すべてを可と評価したが、取り扱いに細心の注意を払えば割れたり、欠損することがない程度の強度である。運搬、移動、展示は専用ケースを使用することが原則である。



写真7 墨痕の損傷

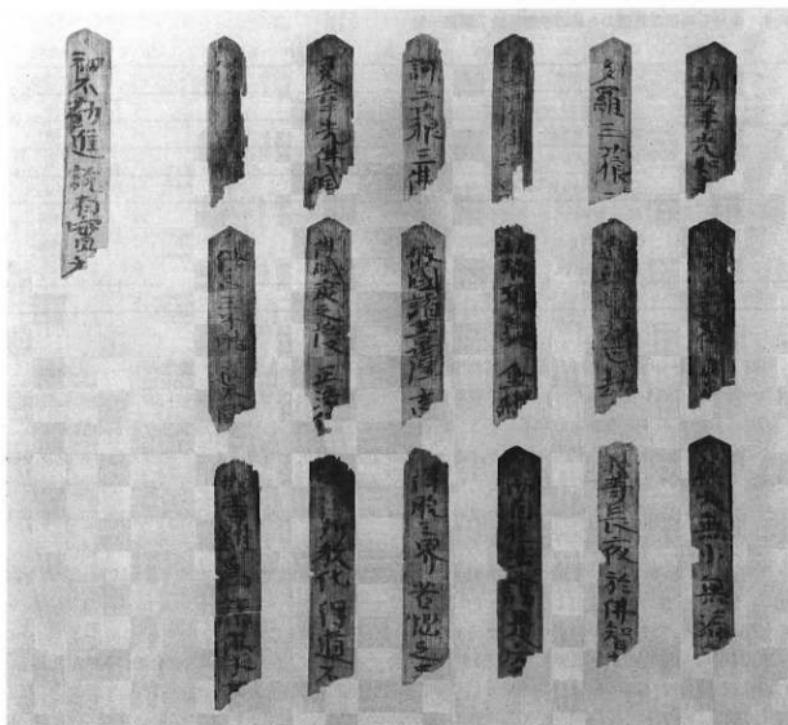


写真8 予備実験の試料



表4 こけら経保存処理のための予備実験 評価一覧

処理法	系	色調	質感	墨書き	寸法安定性	形状安定性	強度	作業性
真空凍結乾燥法	I	無彩色化	やや不自然	不鮮明	良	やや不良	可	やや良
	II	木材色	自然	鮮明	良	良	可	良
	III	木材色・褐色	やや不自然	やや不鮮明	良	やや不良	可	良
	IV	やや木材色	自然	鮮明	やや良	良	可	良
	V	やや木材色	やや自然	やや鮮明	良	良	可	良
高級アルコール含浸法	VI	無彩色化	やや不自然	不鮮明	やや不良	やや不良	可	不良
	VII	無彩色化	やや不自然	不鮮明	良	やや不良	可	不良
	VIII	無彩色化	やや不自然	不鮮明	良	やや不良	可	不良
アルコール・キシレン樹脂法	IX	木材色	自然	鮮明	やや不良	良	可	やや良

④作業性と安全性の確保は、真空凍結乾燥法では乾燥処理後の表面処理、高級アルコール含浸法とアルコール・キシレン樹脂法では含浸後の表面処理の作業性を重視した。真空凍結乾燥法の表面処理は、他の処理法と比較すると非常に容易である。表面処理は、遺物表面に付着する余分な薬剤を除去することをさがすが、真空凍結乾燥後の薬剤はパウダー化しており、熱風を当てることで瞬時に溶けて遺物内部に浸透するためである。こけら経のように極端に薄い遺物では、遺物にストレスを与えない最良の表面処理といえる。高級アルコール含浸法とアルコール・キシレン樹脂法では、含浸濃度の差による違いはあるが、表面に付着する余分な薬剤を除去することは繊細な遺物では手間の掛かる作業となる。

作業の安全性確保については、有機溶剤の取り扱い、換気の徹底等を中心とする安全・衛生教育を実施し、作業の安全性確保につとめた。しかし、引火の危険性の高い有機溶剤を加温する等の処理工程を含む処理法は、できる限り回避すべきといえる。

遺物表面の痕跡や色調を維持するという条件を最優先項目とし、今回の結果を総合的に判断した場合、仁田館遺跡出土のこけら経保存処理法としてはⅡ系の処理法が最良と判断した。

4 実際の処理

予備実験結果を受け、ポリエチレングリコール(PEG) : ターシャリブタノール(以下、TBA) : 水の割合を4:3:3とする溶液に浸漬したのち、真空凍結乾燥するⅡ系の処理法でこけら経の保存処理を本格的に開始したが、予備実験試料では生じなかった症状が一部のこけら経に現れた。破片である予備実験試料には生じなかった真空凍結乾燥法の欠点である軸方向に直交する細かなクラックと割れが、いくつかの完形品のこけら経に生じたのである。以下に、処理工程、実際の処理で起きた問題、その対処法等を具体的に述べることとする。

真空凍結乾燥法の作業工程

①含浸用保護材の取り付け（写真9）

ステンレス製のパンチングボード（250mm×250mm×1mm）の上に湿らせた厚手の不織布4枚、レーヨン紙1枚を重ねた上にこけら経10枚を列べ、霧吹きで湿らせながら下面と同様にレーヨン紙1枚、不織布4枚とパンチングボードを重ね、ステンレス製のガチャ玉で四隅を固定する。

②EDTA 1%溶液に24時間浸漬

③水道水による流水洗浄8時間

④常温のPEG20%水溶液に浸漬（約1週間）

⑤常温のPEG40%+TBA30%水溶液に浸漬（約1週間）

⑥真空凍結乾燥（約2週間）

⑦表面処理（写真10, 11）

写真10は真空凍結乾燥庫内から取り出した直後の状態。PEGはパウダー状となり、表面に付着している。毛先を短く切り抜いた絵筆で軽くerosionのようにPEGを除去した後、ホットエアーガンの熱風でPEGを溶かし（写真11）、キムタオルに吸い取らせる感覚で軽く押さえつけながら除去する。

⑧修復

割っていたもの、新たに割れたものは、シアノアクリレート系接着剤（ゼリー状アロンアルファ）を竹串の先端で点付けし、平坦な場所に置いてゆっくり近づけて接合する。

アルコール・キシレン樹脂法の作業工程

①～③は、真空凍結乾燥法と同じ。

④エチルアルコール置換（30%、60%、100%、各段階約1週間）

⑤キシレン置換（30%、60%、100%、各段階約1週間）

⑥常温の天然樹脂20%キシレン溶液に浸漬（約2週間）

⑦常温の天然樹脂30～35%キシレン溶液に浸漬（約2週間）

⑧室内で自然乾燥

⑨表面処理

天然樹脂5%キシレン溶液を塗布しながら余分な樹脂を除去する。

⑩修復は、真空凍結乾燥法と同じ。

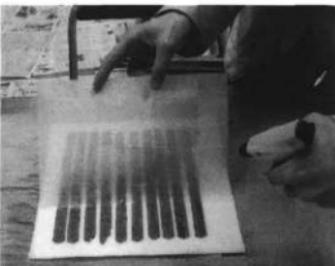


写真9 含浸用保護材の取り付け



写真10 真空凍結乾燥直後の状態

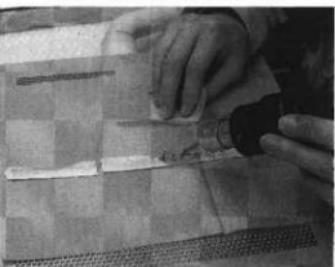


写真11 真空凍結乾燥法の表面処理

真空凍結乾燥法で生じた問題は、軸方向に直交する細かなクラック（写真12）と割れである。現状では、事前にクラックや割れを生じるこけら経を特定することは困難である。こけら経の厚さ、木取り、年輪幅、持ち上げたときの形状や状態、手に伝わる腐朽の程度等、外見上まったく差異のないこけら経に、クラックや割れが生じるものとそうでないものがある。たとえ、1枚単位での含水率を非破壊で測定できる技術や設備が確立しても、処理によって生じる出上木材の正確な変形予測は、影響を与える要素や条件の多様性と複雑な関係性から困難であるといえる。

現状でのこの問題の対応策として、処理法を真空凍結乾燥法からアルコール・キシレン樹脂法に切り替えた。樹脂は、アクリル樹脂パラロイドB72からグンマール樹脂を主成分とする天然樹脂とした。

アルコール・キシレン樹脂法で生じた問題は、前後に波打つ変形（写真13）と左右に湾曲する変形（写

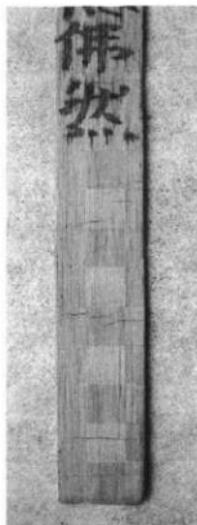


写真12 軸方向に直行する
クラック



写真13 前後に波打つ変形



写真14 左右に湾曲する変形



写真15 保存処理を完了し専用ケースに収納されたこけら経

真14) および軸方向と直交するクラックの発生が認められたことである。

これらの変形は、処理直後に生じるものではなく、1週間あるいは2～3週間後に生じ始め、1ヶ月経過後も形状が安定しないものがある。その多くは、専用ケースに収納する前の仮保管中のコンテナのなかで生じるため、異常の発見にやや時間を要した。

また、色調についても白色化方向への無彩色化が認められたため、再度、処理法の検討を行った。

その結果、処理法を当初の真空凍結乾燥法に戻し、薬剤溶液への浸漬期間、最終濃度の調整、乾燥温度を-20°Cに固定するなどの温度調整、保護材の圧力調整等を改善しながら処理を行い、良好な結果を得ることができた。

保存処理を完了したこけら経は現在、緩衝と滑り止めを兼ねた羅紗紙と切り抜かれた厚紙に保護され、アクリル樹脂の専用ケースに収納されている(写真15)。

5 まとめ

1959年(昭和34年)から、奈良国立文化財研究所が行った発掘調査により膨大な量の木製遺物が平城宮跡から出土したが、これらの遺物の処理法を巡る岩崎友吉・樋口清治、沢田正昭らによる研究と実験と共に、わが国においては木製遺物保存処理の歴史のスタートとなる。いずれの論文も、こけら経と同じ墨書のある木簡の処理法として、真空凍結乾燥法の有用性を指摘している。

仁田館遺跡出土こけら経1,014点のうち、予備実験等で31点、真空凍結乾燥法で713点(38点に割れやクラック)、アルコール・キシレン樹脂法で270点(26点に変形)を処理した。真空凍結乾燥法では約5%、アルコール・キシレン樹脂法では約10%の割合で問題が生じた結果となる。著しく変形したこけら経については再処理が必要である。処理法の可逆性が問われることになる。今後の課題は、問題発生率を0%に近づけることと再処理方法の検討および再処理に伴う処理法の評価であろう。

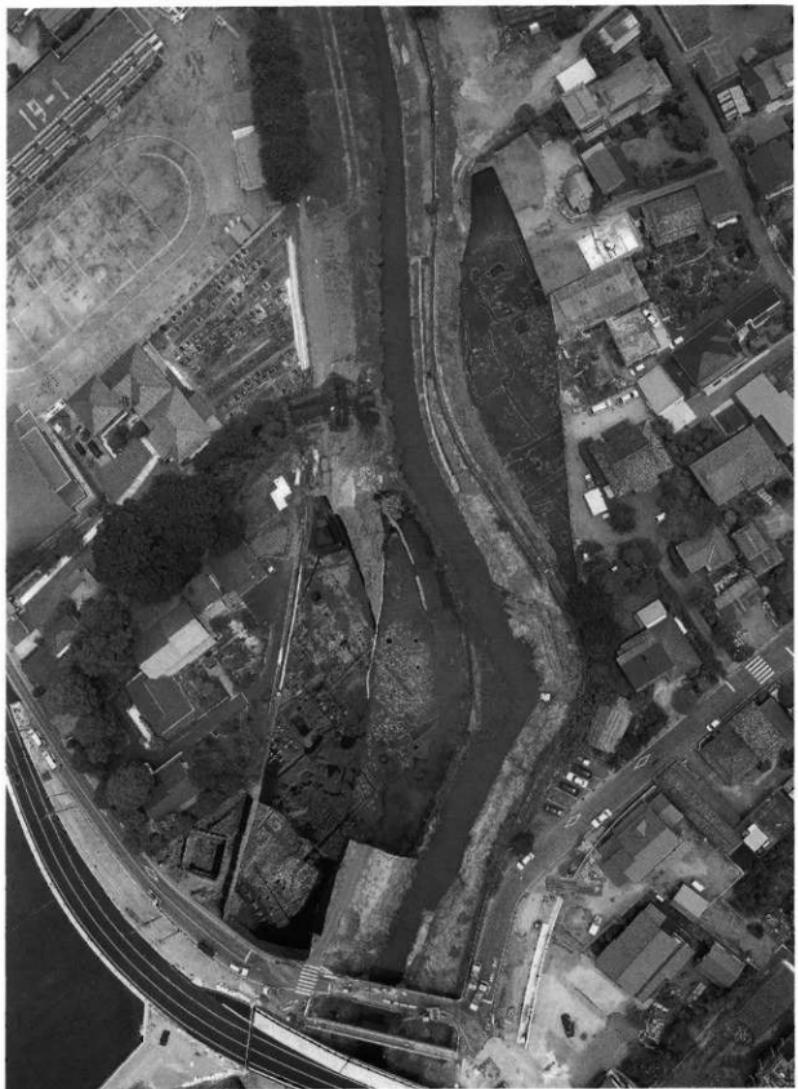
最後に、天然樹脂によるアルコール・キシレン樹脂法について、元興寺文化財研究所の川本耕三氏に多くの御教示をいただいた、記して感謝申し上げる。

参考文献

- 岩崎友吉・樋口清治 1969 「木製品の保存処理(第1報)―平城宮跡出土木簡等について―」『保存科学第5号』 東京国立文化財研究所
- 沢田正昭 1972 「考古資料保存の科学的研究(1)―木簡をはじめとする木製遺物の保存法について―」『研究論集Ⅰ 奈良国立文化財研究所学報 第21冊』 奈良国立文化財研究所
- 増澤文武・廣瀬楳彦 1976 「墨書のある出土木製品の保存処理 柿経の保存法」『保存科学研究室紀要5』 財団法人元興寺仏教民俗資料研究所
- 今津篠生 1999 「出土木製品の保存科学的研究―奈良県四条古墳出土木製品に関する共同研究―」 奈良県立橿原考古学研究所
- 島地謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』 地球社
- 島地謙・伊東隆夫編 1988 『日本の遺跡出土木製品総覧』 雄山閣
- 鈴木一男 1996 「静岡県浜松市角江遺跡出土木製品の樹種」『角江遺跡Ⅱ』 関静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 鈴木三男・能城修一 1997 「石川県金剛山遺跡出土木製品の樹種」『石川県金剛山遺跡 第3分冊』 長野県埋蔵文化財センター

写 真 図 版

図版1



遺跡全景

図版2



1. A区南半全景（北東から）



2. A区南半全景



1. A区北半全景（北から）



2. A区北半全景

図版4



1. A-2区／下水区全景（北西から）



2. A-2区／下水道区全景

図版5



1. B区中近世面全景（南から）



2. B区縄文面全景（南から）

図版 6



1. A-2区全景（東から）



2. A-2区全景（南から）



1. 下水区全景（東から）



2. SH2礎石完掘状況（南から）

図版 8



1. SH2/SH3礎石完揃状況（南から）



2. SH1検出状況（東から）



1. SH1全景（北から）



2. SH1礎石12刻書礎石検出状況



3. SH5完掘状況（南から）

図版10



1. SH4完掘状況（西から）



2. SD10完掘状況（北から）



1. 一分金出土状況



4. SE8完掘状況（南から）



2. SE5完掘状況



5. SE9半裁状況（南から）



3. SE6完掘状況（北から）



6. SE9完掘状況（南から）

図版12



1. SD1堀完掘状況（南から）



3. SD1堀完掘状況（西から）



2. SD1堀完掘状況（東から）



4. SD1堀完掘状況（西から）



1. SD2完掘状況（東から）



4. SD7完掘状況（南から）



2. SD2内貯蔵穴完掘状況（西から）



5. SD17南端完掘状況（南から）



3. SD8完掘状況



6. SD3遺物出土状況（東から）

図版14



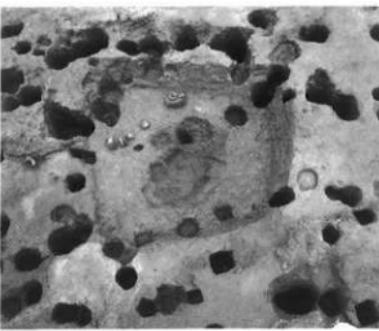
1. SD16完掘状況（東から）



3. SK6完掘状況



2. SD13完掘状況（北から）

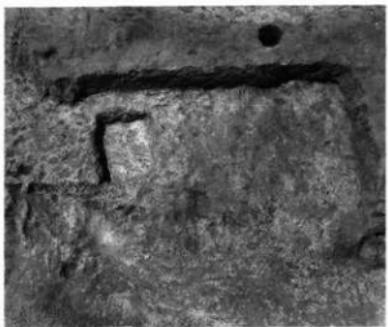


4. SK12完掘状況（北から）



5. SK7完掘状況（北から）

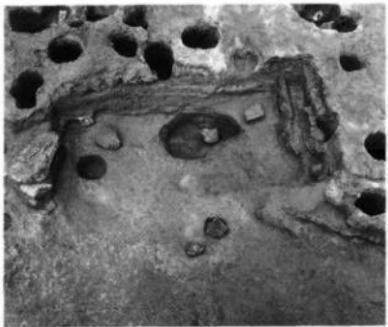
図版15



1. SK10完掘状況（東から）



3. SX4遺物の出土状況（南から）

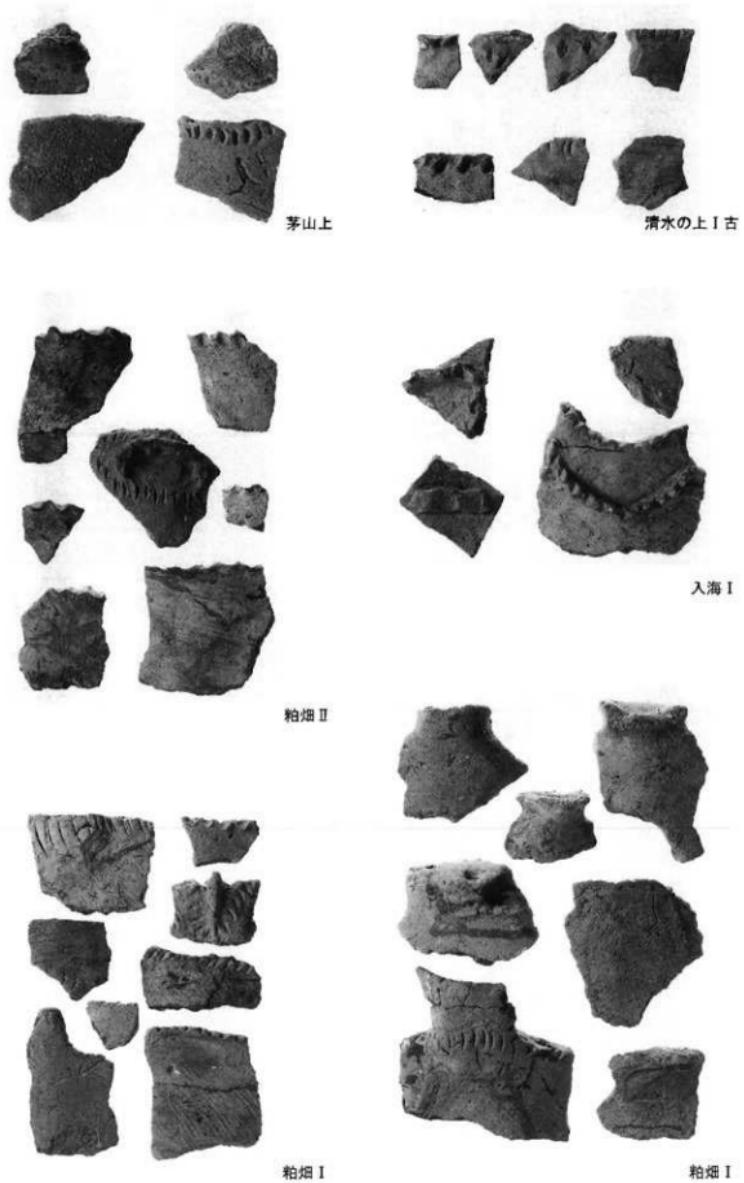


2. SK9完掘状況（東から）



4. SR1完掘状況（北から）

図版16

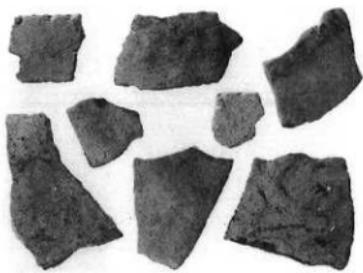




該期無文 口縁



塙屋



清水の上Ⅰ新



前期～後期



該期無文 底部



図版18



18-1



18-1



18-1



18-1



18-1



18-1



18-1



18-1

図版19



19-(83-2)-1



19-(83-2)-2



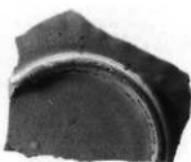
19-(83-3)



19-(83-7)



19-(83-1)



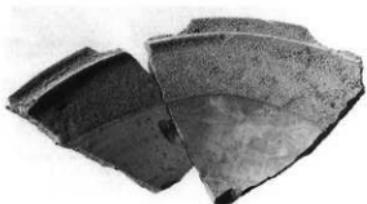
19-(83-8)



19-(82-22)



19-(83-5, 6)



19-(82-11)



19-(81-17)

図版20



20-(83-13)-1



20-(83-13)-2



20-(83-14)-1



20-(83-14)-2



20-(84-3)-1



20-(84-3)-2



20-(83-9)



20-(83-4)



20-(83-10)



20-(83-12)



20-(83-11)



20-(84-21)

図版21



21-(84-24)



21-(85-9)



21-(84-27)



21-(86-2)



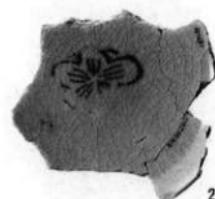
21-(85-6)



21-(85-21)



21-(85-1)



21-(85-13)



21-(85-3)



21-(85-18)

図版22



22-(86-5)



22-(86-18)



22-(86-10)



22-(87-1)



22-(86-16)



22-(86-17)



22-(86-19)



22-(86-27)



22-(86-23)



22-(86-21)

図版23



23-(87-5)



23-(87-2)



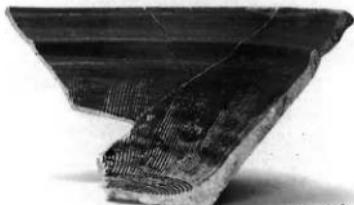
23-(87-3)



23-(87-10)



23-(88-2)



23-(88-1)



23-(87-12)



23-(87-16)

図版24



24-(92-17)



24-(87-18)



24-(92-11)



24-(92-18)



24-(92-1)



24-(92-19)



24-(92-4)



24-(93-2)



24-(91-21)



24-(93-13)



25-(93-15)



25-(94-6)



25-(93-20)



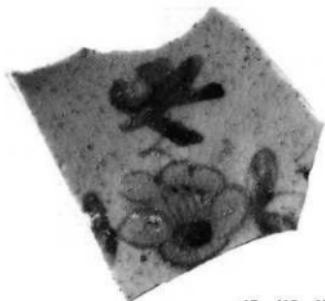
25-(93-10)



25-(94-27)



25-(94-23)

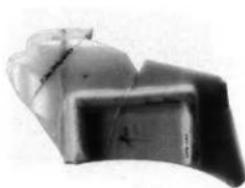


25-(95-2)-1



25-(95-2)-2

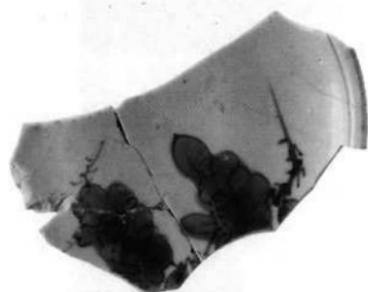
図版26



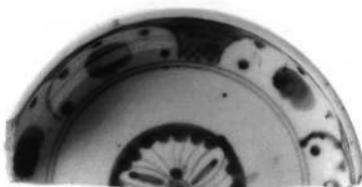
26-(94-28)



26-(95-3)



26-(95-1)



26-(96-2)



26-(95-4)



26-(97-12)



27-(99-2、3)

27-(99-6)



27-(100-6)

27-(100-4)



27-(100-5)

27-(100-7)



27-(100-3)



27-(102-2)

図版28



28-(100-8)-1



28-(100-8)-2



28-(100-8)-3



28-(100-8)-4



28-(101-1)-1



28-(101-1)-2



図版30



30-(103-1)



30-(104-9)



30-(105-1)-1



30-(106-3)



30-(106-2)



30-(104-1)



30-(104-12)



31-(106-6)



31-(107-7)



31-(108-14)



31-(108-13)



31-(109-19)



31-(110-14)



31-(110-11)

図版32



32-(109-5)



32-(108-16)



32-(110-1)



32-(109-18)



32-(109-14)



32-(109-2、3)



32-(111-8)



33-(111-9)



33-(111-4)



33-(110-15)-1



33-(111-10)



33-(110-15)-2



33-(110-15)-3

図版34



34-(120-2)



34-(117-3)



34-(118-3)



34-(118-2)



34一下(98)



35-(121-1)



35-(121-2)



35-(121-3)



35-(118-1)



35-(120-5)



35-(123-1)

図版36



36-(117-2)



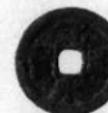
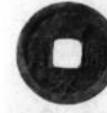
36-(121-5)



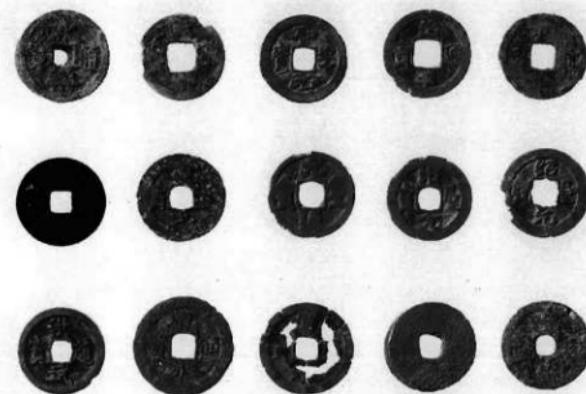
36-(122-6)



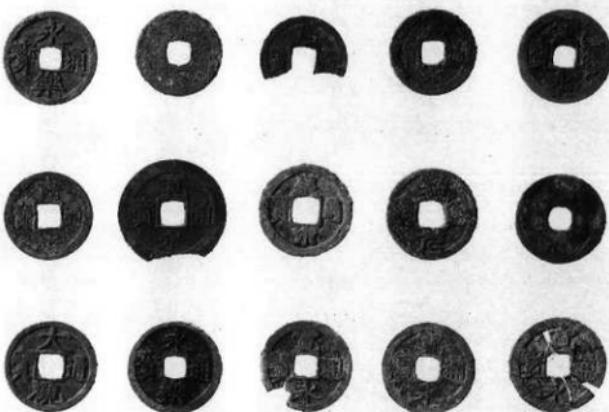
36-(120-4)



36-下(112)

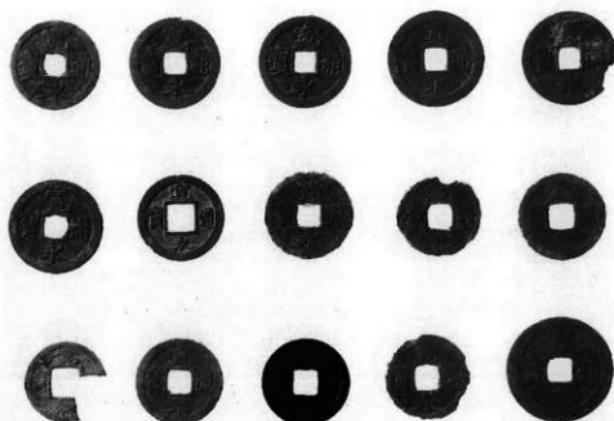


(113、114)37—上



(113、114)37—下

図版38



38-上(116)

38-(116-14)-1



38-(116-14)-2



38-(123-3)



38-(123-4)



38-(123-5)



39



39左下

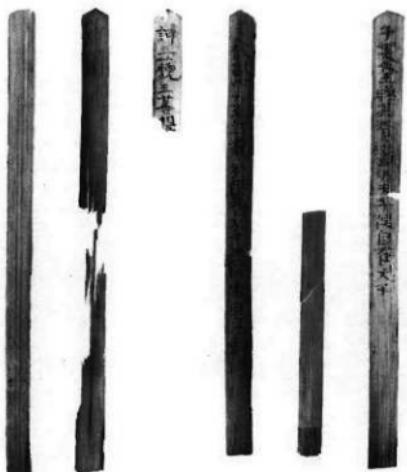


39右下

図版40

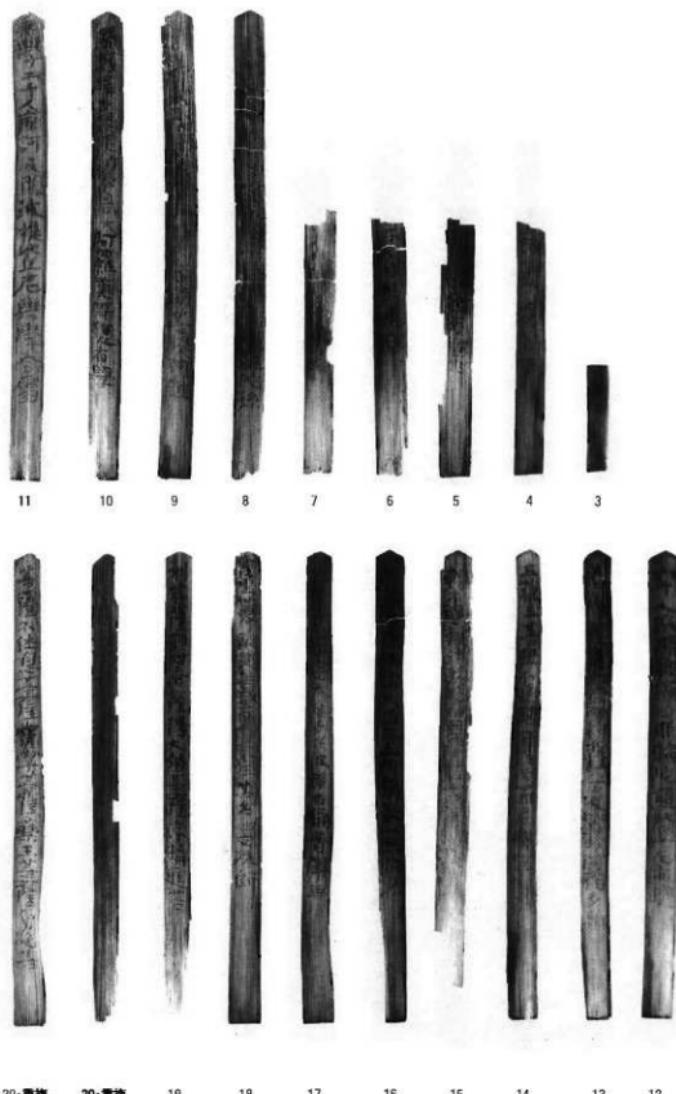


両面写経表

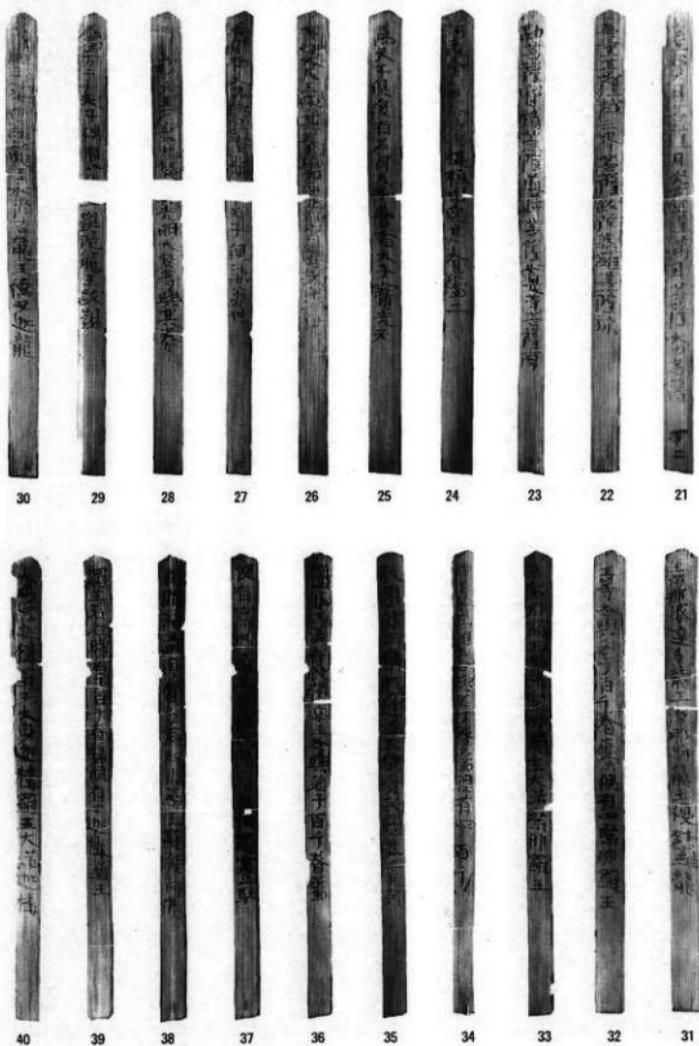


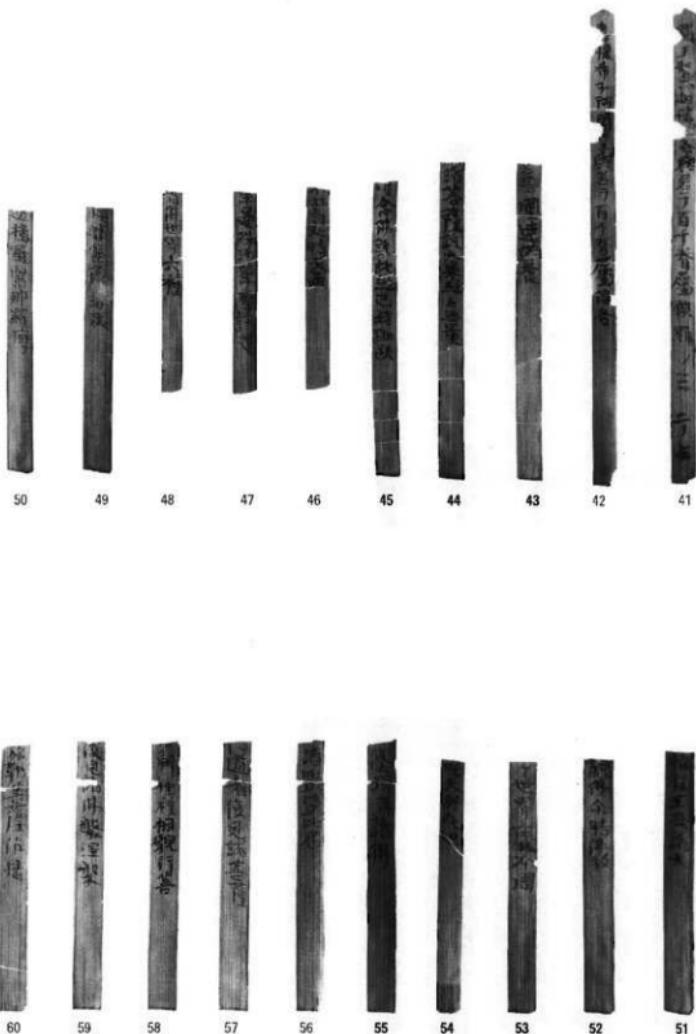
両面写経裏

図版41

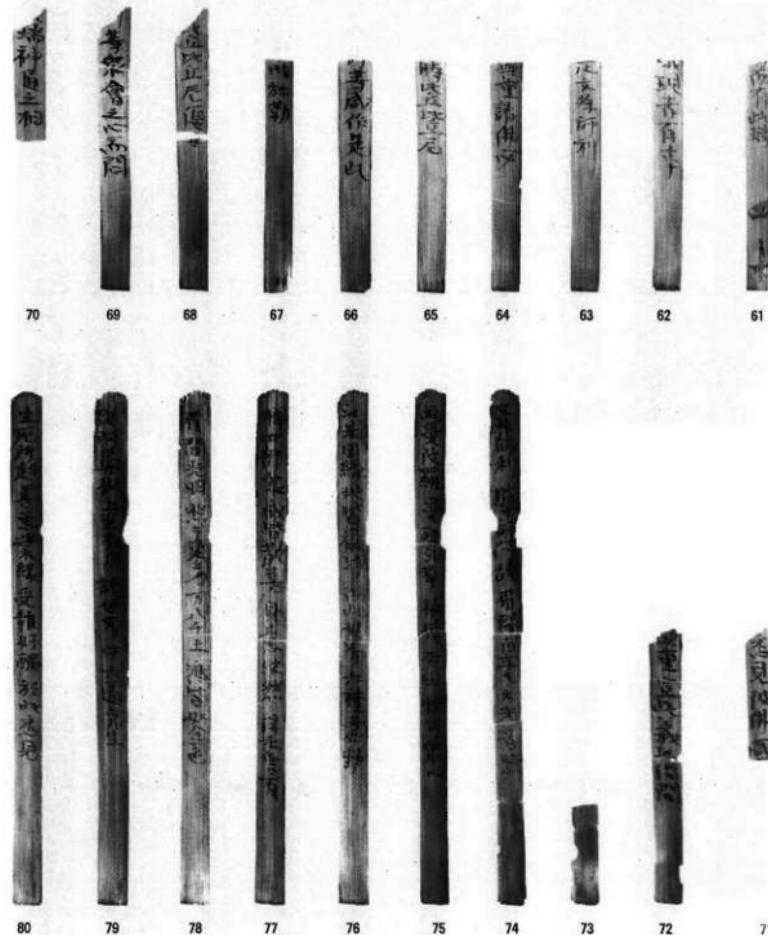


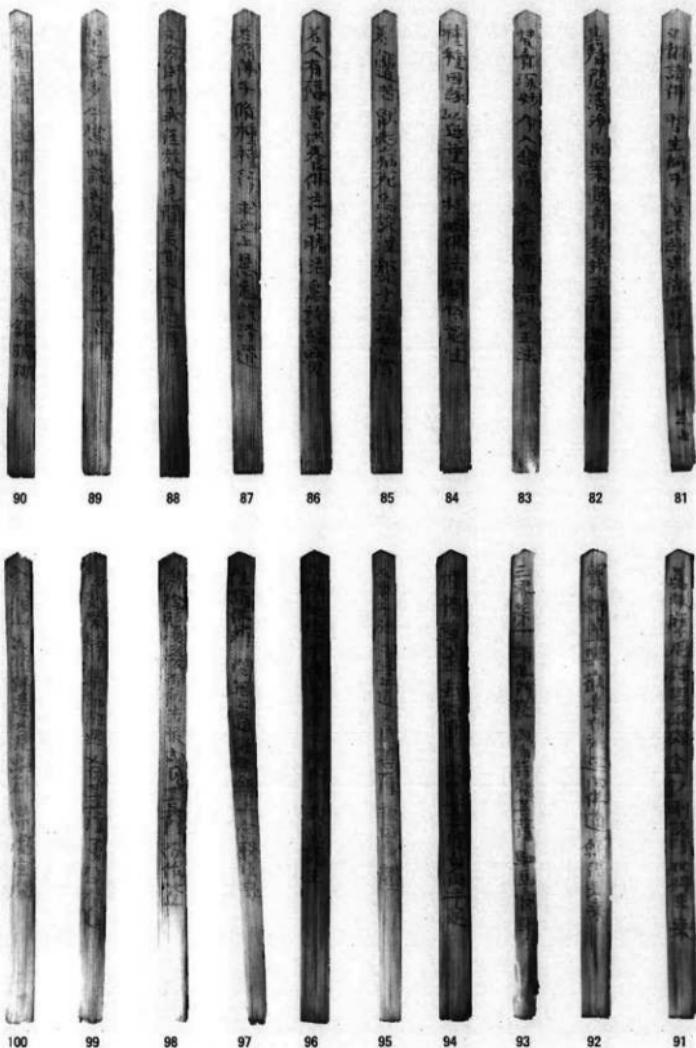
図版42



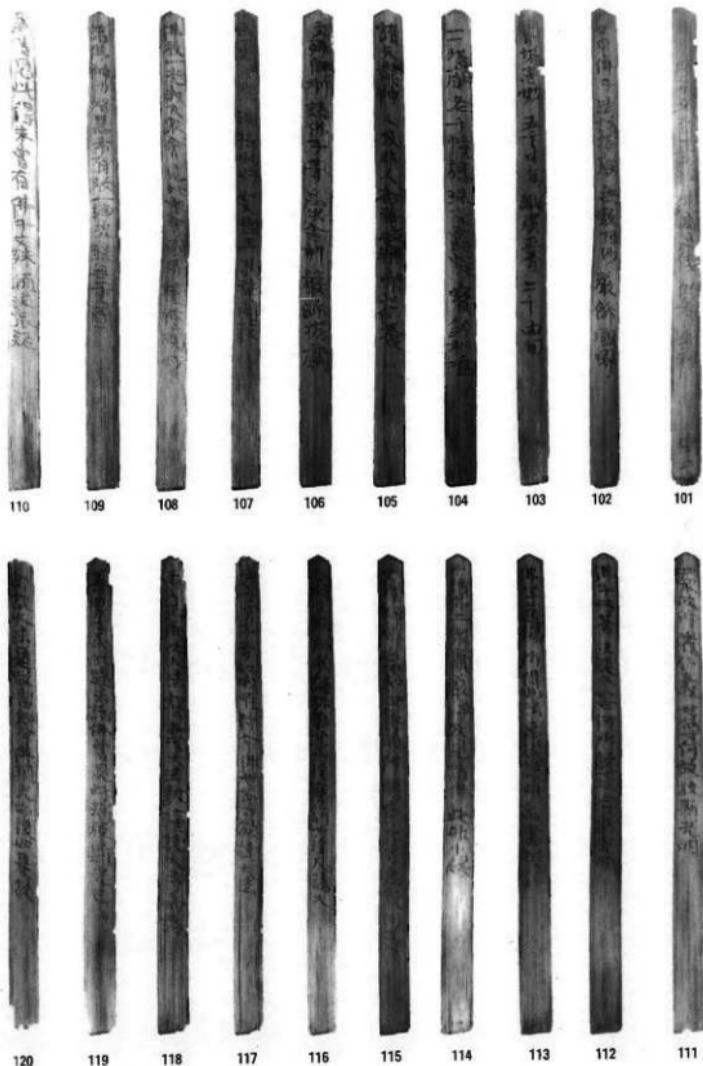


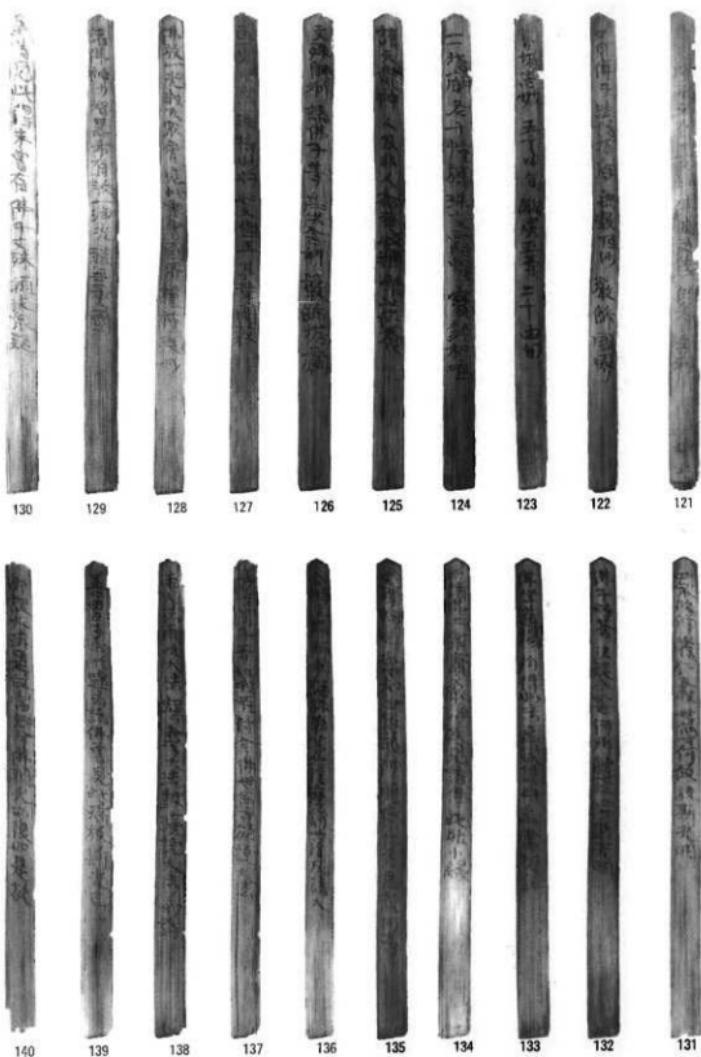
図版44



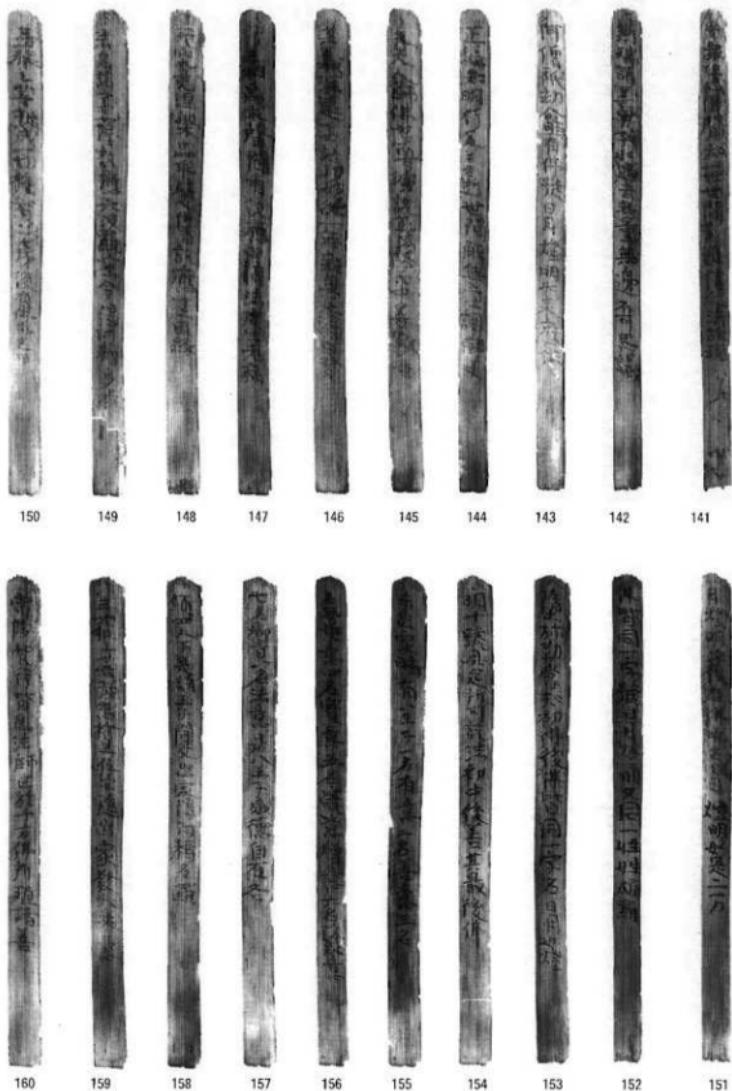


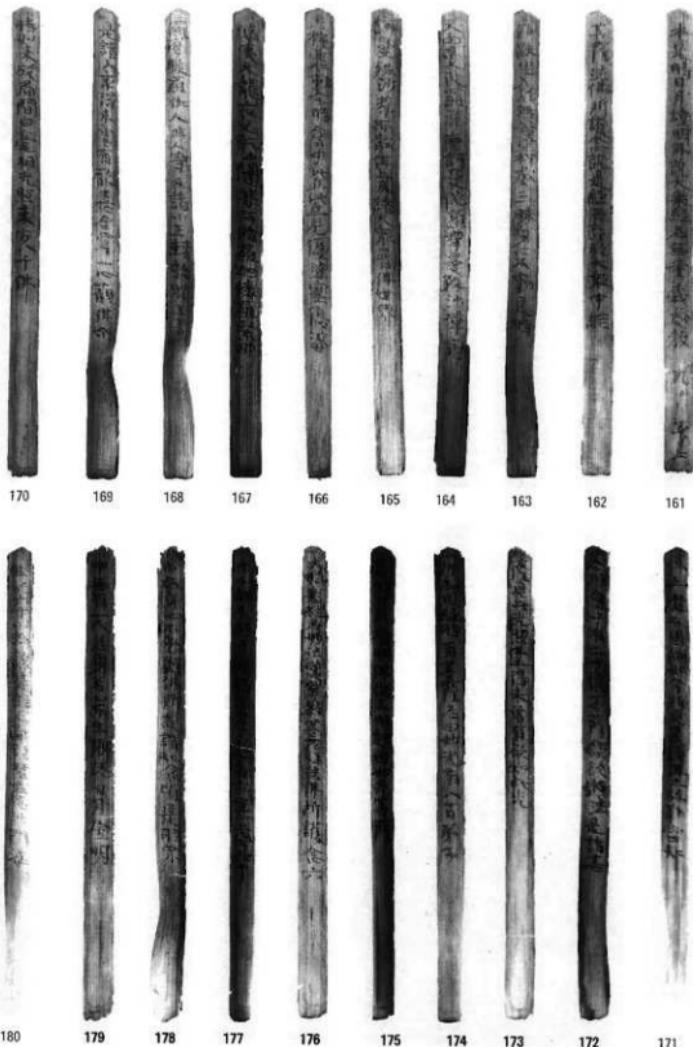
図版46



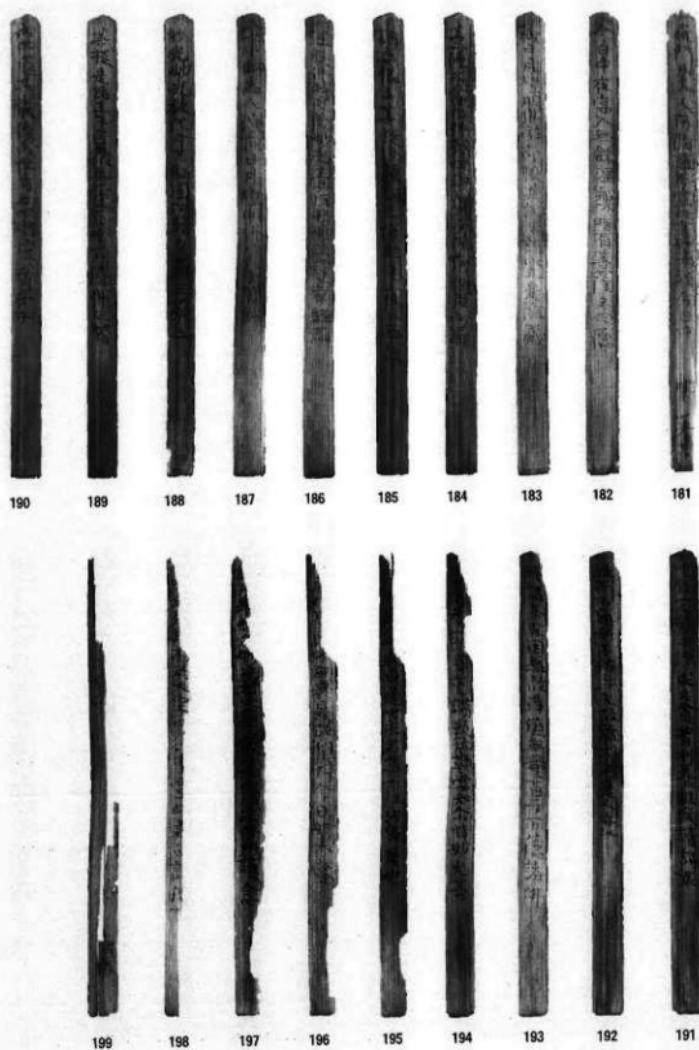


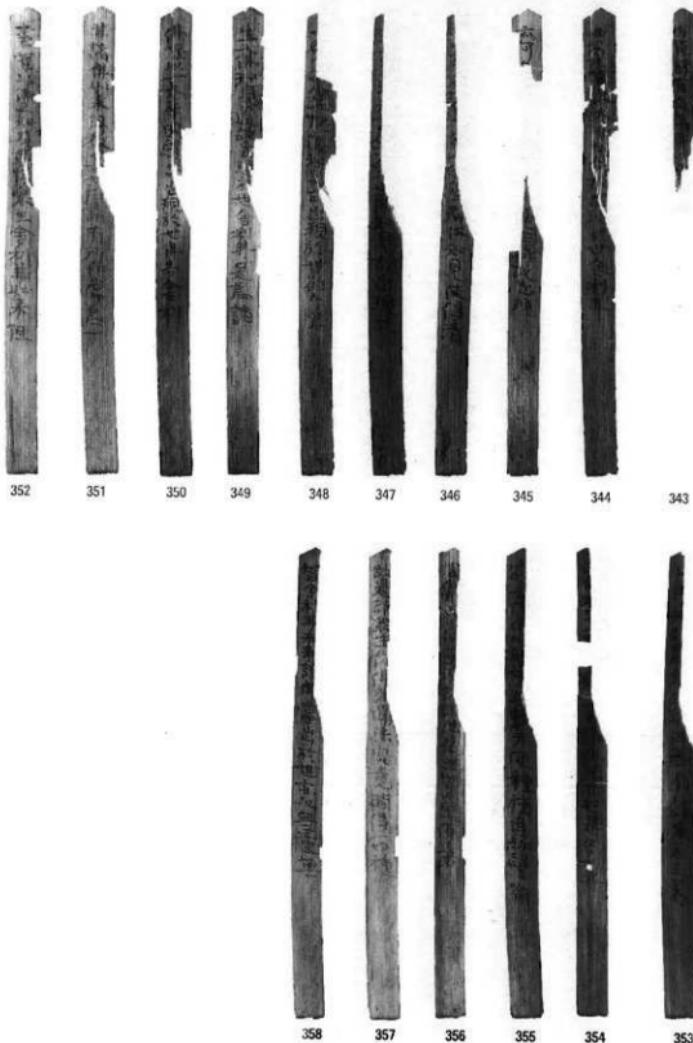
図版48



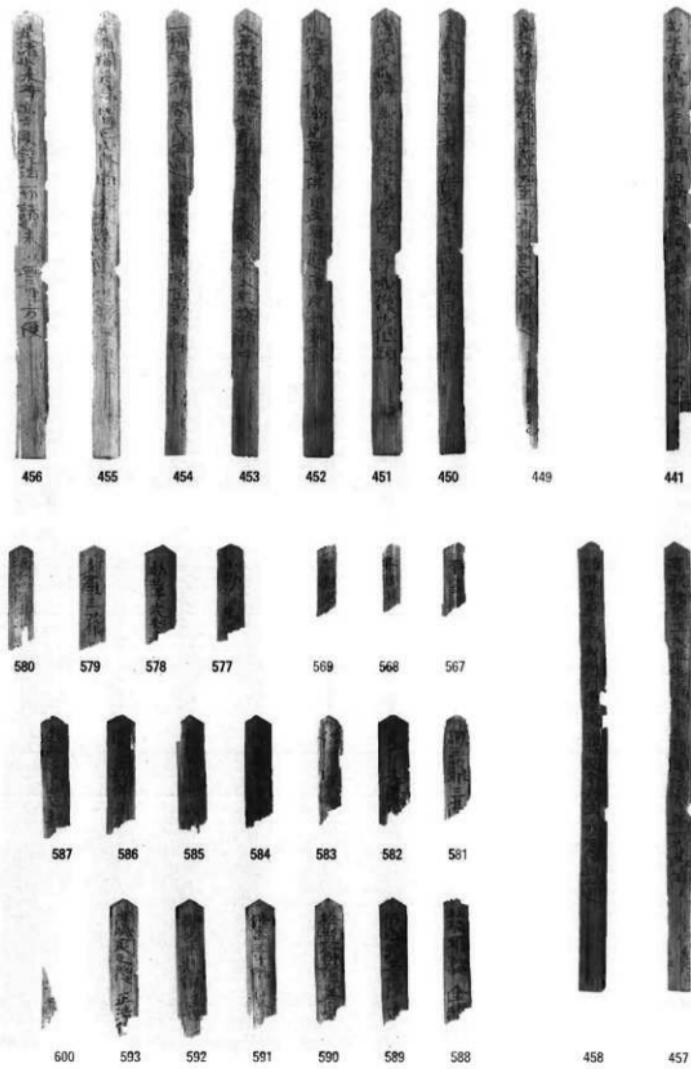


図版50

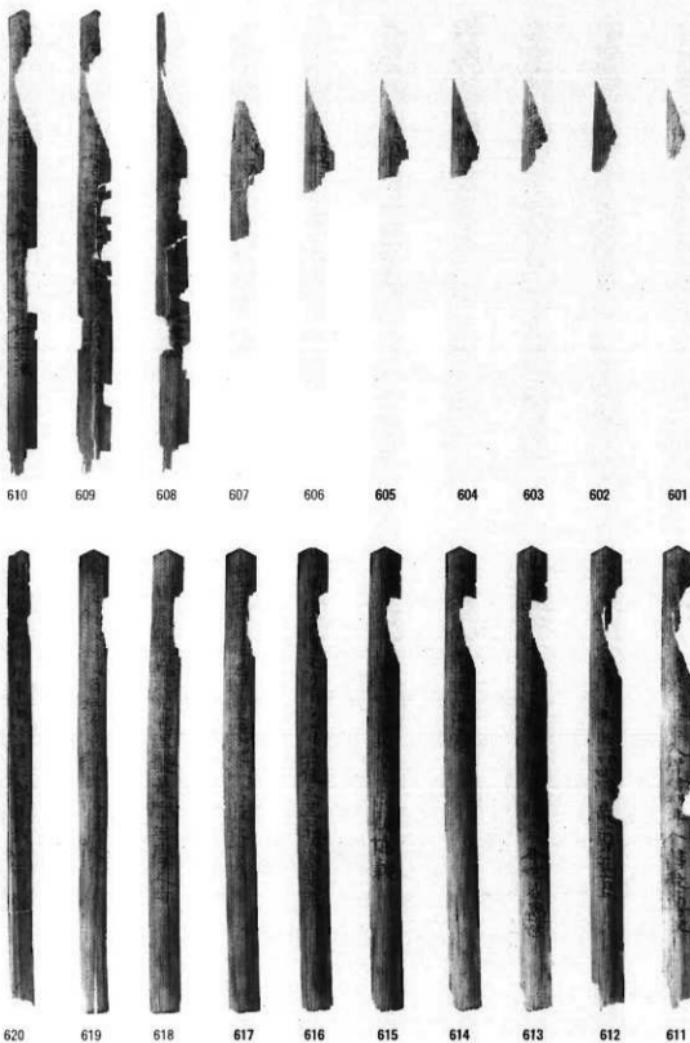




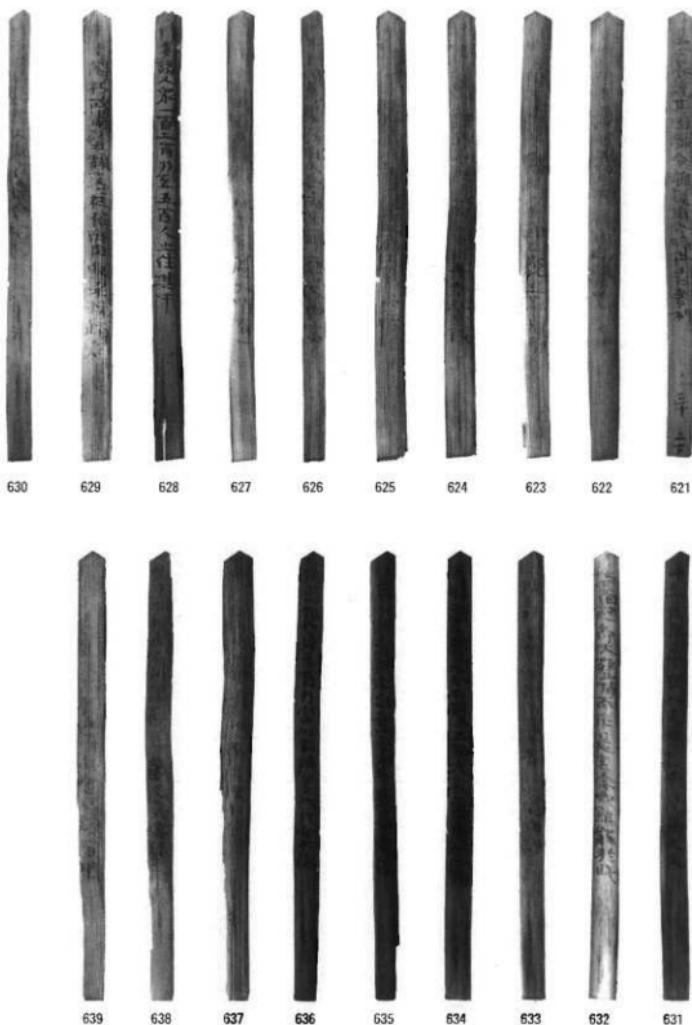
図版52



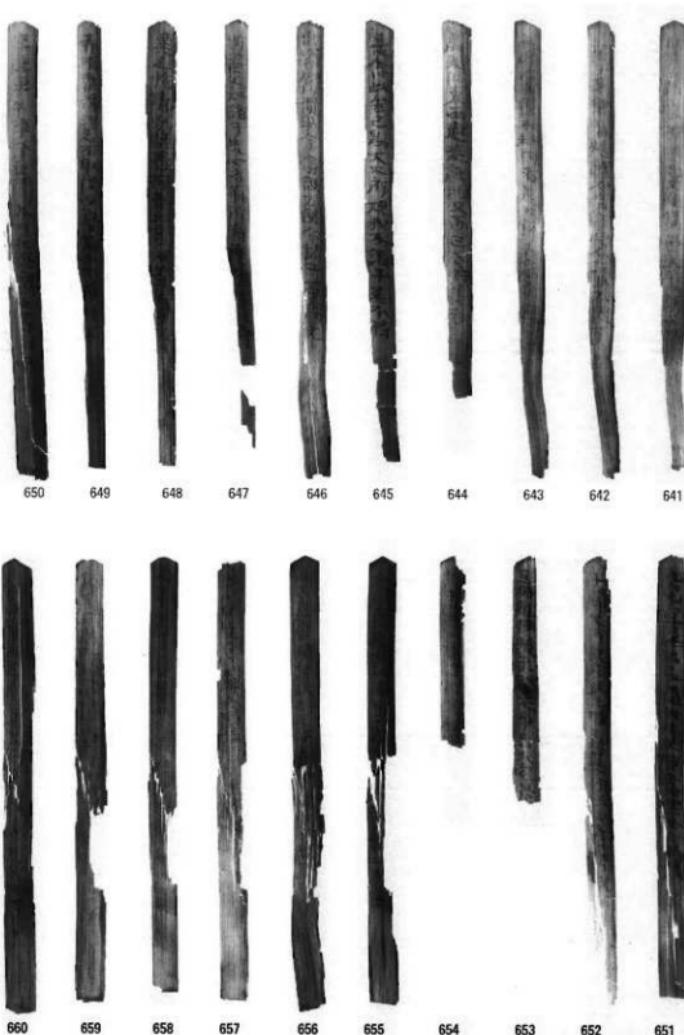
図版53



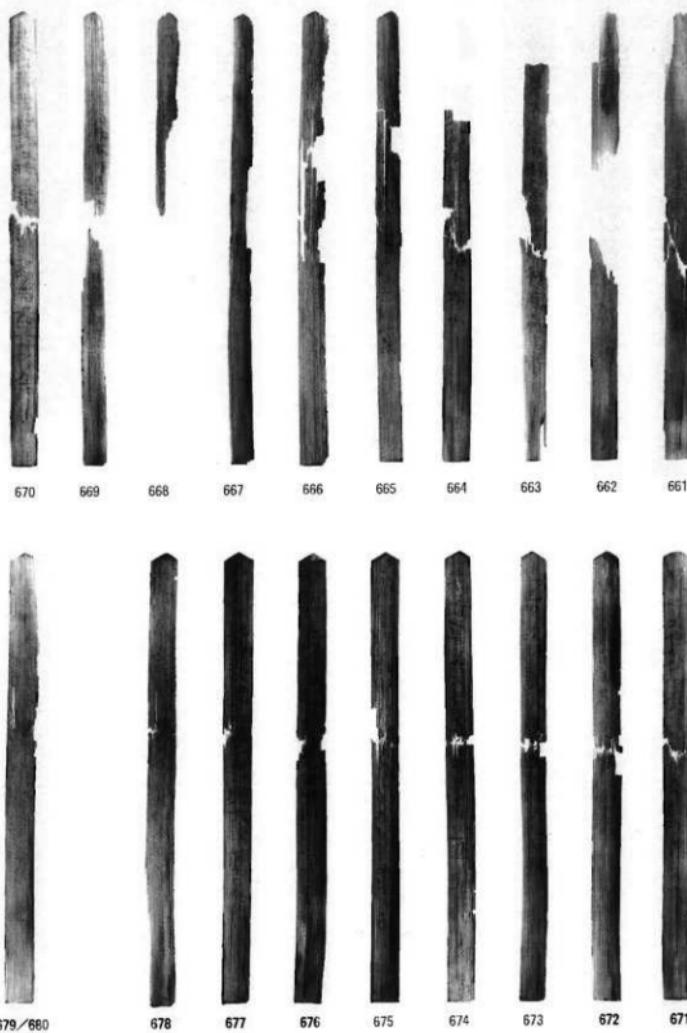
図版54

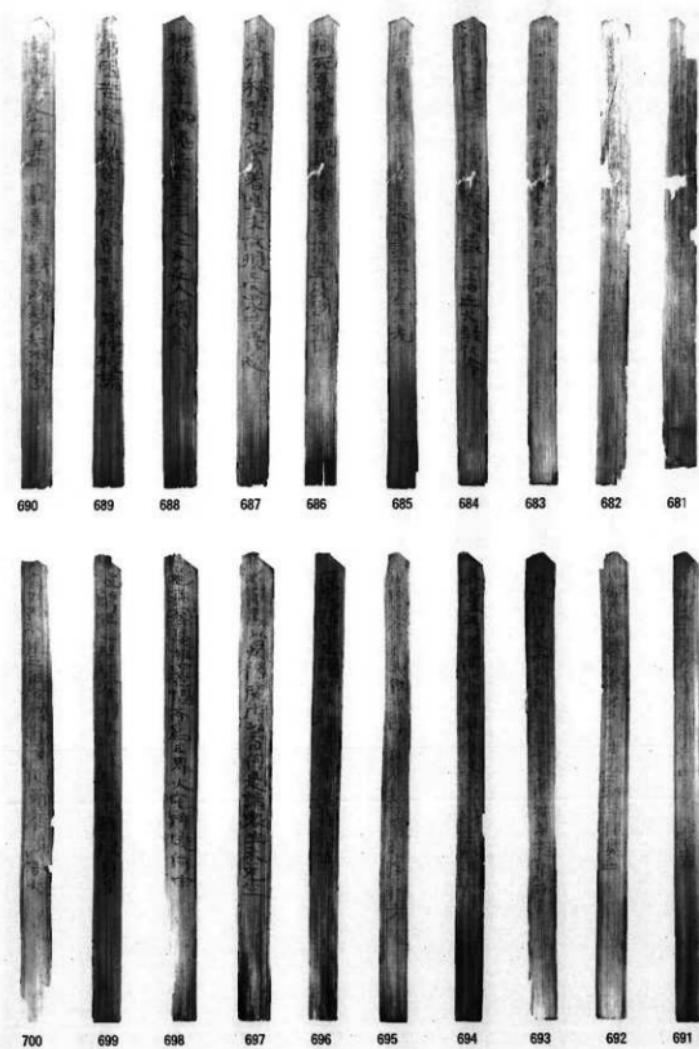


図版55

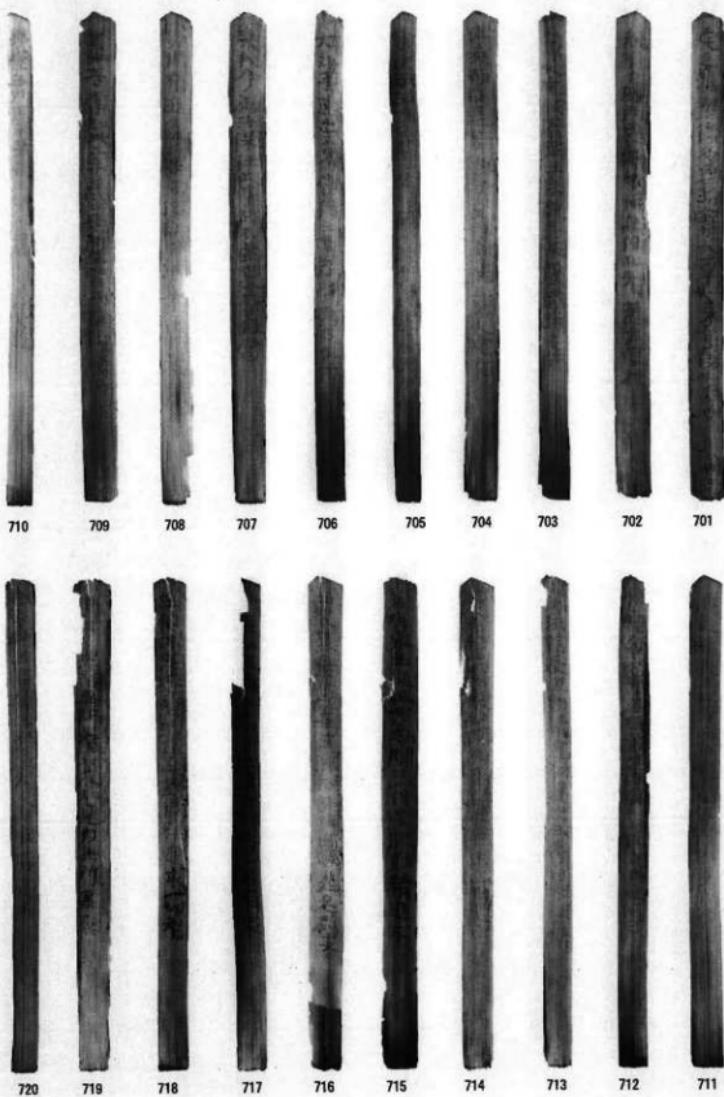


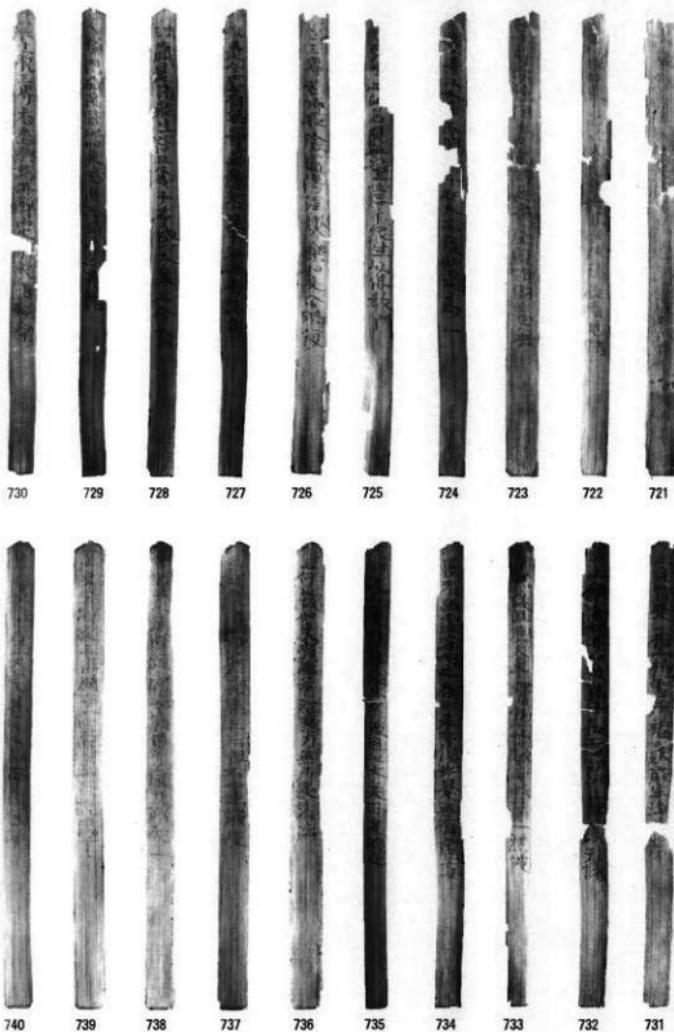
図版56





図版58





小金石記 世祖御用銀器
金玉器
金玉器

750

勝御用銀器
金玉器
金玉器

749

勝御用銀器
金玉器
金玉器

748

勝御用銀器
金玉器
金玉器

747

小金石記 世祖御用銀器
金玉器
金玉器

746

小金石記 世祖御用銀器
金玉器
金玉器

745

小金石記 世祖御用銀器
金玉器
金玉器

744

小金石記 世祖御用銀器
金玉器
金玉器

743

小金石記 世祖御用銀器
金玉器
金玉器

742

小金石記 世祖御用銀器
金玉器
金玉器

741

小金石記 世祖御用銀器
金玉器
金玉器

760

小金石記 世祖御用銀器
金玉器
金玉器

759

小金石記 世祖御用銀器
金玉器
金玉器

758

小金石記 世祖御用銀器
金玉器
金玉器

757

小金石記 世祖御用銀器
金玉器
金玉器

756

小金石記 世祖御用銀器
金玉器
金玉器

755

小金石記 世祖御用銀器
金玉器
金玉器

754

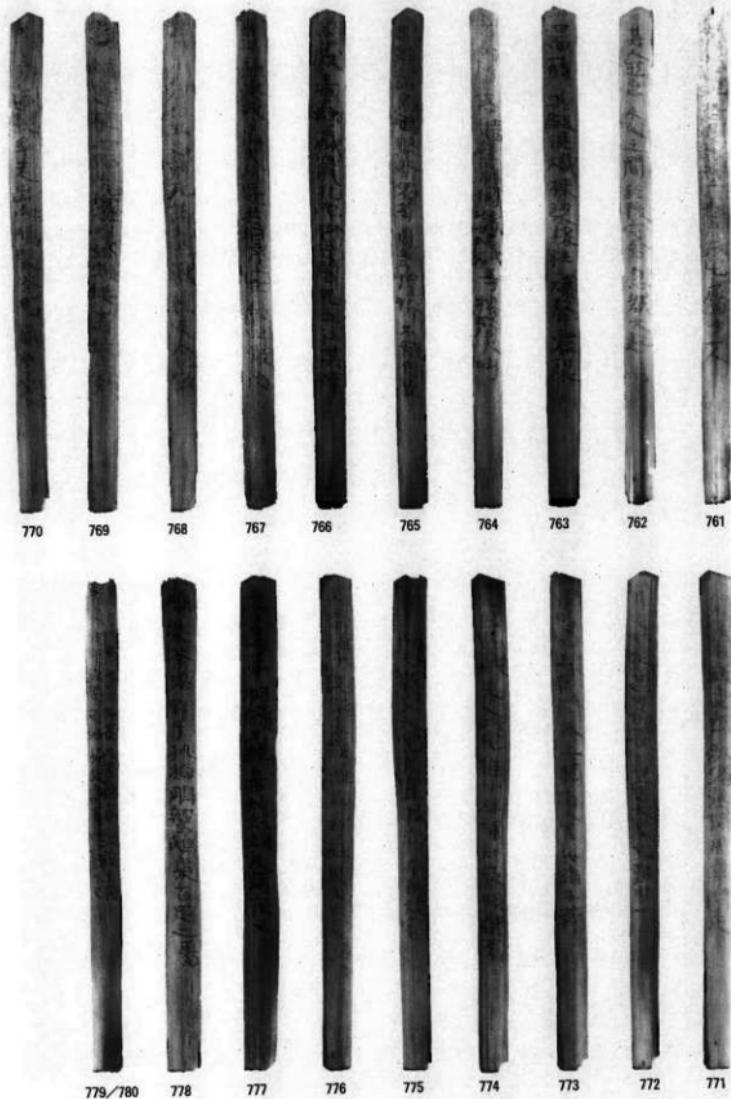
小金石記 世祖御用銀器
金玉器
金玉器

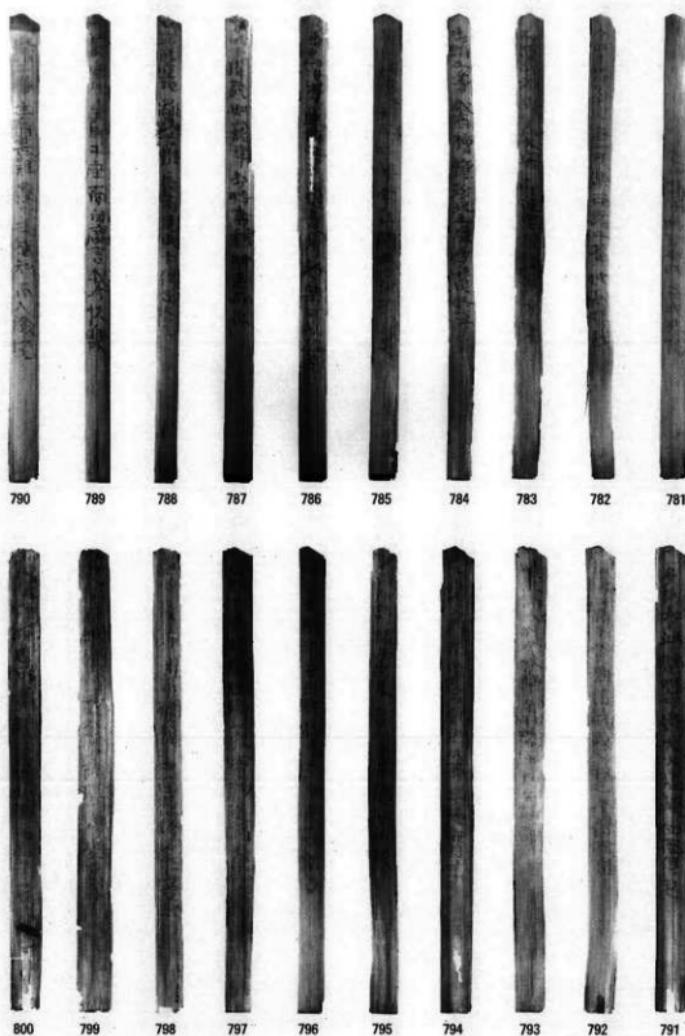
753

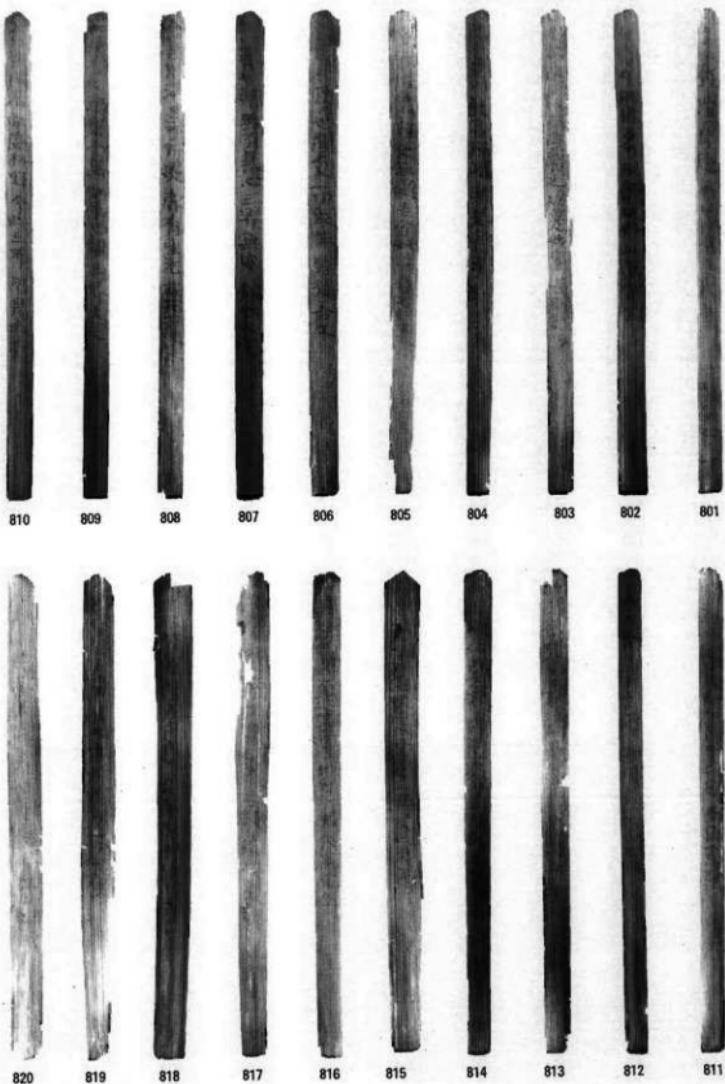
小金石記 世祖御用銀器
金玉器
金玉器

751

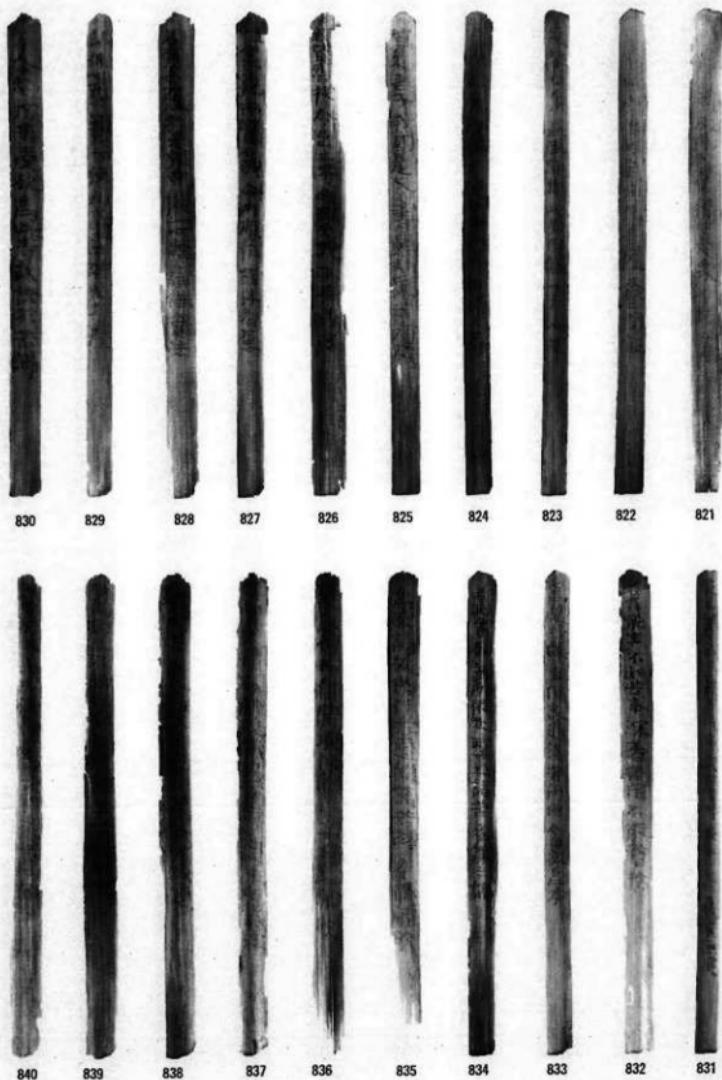
図版61

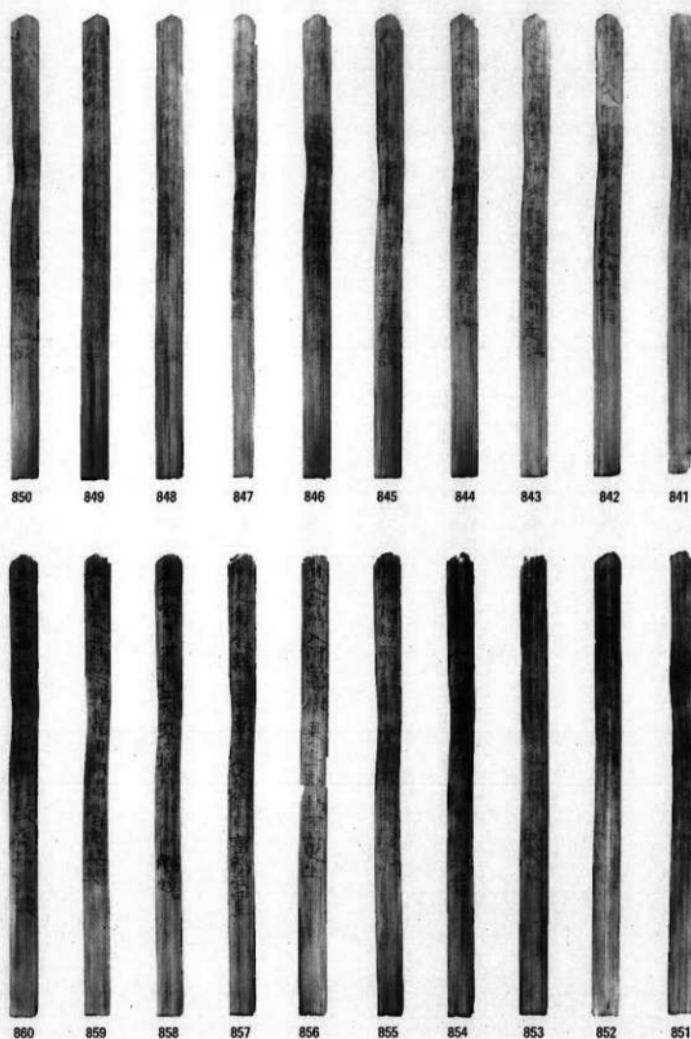




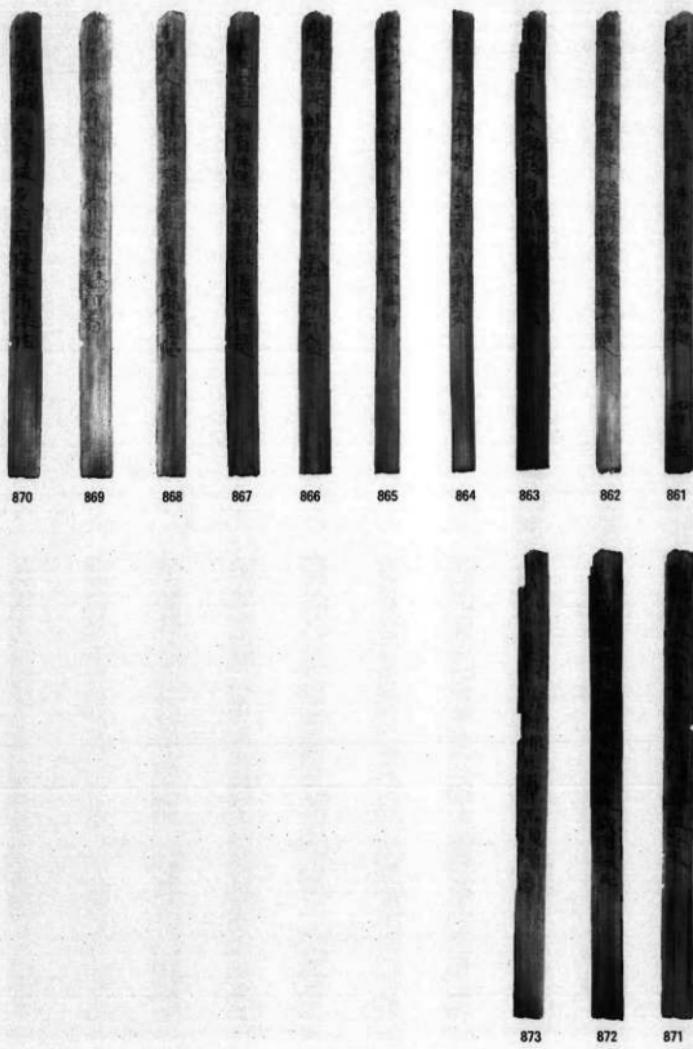


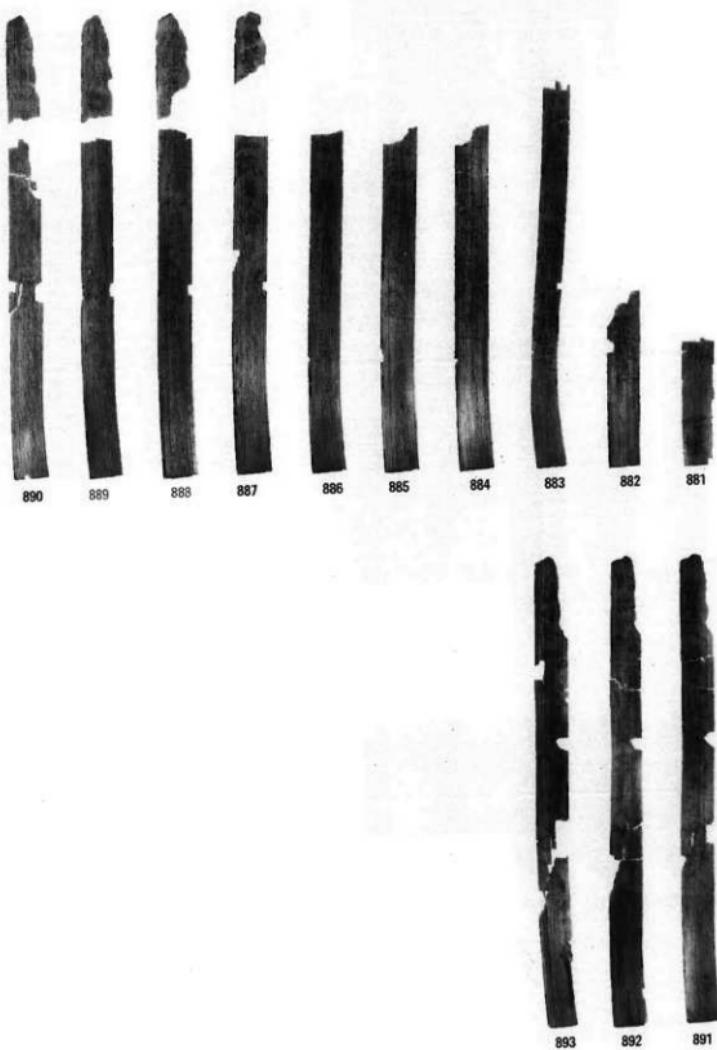
図版64



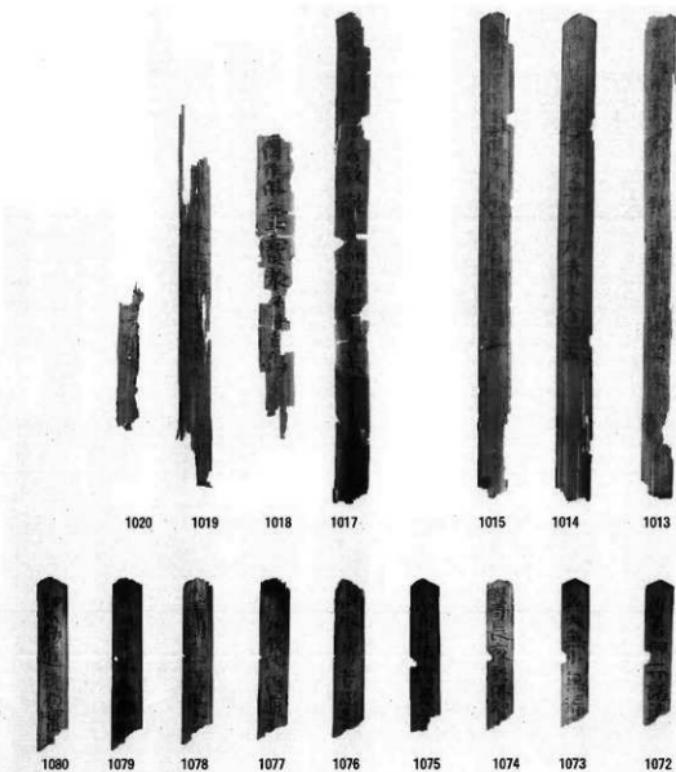


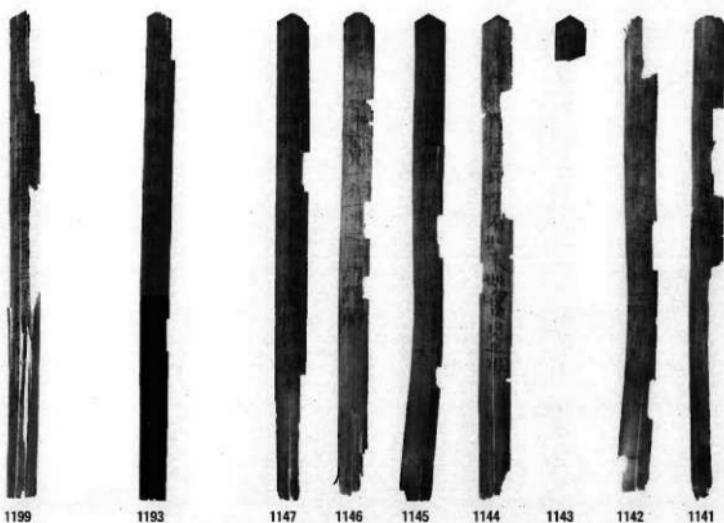
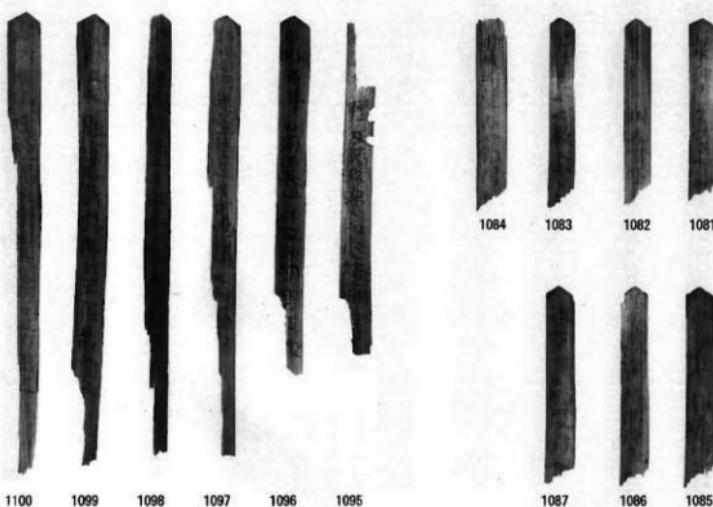
図版66



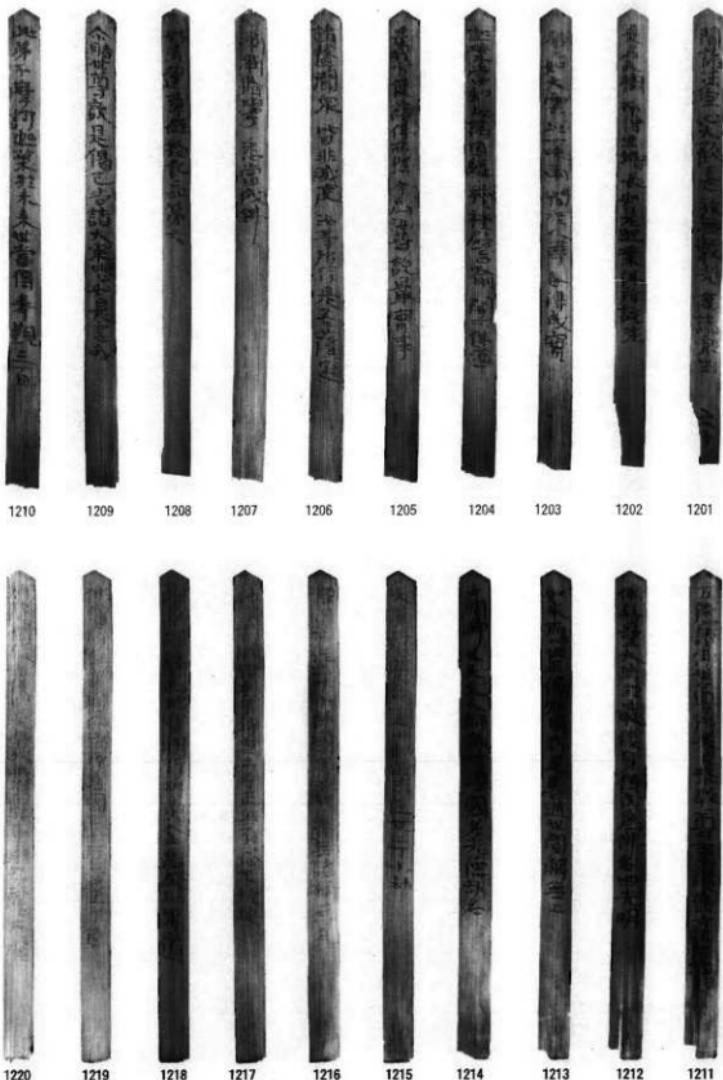


図版68

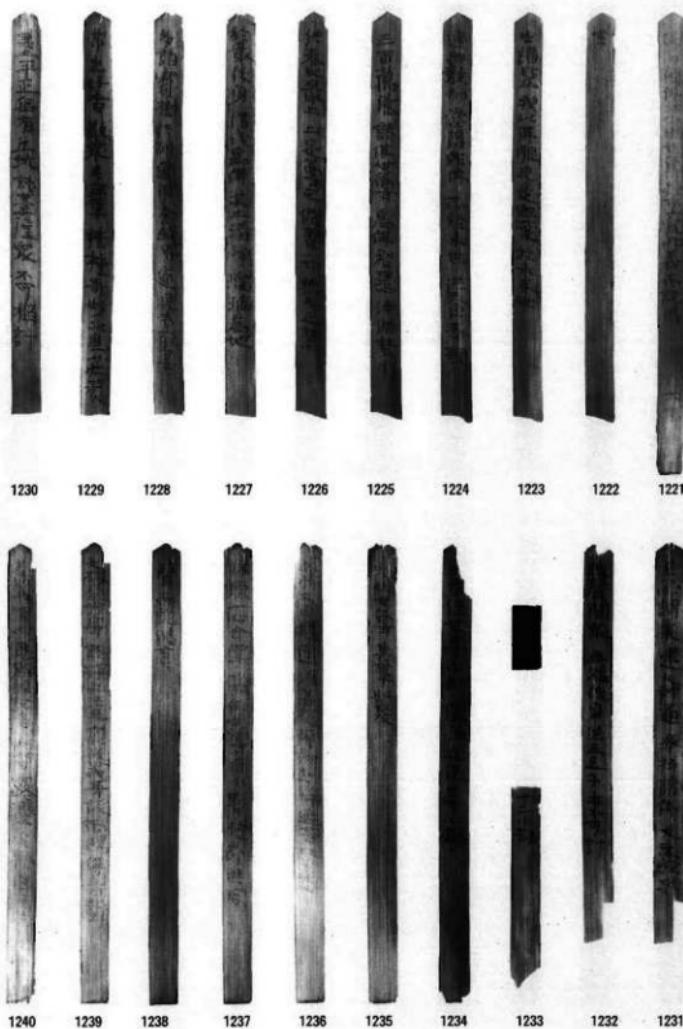




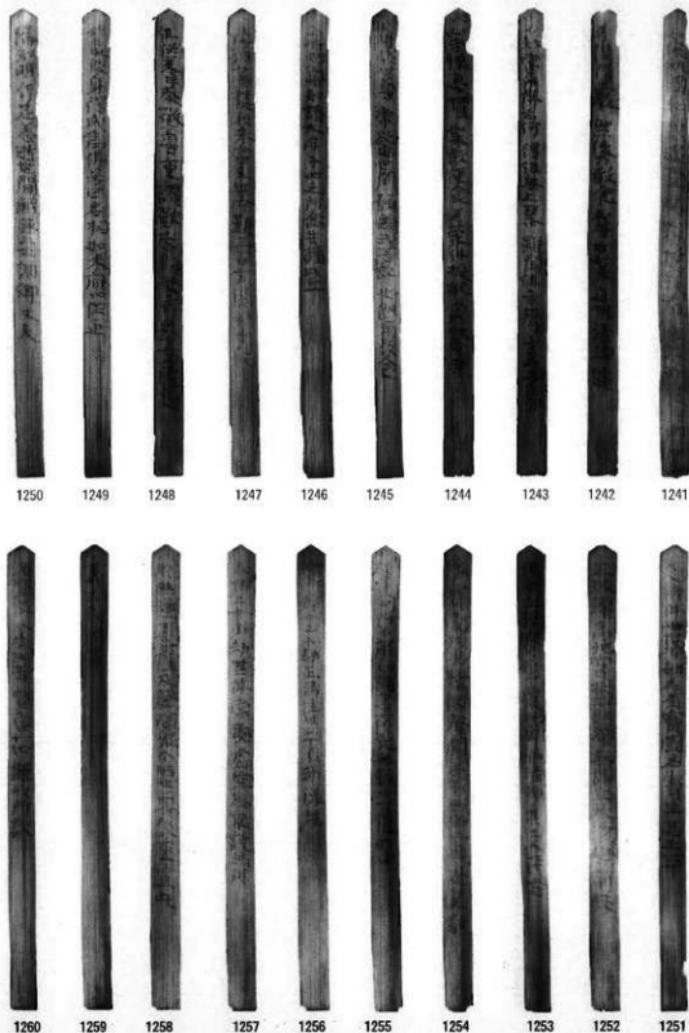
图版70



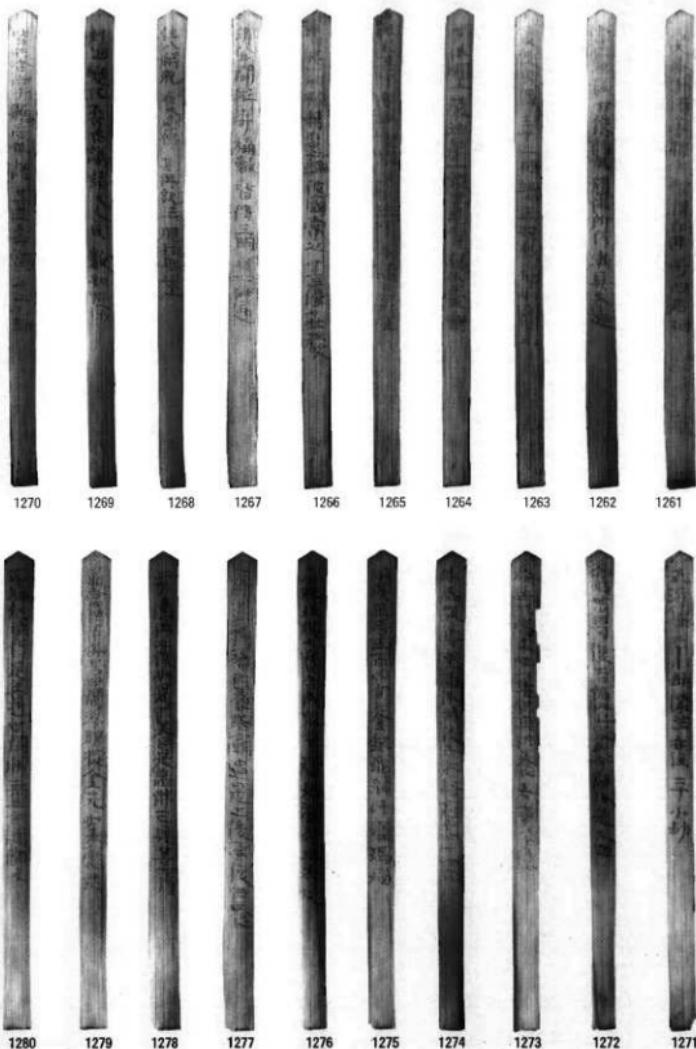
図版71



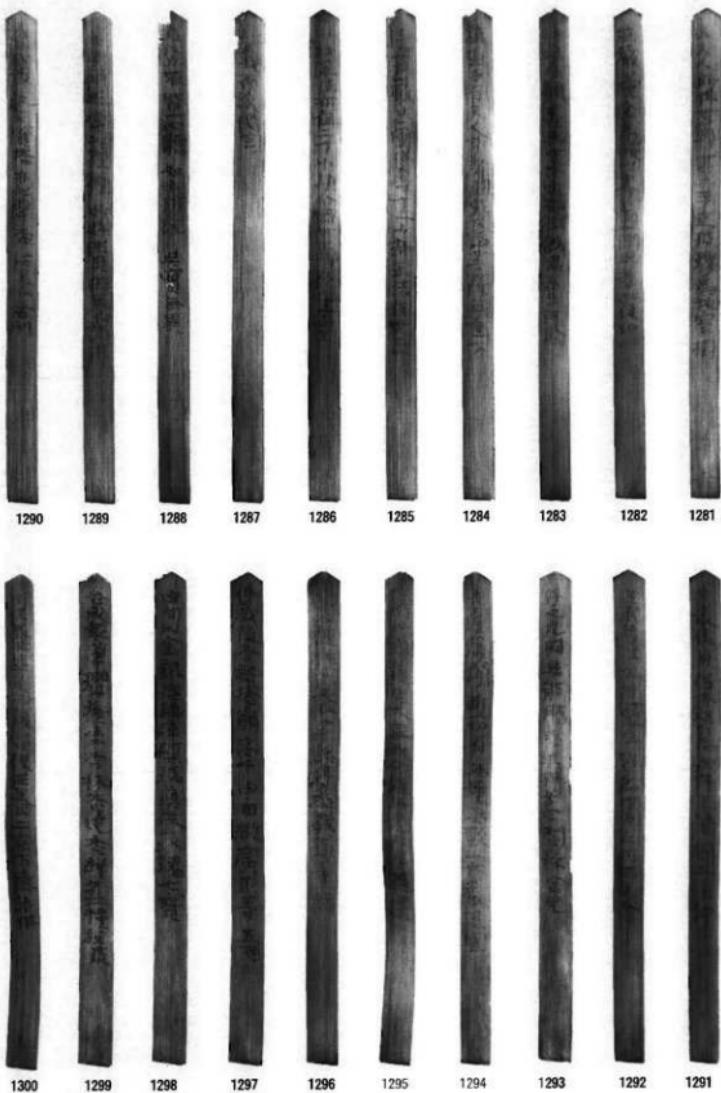
図版72



図版73



図版74





1310



1309



1308



1307



1306



1305



1304
1303



1303



1302



1301



1320



1319



1318



1317



1316



1315



1314
1313



1313



1312



1311

図版76



1330



1329



1328



1327



1326



1325



1324



1323



1322



1321



1340



1339



1338



1337



1336



1335



1334



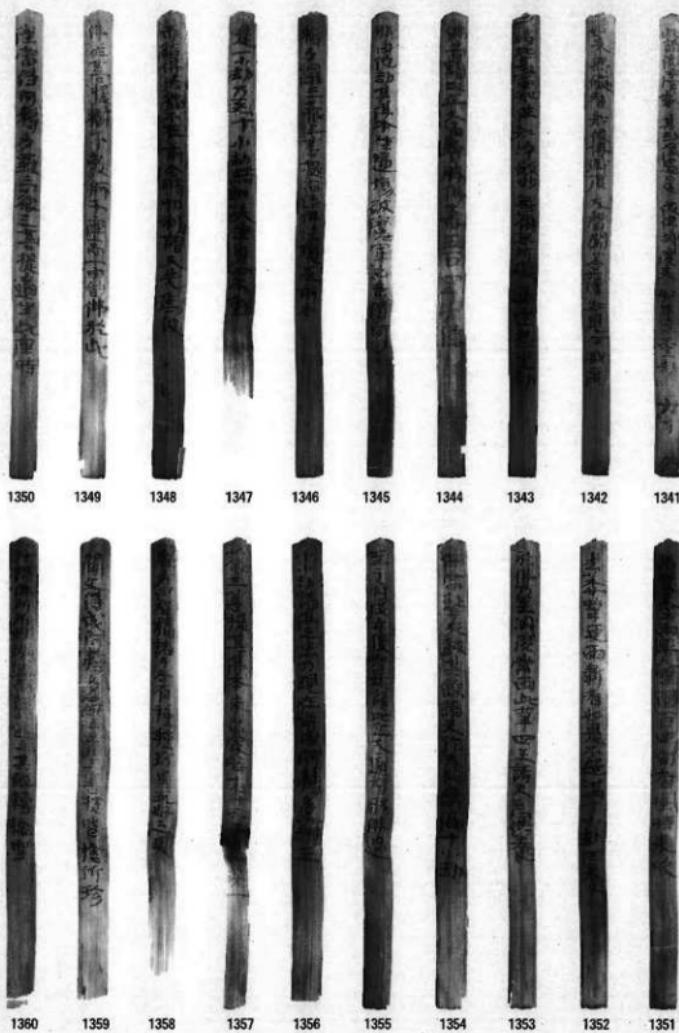
1333



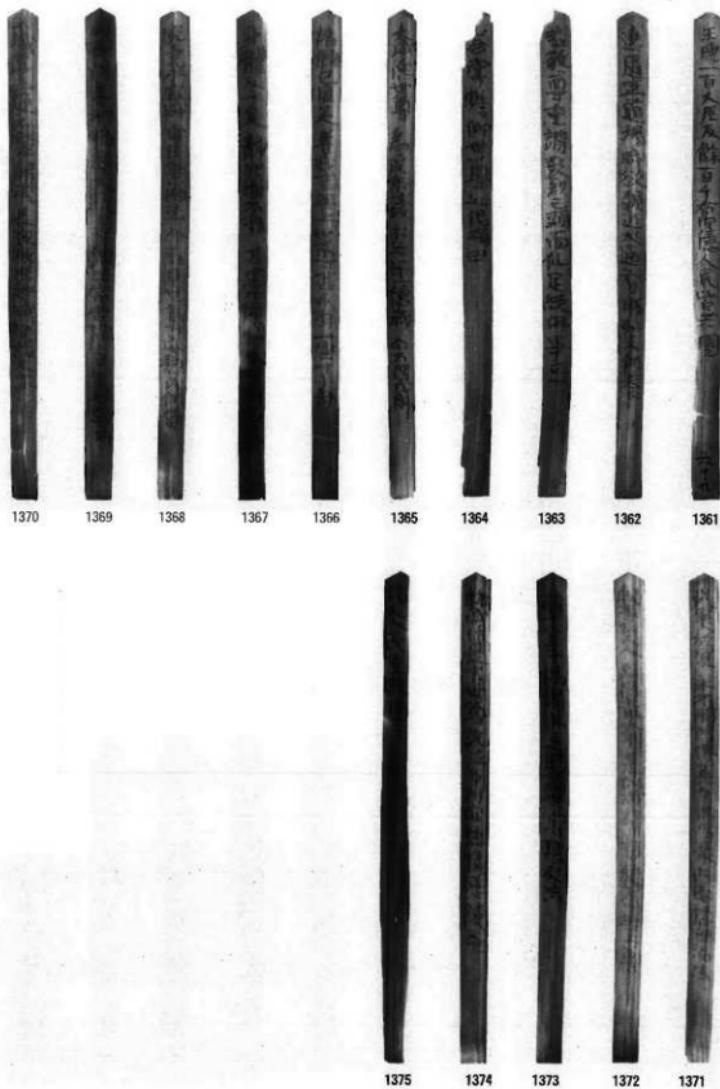
1332

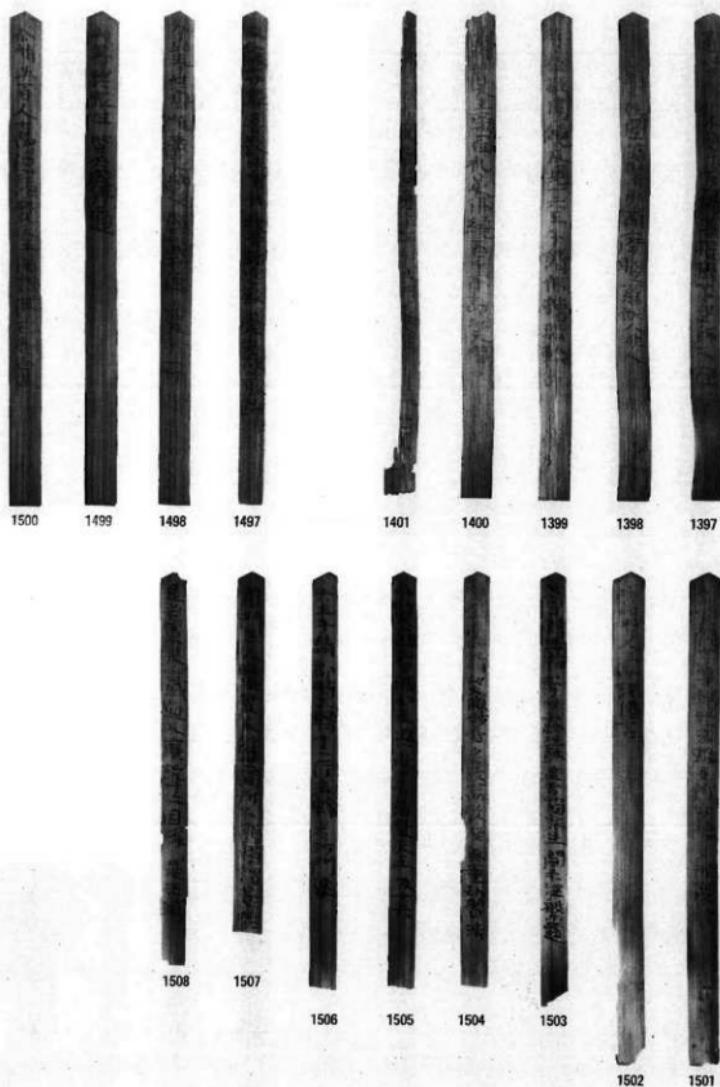


1331

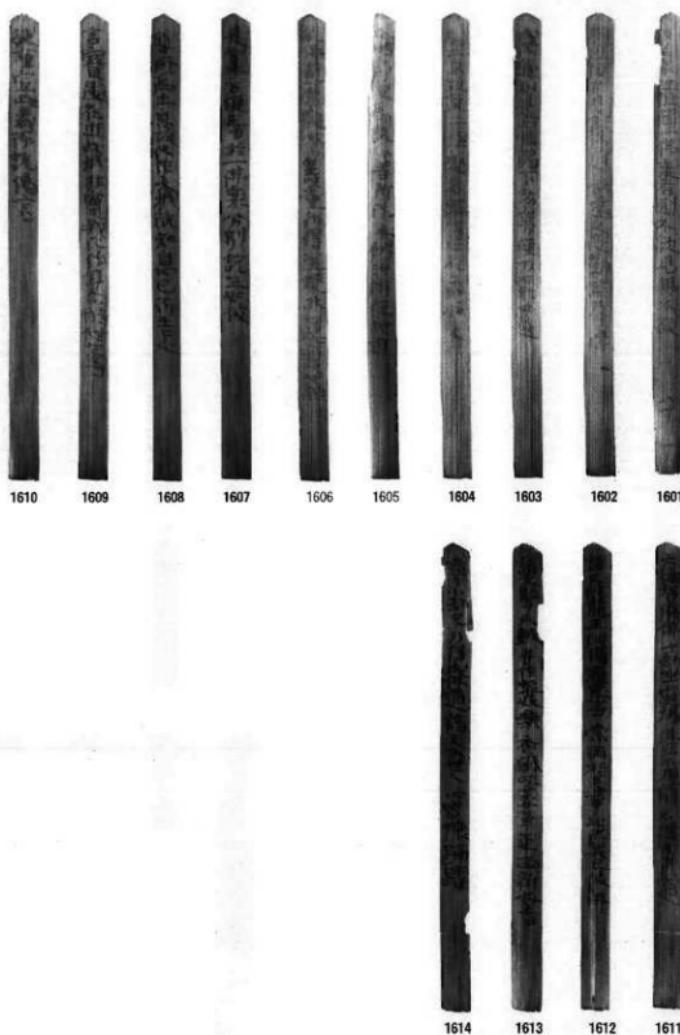


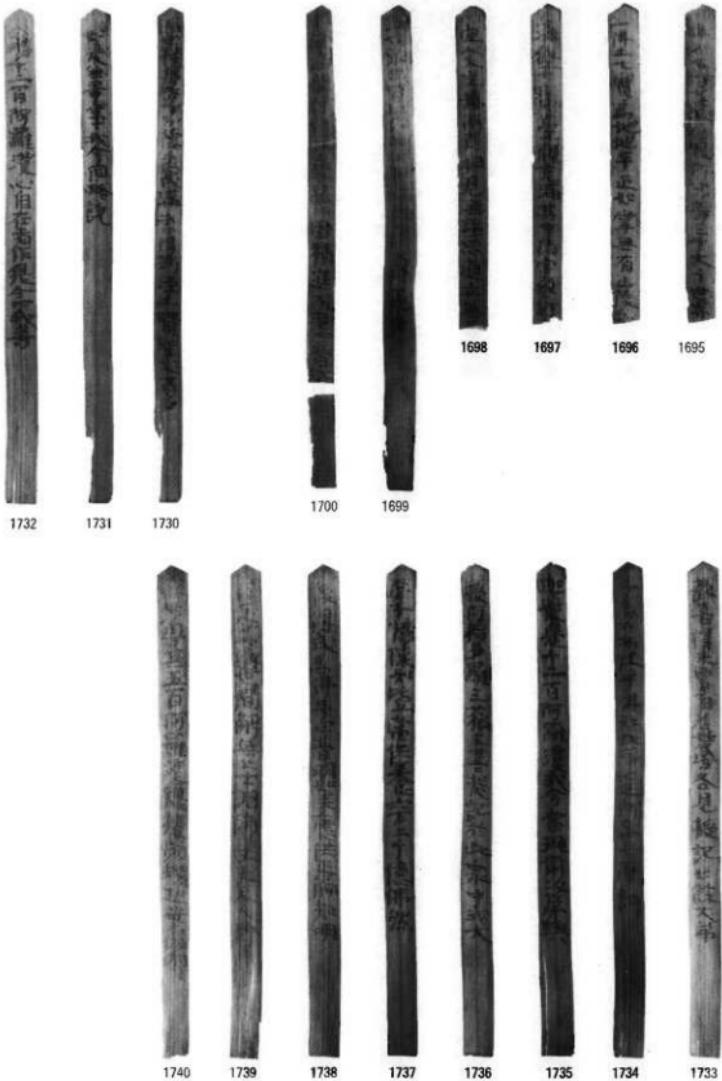
図版78



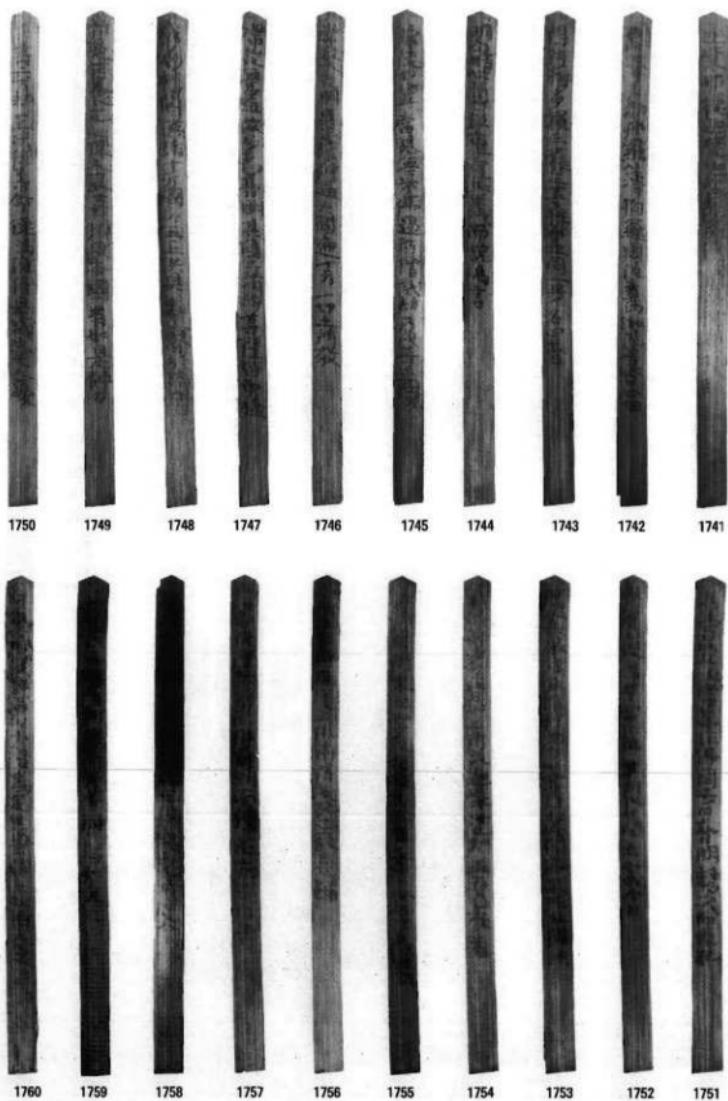


図版80

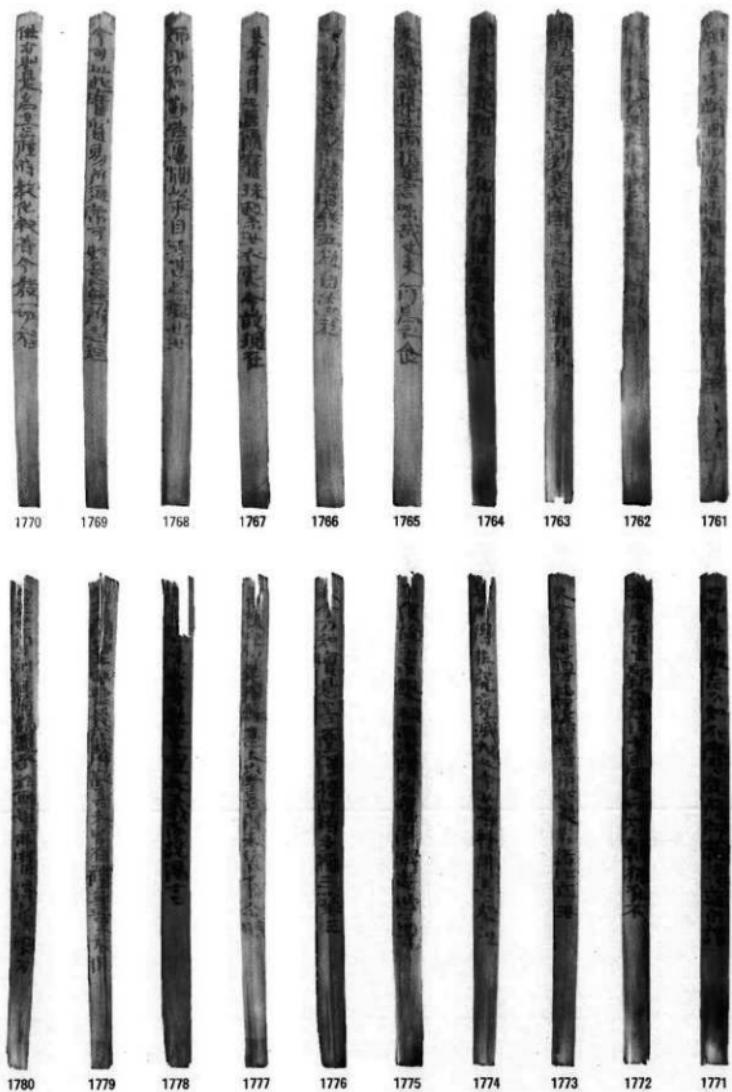




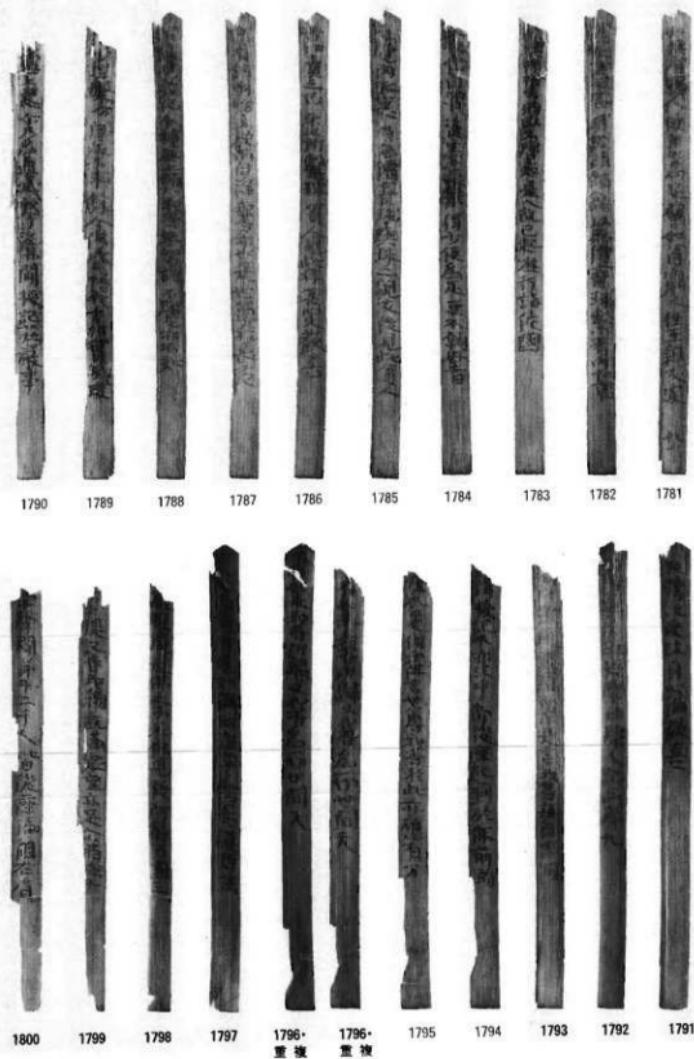
図版82



図版83



図版84





1810



1808



1807



1806



1805



1804



1803



1802



1801



1815



1814



1813



1812



1811

報告書抄録

ふりがな 書名	らいこうがわいせきぐん いち 来光川遺跡群Ⅰ
副書名	平成11~16年度一級河川来光川河川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書
シリーズ番号	第156集
編著者名	岩本 貴 木村忠義
編集機関	静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002 静岡県藤枝市谷戸123-20 TEL 054-262-4261㈹
発行年月日	西暦2005年3月25日

所取遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
仁田館	静岡県 田方郡 南浦町 大土肥、仁田	032599	35度 4分 40秒	138度 56分 57秒	A区・1 平成12年8月～平成13年3月 A区・2 平成14年10月～平成15年1月 B区 平成15年5月～8月 下水工区 平成15年1月～2月	3,962m ² 、1級河川来光川 262m ² 河川改修工事 2,200m ² 390m ²	1級河川来光川 河川改修工事

所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仁田館	館跡	古代以前 中世 ～ 近世	自然流路 礫石建物 掘立柱建物 18 軌道 井戸 溝 土坑	弥生土器、上器、類似器 貿易陶器（青磁、白磁、青花磁器） 瀬戸美濃系陶器（中世 古瀬戸） 瀬戸美濃系、志戸呂、初山御器（大室期） 肥前系、瀬戸美濃系陶磁器（近世） 信楽系陶器（近世） 常滑、丹波系陶器（中～近世） カワラケ（巾～近世） 金鳳製品（煙管、釘、縫等） 木製品（こけら絆、漆椀、曲物等）	軌道 大窓の礫石建物 こけら絆 (別冊同版 あり)
	遺物包含層	绳文早期	集石遺構か	绳文土器（茅山式上器、輪烟式下器、上ノ山式土器等） 石器（石斧、石鎌、石鏃、磨石、穿孔等）	低湿地における 绳文早期の 遺物包含層の 検出

浜松市において、浜松平原の遺物包含層を調査。糸島系の新石器文系の土器群である。約250点を中心に多量の土器を出土した。
さらには石斧、石鎌、石鏃、穿孔等の石器類も出土し、近隣に新期の集落、土器塚等の遺構の検出を予感させる結果となった。
高棚の家底である仁田内田忠常およびその子孫の館跡の調査において、中世から近世の遺物および遺物を多量に出土し、本遺跡に連続性と
厚をもつて遺存する様子を確認した。また、近世後半に比定される大窓の遺物群や平底式の土器を有する遺物の出土は、当地域における
名士の生活を考える上で重要な発見である。大窓の窓の流路から出土した「こけら絆」は、保存状態、最も多くに金剛輪にも1枚品の資料と
なり、仁田家と仏教の関わりを想起させるという意味で貴重であるばかりでなく、中世後半の地方武士と仏教の開拓を考える上でも重要な
発見である。

要約

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第156集

来光川遺跡群 I

平成11～16年度…級河川来光川河川改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

仁田館遺跡

平成17年3月25日発行

編集発行 財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒420-8002 静岡県静岡市谷田23-20
TEL 054-262-4261㈹
FAX 054-262-4266

印刷所 みどり美術印刷株式会社
〒410-0058 沼津市沼北町2丁目16番19号
TEL 055-921-1839㈹